
緋弾のエリア～運命を射す漆黒の魔弾～

KOH SAWAGURA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア〜運命を射す漆黒の魔弾〜

【Nコード】

N7934L

【作者名】

KOH SAWAGURA

【あらすじ】

本当の自分を見失い、生きること自体に挫折しかけていた東京武偵高強襲科三年に所属する鳳凰院 朱雀。

彼はこの学校唯一のSランク武偵である。

彼の容姿は闇のように深く暗い漆黒の艶髪に、哀しいほどに透き通つてる黒の瞳^{ノワール}。

それは彼の二つの名前にも表され、彼は『漆黒の魔弾(Noir・Freikugel)』と呼ばれていた。

類い稀なる超人的な身体能力と神業に匹敵する数々の銃技の持ち主

で強襲科の中では定評ある人物だが、それを恐れて誰も彼には近寄らなかつた。

彼の中にあるのは“生きること”と“孤独感”だけ。

それゆえに彼は生き甲斐を持つことがなかつた。

結局結論が出ないまま、他の科に転科するのか、他校に転校するかを考え始めた頃、彼を求めて一人の少女が現れた。

その少女の名は神崎・H・アリア。

彼女と彼が出会ったその瞬間、運命の歯車は静かに動き出す……………。

ACT 1 漆黒の魔弾と双剣双銃のアリア

空は青い。

誰もが皆、そういう固定概念を持っている。

その固定概念が“空＝青”と言う等式を作ってるのだろう。

まあこんな詩人的な話しはどうだっていい。

無論、そんな空から人なぞ降って来るはずもない。

空間的によつほどの事でもないかぎりね。

人に縁がなかったオレ、鳳凰院 朱雀は不幸なことにそれが現実になつてしまった。

カメラ 緋色の髪の少女。

彼女に出会つたその瞬間から、オレの私生活は一変した。

『ACT・1 漆黒の魔弾と双剣双銃のアリア』

「この自転車には爆弾がついてあがりヤス。」

なんだよこりゃ。

変声器で変えた機械的な声がケータイのスピーカーから聞こえる。

ちっ…朝っぱらからろくなことないな。

朝寝坊したオレは自転車を全速力で漕ぎながら内心そう毒づく。

始めはその事を疑つたがサドル下から独特のピッピッというリズム

が微かに聞こえてくることで事実と実感した。
こんな自転車に付ける爆弾って考えたら、大きくてもTNT爆弾が
それよりも小型だろう。

だいたい、その次に来る言葉は想像がついていた。

「速度を落としても爆発しやがります。」

再びケータイのスピーカーから機械的な声が発せられる。
ほらな？

このパターンのジャックならこの程度の台詞ぐらい聞けるだろう。
こんな冷や汗ヒヤヒヤの事態なのにオレは至って冷静だった。
なぜならオレは恐れ多くも武偵だ。

こんなことで平常心を欠かしたら武偵としての恥。
ん？

これってもしかして例のチャリジャックか？
確か…模倣犯が捕まったって聞いたけど…
まあどーでも良いと言えばどーでも良いが…
とりあえず、どうにかしてこの死亡フラグを回避しなくちゃな。
登校途中、チャリと一緒に人生最期の火花にされたくないから。
考えに考えた挙げ句、浮かんだのはこうだった。

自爆。

スピードはそのまま何かしらの障害物にぶつかる。
何々？

オレはどうするかって？
もちろんぶつかる依然に飛び降りるさ（笑）
下手すれば絶命は免れないが、この世からオレ一人がいなくなった
って悲しむ奴なんて居ないだろう。
つかまず、オレが“死ぬはずなんてない”から。
武偵高の立派な門が見えて来る。

その時、オレは覚悟をしたのだが……

背後から近づいてくる最近流行り出した乗り物。

確かセグウェイっていったっけか？

そのハンドル部にサブマシンガン・UZIウージーを付けて武装している。
なるほど、無人遠隔操作か…

ちっ…新手のお出ましときたな…

くそ……困まれちゃどうしようもないなこりゃ…

四台の無人セグウェイに自転車を囲まれ、そのままの状態で校内に入る。

作戦をグチャグチャにされ、さすがのオレも頭に来ていた。

ようやく危機を感じたその時、オレの頭上を何が通過した。

「頭を伏せなさい!!」

頭上から降って来るアニメ声。

オレは指示された通り頭を伏せた。

突然、轟く数回の銃声。

放たれた数発の弾丸はオレを囲む無人セグウェイを一掃する。

頭上にいるということは恐らくパラシュートにぶら下がってる可能性が高い。

だとするとこれほど動いているモノに当てるなんて相当な腕前の持ち主だ。

一体誰なんだ？

……そんな事はどうでもいい。

今はこの自転車から離れることが先だ。

さてと…どうやって降りようかな…

そう考える間もないまま、オレは無意識の内に自転車から飛び上がり、後方三回転バック宙で10メートルほど離れたところに着地する。

案の定、運転手が居なくなった自転車はコントロールを失い転倒し、爆破された。

一段落着いたと思ったが、それはまだ先のことになりそうだ。

「ちょっと何自力で脱出してるのよ!!」

「ゴゲっ……………」

私の出番がないじゃないのよ、とわめき立てながらオレの顔面に着地する少女。

ほぼ垂直降下、彼女の尻がオレの顔面に激突。
オレはそのまま勢いよく転倒し、彼女の尻に敷かれる羽目になった。
朝っぱらからホントにツイてないよオレって。

「何やってんのよアンタわ！！破廉恥！！！」

「それはこつちの台詞だツ！！着地するところぐらい考え上がれ！

！」

「なによ変態！！！！！」

「誰が変態だこのガキンチョが！！！」

とうとう言い争いが始まった。

どこの誰かは分からなかったが、同じ武偵高の制服を来ているので恐らくは他のクラスの子だろう。

身長はだいたい見た目から140センチの小柄な体型で、カメラリア色のツインテール少女。

それがまだ生まれたばかりでやんちゃな仔犬のようにギャーギャー喚く。

……………おいおい。

一瞬、どこぞの小学生かと思っちまったぞ。

しかしそんな言い争いも、再び登場した無人戦闘兵器セグウェイのおかげで幕を閉じた。

「あぶねえ！？」

「きゃっ！？」

UZIの濁いた銃声と無数に飛び交う弾丸。

それを避けるため、オレは彼女を抱えて全速力で走った。

えーとえーと隠れる場所隠れる場所……

無我夢中で隠れる場所を探しながらUZIの掃射を回避。

彼女をお姫様抱っこしているのも忘れてひたすら駆け抜ける。

「ちょっと離しなさい！！／自分で歩けるわ！！／／」
「いちいち何かとピーピーうるせーガキンチョだなあ。ちょっとは大人しく出来ないのかよ？」
「ガキンチョ…ってさつきから失礼ね！！／／私は…」
「おっと…良いところを見付けた…あそこ体育倉庫に隠れるか…」

全速力で体育倉庫の中に隠れる。

その間、オレはギヤーギヤー喚く彼女を敷き詰められたマットの上に放り投げ、しばらく扉の裏に隠れる。

右胸に掛けていたホルダーから、愛銃・GLOCK35を左手で静かに抜き取り、右手でゆっくりとスライドを引く。

ガチャン……

スライドが擦れる音が倉庫に響き渡る。

GLOCK35はプラスチック拳銃で・45ACP弾を使えるスグレモノだ。

ちょっと形状がデカイが、軽くて使いまわしが効く。

「さつきのあれといい、後方三回転バック宙といい…アンタ何者？」
「しがない一般的な高校生…と言いたいところだが此処にいるんじゃないぞとは言えないな。オレはただの武偵青年さ。ちょっと人より出来る事が多いけどね。」

「私は神崎・H・アリア。言っとくけどガキンチョじゃないわ。」
「わかったアリア。オレは……って自己紹介してる場合じゃなくなってきたな…」

再び轟く銃声。

どうやらこうやらセグウェイ（野郎ども）が追ってきたようだ。恐らくはオレを狙ってるんだらう。

倉庫の中へ何の躊躇いもなくUZIをぶっ放しまくる。

上等じゃねえか…買ってやる…その喧嘩…

アリアが牽制しようと二丁のコルトガバメントを構えて出ようとするが、それを引き止めてオレが入口から飛び出る。

雨のような凄まじい量の弾丸が宙を飛び交う。

それをオレは縫うように躲す。

オレって男は一般的な人間よりも遥かに身体能力が上だ。

飛び交う弾丸がハッキリと見えるし、躲すことも容易にできる。

跳躍力も普通の五倍以上はあるだろう。

ぎりぎり人間的な部分もあるが、ほぼ超人と言ってもいい。

人間離れ過ぎたオレには、それを怖がって誰も近寄らなかった。

だから友達とか親友とか、そう呼べる仲間が誰もいなかった。

孤独感。

それがオレが生きている実感の一つだった。

オレの目は複数の弾丸の飛び交う位置を空間的に捕らえると、オレはそれに近い位置の弾丸に向けてGLOCK35の引き金を引いた。轟く銃声、GLOCK35の銃口から瞬間的に飛び出した10発の弾丸。

それはそれぞれ別な位置を飛び交う弾丸と衝突し、弾き合いながら跳弾を繰り返して5台の無人セグウェイのハンドル部に据え付けられたUZIすべての銃口に着弾する。

ほぼ同時に、そのUZIはすべて大破。

一瞬にして鉄塊にしてしまった。

まさに一瞬の出来事だった。

「アンタが…アンタがああ『漆黒の魔弾』ね？」

その一部始終を背後から見ていたアリアが唇を震えさせながらオレに言った。

そう。

だけどオレは首を縦には振らなかった。

「『漆黒の魔弾』？誰だよそれ？勘違いししないでくれ。人違いだ。」

オレはつまらなそうに言い捨てると、立ち尽くすアリアの横を通り抜け、生徒用の玄関に向かった。

三年A組の教室

とりあえず朝のSHRには間に合った。

ネクタイを緩め、制服を着崩す。

オレの席は中央の列の一番奥に座っている。

と言うよりも机に俯せになり、通常ならば半分寝ている。

もう卒業するだけの単位は取っているし、まずもって単位を落とすということはない。

校内唯一のSランクの生徒と言うだけあり、先生たちの評価と信頼もすこぶる高い。

ゆえに回される任務の難易度も桁外れに高い。

多分、普通の人間じゃあ死ぬレベルだろうね。

えーと確か、オレより一つ下の学年でもSランクはいたには居たらしいがそうそう長くは続かなかつたらしい。

名前は…遠山なんかかって野郎だ。

三年間もSランクを立て続けにとり続けたのはどうやらオレだけらしい。

まあ、んなのはどうでもいい。

どうやらこうやら新学期始まって早々、転校生がこのクラスに来るらしい。

オレは薄目を開け、教卓をぼーっと見ていた。

担任の眼鏡女教師・棗が鼻歌を歌いながら教室に入ってくる。

いい歳こいてウザったいんだよくそババアが。

内心、そう毒づく。

「おはようございます皆さん 新学期から新しく皆さんのお仲間になる転校生を紹介します 彩くん 入って来て」

彩と呼ばれた青年はそのそと扉を開けて入ってくる。
紅いバンダナを斜め寄りに頭へ巻き、黒い髪をツン立てている。
しかも前髪だけブラッティレットのメッシュを入れていて今流行り
な格好だ。

鼻っ面に絆創膏をして顔中傷だらけ。

いかにも、喧嘩してきた後のようだった。

見た目からヤンキーな雰囲気のようなが……

「どうもはじめまして オレの名前は夜桜よきくら 彩さい。新しくこの学校の
強襲科に転校してきたんだ。生まれは東北地方で、前回までは東北
武偵高の強襲科に居たぜ。出身中学は東北武偵高附属中学校だ。ま
あよろしくな」

あ？

オレはゆっくりと顔を上げた。

東北武偵高附属中学だと！？

オレと同じ中学を卒業してんじゃねえか！？

つまりオレはアイツを知ってると言つことになる。

今から三年前…三年前…

覚えてるはずがねえ…だつて三年前だぞ？

「……ん？あ！！良く見たらお前、朱雀じゃねえか！！久しぶりだ
な」

オレと目が合った彩が1番後ろにいるオレを指差して喚く。

オレはびっくりして椅子からずり落ちる。

ガタンっ！！！！

その音で皆、オレを見る。

やけに視線が痛かった。

さすがに棗先生も驚いていたようだった。

「彩くん？朱雀くんとはお知り合いですか？」

「ん？何言うんだよ棗ていーちゃー 朱雀は中学時代、オレとコンビ組んでたんだぜ？」

「中学時代…つまり…朱雀くんも東北武偵高附属中学の卒業生って事ですか！？」

「おいっ！！大事な生徒の出身校、今まで知らなかったのかっ！！」

思わずオレはツツコミを入れた。

ああ、どうなるんだろっ…

オレの最後の高校生活…

その日の放課後。

オレは男子寮に歩いて帰る途中、今日から正式にクラスメイトとなつたチャライ男・彩に再び出くわした。

当然の事ながら昔からのパートナーであるとはいえ、今現在までコンビを組んでるつもりなんてさらさらない。なのに彩はやたらとオレに絡み付いて来る。

「懐かしいよな…まさか朱雀に会えるなんて思ってもいなかったぞ？朱雀？」

「…また過去の話か。そんな事は今のオレにとってどうでもいい事だ。一つ忠告しておくが彩？オレと絡んでるとろくな事ないぞ？」

「昔から知ってるさ。だからこうやって絡んでるんじゃない。」

「あんな目に遭ってもまだ懲りないのかお前は…」

夕暮れ時で日が傾き始め、辺りの景色が陽炎のようにぼつかりと赤く浮き出る。

そんな幻想的な雰囲気の大通りを二人は並んで歩いていた。

たしかに中学二年生の時代、この楽天的思考野郎と初めてコンビを組んで校内一、二を争うくらいまでの名コンビへのし上がり、先輩やら後輩やら学校全学年を巻き込んで模擬戦闘なんかをよくやっていた。

ふと、任務任務に明け暮れていたオレは昔の楽しい思い出が頭から抜け落ちていた。

自暴自棄になつていたオレの唯一楽しかったあの頃の思い出。

それが世知辛い時代の荒波で揉みくちゃにされてすっかり色褪せていた。

現実から逃避するのは簡単。
ただど知らなくて良いところまで知ってしまったんだよ。
オレ、鳳凰院朱雀と言う人間は。
それでなにもなかもやる気をなくしていたのだろうか。
多分、それは嘘だ。
それじゃあ自分自身、納得がいくわけない。
もどかしい気持ち胸の奥からじんわりと込み上げて来る。

「んじゃまた明日な彩……」

「おう 遅刻すんなよ相棒」

オレ達は男子寮の入口で別れの挨拶を交わすと別々な方向に向かった。

オレの部屋は3階の1番突き当たりの部屋だ。
南側の窓からベランダに通じており、日当たり良好でだだっ広い。
もとは5人共同で使う部屋なのだが、日が進むにつれてまた一人、
また一人といなくなっていき、とうとうオレ一人になってしまった。
まあ一人で使うのが勿体ないくらいの広さだ。
儲けたと言えばそういう事になる。

いつものように部屋の入口のドアノブに手を掛けようとした時、ふと違和感と殺気を感じたような気がした。
いつもとは明らかに何かが違う。

誰かがオレの部屋にいる……

そんな感じがした。

今までの中で予想だにしない展開だった。
生唾を飲み込み、右胸のホルダーから左手でGLOCK35を取り出し、ゆっくりと構えて扉に背を付ける。
微かに人の気配を感じる。

オレはそのままゆっくりとドアノブを右手で握り、そのままスツと手前に引いた。

「誰がガキンチョよ！！！！風穴開けるわよ！！！！」

アリアは素早く黒銀のコルトガバメント抜き放った瞬間、それよりも早くオレは左手に握っていたGLOCK35を構えて引き金を二回引いた。

轟く銃声、噴き上がる硝煙。

アリアが構えていた二丁のコルトガバメントが弾き飛び、フローリングの上をガチャガチャと音を立てて転がる。

アリアは豆鉄砲を食らったように目を丸くした。

「…………オレに銃を向けるな。…………条件反射で銃を撃ち落としてしま
うから。」

「なによ…びつくりするじゃないの…さすがは『漆黒の魔弾』ね？」
「空想の人物じゃないのか？それは？」

「惚けないで！！あんたでしょ？教務科に行っているのとあんた
の事を調べて来たのよ？」

「へえ。それで何がわかったのさ？」

「簡単なことよ。知ってるかぎりでは入学試験の模擬戦闘で生徒に
紛して監視していた教官7名を含め、参加していた他の生徒全員を
トラップを使わずに開始10分たらずで一掃してSランク評価を貰
う。それ以降も評価は変わらずそのまま進級していくのよね。まる
で生れつき武偵の素質がある天才そのものよあんたって人間わ。」

「…………褒められても何も出んぞ？つーかオレは天才じゃない。傍か
ら見ればオレは“天災”だ。たしかにオレはSランク評価を貰って
いるけど『漆黒の魔弾』つーあだ名はない。この悪魔みたいな身
体能力のせいで誰も寄り付きゃしない。」

「ふーん。でもあたしにはもう時間がないの！！お願いだから協力
してー！！」

「…………ことわる。オレって野郎はアリアみたいな女とは釣り合わな
いし、第一にアンタに協力する理由も明白じゃ^{わけ}ない。したがってオ

レはアンタの“ドレイ”にはならない。これで気が済んだらとつと帰ってくれ。」

アリアは気に食わない顔をしてオレを睨む。
全然怖くないってアリア。

むしろ可愛いから。

そんな事を考えながら、リビングに行こうとしたときだった。

アリアはオレに向かって喚いた。

「意地でもアンタをドレイにする！！スザクがドレイならなら長期戦に持ち込むまでよ！！」

「長期戦？」

「そう！！スザクがドレイになるまであたしは帰らないんだから！

！」

「いゝ！？」

手に持っていたアタツシケースを見せてアリアはそう喚く。

前々からそのアタツシケースが気にはなっていたが、

まさかあれが宿泊セットだったとは。

つーことはお泊りか！？

……………どこまで本気なんだか。

しかしこんなことで動揺するオレじゃない。

オレは冷めた声色でアリアに言い返した。

「どうぞ御自由に。もとは5人部屋だからベッドだつて多いし。ただしオレはお前のドレイなんかならないからな？勝手な解釈だけは止めておけよ？」

「臨むところよ！！覚悟なさい、アンタが漆黒の魔弾つてことを暴

「いて見せるんだから!」

アリアの悔し紛れの叫びがフローリングの廊下に響き渡った。
やれやれ……。

先が思いやられるよまったく……

これからどうなるんだろう?

今年で最後の高校生活は……(T・T)

突然部屋に転がり込んできたアリアと言い争って2時間が過ぎた。ようやく話が尽き、二人の間に長い沈黙が流れていた。

腹の虫がカエルのように鳴き上げる。

さすがに腹が減ってきたのでオレは飯を買いに近くのコンビニエンスストアへ行く事にした。

オレの部屋の冷蔵庫は伽藍洞。

ジューズ一本すら入っていない。

……冷蔵庫の意味がないよな？

電気代が無駄になってるねこれは。

だったら置くなって話だ。

そんなくだらないことはどうでもいい。

さてと… 今晚は何を食べようかな…

「ねえスザク？」

「なんだよ…」

「桃まんつて売ってる？もし売ってたら買ってきて欲しいな」

「……………自分で買いに行け。なんでオレが赤の他人の飯を出さなきゃいけないんだよ…」

「良いから買ってきて！ドレイでしょ！…」

「厭だね。食いてえなら自分で買ってこい。」

冷たい口調でそう言うとオレはゆっくりソファから立ち上がり、玄関口へ向かった。

アリアは再びこつちを睨んでいるのがその視線でわかった。

知るか？……………

オレは内心そう呟くと、ドアノブを捻って扉を開けた。

闇のように真っ暗な夜空。

星すら見えない。

それに一つでも星が光っていて欲しいな。

まるでオレの心みたいじゃねえか。

そう思いながらオレは夜の街道を歩いていた。

結局、買ったちまうんだよな。

わりとオレってこういうのを無意識にやってしまうんだ。

桃まんを入れたビニール袋を左手に、トボトボと家路に着く。

こういうのって優しさっていうらしい。

あまり実感は湧かないが、どうしてもああいうのは気にかかってしまう。

オレってという人間はそういうところが未だによく分からない。

ふと、携帯のスピーカーからオレ好みのアーティストの着うたが流れる。

どうやらこうやらメールのようだ。

フリップを開けてディスプレイを覗く。

宛先は不明。

このアドレスは…おそらく携帯じゃないな…

パソコンか？

届いたメールを開き、見てみると本文にはこう書いてあった。

どうもはじめまして

こんな夜遅くにすみません m () m

私は貴方と同じ東京武偵高に所属する探偵科二年の峰 理子と言います

実は入学当初から1番キツイという強襲科で大活躍中の先輩である貴方の事がとても気になっていました。

つきましては後日、お会いしてその美しいお顔を一度お目にかかれ

たら大変嬉しいかぎりです。
もちろん、タダでは言いません。
今、貴方がお望みのものを用意して屋上にてお待ちしております。
もしよければメールでお返事をしていただけるとありがたいです。
用件は以上ですが、出来ればこのメールの事はご内密にお願いします。
です。
では、ゆっくりとおやすみなさいませ

今、オレが望んでいるもの？

その言葉がオレを惑わせる。

結局、見当は見つからないままだ。

……峰 理子……か。

名前からして探偵科インクスタで一つ年下の女子というのは分かっている。

確かその学科には遠山っていう奴と一緒にだったな。

しかし…物好きな女の子だ……

あれだけビビって誰も近寄りもしない人物にあえてアピールしてくるとは。

まあ、所詮結果は見え透けてるし。

まったく興味が湧かない。

今でさえ神崎・H・アリアとかいうわけの分からん女に付き纏われてるっつーのに。

でも今オレが望んでいるものって一体なんだ？

気になって仕方ないなまったくもう。

暗い夜道を携帯のディスプレイにメールが表示される。

オレはゆっくりと亀のようなスピードで歩く。

部屋に帰ってくると居間にはもうアリアの姿はなかった。

おそらくは諦めて帰ったのだろう。

まったく嵐が通り過ぎて行ったようだ。

一難去つてまた一難。

桃まんなどという普段は食わないものを無駄に買ってきちゃったじやないか。

はあ……………

ん？

あれ？

アタツシユケースがある……………

忘れて行ったのか？

……………

いや、用意周到な奴なんだ。

忘れるわけがない。

……………まさか……………ね？

笑えないわよまったく。

湯舟に浸かりながらアリアは呟いた。

朱雀が買物に出掛けたので、頃合いを見計らってアリアは風呂に入っていた。

アリアが見たあの瞬間が再び脳裏を掠めていく。

たしかに朱雀は強い。

いや、強すぎる。

そう訂正せざるおえないほどに強い。

複数台のUZIから放たれた複数の弾丸をたつた10発の.45ACP弾で複雑に跳弾させた挙げ句、跳弾させた弾を見事にUZIの銃口に着弾させUZIをすべて爆破。

人間が成せる技とはとても言い難い。

その技量はおそらくほぼ神に等しい。

亜高速で飛び交う弾丸を意のままに操っているようにしか、アリアの目には映らなかつたようだ。

あんなのを目の当たりにさせられ、「漆黒の魔弾」を否定する朱雀ってありえないわ。

アリアは突然襲ってきた自分の不甲斐なさにじたんだを踏んだ。

自分がコルトガバメントを二丁、構えるよりも早く相手に撃ち落とされるなんて今まではありえなかつた。

あれでは完全に自分の敗北だ。

それだけは意地でも絶対に認めたくない。

そしてなんとしても朱雀を自分のパートナーにしたい。

しかし会ってみて感じ、取っ付きにくい印象が今も残っている。

性格も理想より遥かに悪かつた。

でも朱雀には人には見えない力があるのかも知れない。

吸い込まれそうなほどに透き通る黒い瞳。
闇のように深く冷たい黒い髪。
彼を助けようとして私が助けられてしまった。

「はぁ…何やってんだか…」

ため息をつきながら、私はそう呟いた。
不甲斐ない自分に苛立ちを隠せない。
そんな自分が凄いもどかしかった。

湯舟から上がる湯気。

濡れるカメリア色の髪と格子状の白タイルの天井。

蛇口から滴り落ちる水。

異様な静けさのなか、微かにアリアの好物である桃まんの甘い匂いがした。

「桃まん!？」

アリアは風呂から飛び上がり、すたすと風呂場から出て更衣室でパジャマに着替える。

そのまま急いでリビングに向かうと、冷たい錆色のテーブルにコンビニのロゴが入ったビニール袋が二つ置いてあった。

そのうちの一つから、桃の仄かに甘ったるい匂いがする。

おそらく、朱雀が買ってきてくれたのだろう。

「なによ。結局買ってきてくれてるじゃないのよ。」

ふと気がついたらそう呟いていた。

「悪かったな?別に買うつもりはなかったけど、冷蔵庫になにもないのに腹減ったって言われたら困るからさ。」

アリアは目の前の黒革のソファーに朱雀が横になっていたことに気がつかなかった。
きゅっ、声を上げてアリアは後ずさる。

朱雀はクスツと薄い笑いを浮かべ、ソファーから上体を起こす。

……………？

アリアはそれを見て違和感を感じた。

朱雀は黒の無地の袖無しTシャツを着、藍色の半ズボンを履いていたのだ。

武偵高の真っ赤な制服姿の朱雀しか見ていなかったアリアはその格好に違和感を感じたのだろう。

眠そうに瞼を擦る朱雀はどこか少年のようなあどけなさを残していた。

「ふあゝ…………。いつまで他人ん家の風呂に浸かってんだよ？お蔭様で風呂に入りそびれて寝るところだったろが。」

朱雀はそう言いながら起き上がり、アリアの横を通り抜けて行った。その時、アリアの目には微かに服の下から盛り上がる大きな傷が見えた。

ほぼ胸の中心に浮き上がる刻れたような深い十字を描くの傷痕。それから目を逸らすほどグロテスクで凄い痛々しかった。

「その桃まん食べて良いぞ…………今から風呂に入ってくる…………どうした？」

「その胸の傷痕…どうしたの？」

「ああ。服着ても見えたか。これはちっちゃいとき事故った時の傷。大丈夫。すでに完治済みだ。」

「そつ……………」

笑顔でそう言うと朱雀は更衣室に向かった。
その夜、アリアの脳裏にはその傷が焼き付いて離れなかった。

土砂降りの雨。

辺りを潤す、いや、水浸しにするほど凄い大雨だった。そう。

オレが初めて任務に失敗し、この時に致命的な大怪我を負った。胸を刺る十字傷。

これは初めて自分が“仲間”を守るために負った怪我だった。東北武偵高等学校附属中学校二年生の頃。

当時オレは彩とともに、Aランクの任務に借り出されていた。彩はもともとAランクだったのでこの任務を受注していた。

急を要する任務だったので彩の身近にいたオレも任務に同行することになった。

当時から異才を放っていたオレは、なんの苦もなく任務同行を承諾した。

任務の内容はこの学校の生徒が乗るバスジャックの解放。有名な俺達の事だから任務は成功と思われていた。

「朱雀。準備はいいか？」

バスの背後からバイクで二人乗りしながら追跡する彩と朱雀。ヘルメット越しに彩は朱雀に問う。

朱雀は後部席から立ち上がり、スナイパーライフルの定番であるPSG-1を構える。

「嗚呼。バッチリ見えるぜ。獲物がよ。」

標準器無し（ノースコープ）でPSG-1を構える朱雀はそう言う。

前も見えないほどの土砂降りの雨のなか、朱雀は目視で狙撃を行うと言っただ。

朱雀はふうと呼吸を整えると、バスの右後輪を目掛けて銃口を構え、静かに引き金を引く。尾を引く一発の銃声。

放たれた弾丸は反れることなく、吸い込まれるようにタイヤに着弾。バスはコントロールを失い、コンクリートの壁に激突して停車した。急いでバイクを止めて、バスに駆け寄る。

するとバスジャック犯達は止まったバスを盾に銃で応戦してきた。そこで激しい銃撃戦が幕を開けた。

射撃があまり得意ではなかった彩はバスに接近して人質の救助をするように言っておいた。

武偵は如何なる場合でも、人質の救助を優先するのがルール。

オレは一人で土砂降りのなか、雨に濡れながら反撃をしていた。

何故かオレが放った弾丸は反れることなく目標へと到達する。

気がついたらバスジャック犯達は壊滅していた。

オレはバスに到達した彩と合流するため、PSG-1を肩に掛けてバスに駆け寄る。

どうやら、怪我人は出なかったみたいだ。

しかし、そこには想定もしていなかった現実が待っていた。

皆が出れるように誘導している彩に背後から、ナイフを振り回して突然襲ってきた生徒がいた。

オレは彩を庇うために間に割り込んだ。

「彩ッ！！後ろだっ！！」

どん！！

彩に体当たりをした後、オレは迫り来るナイフの切っ先の餌食になった。

胸を引き裂くナイフの十字斬り。

欠かさず跳んで来る蹴りを瞬時にかわし、ベッドから転げ落ちる。

「朝からなんなんだよアリア!!」

「良いから!!遅刻しちゃうじゃないのよ!!」

「え……………」

「えじゃない!!急いで着替えるこのバカ朱雀!!」

「はいはい!!」

朝からうるさいなあ……………まるで訓練所と変わらないじゃないか……………

オレは渋々目を擦りながら制服に着替え、アリアとともにバスの停留所へと駆け出した。

三年A組

ぎりぎりセーフ…

どうやらこうやら遅刻は免れた。

SHRの時間までには間に合ったようだ。

オレはいつものように席にどっかりと座ると、大きくため息をつく。
畜生。

朝メシ食ってくりやよかった……

そう思った時、不意に後ろから誰かにひっぱたかれた。

「いよう ご機嫌麗しゆう相棒どの」

「なんだ…彩か…朝から五月蠅い奴だな…」

「五月蠅いって失礼な!!ハイテンションって言え!!」

「どっちにしるハイテンションなのは変わり無いだろう。相変わらず馬鹿だな。」

「ちえっ…ツれねえやろうだ。今じゃお前、学校中で有名だぜ?」

「何が?」

「一つ下の学年に転校してきた女の子いるだろ?緋色のツインテールの。確かなんてつたっけな…」

「神崎・H・アリア」

「そうそう。お前あいつとどっという関係よ?ん?」

……

先が読めたぞ今ので。

だいたいこうなると次に来る言葉も予想がつく。

「まさかあのツンデレとお前、デキてんのか？」

ほらな？

そうだろう？

そういう恋愛沙汰は苦手中の苦手。

今のオレにとってあのちびは関係の無い、赤の他人だ。
別に付き合ってるとかそういうのじゃない。

「バカ言つなよ…誰があんな不細工なんかとオレがデキてるっていうんだ？」

「へええ。オレは充分可愛いと思うけど。んじゃ朝、一緒に登校してきたのはどう説明するんだ？」

「たまたまバスが同じだっただけ。ほかに理由があると思うか？」

「ふーん。まあ他人の恋愛事なんてオレにはどーでも良いけど。」

「んじゃ初めから聞くなよ…バカタレめ！！」

「あぐつ！！！！いつてえな！！殴ることないだろ！！学校中で噂されてたみたいだから、本当か気になってサ。」

「なんだよそれ…」

うわー……………

噂されてたのかよ……………

誰かみてみたいだな。

早く誤解を解かなくてはいけない。

オレは頭を抱え、机に肘を付ける。。

アリアに聞かれてたらまず銃殺刑は絶対免れないだろう。

いくらオレが漆黒の魔弾とはいえ、いつあやつに殺されるか分からないからな。

まずそうなる前に手を打っておくべきだ。

さてとどうするか……………

「す・ぎ・く・くん」

「いま話掛けるな。オレにとって重要なことを真剣に考えているんだから……」

ん？

今の声は？

オレはゆっくりと首を右に捻っていく。

そこにはクリーム色の髪を腰まで伸ばし、後ろで一本に結っている一人の美少女が凄みを放って立っていた。オレの顔がとてつもない勢いで引き攣る。

「やあ（。・。・。）ノおはよう舞。」

「何がやあよ！！さっきの話はどういうこと！！」

「げ！？聞いてたの！？」

「回りに筒抜けよ！！！！」

「それはなんかのご、誤解だ！！オレは別にアリアなんか知らないし……」

語尾がだんだんと小さくなるオレ。

嗚呼、なんて情けない。

怒りを撒き散らす美少女な彼女は白百合しゅりゅう舞まい。

この学校に来て、初めて会話した人物が彼女だった。

それ以降、“ある事件”をきっかけに普通の話し相手として仲良くはなるのだが、何故か彼女の中ではオレが彼氏になっている。

おそらく彼女の妄想に過ぎないだろうが、こっちからすれば良い迷惑だ。

とりあえず自分のネバーランドにイってもらうまで彼女を落ち着かせなければならぬ。

暴走すると誰も手が付けられなくなるからな。

その切なる思いを胸に押し込めて、始まった1時間目の授業をオレ
はがむしゃらに受けていた。

ACT 2・思考交錯〜Double fake〜

放課後の屋上

とりあえずオレは真面目に授業を受けて昨晚、連絡があつた通り屋上へ来ていた。

もちろん、このことは誰も知らない。

屋上の入口のドアを開けると、薄いクリーム色の髪をクルクルとカールさせ、なにやらスカートにひらひらさせたモノを付けた改造制服を着た美少女がオレを待っていた。

「アンタが……峰 理子か？」

「はぁ〜い アタシが元気いっぱいなの理子りんですよ〜」

「……………」

なんだコイツわ…………

謎のポーズをする理子。

オレはそれを見てドン引きした。

可愛いのかはたまたキモいのかさっぱり分からない得体の知れないモノ。

昨晚のメールの文から見て取れる印象とは全然違う。

それにオレはかなりビビった。

っ！かあれか？

今、秋葉原で流行っているオタクとかつて奴か？

……………ならオレはパスだ。

オタクの分際ならストーカーちびツインテールと妄想変態自殺願望女だけで充分。

もうそんなこんなでうんざりしてるよ。

「…ふーん。ホントに綺麗な目と綺麗な顔立ちをしてるんだねえ
うふ 理子りん、朱雀のこと気に入っちゃった」

「……んなのはどうだっていい。オレを呼び出した理由はなんだ？」

「うふふ 言うと思ってた あの変なちび娘に付き纏われてるんで
しょう？」

「ああ。」

「だから、あの子のこと理子りんが勝手に調べてあげたよ 素性を
知ってた方が何かと楽でいいでしょ？」

「素性？…誰も頼んでないのに…」

「名前は知つての通り神崎・H・アリア。貴方と同じ強襲科でラン
クはSでイギリスで活動していた時は無敗。二つ名は『双剣双銃の
アリア』ね。二丁拳銃と小太刀二刀流を使いこなす。近接戦闘にお
ける戦い方はバーリ・トワード。こっちに来てからは一つしか事件
を解決していない。今分かつてることはそれくらいかな」

「……なるほど。通りで強いわけだ。」

「ね 結構役に立つでしょう」

「とりあえずはサンキューな。」

「どういたしましてえ」

抱き着こうとする理子の頭を押さえる。

理子は抱き着けないままもがく。

「そういう馴れ合いは大っ嫌いだ。やめてくれよ。」

「え……」

「用はこれだけなんだろ？んじゃもう帰らせてもらうよ。ある意味
此処にはいつまでも居られないからね。」

そう言いながら入口へと向かうオレ。

それをただ見つめる理子。

オレの姿がなくなると理子は薄い笑いを浮かべる。

「なるほどねえ 鳳凰院朱雀かあ 多分、キンジと同じ類いの能力
を持つてる者なのかな よし 帰ったら早速インターネットでサー
チだ
」

理子はそう呟くと、入口をくぐり抜けて階段を降りて行った。

『双剣双銃のアリア』か……………

アリアは何故武偵になったのだろうか。

それほどまでにして求めるもの、目的はあるのだろうか。

ふとそんな事を考えながら、帰りのバスの最後部席でそれに揺られていた。

オレが武偵をやってる理由は特にない。

ただ、オレが居るべき場所、オレが居るべき世界は此処だと決め付けて今という死と隣り合わせの生活してきた。

だからなにかのために、目的があって武偵になったわけじゃない。

自分の居場所探し、とでも言えるか。

つまらなくてもそこがオレの居場所。

少なからずそこで落ち着いている自分を幾度となく見てきた。

しかし、そんなアリアを見ると、自分の生きがいは何だろうと感じる。

そもそも生きがいなんてないよなオレ。

とりあえず生きてりゃなんとかなる。

そんなに簡単じゃないっつーの。

わかっていてもそうなる自分。

これじゃあ救いようがない。

ため息混じりに視線を上げると、バスの天井に貼られているマクドナルドの広告が目がいった。

そういえば、この頃ファーストフードなんか滅多に食べなくなったな。

久しぶりに食いに行くか。

さてと誰を誘おうかな……………

携帯電話を取り出し、呑気に電話帳を見ていく。

クラスで中が良いのは彩と舞、あとは……………

……！？

あれ？

『神崎・H・アリア』って……

…コイツの番号、登録した覚えがない。

まさかあの野郎…勝手に人の携帯に…

その直後、携帯電話が振動し始めた。

学校にいる間は着信音が鳴らないようにマナーモードにしていたのだ。

相手はもちろんコイツだった。

オレは渋々、通話ボタンを押してスピーカーを耳に当てる。

「もしもし。」

『遅い！！今どこにいるの？』

アリアの金切り声が電話のスピーカーから漏れる。

辺りの客は驚いてオレを見ている。

オレは苦笑いを浮かべながら、皆に一瞥した。

「あんまりでけえ声出すな…オレの鼓膜が破れちまう。こっちは今、学校帰りのバスの中だ。どうしたんだ急に？」

『特に理由はないわ。ただ…どこにいるか気になって。』

「しょうもねえな。他に用は？」

食いに行くのに誘おうかと考えたが、ろくな事がなさそうだと思い、誘うのは断念した。

『用はないって言ってるでしょ！！それより早く帰って来て！！お腹すいた！！』

「カップ麺なら台所の棚の下にある。オレが部屋に戻るまでそれでも食って大人しく待ってる。」

「ちょっと…奴隷がご主人様に命令する気？とりあえず早く帰って来て！！」

「誰が奴隷だ。お前の下に付いた覚えなんてねえ。……イタ電なら遠慮なく切るぞガキンチヨ…」

「ガキンチヨ！？言ったわね…帰ってきたら覚えてなさいよ変態！！」

「誰が変態だよおでぼちん。アリアに何されるかわからないから今日はお泊りして来ようかな」

「う……二度と帰ってくるな！！帰ってきたら殺す！！」

ぶつ…………。

おいおい…冗談なのに厭な切り方するな…
まあ良いさ。

別にあんなのと一緒になんて居たかねえし。

寂しく一人でマツクを食いに行くか。
かえってその方が良いかもね。

そんな事を考えながらオレはバスを途中下車した。

とりあえずマクドで夕飯を済ませた朱雀は再び帰路についた。

バスで帰ろうか、と考えたがそんな気分ではも無いし、むしろけなしの銭を使うのはもつたないから歩いて帰る事にした。

デジタル腕時計の液晶画面には四角いデジタル数字でPM 9時56分と表記されている。

アリアの事だからおそらくもう寝てる頃だろう。

ギヤーギヤー騒ぐ仔犬が寝付いてくれたらとても助かる。

外灯が眩しく光る町並みを抜け、いつものように寮の入口に入る。階段を上がり、ドアの前に来た時だった。

何かがぶつかつたような音が聞こえた。

それを気のせいにしたかつた。

もう疲れたから寝させてくれ。

そう叫びたい。

ゆっくりとドアノブを握り、ドアを開けると凄まじい光景が目についた。

なぜかアリアと舞が喧嘩していたのだ。

凄まじい銃弾と剣撃の嵐。

理由はどうであれ、この状況の密室に居たらまず死は確定事項になつてしまう。

確か舞は超能力捜査研究所（SSR）でサイコキネシス念力を使う超能力者だ。

その念力の強さはずば抜けて高く、本気になつたらオレやアリアでもおそらくは敵わないと思う。

「早く“私の”朱雀から離れなさいちびー!!」

……あの……

ひとついいか？

何を賭けて争っているんですかあんだ達は？

もしかしてオレとか言うなよ……

オレは激戦区であるリビングの扉の前でうずくまって中の様子を見ていた。

ああ…… オレの真新しいCDコンポが……

この間、やっとなけなしの金を貯めて買ったCDコンポが無残に鉄屑と化す。

そんな事は二人とも構いなし。

縦横無尽に暴れ続けている。

舞の回りに台所に置いてあったナイフやら包丁やらがまるで生き物みたいにフワフワと浮いている。

それがアリアの首筋目掛けて飛び交う。

アリアも負けじと黒銀のガバメントを二丁構え、45ACP弾を飛び交うナイフに向けて撃ち続けている。

懲りないアホ女だな……

撃ち落としても撃ち落としてもまた延々と浮き上がって来るだろう。ちよつとは考える馬鹿。

自分の出る幕がないのは分かりきっているが、このまま見過ごすとこの部屋にはいれなくなる。

なんとしてでも止めなくては。

オレはゆっくりと右胸のホルダーに収まっているGLOCK35のグリップを左手で握る。

扉のノブに右手を掛け、30。ぐらい開けると勢いよく中に駆け込む。

立ち上がると同時に轟く銃声が一発。

しかし銃口から撃ち出された弾丸はそれぞれ二発。

びっくりして止まった二人のこめかみギリギリに弾丸を撃ち抜く。

類似稀に見る高速射撃。クイックドロウ

二人は完璧に硬直して動かなくなった。

「何やってんだよ…人の部屋で…」

オレは疲れたように呟き、GLOCK35を右胸のホルダーに収める。

すると再び二人は言い合いを始めた。

一体何が原因なんだよ…もう…

「うるさいうるさいうるさい！！夜なんだから少しは周りの迷惑も考える！！一体何があったんだよ二人とも？」

まるで猫の喧嘩ようにギャーギャー吠え合う二人を黙らせ、オレはこうなった原因を二人に聞いた。

「私はいつものようにこの部屋でアンタの帰りを待ってたのよ。そしたらチャイムが鳴ったの。出てみたら案の定この女が鍋を持って立ってたってわけ。」

「なるほど。舞は何故よなよな俺ん家に来たんだ？」

「カレーライスを作ったんだけど、いつもより多く作っちゃったからおすそ分けしに来たの。そしたらこのちび女が朱雀の部屋に居るんだもん。つーかこの子は誰？」

「誰がちび女ですって！！私は神崎・H・アリアっていう立派な名前があるのよ怪物女！！」

「怪物女ですって！？生意気な中学生ね！！」

「……舞。このちびは高校生だぞ。」

「かざあ「な」「」

風穴開けるわよ、と言いながらガバメントを抜こうとするがそれより早くGLOCK35を抜いたオレが呆気なく言葉を遮って銃口をアリアの額に向ける。

その時だけ「な」の声がアリアと重なったのだ。

アリアはとても悔しそうにじんだを踏んだ。

舞はアリアが高校生と知り、驚愕の色を隠せなかった。

まあ傍から無理もないだろう。

「ちなみにコイツが二年のクラスに転校してきた噂の転校生だ。オレに小判鮫のように引ッ付いてきあがる。まったく参ッちゃうよ。」
「悪かったわね小判鮫で。朱雀が大人しく私の奴隷になれば済むことよ。」

「……………奴隷!?!」

……………
今の舞のリアクションから想定するとやっぱりSM系めいぢにいくか。

この状況、オレにはどうしようもない。

なぜならコイツがそう言ったからだ。

いつもほぼ一緒に居るのは認めたくない事実。

さらに相乗効果でコイツが鳳凰院朱雀奴隷発言をする。

もう完璧にオレには逃げる言い訳が出来ない。

今まで恋愛沙汰を避けてきたオレとアリアにとってはある種の危機的な状態だ。

それで変に勘違いされているとなると、学校には行きづらくなる。

肩を落として椅子に寄り掛かりながら、そんな事を考えていると背

後に凄まじい殺気を感じた。

振り返りたくはない。

オレの本能がそう囁いている。

振り返ったらもうオレの人生最期だ。

「……………私の理想の朱雀くんにそんな破廉恥な事を教えていたのね…

神崎・H・アリア!?!」

「は?何の事よ?」

「問答無用!!切り刻んでくれるわ!!」

「ヤベー…マジギレしあがった…」

こうなってしまったらどうしようもない。

仕方ないので一度頭をクールダウンさせるか……
サイコキネシスをフルパワーで使おうとする舞。
なんとも言えないオーラが舞を包みあげる。

身軽なオレは素早く舞の前に移動すると、目にも留まらぬ速さで舞の腹を殴る。

むろん、遠慮はしていない。

今まで部屋を散々破壊したお返しだ。

舞は一瞬で意識を寸断され、ゆっくりと床にひれ伏した。

「助かったわ…朱雀。一時はどうなるかと思ったわ。」

「礼なんていらん。まずこんなのに巻き込まれなくなったらオレの部屋から早く出てけ。二度と戻って来るな。」

「嫌だ。奴隷にするまで居るもん。」

「それとオレにはもう今後とも一切、関わるんじゃねえ。お前にはもううんざりしてんだよ。」

「え……」

「目障りだからオレの前から消える。人の生活めちゃくちやにしあがって…誰が貴様の奴隷になるか。」

「う……」

アリアはもう泣きそうだった。

女の子の泣にはとても弱い方だが、今回ばかりは怒り心頭しきっていてもう相手の事なんか考えられなかった。

さらにオレは半泣きのアリアに追い撃ちを掛けた。

「もういい加減に出ていってくれ…お前がオレを必要とする理由はどうであれ、オレはお前の相方パートナーになんかなる気は毛頭ない。お子ちゃまみたいなくせに偉そうな口ばかりたたきあがって。だからお前が求めている相方が一人もできないんだ。出ていく気がないなら力付くでも立ち退いてもらうからな？」

オレは冷たい口調でそう言った。
アリアにはとどめだったのだろう。
アリアは勢いよく駆け出すと、扉を勢いよく開けて外に出て行った。
嫌われたな、と呟くと汗をかいたオレはそのそと風呂に向かった。
内心、後ろめたさが残っていたが、これで侵略者がいる生活が終わ
ると安心していた。

シャワーを浴びながらオレは過去に思いを巡らせていた。

オレが武偵になったきっかけは家族の影響がとても大きかった。

親父の職業が公安零課、俺ん家の家族はとても複雑で、再婚した母方の息子でオレの義兄である鳳凰院清隆ほうおういん きよたかは今のオレと同じ一流の武偵として多方面で活躍していた。

どちらかと言えば、親父よりも清隆兄さんの影響が大きいような気がする。

しかし、今から五年前に不慮の事故で短い生涯に幕を閉じた。

当時、清隆兄さんは18歳だった。

今生きていれば、23歳の立派な青年になっているだろう。

その不慮の事故っていうのが地下鉄ジャックでの銃撃戦だった。

死因は味方の誤射で、味方が放った弾が左胸を貫通したらしい。

防弾チョッキを着ていたがほぼ即死だったそうだ。

その訃報を聞いた時、オレは絶望した。

今でもそのシーンが鮮やかに脳裏に蘇る。

清隆兄さんは銃の名手として業界では有名で、放った弾丸を自由自在に操る事ができる。

跳弾、高速射撃、曲射、弾丸跳弾などオレが清隆兄さんから教えてもらっただけで数十から数百を超える。

飲み込みが早かったオレはみるみるうちに技を覚えていき、ついには清隆兄さんと肩を並べるような実力者になった。

今のオレがあるのは清隆兄さんのおかげなのかも知れない。

『天賦の才と“あれ”を持つお前なら今のオレを超えられるぞ朱雀。いずれは二つ目の名前までもらえるさ。そうだな…例えば“魔弾”とかね。まあなって見れば分かるよ。』

死ぬ前日の日曜日。

いつものように笑顔で彼はオレにこう予言した。
そして彼が予言した通り、オレは見事に今に至っている。

“あれ”とは今でもよく解明されていないのでとりあえず使うべからず。

当時、オレはとても不思議な気がした。

「おっといけねえ…長風呂しすぎた…」

思い出と湯舟に浸かりすぎて意識が朦朧とする。

オレはゆっくりと湯舟から上がると更衣室で手早く着替え、ドツカリとベッドに横になった。

明日も学校だ…寝よう…

目を閉じるとすぐに闇が襲う。

睡魔に逆らわず、オレは深い闇の中に溶けていった。

翌朝、オレは学校に着くな否や直ぐさま任務に借り出された。任務の内容はバスジャックされたバスの中から人質を全て救助すること。

しかもそのバスは武偵高の生徒が乗っているバスだ。とても嫌な予感がオレの脳裏を過ぎる。

この任務にオレを連れ出したのは、昨日喧嘩した後どこかへ逃走した神崎・H・アリアだった。

まずそれはおかしいだろう？

オレじゃなくとも優秀な武偵ならもつと別にいるはずだ。

少なくともアリアとは一緒に任務を受けたくはない。

まあ棗先生を介して連絡が回ってきたので仕方なく受けることにしたのが現状。

しかもオレの他に二年生で狙撃科でSランクの狙撃手のレキ、同じく二年生で探偵科の遠山キンジ、そしてピンクのツインテールを風に靡かす強襲科のアリアが校舎屋上のヘリポートで待っていた。

オレは何故、探偵科のキンジがここにいるか気になって仕方なかった。

「おはよう遠山。」

「おはようございます朱雀さん。お久しぶりです。」

「久しぶりだな。強襲科にいた頃以来だ。ところで何故探偵科のお前がここにいるんだ？任務の内容的に場違いだろう？」

「いやあ…これにはちよつとした訳がありました…」

キンジは隣に腕組みをして堂々と立つアリアに横目を向けて、すぐに視線をオレに戻す。

ああ…なるほど…

コイツもオレと同様に襲われたか。
ピンクツインテールの女の子に。

オレは苦笑いを浮かべてキンジの肩を軽く叩いた。
レキはただブーツと突っ立ってオレ達を見ている。

「お互い様、頑張ろうぜ遠山。頑張つてれば何とかなるさ。」

「ありがとうございます…。」

みな高校指定のプロテクターや防弾着、ヘルメットで身を包む中、
オレだけ学校の制服を着たままだった。

「スザク。防弾着ぐらい着なさい。流れ弾が当たっても知らないわ
よ。」

「おいアリア：朱雀さんはオレ達の先輩なんだぞ…。」

「大丈夫だ：オレだって流れ弾を貰うほどの馬鹿じゃない。それに
キンジ、オレはいつもそいつに呼び捨てにされてる。だから注意す
る必要はない。」

「そうなんですか朱雀さん？」

「そうよ。朱雀も私の奴隷なんだから、大人しく主人の命令を聞け
ば良いのよ。」

「アハハ：まだ奴隷になったつもりはないけどな。アリア。」

「いいの！！朱雀もキンジも私の奴隷なの！！わかった？」

「…いいえ。わかりません。」

名指しされた二人は、ほとんど同時にそう言い放った。

アリアはそれを聞いてむっとする。

まだ懲りてないみたいだなアリア。

オレは絶対に奴隷になんかなりたくないからな。

おそらくキンジも同意見だろう。

そろそろ任務が始まる時間だ。

みなへりに乗り込むと、へりはローターをフル回転させて上空に飛び立った。

へりは上空、依然としてハイジャックされた武偵高行きのバスへ向けて飛んでいた。

徐々に多数でパーティーを組んで動くことになったのだが、生憎、多数だろうが少数だろうがいつも単独で行動していたため、先攻し過ぎる癖がある俺は、今回だけは大人しくしていようと思っていた。どうやらパーティーのリーダーはちびツインテールが率先してやってくれるらしい。

とりあえず必然的にリーダーになるはずだった最年長の俺は、とやかく突っ込まないで窓の外に視線を向け、聞こえてくるアリアの話に耳を傾けていた。

「とりあえず狙撃手のレキはここで待機。そして私とキンジ、スザクが前衛^{フロントマン}をやるわ。文句ある？」

ちっ。

今回だけは暴れずに大人しくしてる予定だったのに、案の条、先攻しなきゃいけない負傷率No.1の前衛^{フロントマン}になるとはね。

まあ、アリアのことだ。

俺が前衛を降りるなんて言ったら承諾して貰えそうにないのはもう目に見えている。

嫌が逐うでもやらされる。

はあ…嫌だ嫌だ。

女の尻に敷かれたかねえよもう。

どうにかして、悪夢のような生活から解放されたいよまったく…

ちよんちよん。

ん？

誰だ？俺の肩を突つついたのは？
振り向くとそこには被害者その2の遠山キンジがいた。
何やら俺と話したいらしい。

「何だ遠山？」

「しつ。声がかいツス先輩。先輩もアリアと約束したんですか？」

「約束？何の？」

「1つでも事件を解決したら俺は強襲科に戻ってアリアのパートナーになるという約束をしました。もしかしたら先輩も1つでも事件を解決したらアリアのパートナーになるって約束ですか？」

「まさか。誰があんな奴なんかと。」

「そうですね〜…」

あ、ヤバい。

つい本音が出てしまった。

アリアから注がれる痛い視線から逃げるように窓の外へ視線を向ける俺。

やぶ蛇だったキンジはしまったと言わんばかりに顔を俯ける。

へりの中はもの凄く重苦しい雰囲気にも包まれた。

「見えました。」

窓の外を終始ずっと見ていたレキは、どうやらハイジャックされたバスを見つけたらしい。

「どこだ？」

「見えん…」

「100m先、今、交差点を右折しました。」

「よく見えるわね。視力は？」

「両目共に6.0です。」

さらっと超人的な数字をいうレキ。

俺たち三人は顔を見合わせた。

レキに言われた通り、武偵高の生徒を乗せたバスは交差点を曲がった。

しばらくしてようやくヘリがバスの頭上に来た。

俺たち三人はワイヤーを使って迅速に降下し、バスのルーフにしがみつく。

ルーフにスパイクを打ち込んでワイヤーを張ってラペリングの要領で体を安定させる。

よし、ここまでではOKだ。

後は車内の様子を調べ、生徒の安全を確保するだけだ。

「まずは車内の様子を確認する。遠山、車内の様子を見てきてくれ。」

「了解。」

「ちょっと！！私がリーダーよ！？勝手に動かないでちょうだい！？」

「アリア。アリアは車体の下に爆弾がないか確認してくれ。迅速にな。」

「だあかあら、私がリーダー……」

「つべこべ言うな。今は人質を救出するのが優先だ。自分の意見がどのこの言うてる場合じゃない。こんなことぐらい、Sランクの武偵なら分かるだろう？わかったらさっさと探せ。」

「……後で風穴……」

「はいはい、後で思う存分な。」

こうでも言わなきゃ、アリアは言うことを聞いてくれなそうさだ。

さて、俺はバスの周囲を警戒と。

しかし、走ってるバスのルーフってこんなに眺めが良いんだな。

いやあ、絶景絶景。

なーんて遊んでる場合じゃない。

俺は辺りに注意をしながら、不審な車両がないか探す。

ふう。

しばらく見回していたがどうやら不審な車両は見当たらない。すると、インカムからアニメ声が聞こえてきた。

『スザク！？』

「見つかったか？」

『ええ。例の武偵殺しの犯人が使っていたものと同じプラスチック爆弾よ。爆薬の量からして尋常じゃないわ。3500近くあるわね…バスどころか電車も吹き飛ばせる！！』

「わかった。とりあえずアリアはその解体を頼む。」

……ちっ……

何がお望みなんだよ…

武偵殺しの野郎は！！

悔しさと憤りが混じる俺の拳に力が入る。

目的が分からない以上は、阻止する手立てがない。

しかし、なんと少しでも皆を生かさなければいけない。

クソッ！！

そう思うと同時に、車内に居る遠山からも通信が入る。

『先輩、ある程度状況が掴めました。どうやら犯人はこのバスを遠隔操作するために、中等部の子の携帯電話をすり替え、音声で操作しているみたいです。また、速度を落としても爆発するらしいです。今、向かっているのはおそらく都心部だと考えられます…』

都心部…？

マズイなそれは…

関係のない人まで巻き込む気か！！

まったくどこまで人を殺せば気がすむんだよ外道野郎が！！

その時、ふと視線に誰も乗っていない車の姿が現れた。

車種はルノーか。

見た限り運転席にはずいぶん立派なUZIの台座がある。

しかも遠隔操作かよ！？

次第に無人車は速度を上げてバスに近づいてくる。

俺は右胸のホルダーから愛銃を抜き、ゆっくりと台座を狙ったが、

バスが不規則に揺れるため、バランスがなかなか保てない。

クソツ…バランスが取れない…

そして無人車がゆっくりとバスへ並行する。

UZIの銃身が動いたのがはつきりと見えた。

狙いは案の定、バスの中だった。

しかし、俺の愛銃は揺れのせいで狙いが定まらない。

しまった！？

「遠山！！皆を伏せさせる！！」

ガガガガガガガガ！！！！！！

耳をつんざくような乾いた連射音。

ガラスが飛び散る音と同時に車内から生徒の悲鳴が聞こえる。

体の血が引いていくのがわかった。

俺はすぐさま、大きく揺れるバスのルーフからGLOCK35で無

人車の左側の後輪をぶち抜いた。

無人車はスリップして停止する。

「遠山！！大丈夫か！！応答しろ！！」

「こちら遠山…う…一発貰いましたが、プロテクターを付けていたので大事には至ってないです。それより先ほどの掃射で運転士が負

傷しました…臨時に武藤へ運転を代行させます!..!』

「そうか。遠山。念のためにお前はそこで待機してる。運転士の怪
私の処置も任せる」

『了解!..!』

「アリア？」

『.....』

返事がない。

恐らく先ほどの大きな揺れで、どこかにぶつかり、気を失ったのだ
ろう。

こんなときに…仕方がないか…

インカムでヘリに待機しているレキに通信して見張りの交代を頼む
と、俺はゆっくりとワイヤーを伝い、車体の下に潜り込む。

すると、ぐつたりとワイヤーにもたれこむアリアがいた。

額にぶつけた後のようなキズがあり、多少ながら出血している。

ありゃあ…こりゃヤバイな…

安全な場所とはもはや言えないが、とりあえずバスの中に連れて行
くか。

そのあとに俺がこのバカでかい爆弾の解体をすればいい話だ。

右手でワイヤーを掴み、ゆっくりとアリアを抱き寄せる。

その瞬間、風に流れるように山梔子の匂いが俺の鼻を掠めた。

う………//////

こうやって女の子を抱き抱えたのは人生初体験かもしれん//////

左手一本で無理矢理抱えたので、左手の指がアリアのけしからん所

(胸)に当たっている。

っ……………//////

恥ずかしながら、今の俺の顔は烈火のごとく真っ赤であるっ。

これは不可抗力だと言い訳しよう。

無論だが、俺には悪気はまったく無い。

しかし、立派な胸板でもこうも柔らかか……

つておい。
それは変態がやることだろ…
俺としたことが…
変に誤解されるからさっさと上がるとするか…
高ぶる気持ちが無理矢理抑えつけ、ゆっくりとワイヤーを伝って上がっていく。

「ん？」

ちょうど車体の下から這い出て、窓にしがみついた時、背後に機械的な殺気を感じた。

嘘だろ…おい…

素早く振り向くとそこには無人のルノーが一台。

運転席に据え付けられた銃座は、明らかに俺たちを狙っていた。

今から反撃しようにも両手がふさがっているため、愛銃さえ握ることができない。

レキは見つけられないのか？

完全に終わった…

俺は本気で死を覚悟したが、まだまだ死ぬ訳にはいかない。

こんなにも早く俺の人生が終わってたまるかよっ！！！！

乾いた連射音が始まる瞬間、無意識に俺はアリアを庇うようにバスの方に抱え込んだ。

ガガガガガガガガ！！！！！！

「ぐうっ！！」

悶えるような悲鳴を上げ、俺は窓を突き抜けてバスの中へと転がり込んで行った。

アリアを抱えたまま、床の上を一回転。

武偵高の生徒たちが見ている中、俺は撃たれた反動で床の上を豪快

にもう一回転して反対側の壁にぶつかる。

はあ…はあ…

撃たれたな…いくら防弾制服とは言え所詮は制服だ…

鋭い激痛、火照る背中。

止めどなく流れる汗と荒くなる呼吸。

じんわりと背中を伝う生暖かい液体。

銃声を聞いたキンジは急いで二人に駆け寄った。

「先輩！？大丈夫ですか！？」

「うう…大丈夫だ…これくらいの痛みならまだいける…それよりアリアの介抱を頼む…額に怪我をしてる…」

「もしかして先輩、撃たれたんじゃ…無理はしないでくださ…」

「ばかやる…無理でもしなきゃいけないことがあるだろ？」

実際にはもう俺の体は完全に撃たれた衝撃で神経が麻痺し、思うようには動かなくなっていた。

力ももうほとんど入らない。

それでもゆっくりと最後の力を振り絞って俺は立ち上がった。

アリアが俺を信じてここへ呼んだように、俺もアリアを信じてそれに報いるしかない。

こうまで人に追い回された拳げ句、奴隷扱いしあがる奴だけど、これもアリアのコミュニケーションの仕方だったのかもな。

アリアも俺と同じ孤独で、寂しい思いをしてきたのかも知れない。

もしかしたら、お互いに求めて来たのかもな。

だって、お前の名前はアリア（独唱歌）だもんな。

理由はどうであれ、似た者同士生きてまた口喧嘩したいくらいだ。それがお前にお似合いだからさ。

でも今日で最後かもな。

バカみたいにコイツを庇って…

さて、まだ”時間”はある。

生きていられる限り、全力を尽くすぞ。

「キンジ。指揮権はお前に託す。今から俺が爆弾の解体をする。お前はレキと通信を取って上手くやってくれ。」

「無茶だ！止めてください先輩！死にたいんですか！！」

「さつきも言ったろ？」無理でもしなきゃいけないことがある”って。それに武偵法第一条『仲間を信じ、助けよ』って言葉があるじゃない。心配するなキンジ。ここで倒れてたまるかって。」

俺はその時初めて笑ったのかもしれない。

呆気を取られて立ち尽くすキンジの横をすり抜けて、俺は窓に手を掛けた。

よし、全力で行こう。

俺は窓の外に身を乗りだし、ワイヤーを掴む。

どうやら先ほどの無人車はレキが倒してくれたらしい。やるなら今のうちだ。

いつもと同じようにワイヤーを伝って車体の下に潜り込む。

俺は爆弾を見つけると恐るべき早さで解体していく。

徐々に意識が遠退いていく。

くそ…景色が霞む。

だが手は止めない。

これで最後だ。

ガチャ……

『こちら…朱雀。爆弾は解除した。至急爆弾処理班と救急車を呼んでくれ。武藤、左に徐行して車を停める』

「了解！！」「」

そして安堵と同時に、俺の意識は闇に消えていった。

ACT3・蒼空の境界線・Sky border line・

任務は無事終了。

人質だった武偵高の生徒は全員生還。

バスの下から引きずり出された俺は意識を失っていて、早急に病院へ運ばれる事となった。

背中には9mパラベム弾が四発、防弾制服を貫いていた。

まあ、俺の準備の仕方が招いた結果だから論理的に自分が悪いことになる。

全治3週間ってことかな。

危なく失血死するところだったらしい。

銃弾の摘出手術を受けた後、しばらく入院生活を強いられる羽目になった。

しかし、俺は三日間も意識が戻らないでいた。

『ACT3・蒼空の境界線・Sky border line・』

「う……ん……」

俺はゆっくりと目を開ける。

朧気な景色が蜃気楼のように浮かぶ。

ここは果たして天国だろうか……

だんだんと焦点が定まっっていく。
暖かい陽が瞳の入ってくる。
見慣れた天井、小鳥の囀り。

「朱雀：朱雀！！」

俺が目を覚ましたのに気づいたのか、半分すすり泣きしたような声で誰かが飛び付いてきた。

はあ…どうやら俺は死んでないみたいだ…

生まれて二回目だな、大ケガで臨死体験したのは。

俺はゆっくりと体を起こす。

「なんだ。舞か。どうしたんだよ急に？」

「なんだじゃないわよ！？心配ばかりかけて！！死んだかと思っ
たじゃない！！」

「大きな声出すな…俺の鼓膜が破れるだろうが。」

「もうこのバカ……」

「泣くなよ…泣くなら俺がホントに死んでからにしてくれ…」

「何よ、人聞きの悪い！！」

「とりあえず生きてんだからさ、笑ってくれよな？そうじゃないと
帰ってきた気がしないじゃんか。」

ああ、戻って来たんだな。

俺は今にも泣きそうな舞を見てからそう実感した。

どうやら俺は一人用の個室らしい。

付きっきりで舞が看病してくれたようだ。

「つか、とりあえず今日は何曜日だ？」

「舞、あれから何日経った？今日は何曜日だ？」

「うーん、ざっと三日かな？今日は日曜日よ。」

「そうか。ありがとう。」

背伸びでもしようかと両手をビツと上に挙げる。すると背中には何とも言えない激痛が走り抜ける。いちち、と俺は背中をゆっくりと擦る。

クソ…しばらくはまともにも動けないな…

まあ良いか…そう言えばアリアはどうなったんだ？

あれくらいキズなら心配する必要はないか。

そう思つて窓の外に視線を向ける。

またキズが増えた…もう誰かのために傷付くことはないと思つてたのにな。

まさか、赤の他人の命を救うために身体を張つたんだよな。

こう言うのをお人好しつていうんだっけ？

……

でも、アリアは俺の中では違う気がした。

まだ分からないけど、何となく分かる気がするんだ。

アイツが求めているものが。

だけど、例え今の俺がアリアのパートナーになつたとしても、絶対に釣り合いが取れないだろう。

何かを一人で成し遂げようとしてるのが、手に取るように分かる。

確かにアリアは強いが、何かに欠けているような気もする。

やっぱり世の中を知りすぎてるんだ。

俺って人間は……

「んじゃ、私は用事があるから帰るわね。また後で。」

「ああ。わざわざありがとうな。」

「どついたしまして／＼／＼」

舞は俺の顔を見るとちよつと頬を紅潮させて病室を出ていった。

おそらく俺がありがとうなんて言ったからか？

そう言えばありがとうなんて言ったことがなかった。
多分、そんな俺にびっくりしたのだろう。
その直後、ドアをノックする音がした。

「入って良いかしら？」

ドアをちよつとだけ開けて、アリアが顔を出す。
俺は”入って良いぞ”とアリアに言う。
部屋に入ってきたアリアは、ゆっくりと椅子に腰掛ける。

「あ…あの…／／」

「どうしたんだ？」

「いや、その…／／私が気絶してた時にバスの中へ運んでくれたのはスザクだよな？」

「ああ」

「ありがとう…なんて、間違っても言わないけど、アンタにはホントに感謝してるわ／／もし、あのままだったら私が死んでたし、銃で撃たれそうになった時に、アンタが私を庇って…／／」

「らしくないな。俺が無意識になってやったことだ。別に礼をするに値しないだろう？悪いけど俺はこれっぽっちもお前には気がないし、パートナーを組んだら絶対に釣り合いが取れないよ。多分、アリアより早く俺が死んでしまう。」

「アンタなんか恋愛だのどーのこーのって言われる筋合いはまったくくないし、興味すらないわ／／ただ…その…／／」

「何？」

「もし、考え直して貰えるならパートナーになって欲しいかなって…／／でも無理ならキングジを奴隷にすればことが済むんだけど、やっぱりスザクにも聞いた方が良いかな？…ってね／／何を考えてるんだろうね私は／／」

「……………答えはNOだ。悪いけど俺を諦めて遠山と組んでくれ。」

もう誰かのために命を失うのは見たくもない。どうせ無くなる命なら自分一人でいい。」

俺は今までにないぐらい真剣な表情でいった。

今までもろおろしていたアリアは、顔を俯けるとゆっくりと立ち上がる。

「そうよね……わかったわ。もう私はスザクに関わらないことにする。お邪魔したわね、身体をお大事に……」

そう言ったアリアの表情はどこか悲しそうだった。

そんなに悲しそうに見るなって。

こっちが惨めな思いをするだろ。

彼女はいつものようにそっぽを向くと、ドアまで走っていき、勢いよく飛び出していった。

これで良いのか……

自分の心に問う。

でも答えは見つからなかった。

ようやく平穏な生活ができるというのに、なぜか寂しい感じが胸に残っている。

俺はどうしようも無くなり、ゆっくりとベッドに倒れ込んだ。

あれから何時間経つたろうか？

俺の病室が賑やかになったのは。

同級生の彩や舞を始め、アリアから逃げてきた遠山やバスジャックの時に知り合った武藤、それに不知火が1年の男子生徒(?)を連れてわざわざ病室まで見舞いに来てくれた。

っ！かコイツ、ホントに男か？

俺の目は節穴なのだろうか？

どう見ても俺には女の子にしか見えんが…

でも制服は男子のものだ。

俺はだんだんややこしくなり、とりあえず考えることを止めた。

「どうも初めまして朱雀先輩。僕は神橋・N・アランって言います！！中学校のころから先輩に憧れてました！！是非仲良くしてください！！宜しくお願いいたします！！」

身体を90°に曲げて俺に深々と礼をする美男子。

というよりも女の子。

美少女に匹敵するぐらいの可愛さだ。

ピンク色のショートヘアに前髪を大きめのヘアピンで止め、大きな青い瞳にいかにも女の子らしい華奢な身体。

これは誰が見ても女の子だと思っ。

その礼儀正しさに俺はたじたじだった。

……………ん？

中学校の頃から？

「あ、ああ。宜しく。ところでアラン君とやら。中学校の頃からっ

ていうと?」

「はい。去年、東北武偵高付属中学の強襲科を卒業したんですが、訳あって東京武偵高の情報科に入学しました」

「つまり俺達と同じ母校の出身だと いやあ朱雀う アリアといい、舞といい、ついにはアランといい、お前にもとうとうモテ期到来か

このエロ男め」

「彩先輩、色男ですよ。」

「あの…僕は『男』ですけど…」

「うるせー!!んなことは分かっているわムトー!!あらあん!!」

「黙れ彩…これ以上俺を虚仮にしたら本気で半殺しにするぞ?」

「殺れるなら殺ってみな。半死人(笑)」

「ああ。良いともバンダナ野郎。そこまで言うなら強襲科の実習棟で首を洗って待つてるが良い。」

「げ…マジで殺るんか…」

「男には二言は無いだろう?なあ遠山?」

「な、なんで俺に振るんスカ先輩…」

「きゃ〜!!朱雀〜!!私に熱い抱擁を〜」

「悪いが舞、お前にくれてやる抱擁などない」

「ホントにモテますね?先輩?」

「不知火、それは言うな。」

飛び交う笑い声、何気無い会話。

いつの間にか俺の周りには、こんなにも仲間が出来ていた。

何でだろう?

ここまで打ち解けたのは初めてかもしれない。

何故か不思議な気持ちになった。

今までこんなにも大勢の人と一緒に話したことはなかった。

いつものように、俺の心の中にあるのは孤独感。

そして、寂しさだった。

強すぎるから俺をみんな避けていく。

でも、俺にはこの笑顔と仲間を守れるだけの力がある。
どうやったらみんなの笑顔を守ることができるのだろう。
そう言えば、遠山はアリアから逃げてきたんだよね？
結局、どうなんだろうか？
とりあえず訊いてみるか…

「遠山。」

「はい？」

「アリアとはどうなったんだ？」

死ーん……………

一瞬で辺りの空気が凍る。

遠山さんは知らんぞ、とそっぽを向く。
なるほど、だいたいは予想が付いた。

「キンジ〜！！お前にもとうとう春が」

「五月蠅い武藤、俺は誰ともそう言う仲にはなっていない！！変な誤解を生むから止めるよな！！」

キンジは全力で否定する。

しまったな…どうやらやぶ蛇だったらしい…

その後、みんなが大いに騒ぐので面会謝絶されたのは言うまでもない。

翌週の日曜日。

俺は早めに退院し、いつも通り家に帰るようになった。

銃痕はまだ塞がってはいないが、普通に動けるまでに回復した。

後で遠山から聞いたのだが、どうやらアリアは無実の罪を着せられた母親を助けるために優秀なパートナーを見つけ、その元凶となった『イー・ウー』とか言うの奴等を追っているらしい。

そう言えば、確かうちの親父や兄さんもそんな連中を追っていたよ
うな気がする。

遠山の話によると『イー・ウー』の連中を捕まえれば、母親の刑も
今のよりも軽くなる見たいだ。

肉親を捕らえられるという寂しさ、特に母親を捕らえられるという
は、同感できるくらい痛いほど分かる。

『私には時間がないの!!』

遠山から話を聞いていた時だった。

ふと、アイツが俺に奴隷宣言をして全力で拒否した時、叫びながら
言っていたアイツの言葉を思い出した。

”時間が無い”って言うのはこういうことだったのか…

人通りの多すぎるスクランブル交差点。

人混みを掻き分けて進んでいく。

見慣れた人混み、聞き慣れた喧騒も、こんなときになるとやけに鬱
陶しくなる。

その後。

どうやらパートナー最有力候補だった遠山と俺に愛想を尽かしたの
か、アリアは生まれ故郷であるイギリスへ今日飛び立つことになっ

たらしい。

まあ他人のことだから、俺には……
そんなことを思い、足を止めた。

「他人だからって良いのかよ……困っている人の隣を知らん顔して通
つて行けるほど、俺は薄情な人間じゃねえっつーのに……クソッ……」

俺は確信した。

アリアが自分を必要としていたことが。

結局、報いることなんかできやしてねえ！！

格好だけつけて、逃げてると同じじゃないか！！

すると、ポケットに入れていたケータイが震動し始めた。

ケータイのディスプレイに『遠山』と電子文字で表記される。

俺は通話ボタンを押し、耳にスピーカーを当てた。

「もしもし。」

『先輩！！大変です！！アリアが……』

「アリアがどうした？」

『こ、殺されます！！今、理子から説明を受けて羽田空港に向かっ
てます！！先輩も援護に来てください！！』

「ああ。分かった。今すぐに行く。遠山、後で合流しよう。その方
が早く目的地に向かえる。」

『了解です。空港の入り口で待ってますから。』

「分かった。」

俺は通話を終了すると急いで駆け出した。

何で気付いてやれなかったんだ俺は！！

ありったけのスタミナを使って、俺は羽田空港に向かった。

くそ、くそっ!!
まんまと嵌められたな。

今回が最後のジャック事件になるとは!!

兄を殺した海難事故をシージャックと考えるならば、朱雀先輩のチヤリジャックでこの間のがバスジャック。

これが隠されてたメッセージだったんだ。

俺の推理によればおそらく今回の飛行機に武偵殺しの張本人が乗ってる。

この三回目を期にアリアと接触して直接対決しようとしてあがる。ちくしょう!!…!!どこまで用意周到な野郎なんだよまったく!!…呼び出された理子に言われなければ俺は気付かなかっただろう。キンジは内心、とても焦っていた。

羽田空港の入り口付近で、反対側から駆けてきた朱雀を見つけた。

「遠山!!」

「朱雀先輩!？」

「はあ…はあ…どうやら間に合ったみたいだな…アリアが殺されるって?」

「え、ああ、その、そうですね!!誰から聞いたんですか?その話を?」

「お前から聞いた。つい数分前までしゃべっていたら?」

「数分前?すみません、俺は先輩に電話なんてしてないですよ?」

「……………?」

なんだ?

会話の内容が矛盾してるぞ?

……………どうも怪しい匂いがする。

しばらく考えた後、ハツと二人は顔を見合わせる。しかし、この状況で怪しいなんて言ってられない。

いち早くアリアと合流しなくちゃ、アリアの命が危ない。額の傷じゃ済まなくなっちまう。

お前は死んでしまっんだよ!!

もし『武偵殺し』があの子を倒したと言っならば、戦ってはいけない。

一人では勝てやしない、絶対に!!

説明をしている暇などない二人は、無言で第2ターミナルへ駆け込むと、チェックインを武偵手帳についた徽章で通り抜け、金属探知機なんか素通りしてゲートに飛び込む。

俺達はボーディングブリッジを突っ切り、今まさに閉じようとしているANA600便・ボーイング737-350、ロンドン・ヒーロー空港行きに飛び込んだ。

バタンっ!!

俺達の背後でハッチが閉ざされる。

「武偵だ!!ただちにこの便の離陸を中止しろ!!」

目を丸くしている小柄なフライトアテンダントに、武偵徽章を突きつける2人。

「お、お客様!?し、失礼ですが、ど、どういう」

「つべこべ言うな!!俺達の仲間の命がかかってんだよ!!下手すりゃアンタたちの命も失うことになる!!とにかく、今すぐにこの飛行機の離陸を止め上がれ!!」

俺の隣に静かに立っていた朱雀が虎の如く吠える。

朱雀の怒鳴り声を聞いたフライトアテンダントはビビりまくった顔で頷くと、二階へと駆けていった。

その後を追い掛けたところだが、逆に両膝をその場に着いてしま
う。

強襲科を辞めてから体力が落ちていたことが災いした。

ここまでの全力疾走で息が切れている。

「大丈夫か遠山？」

「まさかここで限界だなんて……」

「……わかった。ここで待つてる。俺が二階の様子を見てくる。お
前は俺が戻る間、アリアと接触しといてくれ。いいな？」

もし危なくなったら俺を呼べ、と最後に付け足すと朱雀は右胸のホ
ルダーからGLOCK35を抜き、ゆっくりと階段を駆け上がった
いった。

その気持ちはありがたいし、まず武偵ランクがSの仲間が一人でも
いてくれれば何よりも心強い。

とりあえずはこれで、離陸を止めることは出来るだろう。

そう思った矢先。

ぐらり。

機体が動いた。

動いて………いる………

「くそっ！！遠山、止めることは失敗だ！！どうも機長が俺達を信
用できんらしい……」

ダダダダつと二階からアテナントを引き連れて階段を駆け降りて
きた朱雀は、悔し紛れにそう言った。

「ちくしょう……」

「俺も操舵室に向かったんだが、結局怒鳴られて終わりだった。」

しかたない。

信用されてないならそれなりに作戦を変えるしかない…

俺達はガタガタと震えるアテンダントを落ち着かせて別の方法を考えた。

機体は上空に出て、ベルト着用サインが消えた。

朱雀はアテナダントに言ってから……アリアの席、というか個室に案内してもらおう。

この飛行機のキャビン・デッキは普通の旅客機とは明らかに異なる構造をしていた。

一階は広いバーになっていて、二階、中央通路の左右には扉が並んでいる。

なんだこりゃ……この間、舞が読んでいたファッション雑誌の広告でチラッとみたことがあるぞ。

たしか『空飛ぶリゾート』なんて言われていた、全席スイートクラスの超豪華旅客機らしい。

座席とは思えないような12の個室を機内に造り、それぞれの部屋にベッドやシャワールームまでもを完備した、いわゆるセレブ御用達の新型機だ。

「遠山、もしものことがあったらに備えてお前はコックピット付近に待機してる。アリアと合流するのは俺だけで良いだろ？むさ苦しい男が2人も女の子の部屋に押し掛けるのはあっちも困るだろ？」

「た、確かに……でも2人の方が……」

「大丈夫だ、心配するな。別にアリアを独り占めする訳じゃない。」

アリアは俺達で守ろう。何かあったら自分の判断で処理してくれ。」

「なっ……独り占めって……そんなつもりじゃ……分かりました……アリアを頼みます……！」

「もちろんだ、任せろ。」

キンジはアテナダントと共にコックピットへ向かう。

俺は一人でアリアの席、いや、個室に向かった。

「…ス、スザク!？」

生花で飾り付けられたスイートルームで、アリアが、紅い目を真ん丸に見開いた。

案の定、予想通りの反応だな。

「はっ。どこのセレブだお前は?え〜とこの便のチケットって片道20万円ぐらいか?」

鼻で笑い、ダブルベッドを見ながら言っていると、アリアは座席から立って俺を睨んだ。

「断りもなく部屋に押し掛けて来るなんて失礼よ!!」

「お前に言えた台詞なのかバカ野郎。自分だってそうだったくせにか?」

アリアは自分が俺の部屋に押し掛けたことを思い出したのだろう。ぐう、と怒りながらも黙る。

「…なんでついてきたのよ?」

「理由なんてない。俺は遠山に呼ばれてついてきただけだし」

「遠山…ってキンジもいるの!？」

「ああ、念のためにコックピットで待機してもらっている。」

「そう…って納得できないわ!!何でついてきたの!!答えないと風穴をあけるわよ!!」

はっ。

アリアはスカートの裾に手をやった。

俺は内心安堵する。

どうやら帯銃してるみてえだ。

「この飛行機にお前を狙う『武偵殺し』が潜伏している可能性がある。電話で遠山に聞いたんだがその犯人はどうやらこうやら俺にも関係あるらしいんだ。だからお前を追ってきた。」

「武偵…殺し…?」

「アリア、『可能性事件』って言うのがあるってのは知ってるよな?」

「…なにそれ?」

「事故つてことになってるけど、実際は『武偵殺し』の仕業で隠蔽工作で分からなくなってるだけってヤツだって遠山が言っていた。」

「それがどうかしたの?」

「五年前に一人、俺の身内が殺された。」

「……………?」

「彼も俺と同じ武偵だった。たしか…2008年6月24日、有楽町線地下鉄籠城事件。っても知らないと思うが、それで死んだ、いや、殺されたのが鳳凰院清隆武偵。」

「ちよつと待って…それってまさか…」

「わかったみたいだな。俺の兄だ。あれもおそらくジャック事件にカウントされてるだろう。これが始まりだったんだよ。しかもまだ続いてやがる。」

俺はアリアに向き合い、真顔で言う。

自分の身内が殺された、という話しはしたくないが、ここまで来たら言うしかない。

「つまり、アンタは武偵殺しに復讐しようってこと?」

「いや、天国に逝った兄へせめてもの礼がしたいだけさ。アリア」

訝しげに俺を見つめるアリア。

俺はゆっくりと、もうひとつある座席に腰を下ろし、眼下に広がる東京湾に目を向けた。

強風の中、ANA600便は東京湾上空に出た。
神妙な面持ちをして隣に座るアリア。

その旁で『武偵殺し』が動くのを待つ俺。

「お客さまにお詫び申し上げます。当機は台風による乱気流を迂回するため、到着が一时间ほど遅れることが予想されます」

機内放送が流れ、600便は少し揺れながら飛ぶ。
揺れ自体は大したことはない。

だが……

ガガン！！ガガン！！

比較的近くにある雷雲だろうか。

雷の音が聞こえてくる。

ガガガ　　ン！！

ひととき大きな雷鳴が轟くと……

アリアは目を丸くして、きゅ、と首を縮めた。

それを見た俺はちよつと聞いてみた。

「怖いのかアリア？」

「こ、怖いわけない。バツカみたい。」

と言った矢先、再び雷鳴が轟く。

ガガン！！

「きゃっ！！！！」

短く悲鳴を上げたアリアを見て、俺は苦笑いする。

ふーん。

双剣^{カドラ}双銃のアリア様にも、苦手なものがあったとはね。

冷静を装っているがビクビクするアリアに見かねたのか、俺はアリアに助言する。

「雷が嫌ならベッドにでも潜ってな。」

「うっ、うるさい」

お？

良いこと思い付いた。

ここひとつ、日頃の鬱憤晴らしにいじったるか。

「チビんなよ〜：チビんなよ〜：チビったら一大事だかな〜：まさか幼稚園児でもあるまいしね〜：」

「バ、バ、バカ！！」

ガガガガ ン！！

「 うあー！！」

激しく響いた雷の音に、アリアはとうとう座席からジャンプした。そして本当にベッドに潜り込んでしまう。

「 ハハハ！！」

俺は堪えていた笑いがとうとう口から溢れ落ちる。

ヤバい、遠山に見せてやりて〜。

俺はバンバンと座席のひじ掛けを叩いて笑う。

ちくしょう、堪えるに堪えきれんぞ。

笑いが。

しかし、次第に笑いが収まる。

それもそうだ。

誰が見たことあるか？

こんなか弱くて、可愛らしいアリアを。

っーか可愛い、フツーに。

……。

俺ってそんなことにも鈍感だったのか……

……ハッ……。

まさか、もしかして今のでチビってないよな？

「アリア……。替えのパンツ持ってるかあ……？」

「バカスザク！！あ、後で風穴あけてやるから！！」

よかったよかった。

こんだけ元気がありやチビってないだろうな。

ガガガガ　ン！！

ガガガガ　ン！！

しっかしうるさいなあ……

いくら自然現象とはいえ、こればかりはどうも耐えられん。

うるさすぎる。

運が悪いのか、機長が下手なのか。

この飛行機、ずいぶんと雷雲の近くを飛んでるな。

「~~~~~す、スザク~~~~~」

布団の中から涙声を上げ、アリアはとうとう俺の裾を掴んできた。

「うおお……大丈夫、大丈夫だから。こんなのをすぐに止むって。テレ

ビつけてやる。それで気は紛れるはずだ。」

俺は子供みたいに袖を放さないアリアにちょっとたじろぎながら、リモコンでテレビをつけ、チャンネルを回していく。最新映画やアニメの映像に切り替わっていき…とある探偵ものチャンネルで指を止めた。

紳士服を着た、容姿端麗な男性がヘリコプターを操縦していた。

明智小五郎。

大正頃に活躍したとされる日本でも有名な探偵だったな。

そう言えば兄さんが言っていたような気がするんだが、俺の一族のルーツを辿ると、どうやらこの人に行き着くらしい。

少なくとも、そんな名探偵の子孫とは思えんね。人間離れした自分自身が。

「おお、推理ドラマだな。とりあえずこれでも見ておくか。」

「う、うん」

俺の袖を握り、プルプルと震えるその手は小さくて、か弱くて…

俺は初めて、アリアの手が普通の女の子の手に見えた。

もしかしたら、会ったときから見えたいたのかもしれないな。

コイツの内面的なものが。

だとしたら、何故、俺は彼女を避けてきたのだろう。

しつこいからか？

コイツと同じで、恋愛沙汰が苦手だからなのか？

でも、他の女の子と変わらないように、普通に接していたならば、

こんなことには気づかなかったかもしれない。

なんて不様なんだろうな、俺は。

こんな俺に出来ることは1つ。

俺は震えるアリアの手に、そつと手を添える。

普通の友達として、いや、普通ではないだろうが、とりあえず友達として震えを和らげることぐらいはできる。

「ス、スザク…？」

何秒か躊躇ってから、アリアの指が、俺の手を握り返そうとしたときだった。

パン！！パン！！

音。

が、機内に響いた。

今度のそれは雷鳴ではなく、俺たち武偵高の生徒がもっと聞き慣れた音

じゅ、銃声

！？

狭い通路に出るとそこは、大混乱になっていた。

12の個室から出てきた乗客たちと、数人のアテンダント。

文字通り老若男女が、不安げな顔でわあわあ騒いでいる。

銃声のした機体前方を見ると、コックピットが開け放たれていた。

「なっ!?!」

そこにいたのは、さっきの小柄で間抜けなアテンダント。

そいつがずると、機長と副操縦士を引きずり出している。

何故か、遠山まで引きずり出されている。

2人のパイロットと、遠山は何をされたのか、まったく動いていない。

どさ、どさ、どさと通路の床に2人を投げ捨てたアテンダントを見て、俺は慌てて右胸のホルダーからGLOCK35を抜いた。

「動くな!?!」

俺の声にアテンダントは顔を上げると、にいつ、と、その特徴の無い顔で笑った。

そして1つウインクをして操縦室に引き返しなから、

「Attention please. でやがります」

パン!!

俺は胸元から何かを取り出した瞬間に、真っ先に握っていたGLOCK35でそれを撃ち落とした。

カラン、とアテンダントの足元に転がる何か。
それを見たとき、後悔と同時に背筋が凍った。

「スザクっ!!」

雷の恐怖を押しして部屋から出てきたアリアが悲鳴を上げる。

シュウウウ……!!

音で分かる。

これは　ガス缶だ!!

サリン、ソマン、タブン、ホスゲン、ツイクロンB。

授業で習った毒ガスの名前が駆け巡る。

もし強力なヤツだったら、もう終わりだ。

「　みんな部屋に戻れ!! ドアを閉める!!」

自分もアリアを部屋に押し込むようにしながら叫ぶ。

パタン、と扉を閉める瞬間前に

飛行機はグラリ、と揺れ。

パチン、と機内の証明が消え、乗客たちが恐怖に悲鳴を連ねた。

暗闇はすぐに赤い非常灯に切り替わった。

「スザク！！大丈夫！？」

俺は大丈夫だよと手でアリアに合図する。

任務で一度だけ、敵が投げたガス缶を撃ち落としたことがある。

その時はダミーだったから命に別状はなかった。

俺は敵の投げたものが手榴弾と見間違えたのだろう。

反射射撃は俺の悪い癖なんだ。

今回のはどうやら無害のガスらしい。

ちくしょう、またもや引つ掛かるとはね…

「アリア。例の『武偵殺し』がようやく動き始めたぞ。」

「キンジとスザクの読み通りね。二人とも少しはドレイとして役に立ちそうだわ。」

「その言葉、誉め言葉として受け取らせてもらおう。」

ガチャ。

俺はゆっくりと愛銃のGLOCK35の安全装置を下ろすと、アリアが慎重に俺の隣へ来る。

間違っつて暴発したらたまらないからな。

シン…と静まり返る廊下で二人は辺りに注意する。
そこに

ポポーンポポポン。

ポポーン。

ポポーンポポーンポーン。

ベルト着用サインが、注意音と共に訳の分からない点滅をし始めた。

「……………和文モールズ……………」

アリアが呟いたので、俺は揺れる機内でその点滅を解読をしようとしてみる。

オイデ オイデ イ・ウー ハ テンゴク ダヨ

オイデ オイデ ワタシ ハイッカイ ノ

バー ニイルヨ

「…誘ってやがる…」

「上等よ。風穴あけてやるわ。」

アリアは眉をつり上げて、スカートの中から左右の拳銃をぞろりと出した。

「一緒に行つてやる。一人より二人のほうが何かと楽だろ？」

「来なくていい」

ガガン!!

再び聞こえた雷鳴に、アリアはキュッと体を強張らせた。

「どつするよ？」

「……………く、来れば」

床に点々と灯る誘導灯にしたがつて、俺たちは慎重に一階へ降りていく。

一階は

豪華に飾り立てられたバーになっている。

その、バーのシャンデリアの下。
カウンターに、足を組んで座っている女がいた。
さっきのアテンダントだ。

「!？」

ガチン!!

安全装置を外しつつ拳銃を向けながら、俺たちは眉を寄せる。
彼女は、武偵高の制服を着ていた。

それもヒラヒラなフリルだらけの改造制服だ。
どこかで見覚えがある。

「今回もキレイに引っ掛かってくれやがりましたねえ…」

言いながら…ベリベリッ。

アテンダントはその顔面に被せていた薄いマスクみたいな特殊メイクを自ら剥いだ。

中から出てきたのは

「峰 理子か!？」

「Bon soir」

くいつ、と手にした青いカクテルを飲み、ぱちり、とウインクをしてくれたのはこの間会ったばかりの峰 理子だった。
どういうことなんだ!？

一体!!

異例な状況に、俺は愕然とする。

「アタマとカラダで人と戦う才能ってさ、けっこー遺伝するんだよね。武偵高にもお前たちみたいな遺伝系の天才がけっこーいる。」

朱雀は例外”だけ。でも……お前の一族は特別だよ、” オルメス”
”
”
” !!!”

理子に言われた単語に、アリアは電流に打たれるように硬直した。
オルメス……？

よく分からんが、それがアリアのミドルネームの読み方なのか？

「アンタ……一体……何者……!!」

眉を寄せたアリアに、にやり、と理子が笑う。

その顔を、窓から入った稲光が照らした。

「理子・峰・リュパン4世 それが理子の本当の名前」

……リュパン……？

アルセーヌ・リュパンのことか!?

フランスの大怪盗。

理子はあの、リュパンの曾孫だって言うのかよ!?

「でも…家の人間は理子を『理子』とは読んでくれなかった。お母様が付けてくれた、このかわいいい名前を。呼び方が、おかしいんだよ」

「おかしい……？」

アリアが、呟く。

「4世。4世。4世。4世さまあー。どいつもこいつも、使用人どもまで…理子をそう呼んでいたんだよ。ひっどいよねえ。」

「そ、それがどうしたってのよ……」 4世の何が悪いってのよ””

何故かハッキリとそう言ったアリアに、理子はいきなり目玉をひんむいた。

「悪いに決まってるだろ！！」あたしは数字か！？」あたしはただの、DNAかよ！？」あたしは理子だ！！」数字じゃない！！」どいつもこいつもよお！！」

突然、キレた理子は

俺たちではない、誰かに対して、叫んでいた。

ここではないどこかに対して怒っていた。

「うるさいなあ、理子。もうちょっと静かに寝せてくれないのか？」

朱雀の背筋が凍り付いた。
いる。

俺の背後に。

情けないことに今まで気がつかなかった。

アリアはその声に気づいて振り向く。

聞き覚えのある低い、優しい声。

俺の記憶から薄れることなく鮮明に残っている、懐かしい声。

嘘だ。

悪い夢なら覚めてくれ！！

「くふ、くふふ。お目覚めのようねえ。気分はいかが？」ダンテ」。

「
会ったばかりのころのような口調に戻り、俺の後方の人物に問い掛ける。

『ダンテ』と聞いたアリアは目を大きくして理子を見る。

「悪くはない。むしろ良い方だ」

振り向けない。

いや、振り向きたくない！！

振り向いたら、俺は。

俺は正気じゃなくなる！！

頼む、お願いだ” 兄さん”！！

今すぐにでも耳を塞ぎたかった。

しかし、耳を塞いだところで問題は解決しない。

「俺のことは気にするな理子。今の話を続ける。ネタをバラすなら早いほうが良い」

低い、優しい声がまた聞こえる。

幻聴だ！！

「そうね。」

「ちよつ…ちよつと待つてくれ理子。お前は何を言ってるんだ…！？それにイ・ウーってなんだ！？何で死んだはずの、死んだはずの” 兄さん” がここにいるんだ！？『武偵殺し』は…本当に、テメエの仕業だったのかよ！？」

「……『武偵殺し』？ああ。あんなの。」

じろ、と理子がアリアを見る。

アリアは俺の叫びを聞いてさらに真ん丸と目を大きくして俺を見る。

「それはプロローグを兼ねたお遊びよ。ねえ？ダンテ？本命はオルメス4世　アリア。お前だ」

ちらつとダンテと呼ばれた人物を見た後、アリアを睨む。
その眼はもはや、いつもの理子の目ではなかった。
獲物を狙う、獣の目だ。

「100年前、曾お爺さま同士の対決は引き分けだった。つまり、
オルメス4世を倒せば、あたしは曾お爺さまを超えたことを証明で
きる。スザク…お前もちゃんと、役割を果たせよ？」

獣の目が、俺の方を向く。

今の俺はそれどころじゃない。

兄さんが生きていたことで頭の中がパニックを起こしていた。

「オルメスの一族にはパートナーが必要なんだ。曾お爺様と戦った
初代オルメスには、優秀なパートナーがいた。だから条件を合わせ
るためにお前をくっ付けてやったんだよ」

「俺とアリア、お前を…」

「そっ…」

理子は先ほどのような軽い口調に戻り、くふ、と笑った。
なるほどな。

コイツはあのバカな理子を、演じていたんだな。

恐らく、今までずっと。

「スザクのチャリに爆弾を付けて、わっかりやすうーい電波を出し
てあげたの。」

「……あたしが『武偵殺し』の電波を追っていることに気がついて
いたのね…!!」

「そりゃ気付くよおー。あんなに堂々と通信料を出入りしていれば
ねえー。でも、スザクが乗り気じゃないみたいだから、わざわざキ
ンジまで付けて、バスジャックに協力させてあげたんだあ」

「バスジャックもか!?」

「スザクうゝ…証拠も不確かな人物からの通知を受けちゃダメだぞ
…?痛い目に遭うからねえ?」

くそ…

棗先生を装って緊急出撃通知を渡したってわけか…

そして空港へ来るとき、遠山に成り済まして情報を流した…

「なにもかも、最初からお前の計画通りってワケかよ…」

「んー。そうでもないよ?チャリジャックで出会わせて、バスジャックでチームを組ませたのに　スザクとアリアがくっつききらなかったのは、計算外だったの。理子がダンテに頼んで、電話で”アリアが死ぬ”って話をするまで動かなかったのは意外だった」

くそ…ここまで俺は虚仮にされ続けてたのか!!

だんだんと、頭に血が上っていくのが分かる。

左手を握る力が、震えるまでに強くなる。

「くふ。ほらアリア。パートナーさんが怒ってるよおー?一緒に戦ってあげなよー!!」

理子の野郎。

さすがは怪盗リュパンの曾孫だな。

これもまた、想定内の出来事らしい。

「くふ。スザクに良いこと教えてあげる。後ろにいるダンテはあたしの恋人よ。前の人もよかつたけどおー」

「いい加減にしろ!!」

「スザク!!理子はあたしたちを挑発してるわ!!落ち着きなさい
!!」

「うるさい!!」

どンドン躍起になって空回りしている。

まるで空焚きしているエンジンのように。

俺は衝動的にGLOCK35を握る左手に力を込めた。

その時だった。

キンツッ！

「！！！」

「おーらら」

気が付いた時には、俺が握っていたGLOCK35の銃身が斜めに斬られていた。

切り落とされた銃身は、がしゃ、と足元で音を立てて壊れる。

前を見ると、紅いコートを身に纏う身長180cmぐらいの、銀色の長髪の男が右手に刃渡り80cmはある両刃の西洋剣を握って立っていた。

ちらつと見えた横顔はとても凛々しく、美形の顔だった。

瞳の色は神々しく輝く金色。

優しさが残る穏やかな目付き。

あの頃の雰囲気・髪の色・目の色はまったく違つが、背格好は明らかに俺の兄さん、鳳凰院 清隆そのものだ。

それよりも、いつ斬つたんだ？

見えなかったぞ。

俺はもう使いものにならなくなった愛銃を投げ捨てる。

目の前に静かに佇むダンテの向こう側に、小ぶりの拳銃 ワルサ

IP99をちらつかせている理子の笑顔が見える。

「兄さん！！！」

「愚問だぞ……」今の”俺はダンテだ。”

「くっそ……」

「ノン、ノン。ダメだよサク。」今の”お前じゃ、戦闘の役には

立たない。それにそもそもオルメスの相棒は、戦う相棒じゃないの。理子のダントは違うけど。パンピーの視点からヒントを与えて、オルメスの能力を引き出す。そういう活躍をしなきゃ」

ダントは理子の話を聞いている、俺の横を通りすぎてどっかりと椅子に腰かける。

うっとりとか高説ぶった理子を見て

その隙にアリアが動いた。

まるで小さな、獅子のように。

ばんっ！！と床を蹴ったかと思うと、二丁拳銃を構えて襲いかかる。いける、と判断したのだろう。

理子の火器を見て。

どうやらダントはこの状況にも関わらず理子を助ける気はないらしい。

バーの椅子に座ったまま、腕を組んで顔を俯けている。

常に防弾服を着用している武偵同士の近接戦では、拳銃弾は一撃必殺の刺突武器にはなりえない。

バスジャックの時はマズって上着を着てこなかったのが失敗だった。つまりは打撃武器なのだ。

となるとモノを言うのは、総弾数となる。

あのスカート幅広いスカートの中に、弾が20発も30発でも入るUZIを隠し持たれていたら不利だが、ウルサーP99には通常16発までしか入らない。

対するアリアのガバメントは7発。

チェンバーにあらかじめ入れておくか、エグゼクションポートから手に入れておけば8発まで入る。

これが二丁あるから、最大16発。

理論上だと互角になる。

だが

「アリア。二丁拳銃が自分だけだと思っちゃダメだよ？」

理子はカクテルグラスを投げ捨てると、その手でもう一丁、ワルサーP99をスカートから取り出した。

「!！」

だが、もう、アリアが止まるわけにはいかない。

バリバリバリッ!!という音をあげて、アリアは理子を至近距離から撃ち始めた。

「くッ…このっ!!！」

「あはっ!!あはははっ!!！」

アリアと理子は至近距離から、拳銃でお互いを撃とうとせめぎ合う。武偵法9条。

武偵は如何なる状況に於いても、その武偵活動中に人を殺害してはならない。

その法を守るため、アリアは理子の頭部を狙えない。

そして理子も 合わせているつもりか、アリアの頭部を狙わない。まるで格闘技のように、アリアと理子の手が交差する。

武偵同士の近接銃撃戦は、射撃線を避け、かわし、あるいは相手の腕を自らの腕で弾いての戦いだ。

バツ!!ババツ!!

放たれる銃弾は、お互いの小柄な体を捕らえず壁に、床に、撃ち込まれていく。

「はっ!!！」

弾切れを起こした次の瞬間、アリアはその両脇で理子を抱えた。

2人は抱き合うような姿勢になり、理子の銃撃が止みよし！！

格闘戦では、アリアの方に分がありそうだな　！！

「スザク！！」

呼ばれるまでもなかった。

俺は念のために胸ポケットに入れていた、クラスメートの舞から貰ったコンバットナイフを取り出す。

革製の安全カバーを口にくわえ、左手で引っ張りながらカバーを外す。

非常灯の下で、刀身が紅く光る。

「そこまでだな、理子」

アリアの背後に突き出た拳銃に気を付けながら、慎重に近づこうとした時

「カトドラ双剣双銃　奇遇ね、アリア」

理子が、言った。

「理子とアリアは色んなところが似てる。家系、キョートな姿、それと…2つの名」

「？」

「あたしも同じ名前を持っているのよ。『双剣双銃の理子』。でもねアリア」

俺の足が、止まった。

その、あり得ない、不気味な光景に。

本能的に。

何だ…ありゃ…！？

「アリアの双剣双銃は本物じゃない。お前はまだ知らない。」この
力”のことを　　！！」

「理子から離れる！！アリア！！」

ピシッ、と稻妻が俺の脳内にほどばしる。

その異様な光景から、次の行動を先読みして危機を感じた俺は、ア
リアに叫んだ。

しゅら…しゅるるっ。

笑う理子の、ツーサイドアップの、テールの片方が
まるで神話にあるメデューサの髪のように動いて

シャッ！！

背後に隠していたと思われるナイフを握ってアリアに襲い掛かった。

「！！！」

一撃目は、驚きながらも避けたアリアだったが
ザシュッ！！

反対のテールに握られたもう一本のナイフが鮮血を飛び散らせた。

「うあっ！！！」

アリアが　後ろに、仰け反る。

側頭部を斬られた。

血が、紅く、紅く、ほどばしる。

「あは…あはは…曾お爺さま。108年の歳月は、こつも子孫に差
を作っちゃうもんなんだね。勝負にならない。コイツ、パートナー

どころか、自分の”力”すら使えてない！！勝てる！！勝てるよ！！
理子は今日、理子になれる！！あは、あはは、あははははは！！！！」

また、ワケの分からないことを叫びながら

理子は髪で押し退けるようにして、アリアを突き飛ばした。

あの髪、よほど怪力なのだろうか。

アリアは驚くほど易々と吹っ飛ばされ

ボロ雑巾みたいに、俺の足元に転がってきた。

「アリア！！おい！！しつかりしろ！！」

顔を深紅に染める血に瞼をきつく閉じながらも

アリアは、拳銃を放さずにいた。

理子は

テールで握ったナイフに付いた血を、べろり。

美味そうに舐める。

あり得んだろ……

”アイツはバケモノだ”。

ちくしょう！！

とにかく、アリアを連れて逃げなきゃ！！

高笑いしながらの理子の声が、俺の背中に掛けられる。

きゃははははっ！！

ねえねえ、狭い飛行機の中、どこへ行くこつていつのー？

アリアをお姫様だっこしたのは、初めて会ったとき以来だった。あの時は逃げるのに夢中だったのを、嫌でも鮮明に覚えている。本日で嬉し恥ずかしの二度目のはずなのだが、今回は悲しいほど軽かった。

人間ってというのは、怖がったり暴れてたりすると思いの外、実際よりも重く感じるものだ。

アリアは意識が途切れつつあるのか、脱力しきっている。

「アリア！！しっかりしろ！！くっそ…」

迂闊だった自分を悔いながら、ぐったりと俺の腕の中に収まるアリアに声を掛ける。

ああ、俺は本当に大バカ野郎だ。

身の回りの人が死ぬぐらいなら、自分の命を捨てる方がマシ。

そう言った本人がビビってどうすんだよ！！

見栄張ったのは良いが、結局、誰も守れてやしねえじゃねえか！！

この法螺吹き野郎が！！

そう毒づきながら、さっきのスイートルームに逃げ込む。

アリアをベッドに横たわらせ、血塗れの顔面を備え付けてあったタオルケットで優しく拭き取る。

「くっ…」

呻くアリアのこめかみの上、髪の毛の中には深い切り傷があった。

くっそ……側頭動脈かよ……

頸動脈ほどの急所じゃねえが、今すぐに血を止めなければ

！！

「大丈夫だ、安心しな。思ったより傷は浅いから」

武偵手帳に挟んでおいた止血テープでとにかく傷口を塞ぐ。だが、止血テープとはワセリンで強引に血を止めるだけで、その場しのぎにしかならないもんだ。それが分かったのだろう。

アリアは俺の嘘を、力なく笑って流した。

「ちっ　　アリア!!」

俺って嘘をつくのが下手だな、と内心毒づきながら、露骨な舌打ちを響かせた後、アリアの名を叫ぶ。

半ばキレ気味に、武偵手帳のペンホルダーに指を突っ込むと『R_ラa^{ツツオ}zz_{ツツオ}』と書かれた小型の注射器を取り出す。

「ラ、ラツツオを使うぞ!!アレルギーはねえよな!？」

「……………ない……………」

ラツツオとは、アドレナリンとモルヒネをくみあわせた、いわば気付け薬と鎮痛薬を合わせた”復活薬”だ。まさか使う羽目になるとはな。

「ラツツオは心臓に直接打つクスリだ!!いいか、これは必要悪だぞ!!」

そう前置きすると、アリアの小さな身体に股がるようにベッドへ上がった。

一瞬、躊躇ったがその邪念を取っ払ってセーラー服の胸元に手を掛ける。

「変な……こと……したら……風……穴」

「ああ、俺を蜂の巣にするぐらい元気になってくれよ!!」

俺はブラウスのジッパーを乱暴に下ろし、左右に引き開けた。

「う……」

アリアが、小さく震えて

トランプ柄の下着が露になった。

白磁のような肌。

最後の最後まで薄布一枚で守られている、愛らしい女の子の胸。

バクバクと俺の鼓動が高鳴るのが嫌でも分かる。

ちくしょう……ちくしょう……!!

俺は誰にも見られたくないほど、顔面が真っ赤になってるだろうな

……くそつたれ。

こんな時に不謹慎も甚だしすぎる。

でも、ああ、なんて隅々まで可愛らしいんだ、コイツは。

「アリア……」

アリアの白い肌に、震える指を乗せる。

ミニチュアのように小柄な胸に、指を這わせて胸骨を探し当てる。

そこから二本分、上　そこが心臓だ。

ちようど、フロントホックの辺り。

「スザク……」

「どうした？」

「こ……怖い……」

「大丈夫、俺も怖い。……でも心配するな……お前を死なせるもんか。

誰も死なせない、絶対に。」

蚊の鳴くようなアリアの声に、励ましの言葉を掛けつつ、左手に持った注射器のキャップを外す。

「アリア！聞こえるか！！打つぞ！！」

アリアは答えない。

ピクリとも動かない。

心臓の鼓動が止まっている。

くそつたれ！！

「戻ってこい！！」

ぐさッ
！！！！

殴るように、注射針を突き立てた。
迷うと失敗する。

だから一思いに、ギョッ。

薬剤をアリアの心臓にぶち込む。

「！！」

びくん、とアリアが痙攣した。

クスリの激しい威力に、歪む顔。

だがそれすら、今はどうゆう訳かいとおしく思える。

よかった、生きてる。

生き返ったんだ。

俺の肩からスツと荷が降りたような気がする。

「う……………!!」

アリアは大きく息を吸い込むと、ふるふる震えながら小さな口を開く。

どうなるんだこりゃ……………？

蘇ろうとするアリアは……………

青ざめていた肌をピンクがかったものに戻しつつ、次第に呼吸を強めていく。

そして……………

「　　っはあ!!」

ガバツ!!

ゾンビ映画のように、上半身を起こしてきた。

「って……………えっ!?!な、なな、何!?何これ!?む、胸え!?!」

だがクスリのせいか、アリアの記憶は混乱し、いくつかとんでいるようだ。

「ス　　スザク!!アンタの仕業ね!!こ……………こんな胸!!なんで見たがるのよ!!イヤミのつもりか!!いつまで!!経っても!!成長しないからか!!どうせ!!身長だって!!万年148センチよっ!!」

混乱状態のアリアは顔どころか全身ゆでダコみたいに真っ赤になっ
てブラウスの前を閉じようとした。

そして自分の胸に注射器が刺さっていることに気がつく。

「ぎゃーっ!?!」

花の女子高生とは思えない悲鳴を上げ、豪快に注射器を引っこ抜くアリア。

「それだアリア!!お前は理子に殺されかけて、俺がラッツォで…」

「り、理子　　ッ!?!」

乱暴に服を整えると、アリアはベッドの上から左右の拳銃をむしり取った。

そして鬼の形相のまま、バランスの悪い足取りで部屋を出ていこうとする。

しまった、俺としたことが。

ラッツォは復活薬であると同時に、興奮薬でもある。

気付いてはいたのに対応が間に合わなかったな。

クスリが効きやすい体質なのか、アリアは正気を失っていた。

自分と理子の、戦力の優劣が判断できてない　　!!

「ちょっと待てアリア!!今からマトモに殺り合ってもアイツには勝てないぞ!!」

俺はドアの前に立ち塞がり、両手に握る拳銃を手のひらごと鷲掴みにした。

「そんなの関係ない!!は、な、せ!!アンタなんか、どっかに隠れて震えてなさい!!」

アリアは俺に両手を握られたまま、犬のような犬歯を剥いて喚いた。

できればそうしたいのはやまやまだ。
だが、俺も殺されるのは目に見えている。
ここは何としてでも2人で切り抜けなくちゃいけない。

「落ち着けアリア！！これじゃあ、あいつらにチームワークが働いて無いことがバレちまうだろが！！」

「構わないわ！！理子は一人で片付ける！！それにだいたい、そもそもアインタはあたしのことなんか助けに来なくてもよかったのよ！！」

俺を睨むアリアのツリ目は、その紅い瞳を激しい興奮に潤ませていた。

ダメだな、どうやら落ち着かせることはできなさそうだ。

「アインタ、あたしのことがキライなんでしょ！！あんたは言った！！舞とかいうサイコネシス女と喧嘩した後！！あたし 覚えているんだから！！」

うむう…どうすれば黙ってもらえんだ？

アニメ声で叫ぶ口を、塞がねば。

しかし、アリアの銃を押さえるこの両手は絶対に離せない。

離れたら間違いなく、コイツは俺を蜂の巣にしてすぐさま部屋を出ていくだろう。

これを何とかする方法は

無いわけではないが

思いつくのは1つだけ。

アリアの弱点を突く、最後の手段がある。

だが、それは同時に俺の弱点でもある。

恋愛からいつも逃げていた俺にとってはある種の、衝動的自殺動機になりかねん。

正直、今したら真つ先にここから飛び降りるかもしれないぞ。でも、背に腹はかえられねえ。

このままだと、理子は真つ直ぐにここに来てしまう。いや、もう扉の前に居るのかもしれない。

俺達が言い争っているのを聞けば、簡単に始末できると踏むだろう。ああ、それは恐らく正解だ。

銃のない俺は元より、アリアまで

くそつたれ 殺されて堪るかよ!!

「あたしは覚える!!アンタが『目障りだから消えろ』って言ったこと!!ようはあたしのが『キライ』ってことでしょ!!あたし、あのあとどうしようもなくて部屋から飛び出ていったけど

あたし、アンタのこと、パートナー候補だと思ってたのに『キライ』って言われて

「ゴメンな…アリア…!!」

「だからもう良いのよ!!あたしのがキライならいいのよ!!あたしのことキラ

「喚くアリアの口を、俺は。

塞いだ。

”口で”。

「!!」

赤紫色の目を飛び出させんばかりにして驚くアリア。

恋愛沙汰が苦手なチビは、俺のキスに予想通り固まってくれた。

黙るどころか、両手の先までまるで石化したようにびびんと突っ張ってる。

ちなみに俺は

変な感覚に陥っていた。

体の芯に、何かが流れ込んでくる。

熱い、熱い、泥々とした何かが。

ドクン、ドクン。

高鳴る鼓動が、鼓膜を破りそうだ。

それが芯に溜まり、次第に身体中に広げていく。

ビシビシと骨が軋み、頭の中がぐちゃぐちゃになる。

なんだ、こりゃ……

そして、何かが末端まで行き届いた次の瞬間。

ぴしっ

俺の頭の中で、何かが弾けた。

ぷはっ……

2人は口を離し、同時に息を継いだ。

長い　　キスだった。

お互いに硬直していたせいで。

「……ったく……手間掛けさせんなよな……こうでもしなきゃ、黙れないのか？」

「か、かじゃ……あ……にゃ……」

ふら、ふらら、へなへな。

アリアがその場にへたれこんだ。

俺はボスツと一気に頬を赤く染め、顔を反らず。

「バ、バカスザク…アンタ、こんな時に、なんてこと、すんのよ…

…あたし、あたし、あたし、ふあ、ふあ……ファーストキス、だったのに……」

また騒ぎ出すかと思いきや、そうじゃないみたいだ。
喉の奥から出るその涙声は、脱力しきつていて、掠れている。

「バ、バカヤロ……俺だって……その……ファーストキスだったの……」
「バカ……せ、責任……！」

「知るかよ……これはテメエが俺をこうさせた原因だろ？なんで俺がわざわざ責任取らなきゃけねーんだよ……」

ん？

なんかいつも調子が違うな……

これ、ホントに俺か？

アリアに恥ずかしそうに背中を向ける俺。

俺の異変に気付いたように、アリアが声を上げる。

「スザク……!？」

「るせーな。どうした？」

「髪の色、変わってるわよ!？」

ははっ、まさかね。

冗談だと思いつつ、鏡の前に立つ。

(いえっ!?)

俺の髪は全て、髪の毛一本も残らず”アリアと同じ緋色”に変わっていた。

どういうこった、これは。

身に覚えがない。

しかも、明らかに性格というか人格が違う気がする。
声もいつもより落ち着いていてワントーン低い気がする。

「……………それよりも、だ……………」
「……………!?!?」

俺はきよんとするアリアの前にしゃがんで、左手をヒョイツと差し出す。

いつもと違う姿の俺を見たアリアは呆気に取られる。

一瞬、躊躇いつつアリアがそれを握ると、俺は引っ張ってアリアを立たせる。

「今は理子を捕まえることが先決だ。ゴタゴタしてても始まらない。
武偵憲章第1条『仲間を信じ、仲間を助けよ』に則って今から俺はパートナーであるアリアを信じる。だからアリア、お前も俺を信じて”囿”にしろ。この件は”2人”で片付けるんだ。もちろん、文句は…ないよな?」

「バッドエンドのお時間ですよー。くふふっ。くふふふっ。」

理子はどこからか用意したらしい鍵で、スイートルームのドアを開けてきた。

そして、ナイフを握る髪の毛の手のように使って扉を押さえつつ

両手に銃を携え、笑い掛けてくる。

「もしかしたら仲間割れして自滅しちゃうかなあーなんて思ってたんだけど。それでもなかつたみたいなんで、ここで理子の登場でえーす。あっ……」

人がかわったように、っーが変わってるのは見ての通りだが。

いつもと違ってツンツンしている俺の表情に　気付いたのだろう。それを理子は実に嬉しそうに、左右の拳銃とナイフをカチンカチンとぶつけて鳴らした。

「スゴいねえスザク！！髪の色が変わってるよおー。アリアと”何か”したんだ？よく出来たねえ、こんな条件下で。くふふっ」

なんだよそりゃ。

まさか……知ってんのか？

この力のことを。

俺は知らなかったのか！？

そして、この能力のトリガーを。

「で？アリアは？まさか死んじゃった？」

髪の手でナイフでベッドを指しながら、理子が言う。
「はははっ。」

そこはマクラと毛布を詰めて、人がいるように見せ掛けているだけの膨らみだ。

「知るかつ…テメエには関係ない…」

チラッと俺が目だけで横のシャワールームを見ると、目敏くその視線を追う。

「ああん……そういうスザク、初めて見るけどとってもステキ。どつきどきする。勢い余って殺しちゃうかも」

「ふんっ……そのつもりで来いよ？でなけりゃ、俺が間違っつてテメエを殺しちまうかもしれないね……」

目を釣り上げ、冷たく引き離すように言った、俺に
理子はクラツとききたきたような顔をして、拳銃を向けてきた。

「さいッこー。愛してる、スザク。見せて オルメスの、パ
ートナーの力」

愛してる、という言葉に俺のゾクツと背筋が凍える。
「なんだよ俺、寒いのか？」

引き金を引こうとした、理子に。
俺は、ベッドの脇に隠しておいた非常用の酸素ボンベを盾にするように掲げた。

「……」

撃てば、爆発する。

俺ごと。

そして理子ごと。

それを悟った理子の手が、一瞬、止まる。

一瞬で充分だった。

俺はボンベを投げ付けながら、理子に飛び掛かるつもり。

間合いが無くなってしまえば、体格差で圧倒できる。

しゅっ！！と右胸にあるホルダーに隠していた刀身が紫色のコンバットナイフを、左手で素早く抜き放つ。

「！！！」

理子が眉を寄せた、その瞬間。

グラッ！！

「なにッ!?!」

エアポケットにでも落ち込んだのか、飛行機が突然大きく傾いた。

足元が大きくブレて、姿勢を崩した俺の目に

斜めに傾いた部屋の中で、笑う理子のワルサーがこっちの額を狙うのが見えた。

そして。

！！

その銃口から鉛弾が放たれ、こっちに飛んでくる。

のが、視えた。

ぐ。

避けられねえ。

右にも、左にも。

絶対、避けられねえ。

それならば

ヒュヒュオツ！！ギギギンツ！！

俺は左手に握るコンバットナイフで音速を超える弾丸を、” 四等分に斬った”。

俺は 余りにも驚きすぎて立ち尽くしていた。

弾丸を斬るなら分かる、普通に。

だが、今の俺の場合、わざわざ二回も十字に斬り返したのだ。

その瞬間、自分の腕が消えたかと思った。

それほど速かったのだ。

弾丸を目で捉えられるほど、常人を逸した俺の動体視力ならば弾丸を斬ることぐらいは出来ただろう。

しかし、それを斬り返してしまおうとは。

何なんだよいったい…今の俺は…

左右の壁に、四等分にされた銃弾が突き刺さる音が聞こえた。

どこか感動を含んだ驚きに、理子が目を見開いた瞬間

俺は、左手に持っていたコンバットナイフをビュツ！！と手のひらを滑らせるように投げつけた。

ザシュツ！！

「 うっ！？ 」

理子の右肩と胸の付け根に投げられたコンバットナイフが深く、深く突き刺さる。

ガシャツ、と理子は右手に握っているワルサーを力無く床き落とす。激しく痛むのか、理子は顔を歪めている。

それもそのはずだ。

肩の付け根は神経の集中点、つまり、そこにナイフを穿てば、穿たれた腕の神経は圧迫されて麻痺し、手が動かなくなる。

そこに俺は、アリアから借りた黒いガバメントを抜いて理子に向けた。

「動くな!!」

「アリアを撃つよ!!」

圧倒的に自分が不利と判断したらしい理子がシャワールームにワルサーを向けた時。

ガタンっ!!

天井のキャビネットの中に潜んでいたアリアが。

転じて来ながら、白銀のガバメントで

ガンガンッ!!

理子の左手のワルサーを、精密に弾き落とした。

「!!」

さらに空中で拳銃を放し、背中から流星のように日本刀を二本抜く。

「 やっ!!」

そして抜刀と同時に、振り返った理子の左右のツインテールを切断する。

バサッ、バサッ

茶色いクセっ毛を結ったテールが、握っていたナイフごと床に落ちる。

「うっ

!？」

理子は左手を自分の側頭部にあて、焦ったような声を上げた。

ちゃき、とアリアは刀を納め、流れるような動作で拳銃を拾い上げ

る。

「峰・理子・リュパン4世」

「殺人未遂の現行犯で逮捕するわ!!」

俺とアリアが、黒と銀のガバメントを同時に向けると

理子は……にやあ、と満面の笑みを浮かべてアリアと俺を交互に見た。

「そつかあ。ベッドにいろと見せかけて、シャワールームにいろと見せかけて、どっちもブラフ。本当はアリアのちっこさを活かして、キャビネットの中に隠していたのかあ……すごあい。ダブルブラフってよっぽど息が合ってないといけないことなんだけどねえ」
「あいにく、嫌でも一緒にいたからな。たった数日だけ。合わせたくなくてもあっちまうだろーが。」

「二人とも、誇りに思って良いよ。理子、ここまで追い詰められたのは初めて」

「追い詰めるも何も、もうチェックメイトよ」
「ぶわあーか」

憎々しげに言うと、理子は髪の毛をわさわさっと全体的に蠢かせた。その異様な光景に、対応が遅れる。

髪の中で……何かを操作してやがんのか!?

「止める!!何をしてやがる!?!」

俺は理子を捕らえようと、踏み出した。

その、瞬間

ぐらり!!

また機体が大きく、傾いた。

急降下してんのか!?

姿勢を崩したアリアが、壁にぶつかる。
俺も倒れないようにするので精一杯だ。

「ばいばいきーん」

次の瞬間、理子は脱兎の如くスイートルームから飛び出して行った。

おかしいとは思っていた。

この飛行機は”理子に都合良く”揺れすぎている。

アイツは恐らくあの髪の中にコントローラーを隠し、遠隔操作していたのだろう。

ANA600便は、台風の雲の中を、恐るべき勢いで降下している。こんなに高度を下げてどうするつもりだ。

乗客たちの悲鳴を聞きながら廊下を突っ走り、階段を降りるとバーの片隅に理子と先ほどまで寝ていた、兄貴、いや、ダンテが窓の近くに立っていた。

「こんな狭い飛行機の中、どこへ行くこうっというだよ。理子!!」

さっきの理子の台詞を返してやりながら、俺はガバメントの銃口を向ける。

「……………俺達に無駄に近づくなよ。唯一、生き残った肉親に、わざわざ自らの手を掛けたくないからな。」

理子の前に立つ、ダンテが背中に携えていた西洋剣の柄を握る。

鋭く輝く、ダンテの眼光。

重くのし掛かる兄貴の言葉。

それが、まるで耳元で囁かれた呪文のように体を縛り付ける。

くっ…………

何なんだよ兄貴!!

なんで俺達の邪魔をすんだよ!!

静かに睨み合うダンテと俺。

「そおだ。スザクう？私を追い込んだ記念に良いこと教えてあげる
ー。えつとねえ、キンジっているでしょ？アイツの兄さんもイ・ウ
ーで生きてるよお。くふふつ。キンジが起きたらそう伝えといてね」

キンジって…

遠山にも兄貴がいるのか！？

生きてるってことはアイツも被害者の一人だったのか…

俺は理子から唐突に、告げられた言葉に驚く。

っーか、驚くのは後だ。

今は理子を捕まえなくちゃいけねえ！！

「ダンテ、あとはお願い」

「無論だ、任せておけ…」

理子はダンテに言うと、ダンテは背中に携えていた西洋剣を抜き放
つ。

シャキンっ！！

鋭い音を上げて、銀色の刃が現れる。

なっ！？

ダンテはゆっくりと窓に近づくと、飛行機の窓の回りの壁を思いき
り斬りつけた。

ザンツザンツザンツ！！

響き渡る剣戟が三発。

ほどばしる閃光。

すると、いとも簡単に壁が斬れた。

なんて鋭さだっ…あの剣は…！！？

壁に、四角い穴が開く。

「んじゃ、バイバイ！！スザク」

「……見ないうちに大きくなったな朱雀。近いうちにまた会おう。」
理子とダンテはその穴から機外に飛び出して行った。
パラシュートも無しで ！！

「くっ……………」

室内の空気が一気に引きずり出されるようにして、窓に向かって吹き荒れる。

機内に警報が鳴り響き、天井から酸素マスクが雪崩のように飛び出した。

バーにあった諸々の物が、窓の穴から吸い出されていく。
紙や布。

グラスや酒の瓶。

そして 俺も

「っ！！！」

床に据え付けられたスツールにしがみつくと、天井からは自動的に消火剤とシリコンのシートがばらまかれてきた。

トリモチのようなそのシートは空中でベタベタとお互い引っ付き合い、ダンテが斬り開けた四角い穴に蜘蛛の巣を張るようにして詰まっっていく。

俺は手近な窓にしがみつくようにして、外を見た。

僅かな月明かりの差す、そこには

クルクルクルクルツ、と宙を踊るようにして遠ざかる理子とダンテが見えた。

次第にダンテが近付いていき、理子を抱き抱えようと
ばっ！！！！

突然、ダンテの紅いマントが三角形のパラグライダーになる。

最後に見えたのは、遠ざかり、雲間に消えていく紅いパラグライダーだった。

ふっ……やっぱりな……

機外に脱出するために、高度を下げていたいたんだな。

くそっ…もうちよっと早く対応しときゃ…

「な、に!？」

その理子たちと入れ違いに

この飛行機めがけて、雲間から冗談のような速度で飛来する2つの光があつた。

今の俺の目が、その何かを捉える。

バカな。

あり得んだろ。

ミサイルだと　!？

ドドオオオオッツツ!!

轟音と共に、今までで一番激しい振動がANA600便を襲った。

突風や落雷とは明らかに違う、機体を巨大なハンマーで二発殴られたような衝撃。

「!?!」

俺は必死の思いで窓にしがみつく。

そして、すぎるような思いで、翼の方を見た。

悪夢のような連撃を受けながらも、ANA600便は、なんとか持ちこたえていた。

翼は二基あるうちの左右のジェットエンジンのうち、内側を一基ずつ破壊されていたが外側にある残りの二基は無事だ。

血のような煙の帯を引きながらも、辛うじて飛んでいる。

くっそ………

さっきの急減圧のせい、まだ目が眩みやがる。

だが、急がなければならぬ。

コックピットに。

何とか耐えたとはいえ、ANA600便は急降下を続けているのだ。

機長と副操縦士、奇襲に備えて始めに配置しておいた遠山キンジは、理子に麻酔弾を撃たれたらしく昏倒していた。

「 遅い!! 」

機長と副操縦士から取った非接触ICキーで操縦室に入ったところらしいアリアが、やって来た俺に振り返りつつ犬歯を剥いて叫んでくる。

足元には、あのセグウェイの銃座にも似た妙な機械が転がっていた。これは理子が髪に隠したコントローラーで飛行機を遠隔操作するために仕掛けていたカラクリを、アリアが外した残骸のようだった。

「アリア 操縦は俺に任せろ」

「え、ちょっと」

操縦席に座ろうとしたアリアを避け、ドツカリと座るとハンドル状の操縦桿を握る。

アリアは唾然として俺を見る。

「ちょっとスザク!? アンタ飛行機の操縦できるの!?!」

「少しならね。車輛科の実習も少し取っていたからできないわけねえさ。」

武偵高の授業は四時限目までが普通科、五時限目から自分の科や他の科の授業を自由に受けれる仕組みだ。

その時間を暇潰しに使って色々な科の実習を受けてきた。

もちろん強襲科もだが、諜報科、尋問科、鑑識科、装備科などの実習もちよろつと勉強してきた。

ジャンボジェットの操縦はシミュレーターで練習したぐらいだが、だいたい操縦の仕方ぐらいは分かる。

相変わらず緋色の髪を靡かせる俺は思いきり操縦桿を引く。

それに呼応して、ANA600便は目を覚ましたように機首を上げた。

「アリア、そこに寝てる遠山を起こせ。少々手伝ってもらうことがある」

「わかった、任せて」

アリアは隣の席から離れて遠山を起こしに行く。

そして機体が、水平になったのが分かる。

豪雨が流れる窓に視線を戻すと、この機体がヒヤツとするほど海面の近くを飛んでいたのがわかった。

高度は、300メートルそこらだろう。

危なかった。

安堵の表情を浮かべたが、顔がひきつったようにパンパンになっていた。

くそ…今の俺の状態がいつもとは違う。

アリアとキスをしてから体が火照ったように熱い。

初めはただ恥ずかしいからという勝手なことを思っていたが、どうやらそれは思い違いだったようだ。

まるで何かに、体の芯から侵食されているかのようにジンジンと熱い。

何なんだよ…この感じは!?

明らかに違う感じに未だに信じられない。

熱を帯びた、操縦桿を握る手に流れている汗。

この感覚、尋常じゃない。

「おはようございます。おや、先輩？髪の毛が大変なことになってますが？」

「おはよー遠山。ご機嫌で何よりだ」

顔を真っ赤にしながら入ってくるアリアの背後から一段と低い声が聞こえる。

俺はそれが遠山とすぐにわかった。

いつも違つと感じたか、なぜか遠山が今の俺に近い状態だとわかった。

同じなのだ。

体の芯に集まる血の流れが。

全体から発せられるオーラが。

遠山もそれに気づいているか、普段通り、なに食わぬ顔で俺と会話している。

スゴい連中が二人、遂に揃ったということが実感できる。

「先輩、今の状況はアリアからだいたい聞きました。俺にも手伝わせてください」

「バツカヤロ。そのためにアリアを起こしにやったんだろうが。役に立たなかったらこっから飛び降りてもらっからな？」

俺が真顔で冗談を言いながら遠山を見る。

遠山はクールに微笑むと、隣の席に座る。

すると遠山は無線機を探し当て、インカムからスピーカーに切り替えた。

『 3 1 で応答を。繰り返す こちら羽田コントロール。』

ANA600便、緊急通信周波数127・631で応答せよ。繰り返す、127・631だ。応答せよ 』

声が聞こえてきた。

遠山は手馴れた様子で計器盤に備え付けられたマイクをONにする。

「こちらANA600便だ。当機は先ほどハイジャックされたが、今はコントロールを取り戻している。機長と、副操縦士が負傷した。現在は乗客の武偵三名が操縦を代行している。俺は遠山キングジ。あとの二名は鳳凰院朱雀、神崎・H・アリア」

遠山の声に、羽田は安堵と驚きを混ぜたような声を上げた。

おし、とりあえず管制塔との通信は繋がったみてえだ。

俺は遠山の指示を待ちながら、操縦桿を握る。

遠山は続けざまに、何かを取り出して左手で操作している。

ありや、衛生電話か。

携帯電話とよく似ている電話機は船舶通信などにも使われてるやつで、人工衛星を介しておよそ地上のどこからでも、どんな速度でとんでいようと、電話回線に繋ぐことができるものだ。

今の俺にでも彼の行動の先を読むことが出来る。

おそらくは

コール音がスピーカーから聞こえ始める。

「誰に電話してるの？」

聞いていたアリアに、新たに繋がった音声スピーカーから答えてきた。

『もしもし？』

「俺だよ武藤。ヘンな番号からですまない。」

『キ、キングジか！？いまどこにいる！？お前のカノジョが大変だぞ

！！』

「カノジヨじゃないが、アリアなら近くにいるよ」

やはり武藤か。

『ちよ…お前！！何やってんだよ！！』

「か…かの、かの!？」

「カノジヨ彼氏なんてどうでもいい武藤。いまそっちの状態はどうなんだ？」

『！？その声は、す、朱雀先輩!？』

「ああそつだ」

自分がカノジヨ扱いされてることに、アリアはぼぼぼぼ、とまた赤面癖を發揮した。

何か不平を言いそうなアリアを遠山が、つ、と唇に人差し指を当てて抑止する。

アリアはますます真っ赤になっていくが、硬直して黙った。

なかなかやるじゃないか。

それを見た俺は苦笑いを浮かべる。

武藤は武藤で、まだ病院に入院していると思っていた人物がいるという事で驚きの声を上げた。

『朱雀先輩!!こつちはとつくに大ニュースになってるツス!!恐らく客の誰かが機内電話で通報したと考えられます!!乗客名簿はすぐに通信科が周知して、アリアの名前があつたんで、今みんなで教室に集まっているとこッス!!』

俺は、遠山に代弁を頼み、羽田コントロールと武藤に状況を詳しく手短かに伝えた。

機がハイジャックされ、犯人が逃亡したこと。

ミサイルをぶちこまれ、エンジンが二基破壊されたこと。

『……ANA600便、まずは安心しろ。そのB737-350は最新技術の結晶だ。残りのエンジンが二基でも問題なく飛べるし、どんな悪天候でもその長所は変わらない』

羽田コントロールの声を俺はふーん、と軽く流して操縦桿を操作する。

『それよりキンジ。破壊されたのは内側の二基って言ったな？燃料計の数字を数えろ。EICASアイキャス 中央から少し上についている四角い画面で、二行四桁に並んだ丸いメーターの下にFuelフュエルと書かれた三つのメモリがある。その真ん中のTotalトータルってヤツの数字だ』

うわー、まるで計器盤が見えてるみてえに喋りやがるな武藤のやつ。さすがは車輛科の優等生だな。

説明に釣られて俺も目で後を追う。

そこに表示させられた数値がどんどん下がっていくのが見えた。

「数字は 今、540になった。どうも少しずつ減っているようだ。今、535」

数値を読み上げた遠山に、武藤の舌打ちが聞こえた。

『くそつたれ 盛大に漏れてるぞ』

「ちょ、マジかよ！？と、止める方法はあるのか武藤？」

燃料漏れと聞いて、俺は焦ったように武藤に言う。

俺と遠山の間にいるエリアはスーッと青ざめている。

しばらくの間のこと

『すみません先輩。方法は無いツス。分かりやすく言うと、B737-350の機体側のエンジンは燃料系の門も兼ねていて、そこを壊されると、どこを閉じてても漏出は止められないんツス』

「んじゃ、あとはどれくらい飛んでいれんだよ？」

『残量はともかく、漏出のペースが早いツス。言いたくないけど…
…飛べてあと15分ぐらいツス』

「さすがは最先端技術の結晶だな」

聞いていた遠山がそう毒づく。

悪いが俺もそれは同感だ。

『キンジ、さつき通信科から聞いたがその飛行機はそもそも相模湾上空をうろつる飛んでたらしい。今は浦賀水道上空だ 羽田に引き返せ。距離的にそこしかない』
「言われんでもそうするつもりだ」

俺は武藤に言い返す。

『……ANA600便、操縦はどうしているのだ？自動操縦は決して切らないようにしろ』

「はっ。自動操縦なんて遠の昔にぶっ壊されてるっつーの。今は俺が操縦してるから心配すんなよ」

鼻で笑った俺が目で示した計器盤の一部ではAutopilotオートパイロットと書かれたランプが赤く点滅し、点滅と同じテンポで警告音が鳴り続けていた。

「 というわけで、着陸の 」

「遠山。着陸なら心配いらん。シミュレーションでやったことしか

ないが、確実に着陸できる。いや、着陸する」

羽田に問おうとする遠山の声を遮り、俺はそう宣言する。
アリアが驚きの眼差しで見るのが分かる。

何か言い出しそうだったので、つ、と遠山の真似をして人差し指を唇に当ててみる。

案の定、アリアはまた顔を真っ赤にして押し黙った。

そして俺は正面に視界を戻す。

雲の下　暴風雨が吹き荒れる眼前には、黒い海の向こうに東京圏の光が見えていた。

俺たちはあそこへ、突っ込むような形で飛んでいるのだ。

俺は車輛科で習った方法で計器を読む。

現在の高度は1000フィート

たしか1フィート約30センチだから、およそ300メートルか。これはどう考えても危険な高度だが、あと10分しか飛べない俺達は燃料を一滴たりとも無駄に出来ないの、1メートルも上げられない。

横須賀上空に差し掛かったあたりで

『ANA600便。こちらは防衛省、航空管理局だ。』

羽田のスピーカーから野太い声が聞こえてきた。
防衛省だあ？

『羽田空港の使用は許可しない。空港は現在、自衛隊により封鎖中だ。』

『何いつてやがんだ!!』

叫んだのは俺でもアリアでも、隣の操縦席に座る遠山でもなく、武藤だった。

『誰だ』

『俺あ武藤剛気、武偵だ!!600便は燃料漏れを起こしてる!!飛べて、あと10分なんだよ!!代替着陸なんてどこにもできねえ、羽田しかねえんだ!!』

『武藤武偵。私に怒鳴ったところでムダだぞ。これは防衛大臣による命令なのだ』

「へえ〜…。乗客もいるし、こうやって助かるうと頑張ってる俺達

がいる。なのに防衛大臣つてのは相当な大バカ野郎だな？俺達や乗客もろとも死ねってことかい」

防衛省の対応に呆れた俺はそう毒づく。

「自己紹介するまでもねえよな？俺は鳳凰院 朱雀だ。テメエら
犯した失態の尻拭いをした野郎だよ。羽田を開放しねえならこっち
にも考えがある」

「なっ！？鳳凰院だと！？」

「ああ。防衛大臣に伝えときな。あと5分で羽田を開放しねえなら、
テメエの首を絞めることになるぞってね」

俺は過去数回にわたって、防衛省の国家機密の依頼を受けていたこ
とがある。

国家機密というだけあって、バラされては大変な事ばかり。

国民の反感を買うような任務だったのを記憶しているし、何より、
その証拠となる依頼状や資料もちゃんとある。

まあ、俺みたいな腕つぶしがいい武偵だとよくあることだ。

つまり、あと5分以内に羽田を開放しねえなら、国家機密の内容を
マスコミに公開するということだ。

誰だっけ自分の権威を他の誰かに失墜させられたくはないだろ？
それとの交換条件ということさ。

「驚いたわねスザク…アンタにこんな知り合いがいるなんて…」

「さすがです先輩！！尊敬するツス！！」

「止せよ。昔、ちよつとだけ関わったことがあるだけだ」

驚いた様子で俺を見る2人。

そんなにジロジロ見るなよ。

恥ずかしいつたりやありやしねえ。

「とりあえず航路変更なし。防衛省航空管理局より連絡があるまで、当機は引き続き羽田空港を目指してフライトを続航する」

2人の視線から顔を避けてそう宣言する。

それから数分後

防衛省の航空管理局から連絡が入った。

「ANA600便。こちらは防衛省の航空管理局だ。防衛大臣の命令により羽田を使用することを許可する。今現在、自衛隊を撤去させている。幸運を祈る。」
「こちらはANA600便。当機は予定通り、羽田空港の滑走路に着陸する」

ふう。

冷や汗もんだな、全く。

その3分後。

俺達は何事もなく、無事に羽田空港の滑走路へと降り立った。
ギリギリだったな、ほんと。

着陸後、俺達三人は無事に生きて戻ってきたことを実感して喜び合った。

しかし、そんな喜びもつかの間で

操縦席から立ち上がり、そのままコックピットを抜けると、ブチブチツという不快な音と共に背中へ稲妻が走った。

しまった　　ッ。

突然、膝を着く俺。

「先輩!？」

「スザク!？」

「っ。無理が祟ったみたいだ…背中が傷口が」

ドサッ。

背中を引き裂かれるような激痛に無残に倒れ込む俺。

そういえば、バスジャックで撃たれた時の、背中の傷口が完全には塞がってなかったのだ。

理子との戦闘といい、なんといい、派手に動き回ってたから傷口が開いたのだ。

今頃、度重なる無理が祟ったのだろう。

こんなところを舞に見られたら、鬼のような折檻どころか、あの世に逝ってしまう。

「大丈夫ですか先輩!？」

「しっかりしないスザク!？」

「すまん遠山。肩を貸してくれ」

この激痛のせいで感覚が麻痺した。

俺は痛みを堪えながら、遠山の肩を借りて飛行機を降りたのだった。

「先輩、ちょっと良いですが？」

エアジャック事件が解決し、病院に担ぎ込まれた俺は背中の中の傷口の縫合が終わってベッドに横たわっていたところだった。色々な想いに更けていた時、遠山が一人で俺の病室に入ってきた。どうやらアリアは来てないみたいだ。

「どうした？」

「先輩に聞きたいことがあります…」

「そうか。何だ？聞きたいことって？」

「エアジャックの時、先輩がいつものような先輩じゃなかった。あの時、先輩から俺と同じ”感覚”がした。明らかにあの感覚は”ヒステリア・サヴァン・シンドローム”だった。」

ヒステリア・サヴァン・シンドローム？

聞いたことがない病名だな。

でもサヴァン・シンドロームなら聞いたことがある。

サヴァン症候群だっけか？

そのままか…。

確か遺伝性の脳障害の一種で、特定の分野だけに超人的な力を発揮するという。

だけど、ここまで超人的な力を得るなんて聞いたことがないぞ。

「ど、どういうことだ遠山？俺もお前と同じって？」

「ここだけの話ですけど、俺もその力を持っているんです」

「ちょっと待て。ところでなんで俺がそんな力を持っているだ？た

しか遺伝性の脳障害が一般的な通説だろ？そのサヴァン・シンドロームってやつは？親父もお袋も、そんな力を持ってない一般人だぞ？」

「ええ！？どういうことですか!？」

驚愕の声を上げる遠山。

それにビツクリして俺も飛び起きる。

俺んちは一般家庭だ。

特異体質なのは俺だけなんだよ。

「俺に聞くな」

「でも…あれはたしかに…」

「……………」

「突然変異とでもいいますかね？たしかに俺と同じ”感覚”がしたし、若干ですが今も感じます。”あの力”が使われている時と同じ感覚が」

「……………!？」

どういうことだ…今も感じるって…

「詳しくはわかりません。とりあえず、俺と同じタイプですが、異なった能力を持つてるといふことにしておきましょう」

「……………」

納得はいかない。

なんでこんな体になったのか。

仕方ない…そりゃそうだ。

俺がなりたくてこんな体になった訳じゃない…

なるほどな。

幾度となく無茶してきたけど、この力には助けられてきたってわけ

か。

「そう深刻な顔をしないでくださいよ。俺だって詳しくは分からないんですから。あと、この事は他の人に内密にお願いします。知られると厄介なことになるんで……」

「そうだな……… 所謂いえば遠山。お前の兄さんいるんだよな？」

「え、あ、まあ………」

「武偵殺しの犯人、理子から聞いたんだんけどお前の兄さん生きてるらしいぞ？」

朱雀の発言に遠山は訝しげに俺を見る。

俺はそれを無視して話す。

「兄さん……が……生きてる？」

「ああ。現に死んだはずの、俺の兄さんも生きていた」

「バカな………」

「信じないのは構わないが、もし信じる気持ちがあるならば……… 一緒に調べないか？『イ・ウー』について」

コンコン。

その時、タイミングよく扉を叩く音がして

「ちよつと良いかしら？」

ドアが45。ぐらい開き、アニメ声が聞こえた。
所謂いえば前もあつたな、こんな光景。

「あれ、キンジもいたの？」

「ああ。ちよつと先輩に用があつてな」

「そう。ちよつとよかつたわ。私も二人に用があつたの」

「俺達に？」

するともしもじした後、アリアは上目遣いで二人を見る。

「あたし、今日ロンドンに帰るわ。色んなことがあったし、帰って一度態勢を立て直すことにしたの。パートナーも見つからなかった。これで実感したわ。私は独唱歌、誰も私にはついてこれない」

突然、アリアの申し出に俺たちは顔を合わせる。

「本当ならアンタ達二人がよかつたんだけど、二人ともに却下されたし 二人の意見も尊重してもうドレイなんて呼ばない。でも、見付からない訳じゃないってことがわかつたから 帰ることにしたの」

張りのない、寂しそうなアニメ声がシンと静かな病室に響く。いつもの元気がない、アリアの表情。

その雰囲気には俺は顔を伏せた。

わかつてる。

何かと騒がしいやつだけど、俺と同じ孤独を背負ったやつなんだ。重すぎる十字架だよ、アリアには。

一人で戦って、一人で傷付いて。

これから来る『イ・ウー』の連中の相手をしなくちゃいけない。

それは可哀想過ぎるだろ、ホントに。

それに

アリアの母親も助けていない。

いや、母親を助ける前に、アリアが死んでしまうだろうが。

それもわかつてる。

こんな小さな子が、惨めすぎるだろ。

普段は可愛いのに見栄張って自分自身を出そうとしない。

そう叫んだ後、ダッシュで近付いてきて俺に抱き着いた。鼻を掠った、あの山梔子の香り。

その時に見た俺の胸の中で笑うアリアの顔は、どこにでもいる普通の女の子のようでホントに可愛かった。

遠山も遠山で、俺を苦笑いしながら見る。

「そうと決まればいまやることは一つだ。遠山？止血テープ持つてるよな？」

「武偵手帳に入ってますが」

「何すんよスザク？」

決まってるだろそんなこと。

実のところ、俺は病院が大嫌いなんだ。

お世話になってるのは分かる。

雰囲気とか、ご飯が不味いから嫌いなんだよ俺は。

ま、まんざら嘘なんだが。

遠山から止血テープをもらうと、点滴の針が刺さっている場所にぺちぺちと貼り付けていく。

それを見たアリアと遠山の顔を一気に青くなる。

「ちよ、ちよつと先輩！！何を」

「しよ、ししし正気なのスザク！？アンタ、それ抜いたら」

いち、にい、のお、せつ！！

ブチッ！！

ああ。

俺はなんてことをしてんだろ。

「おし、お前ら！！帰るぞ！！」

俺は絶対安静とレッテルを無理矢理引き裂いて、俺はアリアを抱き抱えたままベッドから飛び起きる。
啞然と俺を見ている遠山。

「こんなんで寝てる場合じゃねえ。早く帰るぞ！！来いキンジ！！」
「はいっ！！」

それで抱き抱えているアリアを見て一言。

「こんなやつらをパートナーにするんだ、それなりの覚悟してんだろうな？だけど安心しろ。俺たちはお前を、絶対に独唱歌^{アリア}にはしない！！」

その言葉に真っ赤な顔面のアリアが息を飲む。

俺は病室から飛び出して一気に階段へと駆け抜ける。

階段へ出ると、そのまま一階の入り口まで駆け抜ける。

痛みなんざ関係ねえ。

そんなのどーにでもなっちまえ！！

そうして、俺たちの新しい高校生活は波乱含みで始まったのだ。

どうも、作者のKOH・SAWAGURAです
いやあ、やっと原作一巻分を書き終えました
頑張った頑張った

ここで一巻終了を記念して、まだ公開していないエピソードを載せ
ちゃいます!!

あれだけ思ってるのに、何で届かないんだろう？
本当に恋って偉いんだよね。

それとも、朱雀が気づかないのかしら？

恋愛に鈍感なのかな？

だったらかなり困る(汗)

………恋…恋…鯉!?

あの、端午の節句に空高く上がる…

ってそれは鯉のぼりか…

『Act 2・9 舞の恋、届かぬ想い』

SSRの研修終了後。

部活に顔を出しに行くと後輩で同じSSRに所属する星伽 白雪と
約束していた。

白雪を連れ、一緒に実習棟を出た舞は朱雀にいつものようにメール
をしようと、鼻唄を歌いながら楽しみにケータイのフリップを開け

る。

その隣で白雪が羨ましそうに舞の顔を覗き込む。

15時33分、新着メールが一件。

朱雀からかな？

そうだったらラッキーね。

それは同級生でクラスメート、朱雀の元パートナーの夜桜 彩からだった。

その文面を見た時、一瞬で舞の背筋が凍った。

朱雀が：朱雀が撃たれた！？

しかも意識不明の重体：

ケータイを握る右手に力が入らなくなる。

まさか：

「ちよつとゴメン白雪ちゃん！！急用ができちゃったから、明日遊びに行くから！！」

「あ、はい ではまた明日」

白雪は一瞬驚くが、何もなかったように笑顔で言う。

朱雀負傷の訃報を受けた舞は、急いで都内の総合病院へと向かっていった。

朱雀が、もし朱雀が死んじゃったら私は誰を好きになれっていうの！？

もう今の私じゃ朱雀のことしか考えられないのに！！

ケータイが軋むほど、力強く握りしめて歩道を全力疾走する。

しばらく走っていると息が切れてきた。

しかし、舞の頭の中はそれどころじゃなかった。

疾風の如く、病院へ駆け込むと受付で朱雀が搬入されたか確認して、急いで指定された場所へと向かった。

そこには同級生の彩、そして後輩の遠山 キンジと神崎・H・アリアがベンチに静かに座っていた。

奥が手術室であり、『手術中』と赤いランプが灯火されている。どうやら手術は始まったばかりのようだった。

「彩くん、朱雀の容態は？」

「……深刻だ白百合さん。どうやらアリアを庇ったのが原因で朱雀の背中に四発ももらったらしい。例え9mパラベム弾だったとしても場合によっちゃ即死だ。しかし、朱雀の場合は防弾制服のお陰で傷は浅いらしい。」

「よかった……」

「だが、アイツは一番重要な”止血を”しなかった。ただでさえ手が真っ赤に滲むほど出血していたのに、パーティーを組んでいた遠山の忠告を無視して止血をせず、爆弾を解体した。そのせいで危うく失血死するところだったんだ……」

「え……」

「昔からホントに大バカ野郎だよアイツは……一度死にかけてんのにまたか……結果的に帰って来なかったら、アイツが助けた奴等に示しがつかねえっつーのによ……」

彩は両手で顔を覆い隠し、そう言った。

隣に座るキンジとアリアは俯く。

私は頭の中に初めて朱雀と出逢った時の光景を、一番初めに掛けられた言葉を思い出した。

「大丈夫か？」

私が朱雀と出逢ったのは今から二年前の入学試験の現地テストだった。

試験開始直後。

突然、背後から後頭部を拳銃の台尻で打たれ、気を失った後だった。ふと、目を覚ますと空は暗く、満月が昇っていた。

起き上がる私を見て、月明かりに薄く見える誰かがそう言った。辺りを見ると、同じ実地試験を受けた生徒が幾重にも重なりあって気を失っていた。

ぶつきらぼうに、愛想がない、感情すら籠っていない台詞。ゆっくりと私は声がする方を向いた。

夜風がさらさらと吹き抜ける。

給水タンクの上に見える人影。

ゆっくりと月が誰かを照らし出す。

夜風に靡く黒い髪、夜空を見上げている横顔。

月明かりに写し出された誰かの横顔は、とても凜々しくて、綺麗でカッコ良かった。

『悪いな。丸腰のアンタに不意打ちなんて掛けてよ？別に悪気はなかった。許してくれ。』

『は、はい／＼』

『なんだ…その…今回の詫びと言っちゃあなんだけど、俺がお前を守ってやるよ。今回みたいに背後から襲われちゃ、何かとアンタも困るだろ？』

月夜に流れる何気ない一言。

それが私と朱雀の逢いだった。

「たしかに朱雀は大バカ野郎だわ…私との約束、何も守ってないじゃないのよ…それなのに……………」

涙で潤む舞の視界。

その時だった。

『手術中』のランプが消え、白衣の医師が出てきた。みんな立ち上がり、医師に駆け寄る。

「手術は…?」

「手術は成功しましたよ。あとは本人の回復力しだいですね。」

ドツと溢れ出す安心感。

ふらふらと舞は床に座り込んだ。

そしてその夜。

両親も親族もいない朱雀の看病をするために、舞は朱雀の隣で静かに寝息を立てた。

どうでしたか?

愛読者の皆様、まだまだ未熟者なのでこれからも精進していきたい
と思います!!

多くの応援と感想を、よろしくお願いいたします

病院から脱走後、何事もなく男子寮にある俺の部屋に着いて、三人で夕飯の支度をしていた。

とりあえず、三人でパーティを組んだからには、何かしらお祝いらしいことでもしなくちゃな。

なんて考えて、今日は俺のこぢんまりした部屋ですき焼きパーティーだ。

しかも、材料は全て俺の奢り。

まあ、何かと面倒なことは忘れて、今日は楽しんで貰おう。

そして嬉しいことに、遠山キンジがなんと俺の部屋に移住することになった。

ベッドも在り余つてるところだったし、ちょうどいいタイミングだ。そこで、アリアはというと

「ドレイ二人の部屋が一緒なら当然ご主人様の私も一緒よね？それにまだアンタたちには”あの責任”取って貰ってないし、何よりも武偵殺しの犯人である理子は捕まえ損ねた。ということと念のため、私もしばらくここへお泊まりするわ。」

おいおい。

いくらなんでも横暴すぎる。

「つかもうドレイって言わない約束じゃないか？」

それにまだ根に持ってたみたいだな。

あのキスのこと。

あれはあれで咄嗟に出た不可抗力だし。

アリアの主張を聞いた俺とキンジは同時にため息をついた。

さっさと女子寮に帰れと言ったところで、ガバメントぶっぱなされ

なんじゃこりゃ!?

新着メール50件!!

不在着信30件!!

しかも宛先が全部『白百合』だ。

なんだってんだよ…

メールの一件目の『S研の強化合宿終わったから遊びに行くね。そう言えば白雪から聞いたんだけどスザクってあのアリアって女の子と同棲してるってホント?』に始まり、『ねえ?なんで返事しないの?』や『ちよつと待ってて、今行くから!!』と時間が進むにつれて恐ろしいものへと変わっていく。

冷や汗が流れ落ち、俺の顔がにわかに引き釣る。

ヤバイ、これはヤバイ。

ふと前を見るとキンジも同じような顔になっていた。

もしかして…

「キンジ、お前もか?」

「な、何がです?」

「例の一方的に好かれてるっていう幼馴染みの嬢ちゃん、確か星伽

白雪とか言ったよな?そいつからの執着熱心なメール」

「先輩、やたらと勘が良いですね……」

「やっぱりな……」

互いに苦笑いを浮かべて、俺が食べ頃になったすき焼きの牛肉を摘まんだ時だった。

テキテキキーン!!なんて某ロボットアニメの効果音が響いて、

俺の頭の中を稲妻が走ったような気がした。

嫌な予感が胸を遮り、先ほどのメールの内容が頭に巻き戻され、シネマチックに流れ込んでくる。

ヤバイ、ヤバすぎる!!

俺の予想が当たれば

「……ア、アリア……どっかに身を隠しておけ……ヤバい奴が来たっ!!」

どどどどどど、と、まるで何かが突進してくるような凄まじい音が男子寮の廊下に響き渡る。

俺の部屋は男子寮の最上階の一番端っこにあるため、ここに来るまでは一方通行だ。

とうとう来てしまったか!?

俺はパチンと箸を茶碗の上に置き、近くに立て掛けてあった、届いたばかりのメタルラックの支柱の四本のうちの二本を手に取る。この間前に使ってたメタルラックをアリアと舞に壊されたので、けなしの金をはたいて通販で新しく買った物だ。

当然、アリアは何が起こっているか分からないだろう。

キンジは何が起こっているかすぐに把握したらしい。しかし、時はすでに遅かった。

シャキンッ!!

チカツと扉から火花が散ったと思うと、鉄製の扉が十の字に”斬り開けられた。

げ。

何の躊躇いもないのかよ!?!
人様ん家の玄関だぞ!?!

啞然とその光景を見ていると、巫女装束に額当て、たすき掛けをして日本刀を大上段構えで立ち尽くす大和撫子と、キレイなクリーム色のストレートヘアを神話に登場するメデューサのようにその髪をふわふわと浮かせて、鬼のような形相をして立ち尽くす美少女の姿があった。

「「やっぱり……いた!!神崎!!H!!アリア!!」」

完璧と言って良いほど、同調した声でアリアに吼える二人。こうなることは予測不可能だった。

俺はてつきり白百合だけが来ると思っていた。

そうなればこの支柱でなんとか相手する事が出来たはず。

しかし、生徒会長の『星伽 白雪』までが来るとは想定外だった。

くそう、せめてアリアだけは見付からないように隠しておけばよかった。

一般人じゃない俺はまだしも、あとの二人が並大抵の人間だ。

この二人をまともに相手するなんていくらアリアでも無理だ…

殺されちまう……………！！

それにまた前みたいにアリアに変な言葉を言われちゃ、俺は飛び回るあのナイフで、斬刑に処されてしまっただろう。

無論、三途の川への渡し賃さえ貰えんかも知れん。

そうなるのは真っ平御免だ。

だが、俺より先に二人は目の前に座る敵を殲滅せんとはかりに動くは、疾い！？

「ま、待て白雪！！お、落ち着いて俺の話を聞けっ！！」

「退いてキンちゃん！！それじゃその泥棒猫を！！殺せない！！」

よ、よかった…

アリアの前にキンジが割って入ってくれたみたいだ。

どうやら生徒会長さんはキンジの言うことを聞けらしい。

あとはこっちはこっちで……………

「ス〜ザ〜ク〜」

「ぬおっ！？」

いつの間にか、”それ”は背後にいた

「そう言えばあのとき、アリアとはもう会わないって言ってたわよね。」

「ち、ちよつと待て、待つてくれ舞！！これにはふかーいわけが……」

「言い訳なら後でたつぷり聞いてあげるわ朱雀。だから今はそこを退いて頂戴。朱雀をたぶらかす魔性の女をこの世から消す」

「勘違いもいい加減にしてくれ！！俺はどこも汚れてなんか

」

何とかアリアと衝突しないようにと説得を試みたものの、結局、説得しただけでは埒はあかなかった。

風の如く俺の横をすり抜けて行った舞は、スカートの下から数本の投擲ナイフを、手も触れずに取り出す。

サイコキネシスの能力のお陰で取り出された投擲ナイフは、まるで生きているかのように弧を描いて飛び回る。

ちっ……これじゃいくらなんでも分が悪すぎる。

だが、また暴れられちゃ、ここにはもう居られなくなる。

この場は鉄製の支柱を使って何とか凌ぎきるしか方法はない！！

「神崎！！H！！アリア！！」

「覚悟っ！！」

飛び交う投擲ナイフと白雪の日本刀がアリアを殺しに迫る。

「くっ……させるかっ」

俺は傷が塞がったばかりの鉛のように重たい体。

動きが鈍すぎるこの体に鞭を打って、渾身の力を込めて駆け出した。両手に握る二本の支柱を目にも止まらぬ速さで振り回し、呆然と立ち尽くすアリアに迫るナイフを次々と叩き落としていく。

鉄と鉄が衝突して激しく火花を散らす。

それは次第に心地よい音色へと変わる。

キキキン、キン、キキキンキキキン！！

鉄製の支柱に弾かれたナイフはドスドスと次々に壁や床へ突き刺さっていく。

アリアもアリアで、ようやく目が覚めたように背中から素早く二本の日本刀を抜き放って振り下ろされる白雪の日本刀をガキンツと受け止める。

「朱雀！！キンジ！！どうにかしなさいよ！！」

「言われなくともやってるだろ！？」

俺はアリアの周りを飛び交うナイフを必死に叩き落とす。

言うまでもなく家の中は無惨な状態になっている。

キンジは余りにも現実から掛け離れた光景に啞然と俺達を見ている。さすがにキツくなってきたな…

「先輩？」

「なんだ、キンジ？」

「終わったら呼んでください、俺、外の倉庫に隠れているんで」

この二人を相手に武力介入する余地がないと判断したのか、はたまた自分の命が惜しくなったのか、スタスタと早足でキンジはベランダへ逃げていく。

まあ、一般的に考えたら賢明な判断だろうな。

俺みたいなバカとは違ってね。

「ちょっと朱雀！！何で邪魔するのよ！！トドメが刺せないじゃない！！！！」

「そうですね鳳凰院先輩！！退けなきゃ先輩も巻き込みます！！キ

ンちゃんの仇っ！！」

「バ、バカヤロツ！！その物騒なもんを納める二人とも！！まとも
に話しすらできないじゃないか！！っーか星伽ちゃん！！まだキン
ジは死んでないっ！！」

「くう……そこまでその小娘を庇うなら上等よ朱雀っ！！今回は遠
慮なく斬り捨てるわ！！死を覚悟なさい！！」

「ス、スザク！！無理しちゃダメ！！傷口が」

分かってるさ。

分かってるアリア。

心配してくれてありがとうな。

俺の背中 of 傷口が開くことも、この場でアリアを庇って死ぬことも。

ってアホか！？

まだまだ死にたかねえし、いつも舞と一緒にいること自体ずっと死
を覚悟してるわ！！

上等だ！！俺だっけ殺ってやるよ！！

俺は二本の鉄製の支柱を器用に高速回転させ、パシッと正手へ持ち
変える。

実は銃に頼りすぎて近接戦闘は苦手中の苦手だ。

でもなんとか凌ぎきれればこっちのもん。

さあ、どっからでも

「夜な夜な煩いぞ。」

その一言でぴん、と一瞬で空気が殺気に満ちたように張り詰めた。

低くて鋭い、殺気が籠った声。

俺が発した声でもない。

まさか、キンジか？

いや、それはない。

一触即発状態の舞と白雪がゆっくりと振り向く。

先ほど斬り開けられた玄関に一人の人影。
そこにいたのは

「おやおや。随分と愉しそうだこと。愉しいのは結構。だけど近所
迷惑だつてことに気付かないのか？このアホどもが。」

毒々しく吐き出す言葉。

紅い前髪のメツシユに黒い髪。

寝間着か、甚平か、なんか和風イメージするような軽い服装にサン
ダル。

腰に携えた忍者刀はもう抜き放たれ、右手に納まって部屋の明かり
をキレイに反射している。

「夜桜……くん!？」

「夜桜先輩!？」

夜桜？

彩か!？

よかった、この騒ぎを聞いて駆けつけてくれたのか…

「ご名答。余りにも五月蠅すぎるとルームメイトから苦情が来てね。
その問題を解決するためにわざわざ出向いたという訳だ。しかし
随分と派手に暴れてるなあ、それで武装した二人でその怪我人と
憎んでる小娘を虐めてる、と」

お邪魔するぜ、と言ってからズカズカと部屋に上がってくる。

しかし、いつものお調子者の彩とは全然違う雰囲気だ。

並々ならぬ殺気まで感じる。

ホントにこいつ、彩か!？

「夜桜くん、これにはちょっと訳が」

「言い訳は無用だ舞。闇に墜ちたくなければ黙って部屋からその身を退け。あいにく今の俺は虫の居所が悪いんでね。女に手を出すわけにもいかないが、ことと場合によってはアンタらの柔い体を”解体”する羽目になる。お互い様、そんな結末は嫌だろっ？」

「うう……………」

優しく殺気に満ちた微笑で舞と白雪に囁く彩。

それに怯えたのか、日本刀を下に下げて白雪はスツと身を引いた。

「彩」

「おお、相棒。病み上がりの運動は如何だったかな？」

「しんどいの一言に尽きるな。それとありがとう。危なく死ぬ所だった」

「礼にも及ばんよ。ただ五月蠅すぎるから見に來ただけのこと。これから静かにしてもらえれば、もう來ない」

爽やかに言う彩。

するとそこへ、ピンク色の愛らしいパジャマを着、やたら明るいピンク髪のショートヘアの子が入ってきた。

初めはみんな、その子が女の子かと思ひ、啞然とそれを見ていた。

「彩先輩！！部屋にいないと思つたら…ここに來てたんですか！！」

「うん？アランか。分かつた、もう帰るとしようか。ちなみに俺たちの部屋はこの真下だ。なんかあつたらまた來るからな？」

それだけ言い残すと彩はアランに手を引つ張られて、何事もなかつたように部屋から去つた。

すっかり戦う氣を無くした舞と白雪は、ゆっくりと床に膝を着いた。俺ももうダメと言わんばかりに、膝を床に着き、深呼吸する。

アリアは何が起こったのかわからず、この場に立ち尽くしていた。

一段落してベランダの倉庫に身を隠していたキンジも戻り、五人揃って破壊し尽くした部屋を片付けた。

もうすき焼きなんて食う余裕すらないし、そもそも跡形も残っていない。

だいたい元通りにしたところで、俺とキンジと、舞と白雪の間で今回についての話し合いが持たれた。

長テーブルに対面するように座る俺と舞、キンジと白雪。

一方、今回の火種になったアリアは疲れたようにソファーにもたれ掛かっている。

長い沈黙が流れる。

「……………キンちゃん様？」

「何だ白雪？アリアと一緒にいる、と言うことにでも弁明でもしろと？」

「さあ朱雀。私に隠していること、全て吐きなさい」

「隠していることはない。俺とキンジは神崎・H・アリアの任務上でのパートナーになったってことだ」

「…!?」「…」

対面する女子組は驚く。

何かのヘンなスイッチでも入ったのか、女子組の会話の内容が明後日の方向へと突き進んでいく。

「だからって…同棲…まさか、もしかしてキンちゃん……………」

「断じて言うがな白雪、俺はどっこも穢れててなんかいないぞ!!」

「まさか朱雀も……………あの女が”私だけ”の朱雀をこき使って”嫌ら

しいこと”や”淫らなこと”を……」

「なっ、バツカじゃない！！あ、あああたしがそんなするわけ無いでしょ！？」

「キ、キンちゃんになんてことを！！！！！！」

アリアはボボと赤面しながら犬歯を剥き出して叫ぶ。

キンジも暴走する二人の誤解を解くために必死だ。

しかし対面する俺は反応に困った。

ほかにも突っ込むことが山ほどあるが、どう対処していいか分からん。

っーか話が飛躍し過ぎだろ！！

どこまでいってるんだよ！？

実を言うはこの手の話に、俺はとことん疎い。

俺が押し黙ってしまうと同時に、女子二人の妄想爆進撃はどんどんエスカレートしていく。

また騒がしくなってきたな。

「五月蠅い！！とりあえずみんな落ち着け。これ以上騒ぐと近所迷惑になる。第一に、俺やキンジもそれが目的でアリアのパートナーになったわけじゃない」

「それじゃ何が目的なの！？」

「っ……………」

舞の切り返しに痛すぎるしっぺ返しを貰ってしまった。

アリアを守るためだ、といったらまた二人から変な誤解を招くだろう。

はたまたイ・ウーのことやアリアの母親のこと、兄さん（ダンテ）のこと

話してしまえばそれまでだが、これは決して話すものではない。

アリアやキンジとくっついていれば、生きていた兄さんについてや、

もつと自分の奥底に秘められた力を知ることができると思ってたから。

でも、本当の目的はアリアの命を、そしてその笑顔を守るためだ。それを考え込んだがために、俺は黙ってしまった。

「どうしたの？なんか言いなさいよ!!」

「舞先輩、もしかして先輩とかキンちゃん様とかしちゃったんじゃないですか?……た、例えばキ、キキキスとか……」

ちゅど~~~~ん!!

何が爆発したような気がする。

アリアは耳まで真っ赤にして俺とキンジに助け舟を求める。

お、おい、いくらなんでも酷じゃないかそれは……

無論、俺に弁明なんてする余地はない。

あれはキスしたうちに入るのだから。

つい俺もあの時を思い出してしまい、アリアからパッと目を離す。

キンジも同様だったらしい。

それを見たわなわなと舞の体が震え始め、白雪は不気味な笑い声を発する。

その時、アリアは腰に手を当て、無い胸をドーンと張って立ち上がった。

「でもだ、大丈夫よ!?こ、こ

こ?

なんだよ、『こ』の次は?

「子供は出来てなかったから!!」

ぼくぼくちくくくん。

お仏壇の木魚が鳴ったような気がした。

俺の目の前が真っ白になる。

ああ、これは死の確定通告だ……

俺の短すぎる人生終わった

「ち、ちよつと待てアリア！！何で子供なんだよ！？」

「五月蠅いわねバカキンジ！！これでも結構悩んでたんだから！！」

「バカはお前だろ！！なんでよりによって子供なんだよ！？普通に考えてできるわけねえだろっ！！」

「んじゃ、どうやったらできるのよ！？教えなさいよ！？」

「教えられるかあ！！」

俺はアリアとキンジの馬鹿げたやり取りをしている脇を、幽鬼のようにゆらゆらと通り抜けて寝室へと向かう。

ダメだ：ここに居れる気がしなくなってきた。

居たら気がおかしくなっちまう。

ノブに手を掛けてドアを開けたとき、何気なくチラリと後ろを振り返ってみた。

先ほどまで居た白雪の姿はもう無く、舞は

「朱雀のファーストキスは私のはずだったのに……」

と、床に顔を伏せて悔しそうに泣き叫んでいた。

ファーストキスもくそつたれもあるかっ

もうホントにいい加減にしてほしい。

病み上がりの体を動かされた挙げ句、精神的な苦痛を味わうとは最悪だったな。

そんな痛々しい現実とはおさらばして、今日は寝よう。

明日から普通に学校へ行くつもりだし、早く寝てしまわないと寝坊してしまう。

夕飯も食べてないが、さすがに食べる気がしない。

まだ言い争っている二人を尻目に寝室へ入り、右端の二段ベッドの下に寝転がる。

ポケットからケータイ電話を取り出し、フリップを開き、装備科の親しい友人・熱田雪斗へ近いうちに新しい拳銃の仕入れと開発を頼んでいた『例の武器』の受領しに行くと、メールを送る。

そのあと、俺は何もなかったように眠りについた。

… 3 (前書き)

ファンの皆さん、大変お待たせしました
やっと更新出来ました
是非読んで下さい

「起きて、ダーリン」

大乱闘があった翌朝、俺はキャラメルのように甘ったる過ぎる声の、モーニングコールを耳元で囁かれた。

あまりにも突然の出来事で、身の毛も弥立つほどの悪寒を背筋に覚えながら、ロケットの如くベッドから飛び出した。

ゴンツッ！！

案の定、金属製のベッドの支柱に後頭部を激突させたが、お陰様で目が覚めた。

丸くなり、低い声で呻きながら、打った後頭部をスリスリと摩る。

「大丈夫！？朱雀！？」

心配そうに俺の顔を覗くクリーム髪の美少女。

いつもならアリアの蹴りが顔面に飛んで来るはずなのだが、こんな日に限ってアリアよりも早く起こされる。

それよりも、だ。

ひとつ、トンデモなく重大なことに気が付いた。

何で俺の部屋に、しかも俺が寝てるベッドの布団の中に舞がいるんだ？

ここはあくまで男子寮だぞ？

あくまでもじゃなくて、いつの間に俺の隣で寝てやがったんだこの女！！

キツ、と俺が舞を睨み付けると、いやん、という感じで頬を赤く染めて、舞は上目遣いで俺を見たあと、俺から顔を反らす。

「寝起きの顔は見ないで。寝起きの舞はすごく酷い顔なの。朱雀のばか、えっち」

「あのな、見たくて見たんじゃねえ！！何で俺の隣で寝てるんだよ！！通りで狭い訳だし、寝返り打てねえし、っーか結局昨日は帰ったんじゃねえのかよ！？」

「最初は帰ろうかなとは思ってたけど、あのアリアとかいう女狐に、私の大事な大事な朱雀が色々な意味で大変な事されちゃいけないと思って、ずっと朱雀に添い寝してたの いやん／＼」

「いやん、じゃねえよ！？いいから早く俺の部屋から出てけよこのバカタレが！！」

上目遣いでこのうと言いつつ舞を尻目に、俺は冷ややかに言う。

アリアは反対側の二段ベッドの下の段に、キンジは俺のベッドの真上に寝ている。

キンジとアリアがまだ起きてない事を確認すると、ずっと抱き付いている舞を強引に引き離して起き上がり、あの荒野と化したリビンググに向かった。

「はあ…朝から何なんだよ全く……」

俺は傷だらけのポロポロになったソファーにゆっくりと腰を下ろし、大きくため息をつく。

リビングの壁に掛けられた赤い時計の指針はちょうど午前5時45分を指す。

ちっ。

起き損したぜ。

あと一時間は余裕で寝てれるっつーのに。

まあ、たまには早起きも悪くは無いな。

なんて考えたりするが、今の状態の体はそれを望んではいけないよう

だ。
重たく閉じようとする瞼を、無理矢理抉じ開けて、大きな欠伸をひとつ。

どちくしょうめ、眠くて仕方ねえ。

「ねえ、朱雀う。置いてかないでえ。」

「うるせーな。誤解を招くような変な事すんじゃねえよ全く。朝飯は自分で作るから、とつと自分の部屋に戻れ」

「……………はい」

とても残念そうに肩を落とし、玄関から出ていった舞。

なんでこんなにまで俺に執着するのか、いまだによく分からん。

半ば苛つきながらも、キッチンの流し台の下の棚を開け、カップラーメンを出す。

普段から料理を作るのが面倒な俺は、一日の食事をカップラーメンか学食で乗り切っている。

アリアにどう言われようと、面倒なのは面倒なので料理は滅多に作らない。

……………昨日は例外だけだな。

とりあえずやかんに水を入れて、コンロに掛ける。

それと同時に、アリアが起きてきた。

「……………おはよう。寝坊助のスザクにしては随分早いわね？何か良いことでもあったのかしら？」

「うるせーな。起きちまったから仕方ねえだろ。良いことなんか何も無い」

「ふーん。んじゃコーヒーちょうだい。」

「悪いが俺の部屋にはコーヒーという飲み物はない。飲みたいなら販売機なりコンビニ行って自分で買ってこい」

「スザクは私のドレイよ。貴方が買ってくるのが道理ってもんじゃ

ない普通？」

「そんなの知るかつ…」

びーっ！っ！！

やかんが甲高い音を立てて、アリアへ反論した俺の声を遮る。

ガチャン。

俺はコンロの火を止め、予め開けておいたカップラーメンの口にゆつくりと丁寧にお湯を注ぐ。

「お腹空いた。スザク、朝ご飯は？」

「カップラーメンでも、自分で作って食べよ。昨日のすき焼きの材料の残りなら冷蔵庫の中にあるし。あ、そう言えばコンビニで買っておいたももまんもあるぞ」

「も、もまん！？」

「おお。んじゃ、飯も食い終わったから俺はキンジを起こしに行つて来るか」

5分。

俺が閉じたカップラーメンの蓋を開け、麺をそそり、汁を飲み終わるまで掛かった大体の時間だ。

アリアは好物のももまんと聞いて、今、キッチンにある冷蔵庫を漁っている。

俺は綺麗に完食したラーメンのカップを、キッチンの隅にあるごみ箱へフリースロー。

バカンッ！！

綺麗に弧を描いたカップは見事にごみ箱の中へ収まる。

そして俺はジャージに着替えて、再び寝室へ戻り、ベッドの中で寝息を立てて寝ているキンジを起こす。

「起きろキンジ。朝だぞ」

「……………あ、おはようございます先輩」

「おう。おはよう。朝飯は適当に食ってチビスケ（アリア）の面倒見ててくれ。俺は久々に朝のジョギングでもしてくる」

「適当に食って良いんですか？とりあえず分かりましたけど、朝っぱらからアリアの面倒を見るのは流石にちよつと……………」

「少しだけで良いんだ。ちよつとイラつく事があったから気分転換にな。あとでその分の埋め合わせはしてやる」

布団から出てきた寝惚け眼のキンジに、そう釘を刺して寝室から出る。

珍しくアリアは大好物のももまんを、小さなちゃぶ台に正座しながら、大人しくはむはむと食べている。

その後ろ姿を見た俺は、思わず吹き出しそうになった。

まんま小学生だな、ありや。

込み上げる笑いを堪えながら、何もなかったように玄関に向かい、コンバースのスニーカーを履く。

ガチャツ、ガスツ…

俺はいつものようにチェーンロックを開錠して玄関の扉を開けると、何かが扉に突っ掛かった。

一体なんだ？

開いた隙間から、恐る恐る扉の外を覗く。

そこには何やら大きな四角い物が見えた。

ちくしよう、宅配された段ボール箱か。

痛む傷を堪えながらずいずいと扉ごと押し退け、ようやく外に出る。しかし、やたらと大きな段ボールだな。

配達し間違えかと思ひ、宛先を見る。

ボールペンでやたらと丁寧に書いてやがるな。

鳳凰院 朱雀、うん、俺宛だ。

差出人の名はなし、宮城県から届いたらしいな。

……………なんか怪しい…

たしかに宮城県は俺の生まれ故郷だが、両親が亡くなり、唯一面倒を見てくれていた清隆兄さんが居なくなつて以来、東北武偵高付属中学を卒業した俺は、自分の居場所を探すためにこつちに来た。本来の家を捨てた、関わりがないはずの場所からの宅配便。

親戚か……？

いや、親戚なんていたか？

やたらと大きな段ボール箱とにらめっこすること数分。

考えても仕方ないことに気がついた俺は、それを家の中に運んで物置に突っ込む。

大きさのわりには軽かつたな。

再び気を取り直して、ジヨギングをするために部屋を後にした。

男子寮の門をくぐり抜け、いそいそとジョギングを始める。

まあ、ジョギングをすると言う口実は真っ赤な嘘で、俺は『ある人物』に会いに行くつもりだった。

その人物とは誰もが認める装備科の天才児で、隣の3年B組に在席する熱田雪斗^{あつた ゆきと}。

武偵ランクは、たしか数少ないSランクの一人だったかな。

拳銃の整備やチェーンアップ、刀の研磨、製造や鑄造など、1から拳銃や刀剣を造れるのは、武偵高では彼しか居ないからだ。

東京武偵高に入学してからは、ちよくちよく世話になっているが、彼は誰に対しても丁寧でとても優しいし、頭も良くてスポーツも万能^{ぶつ}。

何しろ2年の不知火亮に匹敵するぐらいの爽やかなイケメン君だ。ちなみに彼は特異体質の持ち主らしく、手で触れた武器と”会話”が出来るとらしい。

だから、その人に合う装備を直ぐに選べるし、武器の不調の原因も分解しなくとも直ぐに分かると言う。

そのお陰で、学年のメンバーや後輩、^{マスタース}教務科に絶大な信頼を得ている。

実は彼に”ある武器”の製作の依頼を随分と前からしていた。

昨晚、メールをしたところ、完成したと言う返信を受けて、今日にでも俺へ持ってくるかと約束した。

しかし、ただでさえ身動きが取りづらい状態にある俺のことをある程度考慮してくれていたらしく、雪斗の申し出で朝早くから会ってくれることになった。

「やあ、おはよう朱雀くん。今日は雲の無い清々しい朝だね」

武偵高が建つメガフロートの一角、穏やかな水面が見える東京湾に面した、岸壁沿いに彼は静かに佇んでいた。

同じジャージ姿で迎えてくれた、爽やかなイケメン男子。

凛々しい顔立ちに、艶のある黒髪を潮風に靡かせ、並びのよい白い歯を見せて微笑みながら、いつものように爽やかに挨拶を交わす。

”キラースマイル”とはまさにこの事だな、とつくづく思い知らされる。

「おはよう熱田。いつもすまないな」

「気にしないでくれよ。いつものことだからね。依頼人のニーズに合わせて親切に、丁寧に最後までやり抜くことが僕のやり方さ。戦闘には向かない僕に出来ることは、こうやって戦いに赴く人を全力でサポートすること。それより例のモノなんだけど、こんな感じで良いかな？」

戦いに赴く人を全力でサポートすること。

それが熱田雪斗の口癖であり、固く決意した彼の信条である。

どこまでも親切で謙虚、自分の出来ることを優先して活躍してる人のサポートに回る彼の人の良さに、いつも俺は感心してしまう。

実際、彼の戦闘の能力は悪くはない。

たまたまクラス別の模擬戦で組み手をしたことが何度かあるが、戦いの駆け引きがとても上手いし、強襲科Aランクの彩とタメを張れるほど、強いのは今でも印象に残っている。

彼自身、戦闘には向かないと言い張っているが、もしも彼が俺や彩と同じ強襲科にいたならば、恐らく彼は素晴らしい武偵になっていたであろう。

それを無闇に人前に出さずに、自分の出来ることを極め、ひたすらサポートに回るのはとても難しく思える。

いつものように微笑みながらそう言う雪斗は、手に持っていた銀色

のアタツシユケースを俺に丁寧到手渡す。

俺は手渡された銀色のアタツシユケースをゆっくりと開ける。

そこには、キチツとスポンジの型に当てはまり、陳列された六本の棒が入っていた。

長さは30センチほどで、幅が1センチ程度の円柱型の棒。

完成品を初めて見た俺は、ちよつとびつくりした。

それを見た雪斗は、付け足すように言う。

「一本一本、手製のギミッククロツドさ。小さなその円柱型の棒の両端は空洞で、中にはワイヤーを数十センチほど巻いたリールが搭載されている。その両端にはアーム式のジョイントがあるから、一本一本繋いで使うことも出来るスグレモノ。もちろん、単体で使ってもOK。不規則な戦い方をよくする朱雀くんなら簡単に使えると思っよ。」

「……なあ熱田？お前の頭の中は一体、何で出来てるんだよ？」

「さあ。なんだろうな。とりあえずミソは入ってるだろうね。もうぎっしりと」

「そりゃいいな。俺の頭はミソすら入ってない」

そんな冗談を交わしながら、棒を手にとって眺めてみる。

金属特有の光沢を放ちながら、それは俺の手の中に収まる。

ずしりとした、重さと冷たい感触がある。

そして、雪斗からそれ専用のホルダーを貰い、両足の太股に三本ずつ取り付ける。

ふと思ったことがあったので、とりあえず聞いてみることにした。

「熱田、この棒の名前は？」

「名前かい？……そう言えば考えて無かったな」

「そうか」

「いい名前でも思い付いたのかい？」

「いや、何となく聞いてみただけだ。今日は朝早くからありがとう
な」

しばらく話し込んだ後、俺は雪斗にそう礼を言つと、部屋に帰るこ
とにした。

制服に着替えなくちゃいけないからな。

えっと今の時間は…

ゆっくりとケータイ電話のフリップを開いて、現在の時間を確認す
る。

ヤベッ!?

話しすぎたな、もうすぐ朝七時だ!!

ちくしょ、結局トンボ返りかよ!?

俺は急いで踵を返し、再び男子寮の方向へと向かって駆け出した。

なんやかんやあって、猛スピードで寮の部屋に帰ってきた俺。

玄関にコンバースのスニーカーを放り投げて慌てて自室に駆け込み、急いで壁に掛けてあった制服を筆取り取るように取って着替える。

時刻はちょうど7時30分。

アリアとキンジはもう部屋を出たらしく、部屋には誰も居なかった。ただ、ちゃんと部屋のちゃぶ台には「遅刻したら風穴！」と言う置き手紙があった。

やってくれるね、あのチビめ。

焦る気持ちを抑えつつ、先ほど熱田からもらった銀色の棒っ切れを両足の太股のホルダーに収納する。

いつものように右胸に拳銃のホルダーを装着するが、肝心な拳銃が無いことに気が付いた。

あ、ミスったな。

トンデモねえバカ野郎だな俺は。

熱田にあった時に、頼んでおいた拳銃も持ってきて貰えばよかったじゃねえか!?

何故か知らないが、変に焦ってきた。

とりあえず急いで部屋を出て、部屋のすぐ脇にある非常用階段を駆け降りる。

俺の部屋は最上階にあるため、降りるのに一苦労する。

すぐ下の階まで行った時だった。

朝寝坊したかと思われる彩が、物凄いスピードで階段に突っ込んでくる。

「朝寝坊した!!!」

「言わんでもその顔を見りゃ分かる。」

冷静に突っ込む俺。

「今からじゃ7時45分発のバスに間に合わねえよ!!」

「つべこべ言うな!!遅刻したくなきゃ足を動かせ!!」

「言われんでもそのつもりだ!!間に合わなかったらどうすんだよ朱雀!!」

「テメエのZ?に2ケツで行く」

「あ、その手があつて、おい!?サツに見つかったら確実に免停だぞ俺!!」

「その時はその時だ。見つかったら御愁傷様だ」

二人で絶妙な掛け合いをしながら階段を駆け降りる。

さすがは元コンビ。

掛け合いが上手いこと。

なんて内心、毒づく。

案の定、この時にはもう7時45分は過ぎていた。

電光石火の如く、階段を駆け降りて地上に着いた俺たちは、急いで近くの駐輪場に向かうと、黒いZ?に二人で跨がる。

最近知ったのだが、彩と言う男はどうも多趣味らしい。

この間の日曜日、真つ昼間から東京湾でルアー釣りをしていたかと思いきや、次は皇室周りをマラソン。

そして今はバイクいじりだ。

それが運良く遅刻を免れる切り札になったと言うわけだ。

いやあ、ありがたいありがたい。

俺達を乗せた黒いZ?は、唸り上げるエンジンの音を張り上げて駐輪場を飛び出す。

「懐かしいもんだな。バイクで2ケツするのは」

バイクのハンドルを握る彩が呟く。
そう言えば中学時代、二人で駐輪場に停まっていたバイクをパクって遊んでたな。

そのまま家に帰ってきたら、清隆兄さんにこっぴどく叱られたことを今でも鮮明に覚えている。

その頃は俺も彩と同じ、質の悪いワルガキだったんだな、と思い返したりする。

思い出に浸りつつ、過ぎ行く街並みを見ながら、武偵高の門目掛けて彩がアクセルを全開に回す。

その瞬間、俺を見張るような視線が胸を貫いた。

「……………」

咄嗟に振り向き、流れ行く景色の中を確認するが、その視線がどこから来ているか辿れなかった。

俺が後ろを向いたことに勘づいた彩は、背中越しに俺へ問い掛ける。

「どうした朱雀？綺麗なねえちゃんでもいたのか？」

「いや、誰かに監視されてる気がした」

「まさか。気のせいだろ朱雀。もしかして舞とかソフィアとかそんなんじゃないの？お前、やたらとモテるからな」

「……………気のせいかな。なら良いんだが……………」

彩が言う『ソフィア』とは、救護科1年に所属している『神橋・N・ソフィア』で、俺達が可愛がっている後輩のアランの双子の姉を指す。

まあ、話すと長くなるので詳しい話は彼女に会ったときにしよう。気のせいなら、気にする必要はないか。

そうこうしているうちに、俺達二人はチャイムが鳴り響く武偵高の、校門を潜っていた。

なんとか遅刻は免れたが、それからが忙しかった。

俺の教室では一時限目から『アリアと朱雀が付き合ってる』だの、『朱雀と舞が破局した』だの、場を騒然とさせる話題が四方八方から飛び交っていた。

原因はあの、ニュースにまで取り上げられたエアジャック事件だろう。

今は長い長い昼休み。

俺は中央の列の、最後尾にある自分の席に座りながら、どうにかその誤解を解く方法を模索していた。

時たま、後ろの方の隅っこにたむろってる女子生徒の声が入る。

『ねえねえ？二年生のアリアって子、知ってる？』

『ああ。知ってる知ってる！！強襲科に転校してきた緋色のツインテールの？』

『そうそう！！あの子ね、ウチのクラスの鳳凰院朱雀とデキてるんだって！！』

『マジで！？あの朱雀と？』

『それがさあ、強襲科の連中から聞いたんだけど、アリアって子、朱雀のことばかり話してるんだってよ。デキてるってホントかもね〜！！』

……………。

言い触らした人物の名は、見当がつく。

恐らく、アイツしかいないだろう。

まあ、それはシカトしておくのが一番良い方法だ。

『でもさ、舞が可哀想じゃない？三年間、いつも朱雀にくっついてたのよね？』

その言葉を聞いた時、何か喉につつかえた。

モヤモヤとした感じが、頭を巡る。

考えた事もなかったが、確かに三年間、舞は俺から離れたことはなかった気がする。

風邪を拗らせたり、大ケガをして入院した時も、傍らにいつもいた。何かと世話好きで、物好き。

一途で、頑固者。

なんかしつこくて厄介な奴だけど、みんな怖がって寄ってこない俺の、一番近くにいた唯一の人物だった。

でも、俺からしてみれば舞もアリアも、大切な友達。

そう、友達なんだ。

それ以上には、なれない。

いや、なつてはいけない、それを越えたら俺は俺じゃなくなる、そんな感じがする。

だから、異性に対しては冷たく接するのもかも知れない。

ああ、考えるな俺！！

ややこしくなつちまうだろうが！！

「ちよつとスザク！！」

ガシャン！！

と、三年A組の扉を勢い良く開け、緋色のツインテールの子ライオンが犬歯を剥き出しにして吠える。

突然響き渡るそのアニメ声に、俺は拍子抜けして椅子からずり落ちた。

すると、ズカズカと教室に入ってきて、俺の前に仁王立ちする。

噂をすればなんとやら。

何なんだよ、一体!?

「つか間が悪すぎるだろ、絶対に!?

そう思いつつ、冷静を装いながら俺はゆっくりと立ち上がり、堂々と目の前に立つ子ライオンに対峙する。

「俺に何のようだ?」

「ラ・ン・チ!!私と一緒に食べるって約束したでしょ!?まさかアンタ、ちゃぶ台に置いてあった置き手紙読んでなかったの!?!」

「ちゃんと読んだが、そんな事書いてあったか?」

「最後の文よ!!さ・い・ご!!」

「……………」

ギーっと今にも噛みつかんばかりに犬歯を剥き出しにして、アリアは言う。

それを見た俺は一步後退り、今朝の記憶を辿る。
しまったな、焦ってて良く覚えてない。

最後?

ん〜……………なんか書いてあったか?

「……………すまん。忘れた」

「……忘れたなら良いわツ!!べ、べべ別にアンタとなんかランチを食べなくてもノノそれより重大な話があるから、放課後に校門で待ち合わせよ!!良いわね?」

「もしことわ」

「風穴」

ミニスカートの下から素早く抜き放ち、額にガバメントの銃口を突きつけられ、畏縮してしまう俺。

くう、いつものように拳銃があればこんなことにはならなかったのに!!

屈辱だ、ちくしょう!!

しかも、やたらと周りから放たれる視線が痛いんだが。

「……分かった。今回だけは従う」

「分かったらよろしいわ。んじゃ、放課後に校門で」

「なあアリア？1つ聞いて良いか？」

「何よ」

「プライベートなら良いとして、まず学校という公の場で、こんな恥ずかしいことは止めようぜ？他の連中が変な目で俺達を見てるぞ？もしかしたら、俺とお前が付き合ってるなんてホントに誤解されたんじゃ」

「なっ!?!?!」

俺の一言に、アリアの顔面はぼぼぼと真っ赤に染まる。

ヤバイ、やぶへびだったな。

一先ず退散しようか。

手痛いとはっちりなんて食らいたくないからな。

恋愛沙汰が苦手なアリアが、ガバメントを発砲した瞬間を突いて、俺は脱兎の如く教室から逃げ出した。

とりあえずあの子ライオンからは逃げたものの、午後の授業で子ライオンと会うことをビビってフケるワケにはいかない。

卒業するために必要な単位は全部揃えているが、だからと言って油断は禁物だ。

さつき急いで食堂で買った、クリームパンを頬張りながら仰向けになり、誰も居ない強襲科の実習棟の屋上で、雲1つ無い空を見上げる。

清々しい風が、俺を撫でるように通り抜けていく。

そんな風の行く宛なんて、誰一人として知らないだろうな。

俺のこれからの事なんて、誰も分らないと同じように。

青い空って良いな。

見てるだけで心が洗われるって言うか…

何もかも忘れられるような、そんな気がする。

空は、決まった色にしか染めれない。

それを俺達が決めることはできない。

自分の生きる道は自分だけで決めれると同じように、他人が決めることはできない。

なんか、1つの人の生き方を表しているみたいで、見てみるとスッキリする。

だから俺は青い空が好きだ。

なあ？空から女の子が降ってくると思うか？

非現実的で有り得るはずのないことが、現実になってしまった。冗談で考えたことが、望んでもいないのに現実になっちまった。アリアが降ってきて、俺の生活は大きく変わった。

これ以上、ややこしくならなければ、今のままが一番充実してるうな。

「よお？相棒」

仰向けになつて寝ている俺の前に、覗き込むように彩の顔がニユツと現れる。

無論、俺はビックリして後ずさる。

ネックスプリングをして起き上がると、後輩であるアランも一緒にいた。

「ビックリしたろ！！何だよ一体！！」

「ん？俺はただ先客が居たから脅かしてやろうと思っただけ」

「つたく……」

「あ、ちょうどよかった。朱雀先輩。先輩の部屋の前にこんな物が……よいしょつと」

「ん？」

どっかで見たとある段ボール箱をキツそうに抱えたアランが言う。

あれは今朝、物置にしまった段ボール箱じゃないか！？

何故に俺の部屋の前にあるんだ！？

「ちょっと待てアラン、ホントに俺の部屋の前に置いてあったのか？」

「はい、そうですけど」

「なんか気になつちまったから、ここに持ってきたんだけど、なんかマズイもんでも入ってたのか朱雀？」

「まさかな。多分、もう使わなくなったガラクタかなんかだろう」

咄嗟に嘘をついてしまったが、実際はそうであってほしいと言つ自分が出た。

「なあ朱雀？開けちまって良いよな？だってガラクタなんだろ？」

彩は何やら嫌らしい目付きで俺を見る。

アランもアランで

「まさか、エロ本とかじゃないですよ？朱雀先輩に限って」

なんて言っている。

大丈夫だ、俺も何が入っているか分からないからな。

健全な男子ならエロ本の一冊や二冊、持っていておかしくないかも知れないが、あいにく様、俺はそんな本なんて一度も読んだことはない。

恐らく、この三人のうち、たった一人を除いてはね。

「開けて良いですか？先輩？」

「どうぞ」

「了解です ガサ入りまーす」

俺から開封の許可を貰ったアランは、意気揚々と制服のポケットから白い手袋を出して、ビシッと両手に付け、女の子が座るように足を斜めにして座ると、慣れた手付きで箱の口を閉めているガムテープを剥がしていく。

ありやまるで鑑識科の連中を連想させる格好だな…。

……………こうして見ると、アランの1つ1つの仕草や行動が、可愛らしい女の子にしか見えないのは気のせいだろうか？

そしてガムテープを剥がし終え、パカッと箱の口を開けて中を覗き込むアラン。

「いえ!!」

小声でそんな驚嘆の声を上げると、ズバババッと急いで口を閉め、明後日の方向を向いて柵に寄り掛かっていた彩を手で呼ぶ。

「まさかねえ、アランちゃんの手が当たったりして。くっくっく」
嫌らしい笑みを浮かべながらアランの脇に行く彩。

しかし、そんな彩は名前にちゃん付けされることを嫌うアランに、ドスツと鳩尾へ肘鉄を食らわされて悶絶する。

さすがに俺は背中に悪寒を感じたので、二人から目を反らし、眼下に広がるパノラマ風景に視線を向けた。

「朱雀にこんな趣味があつたなんてな……っ！か俺も欲しいこんなの」

「ちよつと彩先輩!? 趣味とか言うよりも、むしろ犯罪じゃないですか!?! これは!?!」

「重罪だな、あの野郎め……」

「信じられないです!! こんなの!?!」

「待て待て待てテメエら。何だよ人聞きの悪い。一体、何が入ってたんだ?」

シカトを貫き通していたものの、背後の会話の内容が次第に気になり、ついつい振り向いて二人に近付いて行く。

二人は来るな来るなど、手で合図をしていたが、それを無視して箱を覗き込んだ。

あり得んだろ……

空から降ってくるのは有りかも知れんが、どう考えても郵送されてくるなんて。

中にいたものを見たとき、俺の思考回路がメルtdownした。

まるで溶鉱炉に投げ棄てられた鉄屑のように、ジュツと。

脳ミソがドロツと一瞬で溶解してしまった気がする。

そこにいたのは

「久しいの。鳳凰院朱雀よ」

黒い艶やかな髪を後ろで結び、アリアのようなキリリとした目。

淡青色の真ん丸な瞳に、まるで侍のような髪をした、ちっちゃな女の子がちんまりと体育座りをしていた。

背中には身の丈程の長い太刀を段ボールの底に斜めに敷き、東京武偵高の制服に身を包んでいる。

「つか、体育座りをしながら真顔で俺に挨拶をするな。なんか変な感じがする。」

しばらく互いに見つめ合い、黙り込む。

「ヤバい、激しい頭痛と目眩がしてきた。」

「わりいな。俺とどっかで会ったか？」

俺は視線を戻しながら女の子に問う。
過去と言う記憶の片隅に、微かに彼女は居るのだが、どうも思い出せない。

「失礼極まりないぞ、無礼者め。『許嫁』の顔を忘れたと言うのか？ 朱雀」

ちよつと待て。
今なんて言った？

「悪いな。今お前、なんて言った？」

「いつまで惚けておる、許嫁じゃ！！」

「それはなんかの間違いじゃないか？ 第一にそんな事なんて約束した覚えはないし！！」

「ええい！！つべこべ五月蠅いやつじやの！！黙って認める！！じやなければ……」

やったらめつたらに古めかしい言葉を使う女の子。

その声を聞いてやっと彼女の名前を思い出した。

彼女の名前は伊達だて楓かえで。

東北武偵高付属中学にいた頃の、舞みたいな性格の奴だ。

まだ舞の方が良いような気がするが…

確か、東北武偵高付属中学の頃は同じ強襲科にいて、武偵ランクは彩と同じAだった気がする。

アリアみたいに小柄なクセにやたらと小生意気で、何か気に食わな

いと自分よりもデカイ太刀をブン回す、なんと奥州の独眼竜『伊達政宗』公の子孫らしい。

ちなみに彼女が使ってるその太刀は『大俱利伽羅』と呼ばれる、太刀の峰に『俱利伽羅』と言う大きな竜が彫られた美しい太刀で、正式な伊達一族に伝わる刀だ。

まさか高校3年までなって東北から俺を追って来るとは。

これが舞やらアリアに聞かれたらひとたまりもないな。

ああ、ここから飛び降りてえ。

無性に飛び降りてえ。

唐突な自殺衝動に狩られるのは気のせいだろうか。

なんて思いに更けてると、あの段ボール箱から飛び出して俺の前に立ち、バカデカイ太刀を鞘から抜いて構える。

まさか、こんなところでドンチャン騒ぎするってのか!?

「待て待て待て待て!?!それを抜いて、ここで何をやる気だ!?!」

「言って無駄なら叩きのめして思い出させるまでじゃ!?!覚悟はい」

キーンコーンカーンコーン

運良く、ここで五時限目が始まるチャイムが鳴った。

辺りを見回すと、彩やアランの姿がない。

クソッ!?!置いていきやがったな!?!

俺は焦りながら立ち尽くす楓の横を、疾風の如くすり抜けると、急いで階段を降っていった。

「ちっ。また逃したか。昔と変わって大層足が早くなったようじゃのう」

ただ通り過ぎて行く朱雀の後ろ姿を見て、立ち尽くしている楓は悔しそくに呟く。

「3年ぶりの再会じゃと言っのに、相変わらず冷たいやつじゃ。昔みたいに構ってくれても良からうに……」

楓は寂しそうに言々とチンツと太刀を鞘にしまい、小さな背中に背負う。

そして朱雀を追うように踵を返すと、階段を駆け降りていった。

「はあ…」

溜め息混じりに自分の席に座る舞。

先ほど、教務科に呼ばれて忠告を受けてきたばかりだった。

その忠告とは『魔剣』についてと、再発した『武偵殺し』について。

『魔剣』は噂でしかないので信憑性に欠けるが、『武偵殺し』の方はとても重大な問題だった。

今回の武偵殺しは、爆弾など姑息な物は一切使わず、人気のない夜にターゲットを呼び出して斬殺するという残酷な犯人。

ターゲットにされたのは我らが超能力研究科（SSR）の女子なのだ。

幸いにも被害を受けた女子生徒は命に別状は無かったが、全治一ヶ月の大怪我を負ってしまったらしい。

生徒達の混乱を招かないためか、この事を話すのは口止めされた。何としても被害を食い止めるには、自分達で解決するしかない。

そう考えた舞だが、頼りにしていた朱雀と入れ違いで教室に戻ってきて、ちよつとシヨックを受けていた。

肝心の朱雀を見つけなければ、これ以上、話が進まない。

でも、恐らくあのアリアとか言う小娘も小判鮫のように朱雀にくつついているかも知れないと思うと、逆に探したく無くなってしまっ。なんか悔しいけど。

とりあえず、携帯電話を出してメールや通話を試みるが、一向に繋がらない。

今朝のことをまだ根に持つてるのかな？

「…どうしたの？溜め息なんかついて」

「あつ、理恵ちゃん 何でもない何でもない 気にしないで!!」

突然、背後から小声で話し掛けてきた茶髪でキレイな女の子。

私はパツと作り笑いを浮かべて、考え事を隠す。

彼女は篠原^{しのはら} 理恵^{りえ}ちゃん。

クラスメイトで、鑑識科に所属するおしとやかで寡黙な女の子。

身長も高く、胸も大きくてスタイルも良いし、なんと言っても中学時代はイギリスで鑑識の勉強してきたという珍しい経歴を持つ帰国子女。

日本に戻ってきた理由は、初恋をした人が忘れられ無かったからだって。

何かロマンチックで良いよね

ちなみに、つい最近このクラスに転校してきた男子生徒らしい。

はて、誰だったかな……

いつも無表情に近い感じで、滅多に感情を表さない。

でも、一回話してみると素直でお茶目な印象を受けることが多々ある、何か不思議と面白い人。

「……………何かあったの?」

「ううん、何でもないって ところで理恵ちゃん? 朱雀の姿を見なかった?」

「……………朱雀なら随分前に出ていったわ。……………まだ帰ってきてないみたい。……………舞は彩の姿を見なかったかしら?」

「彩? ああ、夜桜君? 夜桜君なら確かさつき階段上がってくる時、階段の下のベンチに座ってポーツと上を見ていたわね。そう言えば二年生の武藤君と一緒にだったはず」

「……………ありがとう」

「You're welcome」

それを聞いた理恵は血相を変えて、教室から飛び出して行った。

うくん、誰か知ってそんな人はいないかな？

あ、そう言えば朱雀って二年生の遠山君と仲が良いらしいわね。電話してみよつと。

この間、後輩の白雪からちゃっかり遠山キンジの携帯電話の電話番号を聞いておいたので、すぐに電話を掛ける。

一回の発信音が鳴った後、声が聞こえた。

『もしもし』

『もしもし遠山君。白百合舞です。』

『し、白百合先輩！？何で俺の電話番号を知ってるんですか！？』

「それは後で話すわ。それより、朱雀を見なかったかしら？ちよつと大事な用事があって……」

『朱雀先輩ですか？うくん、分かりませんね…。今、食堂に居たのでとりあえずアリアと一緒に探してみます。見つかり次第、折り返し電話します。携帯電話には繋がらないんですか？』

「携帯電話には繋がらないのよ。何度もやってみただけ。とりあえず見つけたら折り返し電話ちょうだいね？バイバイ」

そう言って私は通話を終了した。

一体、どこにいるのよ朱雀ったら。

机に伏すように頭を下げると同時に隣のクラスの爽やかイケメン・

熱田雪斗が入ってきた。

何故が一瞬だけ、教室がざわめいた。

そしていつものように爽やかな笑顔を振り撒きながら、私の席に近付いてくる。

「やあ、白百合さん。朱雀くんを見なかったかい？渡したい物があったんだけど……」

「あいにく様、ここには居ないわ。渡したい物ってなに？」

「いや、昨日発注した拳銃がさつき届いたから、持ってきてあげた

「ただけど、どこにいるか知らないかな？」

「分からないわね。携帯電話で連絡してみたら？」

「それが圏外らしくて繋がらないんだ。おそらく電源を切ってるのかな。なら仕方ない、後で直接渡そう。ありがとう舞さん」

そうやって爽やかに挨拶をすると、雪斗は教室から去って行った。

再び、机に視線を落として溜め息をつく。

次の五時限目からは科目別の実習授業が始まるし、そうになると朱雀にはなかなか会えなくなる。

どうしようどうしよう。

焦るので頭の中で考えが堂々巡りする。

キーンコーンカーンコーン

そうこうしているうちに、五時限目の開始を知らせるチャイムが鳴ってしまった。

舞は慌てて席を立つと、急いで教室から飛び出して行った。

なんやかんやあつて始まつてしまつた五時限目。

生存率が97.3%の強襲科に所属する俺は、近々始まるアドシアードという、銃の技術を競つたり、徒手格闘等を行う武偵張りなキナ臭い競技に出場する、強襲科の後輩達のトレーニングに付き合う羽目になつた。

毎年3人が死亡する魔の強襲科のSランクなんて、なかなかいるもんじゃないし、みんなの憧れの的だ。

でも赤の他人から見れば、俺やアリアなんて化け物そのものだろうな。

更々付き合つ気すらなかつたが、強襲科担当の蘭豹や担任の棗先生の推薦もあつて仕方なく来たようなもんだ。

本来ならば、この時間を有効に使つて食費稼ぎに、掲示板へ貼つてあつた依頼を受けるつもりでいた。

不知火やアリアを始め、選りすぐりのメンバーが一堂に強襲科の実習棟に集まつた。

それを見て圧巻していたが、とりあえず咳払いを1つすると、軽く挨拶をする。

「え〜と、今回、君達のトレーニングのコーチングをすることになつた強襲科3年の鳳凰院 朱雀だ。よろしくな」

よろしくお願いいたします!!

と、一人除いて全員の威勢のいい返事が返ってくる。

いや、実に清々しいね。

さてと、初めは百人組手か……

ん？

ちよつと待て!?

教務科の連中め、なんてハチャメチャなカリキュラム組みやがるんだよ!!!

俺がコイツら全員を一人だけで相手するつてのか!?

素晴らしく腕の立つ連中を、百人も東で相手するなんて、いくら俺がSランクでも無茶苦茶すぎやしませんか?

顔が若干、引き釣っているのが自分でもよく分かる。

「一番目はあたしから行くわ。Sランクの武偵同士の戦い、目玉ひんむいてよく見ておきなさいよ!!!アンタたち!!!」

先頭に立っていたちっこいのがアニメ声で叫ぶ。

そのお陰で、他の連中も鼓舞する。

な、なんてこった……

よりによって一番目の相手はアリアかよ!?

つか、コイツってアドシールドに参戦すんのか!?

「なあ、アリア?まさかお前……」

「アドシールドには出るつもりは無いけど授業の一貫として受けるわ。それにまだパートナーとしての実力、あたしにまだ見せ切っていないんじゃない?エアジャック事件の時の貴方はとても強くて、と……っててもカッコ良かったわ。何であんなに強くなったのか、パートナーであるあたしには知る必要があると思うの。貴方の中には特別な力がある。貴方はそれを上手く使いこなせてない。恐らくそれを使うにはある条件があつて、その条件が揃うと発現する。そこであたしが考え付いたのが貴方を極限まで追い込むこと。そうすればきつとエアジャック事件の時の”あのモード”に切り替わる!!! あたしも本気で行くから、貴方も本気で掛かって来なさい。良いわね?」

「おいおい、いくら何でもそりゃ……」

と、俺の意見はスルーされ、地獄の百人組手が始まった。どうやらアリアは、俺があわけの分からん覚醒モードに切り替えさせるために仕組んだらしい。しかし、あれは偶然の賜物で、狙ってできるそんなもんじゃない気がする。

しかも、そのモードに切り替わるトリガーはと言うとこれまた衝撃的な”キス”なんだよね……あくまでも俺の憶測にしか過ぎないが。

まあ、戦う分に越したことはないし、先ずもって何でも有りの特別ルールなら、こっちは銃撃戦の方が右胸にぶら下がる空のホルダーに、手を掛けて拳銃自体が無いことに気が付く。

しまった、拳銃を熱田のところへ取りに行くのを忘れちゃったな。やべえ、このちんけな六本の鉄の棒で近接戦をあの獰猛な子ライオン挑めつてか!?

近接戦だけは、超苦手だったのに!?

「ちくしょう、どうにでもなりやがれ!！」

そう吠えると、正方形に囲まれたマットの上へ互いに立つ。笛の合図で組手がスタートする。

ルールは簡単で、俺を倒したり、マットから出たらあっちの勝利。俺がコイツら全員を倒すか、マットから出したら俺の勝ちになる。なんて単純なんだろうな。

ちなみに、10メートル四方しかないこのステージでは、無駄な長期戦が逆に命取りになる。

百人も相手をするには、手早く薙ぎ倒さなくては勝ち目はない。しかし、苦手な近接戦だけでアリアに勝てる自信はない。

まあ、やるしかない。

「はじめっ!!」

笛と声の合図と共に互いに距離を詰める。

アリアは牽制するために素早く黒銀のガバメントを抜き放って構えるが、俺はそれよりも早くアリアの懐に飛び込んで、左手で腰の右側面に付いているあのロッドを二本、ほぼ同時にホルダーから外す。バシッッ!!

目にも止まらぬ速さで二本のロッドを繋ぐと、引き金を引こうとしている黒銀のガバメントをマットの上へ叩き落とす。

銃撃戦はダメと判断したのか、アリアは背中から日本刀を二本とも抜き放ち、閃く流星のように俺へ降り下ろす。

キギギンッ!!

俺は素早く振り抜いた左手のロッドを切り返して、俺の脳天に振り下ろされる二本の日本刀へ当てて斬撃の軌道を逸らすと、右手で左側面に付いている二本のロッドを素早く抜いて繋ぎ、再び横に捌かれる二本の日本刀を受け止める。

バシッバシッ!!

打ち合った瞬間、赤い火花が飛び散る。

そして互いに鏑迫り合いに持ち込む。

よし、相手が女の子なら体格差と力で幾分かこちら側が有利だ。

「隙だらけよ!!」

間一髪、自分が劣勢と判断したアリアは俺の腹部へ思い切り前蹴りをしようとするが、その前に鏑迫り合いで俺に押し切られてしまい、そのまま態勢を崩して引っくり返ってしまう。

俺は素早く腰にロッドをホルダーに納めて屈むと、足元にあった黒銀のガバメントを両手に取り、アリアより早く立ち上がると、立ち上がったばかりのアリアの額にその銃口を当てる。

「ち、チエツクメイト!!」

掠れ気味の俺の声が響く。

辺りが静かになり、盛大な拍手が沸き上がる。

そうして、アリアvs俺の組手は、俺の辛勝という結果を残して幕を閉じた。

ちなみにその後、俺は残り99人全員を相手にしようと試みたのだが、まるまる二時間使っても全員を倒せずに終わってしまった。

「やっぱり強いわねスザクは。絶対絶対、ぜったい認めたくないでも百人は出来なかつたけど、たった二時間で強襲科Aランク相当の連中を”85人”も倒すなんて、あたしには考えられないわ。なに？アンタって化け物か何か？」

「化け物だなんて失礼な。アリアにだけは言われたくはない。このちび獅子め。あれはあの後、お前から貸してもらったガバメントのお陰だよ」

「か、貸した覚えはないっ／＼アンタが勝手に使ってたんでしょっ／／」

頬を赤らめて叫ぶアリア。

隣を歩く俺は苦笑いを浮かべる。

全ての授業を終え、約束の放課後。

俺はアリアに言われた通り、校門で待ち合わせしていた。

病み上がりとは言え、一発目から百人組手なんてなんちゅう仕打ちだよ。

強襲科Sランクだからと言って、いくらなんでもあれは酷すぎる。

体のあちこちが軋み、ジンジンと痛む。
背中の銃痕はもうふさがって何ともないのだが、百人組手で新たに出来た痣や擦り傷がやたらと痛む。
お陰さまで顔や体中、絆創膏だらけだ。
みつともないっいたらありやしねえぜ。

「クスッ。ねえスザク？なんか喧嘩した後みたいになってるわよ？その顔」

「仕方無いだろ、あんな乱闘になるなんて思ってもいなかったんだからさ」

「でも、真剣に戦ってるスザクの後ろ姿はちょっとだけカッコ良かったわ。」

「……………」

俺はシンと黙り込む。

だって、急にそんなこと言われたら、反応に困ってしまう。

黙り込む俺に気付いたアリアは、急いで前言の訂正を弁解する。

「べ、別に誉めてるわけじゃないからね／＼変な誤解はしないでよ／＼」

「変な誤解をしてるのはお前だろ、俺はどっこもカッコよくなんてない。だいたい、俺のどっこがカッコいいん」

「全部」

「えっ」

唐突に、背後から声がしたので二人はゆっくりと振り向いた。
そこには舞が静かに佇んでいた。

不穏な空気が三人の間に漂う。

ヤバイ、アリアと楽しそうに会話してるのを見られちゃったな。
っーか、楽しそうに見えるのかこれ？

これで手なんて繋いでたら、確実に俺が死んでしまう。

前に立つ舞の背後にどす黒いオーラが見えるのは気のせいだろうか…

「なんじゃ、こんなところにいたのか朱雀よ。随分と探したぞ」

再び背後から古風な口調の声がする。

俺の背筋に悪寒が走る。

バツと振り向くとそこには剣道着姿の、随分と凜々しい出で立ちの楓が立っていた。

どうやら部活帰りらしい。

なんてこった、見事に挟まれちゃったよ。

「何よ、次から次へと…」

「さあな、俺にもよく分からん」

状況が状況。

事態は最悪、至急援軍を要請したいぐらいだ。

ここで乱闘なんてされたんじゃ、俺の身も心も持たない。

今の状態でコイツらを相手したら、多分、俺が力負けして袋叩きの刑。

退路は二つ。

左の学校か、右の町中か。

どうする、どうする俺。

「はて、朱雀よ。そちの隣にいる女と、後ろにいるは何じゃ？」

「「そういうアンタ（貴方）こそ、スザクの何なのよ？」」

やめろっ！！

それをコイツに聞いたらおしまいだ！！

舞もお前も、そしてアリアも再び敵に回してしまっ羽目になっちま

うー!!

俺は喋り出そうとする楓の口を塞ごうと、駆け出したのはいいが

「スザクはわしの”許嫁”じゃ、それ以下でも以上でもないわ」

遅かった。

俺はそのままつんのめって楓を通り過ぎ、ヘッドスライディングしながら、アスファルトの上を3メートルほど滑っていく。

ああ、死神が俺の前に立っている。

さあ持つていけ、俺の薄汚い魂を。

あの事件が発生してから数分後。

俺は某ファーストフード店へ例の女子3人に軟禁されていた。

一つのテーブルに俺を囲むようにアリア、舞、楓の順で座っている。その理由はただ一つ。

先ほど楓が言い放ったあの爆弾発言で、俺に弁明を求めたためだ。

目の前に座る3人は相変わらず論争状態。

被害者でもある俺に弁明を求めはるはずが、なんか浮気がバレた彼氏みたいに、俺は縮こまって椅子に座っている。

つーか、あの3人が勝手にやってんだつーの。

俯いたまま、とりあえず沈黙。

今の状態じゃ、話す言葉さえない。

まあ、乱闘にならなくて済んだが。

もちろん、そんな関係になったつもりは毛頭ないし、とぼっちりも大概にして欲しいものだ。

「ちよつと何なのよアンタ!! 朱雀の許嫁って何よ!？」

「許嫁は許嫁じゃ、そちこそ朱雀の何なのじゃ?」

「私は朱雀の彼女!!」

「これ、ピンクの。そちは何なのじゃ?」

「あ、あたし!? あたしはスザクの主人よ!! スザクは私のド」

「あぁ〜!!! うるせえ!!! テメエらは一体何の話をしてんだ

よ!!!」

いい加減に頭に来た俺は、ギャーギャー騒ぐ三人を一喝する。

俺にいきなり怒鳴られた三人はビククリして黙る。

一体何の話をしてんだよ!!!

「アリアは武偵としてのパートナーで、舞はクラスメイト、楓は同郷の幼馴染み。はい、これで納得しただろ？お前らはいちいち余計なことを喋りすぎだ。だから話が拗れるんだよ。」

俺は全部引つ括めてそう言う。

そうでもしないといつまでも話が終わらない。

不満そうに三人は俺の顔を見る。

「そう言えば朱雀？さつきから気になってたけど、すごい絆創膏の数ね？顔中傷だらけなの？誰にやられたのかしら？」

「これは授業で出来たキズだ。大したことはない」

「嘘をつくでない朱雀よ。わしにホントのことをもうしてみい」

「嘘じゃない、だったらアリアに聞け」

「そうよ、これは授業でやった百人組手で出来たキズ」

なんか、舞に上手く話をはぐらかされた気がする。

「とりあえず3人とも仲良くしてくれよ？そうじゃなきゃ、俺の立場が危うい」

そう。

実際に3人の仲が悪ければ、俺が間違つて殺され兼ねない。

そもその原因が何なのか分からんが、とりあえず仲良くして欲しいのは、俺の切実な願いなのだ。

それを聞いた三人は、にらみ合いながらも騒がなくなってくれた。ふう、とため息をつく、俺はゆっくりと立ち上がり、レジの方へ向かう。

「ち、ちよつとアンタ！？あたしを置いてどこに行く気？」

「ああ？いちいち俺の行き先なんか聞くなよ。空きつ腹減ったから、メガマツクのナゲットセットでも頼みに行こうと思って」

「あ。んじゃ、良かったら私もお願いして良いかな？」

「自分で行け。何の為に足なんかついてんだよ舞？」

「ご免なさい……」

う。

このタイミングで謝られてもな。

お人好しな俺は、しばらく考えた後、仕方なく言った。

「分かった。変なタイミングで謝るな。反応に困る。今日は特別に俺が頼んできてやるから、金は後で俺に払えよ。んで何を注文すりゃ良いんだ？」

「私はチーズバーガーセットで」

「んじゃあ、あたしは照り焼きチキンバーガーセットをお願いするわ」

「わしはハンバーガーで良いぞ」

おいおい。

ちよつと待てテメエら。

誰が全員の分のメニューを頼んできてやるなんて言った！？
ちくしょう、直ぐに調子に乗りやがって。

内心、俺はぶつぶつと文句を言いつつも、素直にレジに並ぶ。
はあ、なんかツイてないな俺って。

授業でボコられ、女の子にボコられ、拳げ句にはパシられる。
なんつー有り様だよ、全く。

体と心が捨てられた紙切れのようにボロボロになってる。
こんな奴等と関わるんじゃなかったな。

なんて考えながらレジに並んでいると、後ろから声を掛けられた。

「朱雀さん？」

「ん！？お？どっかで見た顔だな」

俺が振り向くと、端正な顔立ちのクールな細目の男が佇んでいた。服装は武偵高の防弾制服。

「ーことはうちの学校の生徒か。」

咄嗟のことだったので、ビックリして誰だか分からなくなってしまった。

「諜報科2年の二階堂 にかいどう 隼人 はやとです」

二階堂 隼人。

去年、唐突に転入してきた生徒で、クールな割りには存在感なく、いつも忘れ去られている影の薄い、俺の知り合い。

生まれつき細目なのか、いつもそうやって笑っている。俺よりも無愛想だが、性格が生真面目で固い。

諜報科Bランクらしい。

何をとつても並み程度はできるらしいが、コイツの突出した技能と マスクテイング 言えば、変装だ。

コイツが変装して、バレたことは一度もなく、勘の良い彩や俺でさえ分からなくなっちまうほどの完璧な変装する。

で、俺たちが付けたアダ名が『無限の仮面』 インフィニティ・マスク

最近では、業界で通じるようになってしまった。

しかも、何でか知らんがやたらと俺のプライベートまで知ってやがるとんでもねえ変態野郎だ。

「ああ。隼人か。諜報科の変態野郎が俺に何の用だ？」

「変態は蛇足ですよ朱雀さん。昨日、うちの生徒が殺され掛けた事件のこと、知ってます？」

「！？」

「超能力捜査研究科（SSR）の女子生徒が何者かに襲われて重傷運が悪かったら間違はなく即死。凶器は不明だけど、切り傷の深さ、鋭さから考えて恐らく刃物。犯人は依然として姿を眩ましているため、別な『武偵殺し』の可能性あり。そして超偵だけを狙う誘拐魔『魔剣』が我が校の生徒とコンタクトを取ろうとしている。これが今日、僕たちが教務科に提出したレポートの内容です」

「ぶ、武偵殺し!？」

また聞くとは思ってもいなかった言葉が出てきて俺はビククリする。前回の武偵殺しの犯人は理子だ。

解決したと思いきやまた別な武偵殺しだって!？
何なんだよ一体。

…………… 待てよ。

エアジャックの時、狙いはあのちびホームズのアリアだったはず。もしも、だ。

もしも『イ・ウー』の仕業ならSSRの生徒を狙わずともアリアを襲えば良い話だ。

なのに何故、無関係な人を？

もしかして勘違いでもしてるのか、俺は。

そして超能力武偵（略して超偵）だけを狙う誘拐魔『デュランダル魔剣』。

何度か耳にしたことはあるが、実際に居るのかさえ怪しいし、とても信憑性に欠ける情報だ。

魔剣はともかく、俺は武偵殺しの方がやたらと気になって仕方がない。

つーか、そんな情報を俺に流してしまっただけで良いのだろうか。ちよつと疑問に思ったが、まあいいか。

「ところで朱雀さん？ここで何をしてるんですか？」

「ん？俺は空きっ腹減ったから、メガマックのナゲットセットでも頼みに来ただけ」

「そうですね、僕の連れの子も朱雀さんを探していたので連れてきますが……」

「もう隣にいる……」

隼人の隣にいる、白桃色のロングヘアの、やたらとアラン似の女の子へ目に止まる。

そう、コイツが神橋・N・ソフィア。

アランの双子の姉だ。

武偵ランクはE。

救護科なのに、想像以上に無器用だから治療が下手すぎて評価は最悪。

その反面、弟のアランはとっても器用。

おしとやかそうな顔をしているが、怒ると笑いながら格闘技を掛けてくる。

コイツのパンチは一撃必殺技だからな。

中学時代はアランや俺と同じ強襲科に在籍していたため、格闘技はやたらと強い。

その頃の評価は他の女子よりも圧倒的に高く、武偵ランクは入学当初からB。

特に一年生の頃はとんでもねえ女の子だったなあ。

たしか、俺の幼馴染みの楓と仲がとっても悪くて、拳げ句の果てには決闘を申し込んで一騎討ちしたくらいだからねえ。

そもそも何が原因だったわけ？

まあ、結果は無論、大敗。

でも性格は優しく、俺を兄のように慕ってくれる。

ブリッ子なのが玉にキズだが。

なんと言ってもこの双子姉弟、やたらと可愛いのは気のせいだろうか。

アランは違反だろ、男って。

なんて考えてると、ソフィアが俺の顔を見て心配そうに言う。

「スザク先輩？顔のケガ大丈夫ですか？」

「ああ。心配無い。」

「私は物凄く心配です！ホントに大丈夫ですか？」

「心配しすぎ、見ての通り大丈夫だ。それよりお前の治療の腕が心配だよ」

「うう……。それはヒドイです。一生懸命やっているのに……」

Wチーズバーガーのセットを乗せたお盆を持ちながら、プリプリと怒るソフィア。

あ、ちなみにコイツらのミドルネームの『N』っつーのは”ナイチンゲール”の頭文字だとソフィアが言っていた記憶がある。

嘘か真か分らんが。

恐らく嘘かな……

だって名看護師の遺伝子を引いてる子孫が無器用っつーのはちょっと……

納得がいかない。

すると、先ほどまで怒っていたソフィアの機嫌がいつの間にか治り、ニコニコと俺に話し掛けてきた。

「せっかくなんで、ちょっと話しましょうよセンパイ テーブルはどこですか？」

「ちよつとそれだけは勘弁してほしいな……今それどころじゃないんだよ……」

「何かあったんですか？」

「いや、ソフィアには関係無い。隼人、ソフィアを頼む」「分かりました」

飄々とした返事をして歩いていく隼人。

残念そうに項垂れ、隼人の後ろをついていくソフィア。

ごめんよ、テーブルまで連れていったらまたややこしい事になるからな。

今回だけは勘弁してくれ。

内心、済まなそうに謝りつつ、レジで女子たちに頼まれた品を注文し、足早にテーブルへ戻る。

案の定、痛々しい視線とともにあの三人が俺の帰りを待っていた。

「……………」

あまりの気迫と眼力で怯む俺。

とりあえず黙って座ってよ。

「さつきの子、一体なに？」

「アランの双子の姉だよ。久しぶりにあったから話してただけ」

「アランの双子の姉じゃと……？な！？あの小生意気な小娘か！？あやつめ……またわしの旦那をたぶ」

誰が旦那だ！！

俺は無言で隣に座る、楓のおでこを

バツチこー……ん！！！！！！

と思いきりひっぱたく。

「何をするか朱雀！！痛いじゃろうが！！」

「余計な単語を出すなよバカタレ。他の二人が過敏に反応しちまうだろっ」

「朱雀っ！！あ、私にも旦那様とよば」

「呼ばせるかっ！！気持ち悪いっ！！」

「スザクはスザクよっ！！誰がそんな変な呼び方するのよ／＼気色

悪いわー!!」

ほれみる。

話がドンドンずれていく。

こりゃ早く帰った方がいいな、俺。

一旦、注文した品を取りに行き、戻ってきながら後悔する。

「いいか。何回も言うけどな、お前らとは一度も『そういう関係』
になったつもりは無いからな。次回から、変な揉め事で俺を巻き込
むなよ」

「 承知した。殿方の命令とあらば黙って従うぞ」

「と、殿!? だったら私はご主人様で」

「舞、いい加減にしろ」

「あたしも同感だわノノ恋愛なんてくつつつだらない事をやってる
暇は無いんだからノノ二人もスザクからスツパリと離れてちょうだ
い!!!ノノ」

なんて赤面しながら叫ぶアリア。

なんでそんなムキになってんだ?

そう思いながら口に入りきらないほど高く積まれたハンバーガーを
頬張る。

あがががが…

あ、ああ顎がハズレるっ……

他の三人も、アリアに抗議しながらそれぞれ俺に頼んだハンバーガ
ーを口に運ぶ。

モグモグと男らしく大口を開け、ハンバーガーを片手で頬張る楓。

両手できちんとハンバーガーを握り、口をできるだけ汚さないよう
にチマチマと食べる舞。

もきゅもきゅ、と不思議な音を立てて食べるアリア。

どっから出てんだ?

その音は？

ももまん食つてた時もそうだったよな？

なんて考えつつ、見ての通り、三者三様の食べ方をしている、じー
っと三人を観察しているとなんか楽しい。

一通り、ハンバーガーを食べ終えた俺は席を立つ。

「んじゃ、俺は帰るわ」

「そうじゃの。ワシも、そろそろ帰ろうかの。」

「私も帰ります。では」

「スザクが帰るならあたしも帰るわ」

三人も席を立ち、それぞれ帰路に付いた。

運良くあの地獄から生還した俺は、部屋に直接帰らずに寮の屋上に向かった。

男子寮の屋上。

普段から人は入れなくなっているため、誰もいることはないのだが、ごく希に俺が特訓するために使うことがある。

銃は使わない、近接戦闘技や集中力を高める座禅をしたりしている。特に最近は、現実逃避するためにも使っている。

鍵をピッキングで開けて立入禁止の鎖を外し、こっそりと中へ踏む込む。

また、元のように鍵と鎖を閉め、ゆっくりと階段を上がっていく。非常階段からしか行けないので、かなり慎重になってしまう。

階段を最上段まで上がると、とても大きな給水タンクの裏側に出る。タンクと転落防止のフェンスの間、幅50〜60センチの隙間しかない細い通路を抜けると、だだっ広い空間が広がる。

ふと、空を見上げると、満月が美しく輝いていた。

俺は広い空間のど真ん中に横たわると、何にも見えない夜空を仰ぐ。

「一人って、良いよなあ…」

ポソリと呟く。

完全な孤独よりはマシかも知れないが、あんな入り乱れて会話したことなんて小学生以来の出来事だ。

常に人に距離を置いて来られた自分が、まさかこんな風に、人と交わるなんて一度も考えた事がなかった。

嬉しいと言えば嬉しいが、精神的な面で参ってしまう。

特にあの三人はね。

何の意味もなく溜め息をつきつつ、左の掌を星1つ無い夜空に翳す。暗闇の中、微かに見える左手の輪郭を見つめる。

俺は一体何なんだろう？

他人から見れば、俺はただの女誑しなのだろうか？

はたまた銃弾を操る化け物か…

最近、やたらと他人の目が気になる。

いつもはそんなことはなかった。

まあ、そんなことはどうでもいいや。

ゆっくりと左手を頭に下ろすと、グシャグシャと頭を搔く。

「おや？珍しい御客だな。こんな所で何をしてるんだ？相棒？」

「！？」

背後から聞こえた低く優しい声。

しかし、それとは裏腹に、とてつもない殺気も同時に放っている。

俺は上半身を起こし、素早くそっちの方向を見る。

そこにいたのは藍色の甚兵衛を着た、彩だった。

しかし、明らかにいつもの感じとは180°違う気がする。

「現実逃避しに來ただけだ、しばらくすれば部屋に帰る」

「そうか。見たところ、いろいろと散々な目にあっただな」

「顔と体、擦り傷だらけ。病み上がりだったのに、教務科の連中は容赦ねえよ」

「いつものことだ、愚痴っても何も変わらんだろ？もっと前向きになれ」

「前向きになれ…か。なれてるならこんな所にはこない」

俺の隣に座る彩。

なんか明らかに違っぞ、雰囲気だ。

「なあ、彩？なんか明らかにいつもの感じとは違うよな？」

「さあな。いつものようなテンションとは違うからだろう。これは昔からの体質的な問題でね」

「体質的な問題？」

「ああ。それについて、あんまり喋る気はないがな」

残念そうに言う彩。

まあ、言いたくなきゃしかたないさ。
超気になるけど。

俺は再びタイルの上に横たわる。

視界に飛び込んで来るのは、何にも見えない東京の夜空。

「ところで朱雀。ものは相談なのだが」

「何だ？」

「久々にオレと組手しないか。無理にとは言わん」

「分かった、俺で良ければ相手になろう。ちょうど新しい武器の使い方にも慣れておきたいところだったからね」

「ふ。悪いが朱雀、今のオレはあの頃の”オレ”とは一味も二味も違うぞ？念を推して言うておくが、覚悟して挑めよ？」

「まさかね、冗談はよせやい。その台詞、まんまお前に返上したる」

そう言うと、彩は腰に据えていた小刀をヒラリと右手で抜き放ち、ホントに斬らないように刃と峰を入れ換える。

持ち方は手に対して刃が下側になる逆手持ちだ。

たしか、暗殺を主とした忍者が使う持ち方だったな。
いつもの彩なら、あれは正手で構えているはず。

軽口を叩きつつ対峙する俺は、両手に三本ずつ繋いだギミッククロツドを、二刀流の剣のように握る。

俺が握るギミッククロツドの長さは90センチもあるので、あの短い小刀の間合いなら明らかに俺が有利だ。

しかし、油断は禁物だ。

「一回勝負だ。武器が相手の体に触れたら終了にする。良いか朱雀？」

「上等、来いよ」

二人の間に流れていく夜風。

街の光は、時が止まったように揺らめいて幻想的な雰囲気を作り出す。

先手必勝。

俺は欠かさず、彩の懐に飛び込む。

しかし、俺の判断はやはり甘かった。

懐に飛び込んだのは良いが、彩にそれは読まれていた。

さすがは東北武偵高の初代格闘王。

中学時代、近接格闘技でコイツには誰一人として勝ったことはなかった。

無論、この俺も。

彩は逆手持ちの小刀を、低く後手に構えると、俺をすり抜けるように通り過ぎ、無数の斬撃を放った。

ガガガガガガッ！！

放たれた剣閃は16回。

しかし、実際に俺に打ち込まれた斬撃は半分の8回しかない。

俺は素早く二本のロッドを守りの構えに変えて、軌道を見切って全て受け流す。

受け止めたロッドからは赤い火花がキレイに散る。

「今が血桜八閃十六夜。16回斬っているように見えるが、実際に相手に当たるのは半分の8回に相当する”斬殺技”だ。代々、家系に伝わる技の1つでね。生身の状態のオレでやると右腕が吹き飛んでしまう。ちなみに今の、あたりどこが悪かったなら確実に墜ち

てたよ朱雀。」

冷やかに言う彩。

やるな、さすが俺の元・相方だ。

俺は負けじと反撃を開始する。

勢い良く鑪を踏むとまるで虎の如く、ロッドの連撃を叩き込む。

一撃目は右肩から下、続けてロッドの切っ先を頭目掛けて穿ち、左胸から下、右、左へ流れるように打ち込む。

キンキンキンキンッ！！

彩は何食わぬ顔をし、目にも止まらぬ速さで、俺のロッドを全て受け流す。

そして側宙で俺の頭上を越え、背後に着地する。

機敏でトリッキーな動きをする彩は、どこか古風な面影を残している。

しかし、俺はその動きを先読みし、手を打っていた。

連撃の後、即座に左手のロッドを全て分解し、三本ずつ指に挟んで後ろに振り返りながら勢い良く投げる！！

「な！？」

ズドドッ！！

彩はその一瞬の反応に遅れたようだった。

至近距離で放たれたロッドは三本とも、彩の懐に食い込んだ。

勢い良くタオルの上を転がる彩。

俺は荒くなる息を整えながら、ロッドを分解してホルダーに戻す。

「やるな相棒……腕を上げたようだな……しかし、痛いなこれは……」

「大丈夫か？」

「ああ。何とかな」

「そうか、お前の動きには毎度ド胆を抜かれちまうからな。だから今回だけは手加減はしなかった」

「ふ。笑わずな。格闘技だけは三流・二流のクセに」

そう言っただけで笑う彩。

その笑顔はいつもの彩だった。

「朱雀。そう言えば、例の事件の話は聞いたか？」

「ああ、諜報科の隼人から話は聞いた。例の武偵殺しと魔剣だろう？」

「学校の誰かを狙ってる可能性がある。恐らく組織ぐるみのね」

「何か知ってるのか？彩？」

「元・探偵科のオレを嘗めるな。東北武偵高にいた頃、強襲科の筆記テストで落ちちまったオレは、滑り止めで受けていた探偵科で受かって二年間勉強していた。推理ぐらいなら他人よりはできるさ」

意外だな。

東北武偵高強襲科から指定推薦を受けたくせに落ちちまったのかよ。まあ、俺の成績ならすんなり行けたのだが俺はこっちの指定推薦を受けたからな。

苦い思い出を噛み潰すように語る彩を見ていたら、なんか可哀想になつてきた。

「で、お前の推理は？」

「あくまでもオレの憶測だが、SSRの連中が危ない。超偵だけを拐う『魔剣』とSSRから怪我人が出たということを見ると、これから狙われるのはその科の連中が多いはずだ。特に今、上の学年はこれ以上被害者を出さないために必死になつてやがる。武偵殺しを取っ捕まえるために動き出すのは時間の問題だとオレは思う」

なるほど。

そうなると魔剣は武偵殺しを装って、SSRの連中に接触することが可能だ。

もしも、魔剣と武偵殺しが同一人物なら、その可能性が充分高い。しかもアドシアドも迫ってきた今、外から校内へ沢山の人が訪れるし、その日に重なってしまったら、魔剣や武偵殺しへの接触の可能性が劇的に高くなる。

そうなったら多くの人を巻き添えにする最悪なパターンまで考えられる。

「だが動き出すのはまだ早い。もう少し詳しい情報が集まってからだな」

あくまでもこれは彩の憶測。

必ずしもそうとは限らないのは百も承知。

迂闊に動くよりも、必要な情報を集めてから行動する方が無難だ。

「そうなると狙われる生徒って……」

「ああ。だいたい目星は付いてる。2年の白雪か、俺達のクラスの舞だろう。あの2人なら、狙われる可能性が充分に有り得る」

成績優秀、SSRの中で最高クラス的能力を持つ2人なら充分に有り得る。

まあ、魔剣がホントに居たららの話だが。

「これ以上、考えてもキリがないな朱雀」

「……そうだな。情報が少ない今回は打ち切って、相手方の出方を窺うのが得策らしい。俺は引き続き、諜報科の隼人から情報を得るようにする。彩はどうするんだ？」

「アランを使うか……ルームメイトだし、アイツ、情報科だからネ

ットでサーチしてもらって、何とか信憑性が高い情報をピックアップしてもらう。あと、お前の相方のアリアとかいう女には絶対に言うなよ？アイツに話すと勝手に資料調べ上げて、一人で突っ走って危ない目に合うんだからな」

アリアの性格からしたら絶対にそうなるに違いないな。

アハハ…

そんなことを想像して俺は苦笑いする。

「分かった。んじゃ、俺は先に部屋に戻るわ。いろいろありがとう」

「ああ。また明日、学校でな相棒」

そう言っていると、俺は来た細い道に戻り、アリアとキンジがいる、自室に戻った。

翌朝。

また清々しい朝がやって来た。

爽やかな目覚め　　なんて、今の俺の生活に有りはしない。

ズガッ！！

ふと目を覚ました途端、アリアに爪先で顔面を蹴飛ばされ、ベッドから転げ落ちて悶え苦しむ俺。

マジかよ、今、顔に足がめり込んだような気がする。

5センチほど。

めシャッ！！

向かいのベッドからも鈍い衝突音と共に、キンジの悲鳴が上がる。

アイツも蹴られたのか、可哀想に。

「早く起きなさい、バカドレイどもっ！！もう7時よ！！」

相変わらずふんぞり返って、部屋中にそのアニメ声を響かす。

いちいち叫ぶな、おでぼちゃんめ。

なんて毒づきながらも、ベッドごとガバメントで撃たれたらたまらないので、俺はそそくさと布団から出る。

『H』の貴族様が、こんな朝っぱらから大声で叫ぶなっっーの。

「おは」「あ」「ようキンジ」

「おはよう」「さ」「ございます先輩」

「朝っぱらか」「こ」「ら散々だな」

「ええ、ま」「は」「ったくですよ」

「んじゃ、急いで」「ん！！」「行きますか」

アリアの叫びを見事に無視して会話をする俺とキンジ。

俺は素早く武偵高の制服に着替えると、いつもの場所に新調した『GLOCK・17』と、対アリア用にもう一丁用意したベレッタのニューモデル『M8000クーガー』を左胸のホルダーに収容する。『GLOCK・17』は相変わらず拘っている、同社の拳銃で前・相棒『GLOCK・35』の元になったスタンダードモデルだ。プラスチックポリマー製で軽量、なおかつ高性能。

グリップ性も高く、使い回しが良いので、俺は絶大な信頼を置いている。

弾丸は9mmパラベム弾を使用、前・相棒よりは大幅に威力は衰えたが、よりの確な場所へ正確に連射することが可能になった。

装弾数は17発だが、俺の場合、マガジンに専用のアタッチメントを装着して弾数を1発多くした上にチャンバーへ1発装填しておくので合計すると19発まで装填できる。

今回、初めて入手した『M8000クーガー』は熱田に頼んで対アリア用に改造^{イン}してもらい、『.45ACP弾』を三点バーストできるようにになっている。

フルステンレス製で全体的に重くなっているため、リコイルが少なく、安定した連射ができる。

装弾数は全部で10発、チャンバーに1発入れたら合計11発入る。そうすると、二丁合わせて30発。

相当な数になる。

そもそも、俺が二丁拳銃なんて使って良いのだろうか？

「あ。スザクも二丁流にしたんだ。もしかしてあたしの真似？」

「んなことするか……バカじゃねえの？これからやたらと物騒な任務が来るかも知れないんでね。もう一丁、入手したのさ。それに、俺は一丁ずつしか使わない」

「ば、バカとは失礼ね！！アンタと一緒にされて堪るもんかっ！！」

「はっ。万年チビの癖によく言えるよ」

「な、なんですって!?!」

あ、口が滑つちまった。

アリアは、鬼のような形相で俺を睨み付ける。

「そ、れ、よ、り!!朝ごはんは!?!」

「テメエに食わせるもんなんかねえ。行くぞキンジ」

「了解です」

「お腹空いたっ!!!!」

「そんだけ騒げれば飯なんていらねえ!!」

早くしないとバスに遅れる。

キンジと共に急いで外へ出ようとするが、朝ごはんを抜かれたアリアが、まるで子犬のように俺の腕に噛みついてくる。

「あだだだだ!!は、な、せっ!!」

俺は無理矢理、アリアを引き離そうとするが、それよりも先にバスに間に合わないので、アリアをズルズルと引きずりながらバス停へ向かう。

隣を歩くキンジは苦笑いしながら俺を見ている。

ちくしょう子ライオンめ。

つか、矛先がキンジだったら一体どうなっているんだろうか?

なんて考えながら、俺達三人はバスに乗り込んだのだった。

なあ？

ここは一体どこなのだろう？

それよりもなぜ俺はここにいるのだろうか？

薄暗いエアダクトの中、俺は楓と二人で教務科の天井裏に来てしまっていた。

思い出すこと数分前、掲示板に貼ってあった生徒呼出の紙がこの発端だった。

『生徒呼出 2年 超能力捜査科 星伽 白雪 3年 超能力捜査科 白百合 舞』

昼休み。

偶然にも、俺はそれを見つけてしまった。

羽目さえ外さなければ、人より大人しい舞が、なぜ教務科に呼ばれるのだろうか？

俺は、とても不思議に思えて仕方がなかった。

しかし、これはあくまで他人事。

興味があつたが、無理矢理首を突っ込むようなことはしたくない。

厄介事のような、危険な匂いがする。

そんな俺は、見てみぬ振りをしたのだが

「やや？面白い物を見つけたぞ、朱雀よ」

よりによって、たまたま一緒にいた舞と超仲の悪い楓が、それを見つけてしまった。

「な、なんだ？」

「生徒呼出の貼り紙じゃ。2年の名前は知らんが3年は白百合 舞と書いておる。何かとんでもないことを仕出かしたのかも知れんの。気にはならんのか？」

「他人事だ。そもそも俺には関係ないし、気にはならない」

「ふん、相変わらず釣れん奴よの。もしかしたらあやつを冷やかすのに使えそうなネタかも知れん。朱雀よ、ちとわしに付き合え」

ニヤニヤと嫌な笑い方をしながら、俺の裾を引く楓。

嫌だ、と言う言葉が先に浮かんだが、断ったらあの長太刀で斬られるという直感が働いてしまったため、結局、楓に付き合う羽目になった。

二人はこっそりと一階の男子トイレに忍び込む。

「朱雀。わしを肩車してくれんかの？」

見ての通りのおちびさんだからな。

背伸びしても届くはずはない。

内心、そう毒づきながら屈み、楓を肩に乗せる。

そしてゆっくりと立ち上がる。

なんか変な感触が　と言うよりも、首に触れる楓の生足の柔らかい感触が、何とも言えんのだが。

体の芯に、血液が猛烈な勢いで集まってくるのが分かった。

ヤバイヤバイヤバイ。

冷静になれ、俺。

こんなところで鼻血大噴火させたら、男として恥ずかしい。冷静を装いながら、顔が真っ赤になる。

ガチャ……………

耳元で鳴った音。

目のやり所に細心の注意を払いながら、それを探す。

どうやら音の正体は、楓の両足の太股には何やら小型の拳銃がホルダーに収まっていた。

イスラエルの要人が、護衛用に誂えてるハンドガンサイズの、コンパクトなサブマシンガン『micro UZI』が二丁。

黒い光沢を煌めかせて、楓の両足の太股のホルダーに収まっていた。なんつー拳銃まのを持ってやがるんだ。

もし、コイツと模擬戦なんてやったら勝ち目はないだろ。

近接戦闘でしか意味を成さない、武偵同士の戦闘は、拳銃の弾が多いほど明らかに有利になる。

見る限りだと、マガジンが15〜20センチほどある。

実に30発〜50発用のマガジンだ。

それが二丁、つまりは最低60発はあると言うことになる。

いくら防弾製の制服でも、近距離でこの量を浴びせられたら、身体中、痣だらけになるだろう。

そう考えるだけで、背筋が氷る。

肩の上にいる楓は早速、無い胸の谷間からツールキットを取り出し、ドライバーを取り出してエアダクトを閉じる格子の、四隅のネジを緩めて音を立てないようにゆっくりと格子を取り外して開ける。

早いな、手が器用だからか？

そう思っていると、楓は素早くエアダクトの縁に手を掛け、体を持ち上げて中に取り込む。

その瞬間、捲れた楓のミニスカートの中に俺の顔が隠れた。

「!?!」

一瞬、目を閉じたのだから見えてしまった。

いや、あえて言うならば見てしまった。

水玉模様の　　愛らしいパンツを。

うあ、やってしまった。

俺はぎつちりと目を瞑り、後悔する。
身体中が火照ったように熱くなる。

「どうしたんじゃ朱雀？柄に似合わず顔を真っ赤にして？」

「な、何でもない／＼」

「あ、見たのか。わしのパンツを」

「み、見たいならば良いのいの？また見たいか？」

俺はひっぱかたれると思ったが、楓はそれと逆の反応をしたので啞然とする。

その俺の顔を見て、ニンマリと笑う。

「み、見たいわけねえだろ！！／＼アホ！！／＼」

楓に凶星を突かれた恥ずかしさと自分の犯した失態を紛らわせながら、俺は楓から視線を反らして言う。

楓の野郎、何なんだよ一体。

まさかわざとじゃねえだろな。

「わしは、朱雀のためなら全部脱いでもいいぞ？」

「バ、バカヤロ！ここで脱くなよ！？」

「ふふふ。予定通りの反応をするの。実に愉快じゃ。心配するな、この話は冗談」

「い、いい加減にしろ／＼」

ニツと笑って、楓はエアダクトから右手を差し出す。

まるでアリアのように、耳まで赤くなった俺は、楓の手を見ずに握ってエアダクトの中に入り込む。

狭いエアダクトの通路を、教務科を目指して匍匐前進で進む二人。

先頭を突っ切って進む楓は、やたらと進むのが早い。

「待ってくれ楓。お前、やたらと匍匐前進早いな」

「ふむ。今まで強襲科の女子の中で負けたことなどないのじゃ」

「なるほど。そうだよな。なんせ匍匐前進するのに邪魔なものが無いからな」

「……？どういう意味じゃ？」

「立派な胸板だ。昔からな」

俺はクスクスと笑いながら言う。

ゲシッ！！

「んがっ！！」

案の定、楓の爪先が見事に中心を捕えて俺の顔面にめり込んだ。

本日二度目の殺人キックだ。

「つか、どうやったら人の顔がここまで変形するだろうか？」

しかもちょうど鼻筋に入ったらしく、鼻が物凄く痛い。

今のはさすがに酷かったらしい。

蹴られるのは当然だな。

鼻を擦りながら、ズルズルと匍匐前進。

暫く進むと、通路の真下に格子が現れた。

ゆっくりと慎重に覗き込むと、2年の白雪と3年の舞が並んで椅子に座っていた。

俺達は狭いエアダクト中で、半ば頭と頭をくっ付けるような形でそれを見ていた。

うう………

身体接触がさっきので若干トラウマになりつつある俺は、少し身を退いて横目でチラチラと隣にいる楓の様子を見る。

今まで一度も気にしたことはなかったが、このアングルで見る楓の横顔は　格子から差ししてくる光の翳りで、想像以上に可愛く見えた。

日本人のクセに、妙に顔が西洋の人形のように整っていて…なんていうか…

艶のある黒い髪を後ろで結うというサムライみたいな髪型だが、なんか似合っているというか、サマになっている。

わりと、この後ろ髪をほどいたら、かなり可愛いんだろうな。

誰かに似たようなつり目は、普段とは違う印象を受ける。

けっこう見所あんじゃねえか、コイツ。

アリアとか、舞に負け劣らずと言ったところか。

ちっこ可愛いさならアリアがダントツ、綺麗なお姉さんなら舞がダントツ。

楓はその中間あたりかな、多分。

俺自身、初めて気が付いた。

昔からワガママでやたらと悪戯好き、ちっこい身体に似合わず、長太刀を器用にブン回す元気なパワフルガール。

最近はずっとエロくなつた気がするが…

まあ、この身長だとませたガキみたいでちょっと可愛い。

「星伽と、白百合い〜」………」

女にしては低めの、二人を呼ぶ声。

室内では2年B組の担任で尋問科の教諭 綴先生が黒い革張りの椅子で、編み上げのブーツを組んで座っていた。

格子から辺りを見渡したところ、ここは教務科の個室らしい。

白雪は少し俯き、舞はため息混じりに困り果てたような顔をしていた。

「白雪。お前最近、急うに成績下がってきたよなあ…舞も今年、卒業試験が控えてるしい…」

ぷは、と煙草の煙を輪っか型に吹いた綴は室内でも真っ黒なコートを羽織っていた。

そのコートの着方が、漫画とかに出てくるだらしのない博士の白衣みたいなのに、やたらとだらしがない。

腰には黒革のホルスターとそこに入った真っ黒な拳銃、GLOCK 18が丸見えだ。

あ、思い出したぞ。

興味は全く無かったが確か綴ってやつは 教師の中でもアブないのの筆頭みたいな女だと聞いた覚えがある。

まず、目がいつも据わっている。

聞く話によると年中ラリってるような感じらしい。

んが？

俺は微かにエアダクト内に立ち込めた煙の臭いを嗅いでしまった。

くっさ…!

とんでもない臭いに、俺は顔をしかめる。

隣にいる楓も、片手で鼻を塞いでいた。

あの煙草、明らかに市販の物とは別な臭いがするな。

なんか、草っぽい感じがする。

あれ、日本国内で吸って良いモノなのか？

綴は黒くて薄い革手袋の手で、タバコらしきモノを灰皿に押し付ける。

「あふぁ……まあ、勉強はどおーでもいいーんだけどさあ」

おいこら。

先生がそんなこと言うな。

つーかテメーはホントに先生なのか!?

「なーに……えーつと……あれ……あ、変化。変化は、気になるんだよね」

なあ？

頭、大丈夫なのかあの先公は？

チラチラと横目で楓を見ると、それに気が付いた楓が俺の耳に口を寄せた。

「どうしたのじゃ？朱雀？」

「あの綴って先公、大丈夫なのか？」

「ふむ。知り合いからの話では”無気力全開の先生”と聞いたが、ある一点に置いて恐ろしく有能な先生じゃと」

「ある一点？」

「尋問じゃ。その技術は日本でも五本指に入る名人らしい。何をされるかは知らぬが、コヤツに尋問されるとどんな口の堅い犯罪者も洗い晒い何でも白状するのじゃ。その後おかしくなって、コヤツを女王や女神と呼ぶようになるらしいの」

「こ、こえ〜……」

真顔で語る楓に、身震いする俺。

一体、何をするのか気にはなったが、その先は聞かないでおこう。

綴はおかつぱ頭の黒々した髪を揺らして、かぶりを振った。

「ねえー、単刀直入に聞くけどさア。星伽に白百合、ひよっとして
アイツにコンタクトされてた？」

「魔剣に」

「例の武偵殺し、ですか？」

二人が発した言葉に、俺は眉を潜めた。

隣にいる楓も　ピクツ、と眉を動かす。

魔剣と武偵殺し。

彩の推理の通り、狙われていたのはこの二人だった。

魔剣の方はデマっばいし、まず一番有力なのは後者の方だ。

「それはありません。と言いますか……もし仮に魔剣が実在したとしても、私なんかよりも白百合先輩の方を狙うでしょうし……」

「私も白雪に同感です。が、私よりももっと大物の超偵を狙うはず

……」

「星伽に白百合いゝ。もつと自分に自信持ちなよお。アンタ達二人は武偵高の秘蔵っなんだぞ〜？」

「そ、そんな」

白雪はぱつつん前髪の下で恥ずかしそうに視線を落としている。

舞は舞で、先生を見るよりも上の空っーかなんていうんだか……

視線が明後日の方に行っている。

何を考えてんだ？

アイツは？

「二人ともお、何度も言っただけど、いい加減ボディーガードつける
ってば。諜報科は魔剣か、例の武偵殺しがアンタ達を狙ってる可能性
が高いってレポートを出した。超能力捜査研究科だって、似たよ

うな予言をしたんだろ？」

「でも…ボディーガードは…その…」
「にゃによう」

破った英和辞典らしい紙で妙な草をもぞもぞ巻いた綴は、べろ、とそれをツバで留める。

「私は、幼馴染みの子の、身の回りのお世話がしたくて……誰かがいつもそばにいと……その……」

「星伽、教務科はアンタ達が心配なんだよお。もうすぐアドシアードだから、外部の人間もわんさか校内に入ってくる。その期間だけでも、誰か有能な武偵を　ボディーガードにつけな。これは命令だぞー」

「綴先生。私はクラスメートに頼むつもりでいますので、先生は心配なさらずに」

「クラスメートお？確か3年A組のお…ああ、アイツか。強襲科Sランクの。分かったあ。相変わらず気が利くなあ白百合い」

3年A組に強襲科Sランク？
はて？

そんな逸材、どこにいた？

「……でも、魔剣なんて、そもそも存在しない犯罪者で……」

「これは命令だぞー。大事なことから先生は二度言いました。三度目は怖いぞー」

タバコに火を点けた綴は、プフウツ。
と煙を白雪に掛けた。

「けほ。は……はい。分かりました」

煙に目を細めつつ白雪は首を縦に振った。

(……………)

今の話からすると、だいたい二人が呼び出された理由が分かる。超偵の二人は、『魔剣』か、はたまたわけの分からん武偵殺しに狙われているかもしれない……と、最近学校から警告を受けていたらしい。

なので教務科の連中は再三、舞や白雪に護衛をつけろと命じた。しかし、二人はそれを断り続けたきた。

……………それ自体には、実は俺も納得できると言えばできる。

武偵高では、よくこう言った警告が生徒に出されることがある。

俺自身、あまりこう言った警告を出されたことは無いが、教務科から依頼されて、生徒の許可のもとボディガードについたことは多々ある。

が 実際には誰かがその通り襲われたことは、ほとんど無い。

超能力捜査研究科の予言なんてそもそも眉唾物だし、諜報科はガセが多くて有名だ。

しかも敵は、存在すら怪しい魔剣。

つまり

これは、教務科の”過保護”ってヤツだ。

優等生の舞や白雪は教務科的には期待の星と言うヤツで、その身に万が一でも何かあってはいけない。

なので不確かな情報にも過剰反応して、ボディガードをつけろと命じているのだろう。可哀想だな、二人とも。

大人の都合に振り回されて、迷惑だらうにな。

と、俺が口をへの字に曲げたとき

がしゃ、がしゃん!!

と、楓が。

エアダクトを塞ぐ格子のネジをドライバーで緩め、面積の小さいパ
ンチでぶち開けた。

「なっ……………!!バカヤロツ!!」

ブラウスの裾を握る俺の制止を
バシヤッ!!

勢いに乗ったワンキックで振り切る。

いつっ……………コメカミがつ!!

こんちくしょうめ、よりによって鼻筋の次はコメカミに踵かよっ!!

俺の制止を振り切った楓は

ひゅらっ!!

ダクトから飛び降り　ってあれ?

楓とほぼ同時に、反対側にある別のダクトを破って降り立ったヤツ
がいた。

緋色のツインテールと、漆黒のサムライヘアが靡く。

ダクトから飛び降り、豪快にスカートを翻しつつ室内に二人は同時
に降り立つ。

目を丸くする、白雪と舞と綴。

と、俺。

いや、今はそれどころじゃない。

頭が、頭が割れそうだ……。

「
” そのボディガード、あたし（わし）がやるわ（のじゃ）
！！”」

着地と同時に放たれ、ハモった二人のセリフに、俺は驚きのあまり
つい身を乗りだし
ズルツ、ズルズルズルツ、

「ぬ…………ぎゃっ!？」

ドサツ!!

真下にいる楓に目掛けて、落っこちてしまった。

「ぐへっ!？」

「うきゅ!？」

「うおっ!？」

「むきゅ!？」

ありゃ？

今、聞いたことのある声が聞こえたのだが……
なんて思ってたなら。

楓は一瞬、煎餅みたいに潰れたが、ボンツと俺をはね除けた。

「す、朱雀っ！！重たいではないかっ！！」

「き、きき、キンジ！！ヘンな所にそのバカ面つけるんじゃないやうにゆえー！？」

赤くなつて怒鳴るアリアと楓。

どうやらこうやら、アリアのヤツ、キンジも連れてきていたらしい。アリアはセリフの途中で、綴に猫づかみされて持ち上げられる。

起き上がった俺やキンジも　グッ。

襟首を持ち上げられ、だんっ。

だだんっ、だんっ。

アリア共々壁際に投げ捨てられた。

な、なんてバカ力なんだよ、綴。

「んー？　なにこれえ？」

投げ捨てられた四人の顔をしゃがんで覗き込んだ綴は、

「なんだあ。この間のハイジャックのパーティーじゃん」

すーっとタバコを一口气吸いすると、こき、こき。

なんか薄ら笑いを浮かべて、ナナメ上を見つつ首を鳴らした。

あ……あぶねえな。

コイツ。

こう言う仕事。

「へえ。アンタ、この間の転校生かあ。えーっと確か名前は伊達

楓　イスラエルの最高傑作サブマシンガン『UZI』を最小化した『micro UZI』を二丁に、古来より伝わりし伊達家の

名刀『大俱利伽羅』を使う長太刀の達人で東北を中心に、特に宮城県で活躍した武偵だねエ。武偵ランクはA。こっちに來て解決した事件は　なし。アンタ一体、任務しないで何してんのさア？」

綴は楓の後ろ髪を付かんで顔を確かめながらペラペラとプロフィールを語り出した。

「な、何をする！いい、痛いではないかつ！！別に任務を受けようが受けまいが、そちには関係ないっ！！」

楓は綴の怪しさにも怯まず、睨み付けながら答える。

「へえ」。確かに関係無いけどオ。なんか武偵としてのやる気が感じれないねえ。そう言えば欠点……………そうそう、アンタ、おば……………」
「いや　……………」

何か言いかけた綴の言葉を、楓は両手をバタつかせつつ金切り声でジャミングした。

顔が真っ赤になってるぞ、楓。

おば……………何だろつな……………？

「そ、それは弱点ではないぞっ！？綴先生！！夜に、ひ、一人でトイレぐらいは行けるっ！！わわ、わしを見くびるでないっ！！」

ははあ……………ん。

自爆したな、楓。

お前、オバケが嫌いなのか。

この歳になつてまで情けねえな。
典型的な女の子っぷりだ。

まあ、可愛いと言えば可愛いが。

突然の出来事に茫然自失してる白雪と舞はピンと来ていないみたいだが、俺は分かったぞ。

いやあ、良いこと聞いちゃった。

ぐっじよぶ、綴先生っ!!!

綴はバタつく楓から手を離すと、次にアリアの方へ向かう。

「こちらは神崎・H・アリア　ガバメントの二丁拳銃に小太刀の二刀流。2つ名は『双剣双銃』^{カトラ}。欧州で活躍したSランク武偵。でも　アнтаの手柄、書類上ではみんなロンドン武偵局が自分の業績にしちゃったみたいだね。協調性が無いからだ。まぬけえ」

綴はアリアのツインテールの根本を片方つかんで、顔を確かめながらまたプロフィールを語り出す。

「い、イタイわよつ。それにあたしはマヌケじゃない。貴族は自分の手柄を自慢しない。たとえそれを人が自分の手柄だと吹聴していても、否定しないものなのっ!!!」

「へー。損なご身分だねえ。アタシは平民でよかったあー。そう言えばアнтаの欠点は……あ。アнта、確かおよ……」

「わあ　　!!!」

に、似た者同士の連鎖。

これが分かったら大スクープだ。

およ………つてなんだよ。

「そそ、それは弱点じゃないわ!!!浮き輪があれば大丈夫だもんっ!!!」

ああ、なるほど。

見事に自爆したな、アリア。

お前は、”泳げない”のか。
こりやまた良いことを、2つも聞いちゃったなあ。
綴先生、心より感謝するぜ。

「んで」

綴は慌てふためくアリアから手を離すと、じろり。
子供用プールであっぴあつぷ溺れるアリアとオバケを見て腰を抜かす楓を空想して、笑いを堪えていた俺の方を見た。

「こっちは鳳凰院 朱雀くん」

「ぬ？あー……えーっと……俺は楓についてくる気は無かったんスけど…」

「……………性格は非社交的。だが、見た目によらず温厚でお人好し。特に異性と深く関わりを持つことを極端に嫌う傾向あり」

思い出すように言う綴。

まさか…全生徒のデータが頭にはいつてるのか！？
最後のは、いらぬような気がするが。

「えーっと、並外れた身体能力を持つ。特に銃技においては神に等しいほど卓越した技術を持ち、東北武偵高付属中学に在籍していた頃からその異才を放っていた。任務成功率はほぼ100%で、過去3年間の累計の成績は校内トップ。今や後輩達の憧れの的であり、先生方も一目置いている本校強襲科のSランク武偵。2つ名は『漆黒の魔弾』。解決事件は……確かANA600便のハイジャック。やっぱりSランク武偵が解決する事件はスケールが違っねえー……」

「あの、スケールとか関係無いんじゃない」

「武器はえもGLOCK・17と違法改造したM8000クーガーの二丁拳銃で、装備科の熱田が開発した近接戦闘武器の”試作品”を試

験的に装備している。」

ぎく。

「たしか、M8000クーガーは通常、主流の『9mmパラベム弾』を使うが、アンタの場合、大経口拳銃に使うような弾丸『.45ACP弾』を三点バーストできるようにいじってある。今度はGLOCK・17の方の、改造の予約入れてるだろ？」

「ま、まさか……俺がそんな事するはず無いじゃないですか？」

「ちなみにいー…朱雀うー…？アンタ、これ全部の武器申請書を提出してないよねえー……？」

じゅっ！！

「ほあっ!？」

笑いながら起こると言う顔芸を見せた綴が俺の手にタバコを押し付けやがった!!

あ、あり得ねえ。

一瞬だったから火傷はしなかったが、先生が根性焼きって。

っーか、しまった。

武器の使用許可申請書を完璧に提出し忘れてた。

「でえー？どついう意味？『ボディガードをやる』ってのは「

黒いおかつぱ頭を向けた綴の前で、アリアは勢い良く立ち上がった。

「言った通りよ。二人のボディガード、24時間体制、あたしが無償で引き受けるわ!!」

「何を言う!!ワシもそのボディガード、引き受けるぞ!!」

アリアの前に仁王立ちする楓。
おいおい、これ以上厄介事に俺を巻き込むなよお前ら。
むしろお前らが襲いかねん。
と目で訴えるが二人の意志は固いようだ。

「……………なんか知らないけど、SランクとAランクの武偵二人が無
料で護衛してくれるらしいよ?」

黒いコートの裾を揺らして振り返った綴に、二人は、

「い……………嫌です!!アリアがいつも一緒なんて、穢らわしい!!」
「私も、仲の悪い奴なんか一緒に居たくないわ!!」

キレイなクリーム色の前髪の下の眉毛をつり上げ、予想通りのリア
クションを見せた。

「……………あたし(わし)にボディーガードをさせないと、コイツ
(コヤツ)を撃つわよ(ぞ)!!」

じゃきじゃき!!

二人は臙脂色のスカートの下から、いきなり白銀のガバメントとゴ
ツイmicro UZIを取り出す。

なんでこんなにも二人の息がピッタリなんだろう。

なんて考えてると、micro UZIは俺の眉間に、白銀のガバ
メントはキンジのこめかみに、ゴリツと銃口を当ててきた。

ち、ちよつと待て楓!?

武偵法9条!!9条!!

ぶ、武偵は人を殺しちゃダメなんだぞ二人とも!!

「キ、キンちゃん!!」
「す、朱雀っ!!」

はわっ!!と両手を口に当てて慌てる白雪。

舞は悔しそうにチツと露骨な舌打ちをしながら、楓を睨む。

計画通り　　と言ったカンジの、邪悪な笑みを浮かべる二人。

つか、いつから仲良くなったんだ?

コイツら。

「ふうーん……そおかあー。そおいう人間関係かあー。で?どーすんのさ二人とも?」

綴は何が面白いのか、この状況をニヤニヤ見ている。

おいこら。

止めるよこの拳銃だけでも。

「じ、じよ、条件があります!!」

「私も同じく条件があるわ」

じよ、条件?

何だよ

「キンちゃんも」

「朱雀も私の護衛して!!24時間体制で!!」

はい?

「私も、キンちゃん(朱雀)と一緒に暮らすう!!」

俺の体からは

ひゅづ。
と、俺の形をした何かが出ていくのであった。

ACT 5 ・ 極限下の護衛、過去に潜む魔の手

ボディガードは、武偵の中でもっともポピュラーな仕事である。政治家や有名人、子供、時には武偵同士、護衛するのは例外ではない。

そんな俺も、幾度となく危険な護衛をさせられてきた。まあ、今回の場合、今までやってきた護衛よりも辛い。色んな意味で。

あの一件が終わった放課後、俺は楓やアリアから目を欺き、一人で静かに下校

「どこへ行くのじゃ？朱雀？」

するつもりだったはずなのだが。

見事に計画を狂わされてしまった。

よりによって楓と舞に昇降口へ先回りされていた。くそ。

何でだよ……

「ちよつとな。ここ最近、休む暇がなかったから久しぶりに息抜きしようと思って」

「舞のボディガードはどうするのじゃ？まさか契約したばかりの依頼を放棄するつもりか？」

半ば怒りつつ、楓は俺を睨む。

楓の隣に静かに佇む舞は、とても不満そうな表情を浮かべていた。

「依頼の約束は守るさ。だけど、今回は楓が付いててやれ。俺

が一緒だとまた学校中に変な噂が流れちまうからな。たまには、一人にしてくれよ」

「それは無理な相談じゃな。依頼の約束を守るならば、わしらを連れていくのが筋に沿うやり方じゃないのかの？」

ニヤリと邪悪な笑みを浮かべ、臙脂色のスカートの下に手を伸ばす楓。

ま、またか!!

あのmicro UZIを出すのか!!

それだけは勘弁してくれ!!

「う……。分かった分かった。分かったからmicro UZIは止めてくれ。付いてくるなり何なり好きにしろ」

「良い心がけじゃ朱雀よ。して、どこに行くのじゃ？」

「ゲーセン」

ぶっきらぼうに答える俺。

楓の頭にハテナマークが浮かぶ。

「げーせん？」

「ゲームセンターの事だ。……………まさか今まで知らなかったのか？」

「あ、え、それくらい知っておるわ!!」

「そ、そうか。悪い悪い」

「朱雀、私も連れてってくれるの？」

「もちろん。俺は舞を護衛するってことになってるしな」

あの後、数が多いということもあり、分担してボディガードにつくことになった。

舞の後輩の白雪には、本人の希望ということもあってキンジと何故

かアリアがボディーガードに。
舞は見ての通り、俺を希望したのと、余った楓がボディーガードになった。

まあ、今は子ライオンが居ないだけでも清々するな。
ほんと。

しかし、問題はボディーガードの拠点となる俺の部屋だ。

一気に5人も面倒を見るとなると、金銭的に余裕が無いし、なんせ寝る場所もない。

だって、俺の部屋は元もと5人部屋でベッドが5つしかない。

しかも、男女の割合が2：4。

圧倒的に女子の方が多いから、やたらと気を使わなければいけない。普通に考えて男子寮に女子四人がいるって事がおかしいだろ。

もしものことを考えて、ちゃんと男女別に部屋を分けておかなきゃな。

……もしかして、俺はリビングのソファで寝ることになるのか……。

つーか考えることがやたらと多すぎる。

「ところで朱雀、ゲーセンとやらに行って何をするのじゃ？」

あ。

そう言えば考えて無かったな。

俺を挟むように、並んで歩く舞と楓。

健全な男子生徒ならば、女の子に挟まれて歩くなんて、とても嬉しいことかも知れないが、俺はまったく嬉しくなんかない。

まあそれは置いといて、何をしようかな。

その困った俺の横顔を見ていた舞が

「私から提案があるわ 一緒にプリクラ撮ろうよ 私、ゲーセンなんて行くの、生まれて初めてだし」

「ぶ、ぶりくら？」

再び、楓の頭に複数のハテナマークが浮かび上がる。
コイツ、意外と世間知らずなんだな。

「つかいつの時代の人だよ……」

プリクラとかゲーセンを知らないなんて。

しかし、プリクラなんぞ興味の欠片さえ無いし、むしろ撮る気なんて更々ない。

(……………)

でもよく考えてみれば、こっちに来て女の子と出掛けるなんて、一度もしたことはなかったな。

舞はゲーセンは初めてって言ってるし、意地を張りそうな楓も、どーやらゲーセンの言葉を知らない時点で行くのは初めてっぽい。

まあ、こんな機会だし、良いストレス発散になりそうだ。

そんな事を考えているうちに、俺達三人はゲーセンの入口まで歩いてきていた。

「ここがゲームセンター、略してゲーセンだ」

「ちと騒がしい音よのう。耳が痛くなりそうじゃ」

「大丈夫だ。そのうち慣れる」

「んじゃ、早速入ろうよ」

俺は舞に強引に腕を引っ張られつつ、中に入る。

入って直ぐの場所には、中に人形やらフィギュアが並べられたUFOキヤッチャーがあった。

その1つのUFOキヤッチャーに、楓が釘付けになった。
何だろう。

中を覗くと、豹なのかチーターなのか、わけのわからない、猫科動

物のぬいぐるみのストラップがわんさか入っていた。
背の低い楓は、背伸びをしながら中を必死に覗き込んでいた。

「朱雀よ？何じゃ、これは？」

「ん？これはUFOキャッチャーだな。百円なり二百円なり金を投入口に突っ込んであのアームを動かしてあのわけの分からん動物のストラップを掴む。そしてあの穴まで運んだらアームが自動で掴んだストラップを放す。するとこの取り出し口にあのストラップが出てくるって仕組みのゲームだ」

「おお！！つまりあれが百円で取れると言うことか！！よし、朱雀よ！！取ってくれ！！」

「ちよつと待て楓。これは自分でやるゲームだ。人に頼むなよ」

「むむむ。わしは初めてじゃからまずは手本を見せてくれ」

「手本？俺がか？冗談じゃねえ、俺はこの手のゲームは苦手中の苦手だ。物は試し、一回分は俺が払うから、やってみな」

「うう。仕方ないかのう。よし、一回でゲットしてやる、このじゃんころめ！！」

にゃんころつて、これは猫なのか？

再三疑問に思いつつも、投入口に百円を入れて楓と入れ換わる。

あ、良いこと考えた。

初めてじゃ取れないだろうし、さっきの仕返しに後ろからイビつてやるか。

なんて黒い笑みを浮かべながら、楓の背後から眺めていた。

「朱雀、今、暇ならちよつとだけ私に付き合って！！」

後ろのUFOキャッチャーに寄り掛かりながらプレイする楓を見ていたら、向こうに行っていた舞が戻ってきて、強引に袖を引かれながらゲームセンターの奥に連れていかれる。

そこには、華の女子高生達が集まるプリクラコーナーがあった。舞は俺を引つ張ってることなんて御構い無し。

無我夢中で俺をどどん女子高生達の中へ連れていく。

うっわ………

辺りの視線が嫌なほど気になる、うん。

胸を貫く痛い視線を掻い潜りながら、空いているプリクラの前で舞は止まった。

「私と朱雀の初デート記念に、一緒にプリクラ撮りましょー!!」

振り向くと同時に、きゃ〜と頬を赤く染めて恥ずかしそうに首を振りながら言う舞。

なあ、勝手な妄想は止めてくれ。

かえって迷惑だ、アホ。

「はあ、何度も言うが俺はおま」

「いーのっ!! 私も彩くんや理恵ちゃんみたいに朱雀とプリクラ撮りたいのっ!! 楓ちゃんやアリア、ソフィアちゃんとか、アランちゃんには負けられないのっ!!」

顔を俯かせながら早口で叫ぶ舞。

そうか。

あのド変態野郎の彩にもとうとう春が来たようだな。

しかも、相手はスタイルが良くて清楚、一部男子生徒には定評のある、クラスメートの篠原 理恵か。

いやあ、実におめでたいな。

………ん?

っーか待て、舞。

一人だけ、男が混じってるんだが…

俺は異常なまでの危険を察したので、口にはしなかった。

「負けれないのは分かった。けど、なんでそれが俺なんだよ？」
「え？」

「俺じゃなくても良いだろ。男なんて、他には一杯いる」
「……私は、初めて男子をす、すす好きになつたのが、朱雀だったから／＼」

顔を真っ赤にして、俯かせながらボソボソと呟く。

周囲が五月蠅くて話の半ば辺りから、舞の音が全く聞こえんのだが、まあ、聞いたら心臓が止まるようなことだろうから、聞かないでおこう。

「仕方ない。よく分からんが、特別に撮ってやる。一枚だけな」

「ホ、ホントに良いの？」

「誰にも見せないって、俺と約束してくれるならね」

「あ、ああありがとうございます!!」

舞はピョンと跳びはねながら正座して着地し、ベターッと地面におでこを着けて土下座する。

土下座らしからぬ土下座だな。

これ、やらせてるつもりはないが見てるところこっちまで恥ずかしくなるぞ。

「顔を上げる舞!!変に思われちゃうだろ!!ほら、さっさとプリクラ撮るぞ!!」

「はい!!」

俺達がプリクラの中に入ると、中は写真撮影場のようになっていた。正面中央には、タッチパネル式の画面があり、プリクラの枠の形や枚数、鮮度、フレームなどあらゆる設定が出来るようになっていた。

らしい。

なんかスゴいと感心させられる。

まあ、俺はよく分かったので、細かい設定は舞にお任せすることにしました。

舞が設定をしてる間、俺は何も弄るものがないのでソワソワしていた。

なんせこの方、生まれて初めてプリクラとかいうヤツを撮るんだからな。

一通りの設定を終え、とりあえず撮る準備は万端。

後は撮るだけ。

俺の右腕を掴み、可愛げな笑みを浮かべながらカメラにピースをする舞。

もし、舞とか、アリアや楓が普通の女の子だったなら、どれだけ可愛いんだろうな。

羽目を外して、普段見せたことのないような、楽しそうに笑う舞を見ながら俺はそう思った。

俺もごく一般の、普通の男子生徒だったらこんなこと毎日してそうだな。

ま、相変わらず女の子には興味がない気がするが……。

それを横目で見ながら、俺はカメラの方を向く。

気が付けば、タッチパネル式の画面に撮影のためのカウントダウンが始まった。

3……2……1

「見よ朱雀っ！！三千円も掛けた末にようやくじゃんこるを」

カシャッ……。

「「あ」「

カウントダウン終了直後、タイミングよくプリクラの中に乱入してきた楓。

片手にはあの謎の猫科動物のストラップが握られていたが、見事に彼女の後頭部で二人の顔を遮られた。

舞は両手をワナワナと震わせ、今にも泣きそうになりながら楓を見る。

元凶である楓本人は、あの謎の猫科動物のストラップを、俺達に自慢するように見せびらかしている。

「どうだ、スゴいだろう朱雀。そちにこんなことが出来るか？ん？」

「バ、バカヤロ！！隣を見る、隣を！！」

「うう〜……………」

「うお！？ど、どうした舞！！」

ようやく気が付いた楓。

しかし、凄まじいショックを受けた舞はプリクラから勢いよく飛び出して言った。

「何をしてる朱雀！？舞を追え！！」

「お前が追えバカヤロ！！元々の原因はお前なんだからな！！」

「わ、わしがか！？」

「ああ、追い掛ける責任はお前にある。分かったらさっさと追え！！俺は先に帰ってるからな」

慌てる楓に冷静に言う俺。

誰だってそうだろう？

初めてのことに水を刺されたりしちゃ、怒るに決まってる。

しかも、舞は金を掛けてんだぞ。

相当凹むぞ、ありゃ。

やつちまった。

なんだかんだ言って、結局後先考えずに行動に先走ってしまつた。お人好しも大概にしろってカンジだ。

ストラップがぎっしり詰まったビニール袋を片手にようやく帰路に着いた俺。

このビニール袋の中身は、UFOキャッチャーの景品だった謎の猫科動物シリーズのストラップだ。

このシリーズのストラップを探して、UFOキャッチャーをやっているうちにすっかり日が暮れてしまった。

たしか、このライオンっぽいのが『レオポン』とか言う名前で、楓と同じ豹かチーターか不明なのが『スカイル』と言う名前だそうだが、他にもいろいろ獲ってきたのだが、気が付けばビニール袋一杯も獲っていた。

その中で何故か気に入ってしまったレオポンのストラップをケータイに付けてみた。

ちなみに俺と同じレオポンのストラップはあと1つしかない。

それらを獲るのに費やしたお金の金額は2000円。

大体、お昼の学食四回分に相当する金額を費やしてしまったよ。

ハンバーグ定食が四回も食べれるんだぞ？

はあ………。

ま、コツさえ掴めば簡単に出来るゲームだった。

「に、してもだ。これから多数の女の子と共に生活していく中で、こりゃ幸先が悪過ぎる。四つ巴の戦争が一触即発の密室の中で生活するなんてイヤだな」

もしかしたら、だ。

四人のうちの誰かが、誰かに嫉妬して喧嘩が勃発する。

まあ、大体、嫉妬される人物は俺を含めた6人の中で誰か想像がつく。

残りのメンバーも喧嘩を止めに入る。

何故か4対4、つまり四つ巴の戦争が発展する。

ただでさえ、覚醒しない限り平凡な人間の俺とキンジが怪物娘どもの戦争に巻き込まれたら、命がいくつあっても足りない。
どよ～～～～ん。

それを考えただけで一気にテンションがた落ち。

平常の状態でのテンションからあり得ないほど低いテンションまで落ち込む。

もう最悪だ。

なんか帰る気さえ無くなってしまふ。

待て待て。

そんなに気に病むな。

気が付けば、すでに日は落ちて辺りは暗くなっていた。

俯き加減で歩いていると、どこからか前に隼人が現れた。

黒いジャケットに白いYシャツを着、黒いネクタイを締め、黒いスラックスを履いている。

見たカンジ、貴族に仕える執事を思わせる雰囲気漂う。

「どうしたんだ隼人？そんなカツコで？」

「依頼中だからです先輩。ところで先輩こそどうしたんですか？ストラップなんか大量に袋に詰めて？」

「いろいろあつてな……これはちょっと。今日はなんか酷く疲れた」

「あはは……そうですか。何かと先輩はいろんな人にモテますからね」

「……………この俺がモテるわけがない」

「謙遜しなくて良いですよ。学校じゃ変な噂が流れていますし。三股

してるとか？」

「み、三股!？」

三股なんて俺はしてない!!

誰とも付き合った事は一度もありません!!

「それはともかく、先輩は今、クラスメイトのボディガードの依頼を受けてるんですよね？」

「ああ。何でその事を知ってるんだ？」

「教務科の前で小耳に挟んだだけです。ついでに1つ忠告しますが、今夜の外出は避けた方がいいでしょう。今夜はとても悪い風が吹いてますよ……」

怪しく細目をうつすらと開けて、俺を見ながら忠告する隼人。

何だろう、このカンジは。

隼人の言葉が、俺の耳には嘘のように聞こえなかった。

おいおい。

変に俺の不安感を仰ぐなよ。

内心はそう思いつつ、俺はポーカーフェイスを利かせながら真っ直ぐに隼人を見る。

それを見た隼人は、不気味に口元を緩めてこう言った。

「いい目ですな先輩。実にキレイに透き通った、戦いを好む目だ。

そうじゃ無くてはボディガードの仕事も務まらないでしょう。では、僕も仕事はまだ終わって無いんでお先に失礼します」

一瞬で怪しい雰囲気を漂わせていた表情からにこやかな表情に様変わりすると、隼人は俺に一瞥して人混みの中へ歩いていった。

今夜は外出を控える、か……。

それには何か裏がありそうだが……。

なんて考えたが、外出する理由や用事はこれと違ってないし、多分、ビビらせるための冗談かなんかだろう。

さて、早く帰らんとアリアに騒がれそうだし、いろいろとやることがある。

俺はちよつと早足で目の前にあつた横断歩道を渡り、第3男子寮へと踵を返した。

ブーツ、ブーツ!!

朱雀と別れて人混みの中を歩いていた隼人の胸ポケットでケータイ電話が振動した。

隼人は何気無い様子でケータイ電話を取り出し、フリップをスライドさせて通話ボタンを押す。

「もしもし。二階堂隼人です」

いつも通りのカンジで電話に出ると、隼人の顔が険しくなる。

「クライアントさんですか？ 毎度ご無沙汰してます。依頼ですか？ ええ、順調に進んでますよ。あと一ヶ月もすれば祭りがありますし、そうすれば”あれ”はこちら側に はい。分かりました。例の奴らは僕にお任せください。はい。では失礼します」

ピッ。

通話終了ボタンを押すと、また不気味に口元を緩めて人混みの中を歩き始めた。

闇が深まる夕暮れ時。

茜色に染まる人工島の海岸沿い。

メガフロート

ゲームセンターから出てきた二人は、そこで大喧嘩していた。

案の定、周りには誰も居なかったから良いものの、もし誰か居たら通報されてもおかしくない。

二人は激しく剣を交し、打ち合い、幾重にも反響して辺りに鳴り響く金属音。

「わ、わしが悪かった！！だから、その無数に飛ぶナイフをしまえ！！舞！！」

「アンタのせいよ！！アンタさえいなければ…許さないっ！！絶対に許さないっ！！死んでも許さないだからっ！！」

キンツキンツキンツキンツ！！

楓は自分の身長に近い長さの長太刀・大伽羅俱利を器用に振り回し、まるで命を吹き込まれた生き物のように、楓へ襲い掛かるナイフを的確に叩き落としていく。

小さく体を活かし、まるで豹のように機敏に動き回りながら、飛び交う紫色の刃が煌めくナイフを牽制する。

しかし、楓は舞へ攻撃することが出来ないうでいた。

（ちっ、サイコキネシスか！？こつも能力を使われたら攻撃する方にまで手が回らん！！いくら何でも街中でUZIをブツ放すわけにもいかんし、何よりも無駄な戦い、特に怪我は避けたいのう。もしもの時のことを考えたら、朱雀に迷惑が掛かる……。どうすればいいのじゃ……）

怒りで我を忘れた舞の猛攻は、治まる気配がない。時間を追うごとに、増しているようにも思える。

強烈な一撃をお見舞いしなきゃ、正気には戻らないだろう。

原因は自分自身である以上、これは自分で解決するしかない。

楓は自分に狙いを定めて降り注ぐ、ナイフの雨を掻い潜り、徐々に舞との距離を縮めていく。

距離さえ詰めてしまえば、後は太刀の長さと手数で攻めて一発逆転を狙える。

長太刀を極めた楓ならば、それは雑作もないことだった。

キンツキンツキンツ！！

三方向から飛来したナイフを一瞬で見極めて、素早く太刀を軌道に載せて切り返し、見事に叩き落とす。

今の楓の姿は、まるで川の流れのように麗しく、豹のようにしなやかで力強く乱舞する。

強靭なスタミナと高い集中力がその動きを実現させているのだ。

「なかなかすばしっこいわね！！いい加減殺られなさいよ！！」

「武偵法第9条！！武偵は如何なる場合でも人は殺せぬ！！落ちて着いてわしの話の話を聞け、舞！！」

怒りに吞まれて我を忘れた舞が、泣きそうになりながら叫ぶ。

それを遮り、楓が叫ぶ。

しかし、舞は聞く耳を持たなかった。

シャキンツ。

遠隔操作ナイフ攻撃がダメだと判断した舞は、素早くナイフをしまつて腰に差していた日本刀を鞘から抜き放ち、ビシツと正眼で構えた。

それを見た楓は驚きを隠せなかった。

「ほう。その太刀、正しく贗物には見えぬな。刀の反り、刃紋、鐔の形。どれをとつてもそれは『虎徹』じゃ。それに舞。そちも少しは剣の腕があると見た」

「そうよ。幼い頃、この能力のせいで虐められていた私が、助けてくれた”あの人”のように強くなるために一生懸命学んだの」

私は幼い頃、父親の仕事の都合で一時期、宮城県に住んでいたことがあった。

生まれつきサイコネシスの能力を持っていた私は、小学校に通い始めてすぐに虐めにあつた。

初めは誰も助けてはくれなかった。

友達なんて、誰一人居なかったから。

毎日ひどい目にあつて一人で泣いていた。

だけど、ある日、また虐められていた私の前にあの人が見れた。

今でもはつきり覚えている。

同じクラスの明智くん。

名前と呼ぶより、そっちの方が印象が強かったからだろう。

彼が、虐めっ子を一瞬で撃退して、私を助けてくれた。

彼はとても優しく、物凄く強かった。

その日から、私も明智くんのようになろうと思って剣道を習い始めた。

しかし、また父親の転勤が決まり、剣道を辞めてしまい、彼とは顔を合わせずに別れてしまった。

もう会うことは無いだろう。

そう思つて過ごしてきた。

それが武偵高の入学試験の時、また会えたと思つた。

でも、私の勘違いかも知れないが、明智ちゃんと朱雀が重なって見える。

だから、今度こそ傍に居たい。

どんな些細なことでも、私には意味があることだった。

それなのに……………
私はぐつと唇を噛み締めて、楓を睨む。
それを見た楓は　。

「……………そうか。ならばわしも手加減など言っではおれんな。次の一騎打ちでこの闘争も終いにしよう。お互い、これ以上長くはここに居られんからの」
「……………分かったわ。そうしましょう」

舞の承諾を得た楓は、息を整えながら静かに長太刀を下段に構える。
シャキンッ！！
楓は刃を返して峰にする。
茜色に輝く夕日を反射して、2人の刀身が赤く染まる。
間合いは10メートルほど。
二人とも、体力は極限状態だった。
息が荒くなっているのは言うまでもない。
日が完璧に沈んだ時、二人は同時に駆け出した。
二人の影が交わった瞬間

ガキンッ！！ザシュッ！！

それよりも早く、誰かが割り込んできた。

「な!？」
「え!？」

二人はゆっくりと顔を上げた。
そこに居たのは武偵高の制服を身に纏ったクラスメートの夜桜 彩
だった。

赤いメツシュ入りの前髪を靡かせ、冷めた目で二人を見ていた。
左足を振り上げようとした楓の長太刀の上に乗せて押さえ付け、左
手に持つ大型拳銃 S & a m p ; W M 6 4 5 の銃口を楓の額に向け
られ、右手には忍者刀が握られていて、振り下ろす舞の虎徹を受け
止めていた。

これが、たった一瞬で起きたのだ。

「動くな二人とも。動いたら片方は頭にでけえ風穴、もう片方は身
動き出来ないように斬りつけるぞ。武偵同士の私闘は禁止されてい
たはずだよな？」

冷淡な彩の声が響く。

「すまぬな、彩。ちとわけがあつて」

「ご免なさい、夜桜くん」

「認めるならそれでよし。今回は見逃してやる。さつき朱雀に電話
で頼まれたんだ。お前らを向かえに行ってくれってね」

「そうなのか、それはすまぬ」

「おう んじゃ、帰るぜ」

拳銃と忍者刀をしまい、いつものような笑顔になって二人を見る彩。
舞と楓は武器をしまつて、互いに顔を見合わせる。

「軽率じゃつた。まさかこうなるなんて思つてもなかった。許すと
は思わぬが、ホントにすまかつた」

「……私こそ、巻き込んでご免なさい。以後、気を付けるわ」

互いに謝ると、彩に誘導されるように帰路についた。
朱雀の部屋の前に着く頃には、月が夜空に浮かんでいた。

こんなに賑やかな夕食は何年振りだろうか？

俺の部屋の食卓を囲むテーブルは、いつもよりも大いに賑わっていた。

男子二人だけである俺とキンジを挟むように、怪獣娘四人が座っている。

今日は白雪と舞の手作りの夕食で中華料理のフルコースだそうだ。

大皿に盛り付けられたエビチリや焼売、小籠包、青椒肉絲、回鍋肉など数々の豪華メニューがテーブルの上に並ぶ。

「つか、スカスカの冷蔵庫の中にある材料を使ってよくこんな量の料理を作ったな。」

と、感心してしまう。

「たくさん作ったので一杯食べてくださいね。特に朱雀さんとキンちゃんは」

「良いのか？こんなに？」

「もちろんだわ。だって私は朱雀に食べてもらいたくて作ったんだから」

「そ、そうか。ありがたく頂くよ」

「い、いただきます」

「おい舞っ！！ご飯のお代わりをくれ！！」

隣にちゃっかり座っている楓は、口にご飯粒の行列を作り、大きめの茶碗にてんこ盛りに盛られたご飯を平気で平らげる。

しかも、これで三度目のお代わりだ。

「アリアみたいな体躯のどこに、そんな量の飯を入れんだ？」

「スゴい食欲だな、おい。」

うわ、まだがつついてやがる……。
なんて毒づきながら、大皿に盛り付けられたエビチリの海老を箸で
掴む。

すると、そのエビチリの向かいにちんまり座っていた子ライオンが、
俺の海老に勢いよく飛び付く。

ガブツ！！

「あゝっ！？俺の海老がつ！？」

「もらいつ！！始めにアタシが狙ってた海老なんだからアタシのだ
もんねっ！！」

「知るかつ！？っ！か人の食うなよ！！」

「どうどう、焦るでない朱雀よ。ほれ、ワシの取ったエビチリの海
老を」

「大丈夫よ朱雀、私上げるわ。はい、口をあーんして」

「な、卑怯だぞ舞っ！？不意に横槍を入れおつて！！」

ヤバイヤバイヤバイ！！

海老ごときで一触即発状態になるなよっ！？

つたく、今すぐに回避行動をしなければヤケドじゃ済まなくなるぞ
！！

え〜と、え〜と。

「二人とも気持ちはありがたいんだが、俺の取り皿に置いてもらえ
ないか？後で味わって食べたいし、一度に2つ食うほど大きな口じ
やないからさ」

「むう。遠慮はいらんぞ朱雀よ」

「そうよ朱雀」

「俺は遠慮なんてしてねえ」

「そうね。喧嘩になっちゃこの部屋が大変なことになるわ」

珍しく察しの良いアリアが、いきり立つ二人に釘を刺す。

その隣で苦笑いを浮かべるキンジ。

そんなキンジを上の方で眺めている白雪。

二人はしばらくにらみ合い、無言のまま互いに顔を背けて座る。

すると、アリアは気付かれないように正座から立ち上がり、すすすと俺の隣に歩み寄る。

そして、何気無い振りをして俺の取り皿へ自分の取った小籠包を一つ、ちよんと置いて自分のサツと定位置に戻った。

な、なんだ？

何がしたかったんだアリアよ。

まあ、ちようど小籠包も大皿の上にはないし、食べてない俺にと持ってきたんだらう。

俺はそう思い、ご飯を口に運ぶ。

くっそう。

なんでこんなに美味しいんだよ、舞。

「ところで朱雀先輩？」

「なんだキンジ？」

「アリアが勝手にこの部屋を要塞化したんですが……」

「ああ。それなら心配ない。明日にでもやっておこうと思ってただ」

「そうですか」

俺が帰ってきた時、部屋の至るところに赤外線式の警報器アラームが付けられていたのを確認済みだった。

誰が仕掛けたのか気になっていたのだが、やっぱりアリアだったか。さすがは武偵の申し子・アリア。

やるのが早いな。

感心しながら俺はチラッと横目でアリアを見ると、清ました顔でご飯を食べている。

あ、そう言えば熱田の奴にGLOCK17（グロ）とM8000（ベレ）のメンテしておけて言われてたな。

明日、撃ち初めする予定だし。

俺は先にご飯を食べ終わらせ、席を外す。

「どこに行くの？スザク？」

「新しい銃のメンテ。念のため今のうちにしとく」

「ほお、朱雀よ。拳銃を新調したのか？」

「ああ、長年使ってたGLOCK35がダメになったからな」

中学時代の頃の俺を知っている楓は、長年愛用していたGLOCK35のことを知っている。

何度も繰り返し、直して使ってた亡き親父の拳銃（形見）だからな。

とても思い入れがあつたが、まあ今回は仕方がない。

自室に入ると、直ぐに机の前にある椅子に腰を下ろし、通常分解して丁寧にメンテナスし始める。

実は意外と不器用だから、こう言う細かい作業が苦手で、物凄い時間がかかる。

長いときでは一時間ぐらい掛かるからな。

ほんと、戦闘以外じゃ何の役にも立たないんだよ。

俺って人間はさ。

そんな俺のことを、舞やアリア、楓はどう思っているんだろう。

まあ、「木偶の坊」とかってアリアにバカにされるのは目に見えているが。

メンテナスをし始めてから、何十分経っただろうか。

細部に渡るメンテナスに真剣になりすぎて、背後に居る”誰か”の存在に俺は気づかないでいた。

「随分と真剣じゃのう。わしは感心したぞ朱雀」

「うおっ！？か、楓かつ！？い、いつから俺の後ろに！？」

「ついさつき。随分と真剣になってるから声が掛けづらかったのじや。すまん」

「居るなら直ぐに声を掛けるよ。ビックリするだろ」

「うむ。次回からそうする。しかしカツコいいものじゃな。何かに真剣になってる男の横顔は。特にそなた、朱雀は別格じゃ。他の男とは違う独特な魅力と男気に溢れとる」

「楓、どうかしたのか？」

わりに合わない話をする楓を不審に思った俺は、思い切つて聞いてみた。

「中学二年の頃の、バスジャック事件を覚えとるか？」

真剣味のある声で、楓はそう返してきた。

「中学二年のバスジャック　ああ、あれか」

中学二年の頃のバスジャック事件。

俺が唯一、相棒の彩を庇い、意識不明で入院した大怪我の原因。

この胸に、太く深い十字の切り傷を負わせたあの忌まわしき事件。思い出すだけで、胸の傷跡が疼いたような気がした。

それが今更、何かあるのか？

「そのバスジャックの『真の犯人』が、まだ捕まってはおらん」

「！？」　待て楓。それはあり得ない。犯人は確かに彩が捕まえた今更、そいつが偽者だとか言うのか？」

「そうだ。仮にバスジャックをしたとしてもムシが良すぎる。彩が捕まえた現行犯は焦点が合わず、無意識にバスジャックをしたなんて、考えられるか朱雀よ？誰かに操られていたとしか考えられん。」

それに「

そこで、楓は一呼吸置いた。

「彩が捕まえた現行犯は、一昨年の8月24日に獄中で謎の死を遂げている。もし操られていたとしたら、獄中で変な死に方をしてもおかしくはない」

なんだと!?

そうになると、楓の言う通りにまだ犯人は捕まってないことになる。根本的な根拠は無いが、確かにあの時、現行犯の目は虚ろだったのは覚えている。

あり得ない。

あり得ないだろ。

「もしそうならば、またどこかで事件を起こす可能性はなきにしもあらず、と言うことになる。ま、まさか!?!」

「そのまさかじゃ。奴は今、ここ東京におる。わしの予想が正しければな。そして何らかの恨みがある武偵を立て続けに襲って殺そうとしているとしか考えられん。例の超能力捜査研究科の女子生徒を狙つての。無関係の仲間が襲われるのを黙って見てはおれんわ」

「断定はできないがな。それなら可能性は十分にある」

「ふ。わしはただ朱雀を追っ掛けて東京に来た訳じゃないので。本当の目的は仇討ちじゃ。武偵として憧れた亡き父上と姉上の仇を」

「……仇討ち……」

「わしの父上と姉上は、あの時のバスジャック事件の『真犯人』に殺された。二人とも、もう遺体が誰だか分からなくなるぐらいに切り刻まれての。わしの父上はそなたの父親の相方じゃ。姉上はそなたの兄の……大切な人じゃった」

悲しく俯いて喋る楓。

俺は初めて楓の親の話、姉の話聞いた。

内心、驚いたがそれ以上に兄や犯人への怒りが募る。

とても懂れていた俺を裏切り、あっちに行ってしまった俺の兄。

武偵と言う仲間を操り、俺を殺そうとしたバスジャック事件の真犯人。

ただ楓の話聞くだけで、何の言葉も返せなかった。

悔しい。

なんか悔しい。

俺は分解し、メンテナンスしたばかりの部品を机の上に静かに置く。こんなに悔しい思いをしたのは、親父や兄が殉職したと聞いた時以来だ。

今の楓の言動から読み取ると、今回の殺傷事件の犯人はバスジャック事件の真犯人と同一人物の可能性が高い。

でもこれで、『魔剣』の可能性は限り無く低くなった。

だが、無いとは言いつけることはできない。

楓が焦る気持ちは分からなくもないが、情報が少なすぎてこちらは迂闊に動けない。

そんなジレンマが俺を襲う。

ちくしょう。

「……分かった楓。俺で良いなら協力してやるよ」

「ホントにすまぬ、朱雀」

「良いつて。舞をボディガードするついでだ」

「そうか。仕事中に邪魔したの。すまぬ」

「いやいや。そっちこそ言いつらい私情を持ち出してまで事件の情報を、わざわざ俺に提供してくれたんだ。礼を言いたいのはこっちだよ」

「礼じゃと?」

「ああ。ありがとう」

と背中越しに言ってやった。

しばし長い沈黙。

不思議に思い、振り返ると。

楓は珍しく恥ずかしそうに立っていた。

頬をちよつと赤く染め、両手を前に組んでもじもじしている。

普段は男勝りで、女の子って感じがしない楓が、こつやってみると普通の、恥ずかしがりな女の子に見える。

そう言えば、楓にありがとうなんて言ったのは今回が初めてだったかもしれない。

俺に見られたのが恥ずかしかったのか、楓はそそくさと部屋から出ていった。

つーか、俺の身の回りに女の子しかいないのは何故だろうか。

なんて思いつつ、部品を組み立て、二丁の拳銃を元通りに戻し終える。

ふう。

事件のことを考えながらメンテナンスなんてできやしねえよ。

椅子の背もたれに寄り掛かり、グーツと背伸びをする。

すると、部屋を丁寧にノックする音が二回ほど聞こえた。

「おお、どうしたキンジ？」

「あれ、何で俺だつて分かったんですか先輩？」

「簡単だよ。そんなの。1週間も一緒に生活してれば分かるさ。ノックする回数だよ。他の連中はやたらと回数が多いかったり少なかったり、時にはしないで入ってくるバカ者も居やがる。決まってキンジの時だけ分かりやすく二回なんだよ」

「そんなこと、気が付きませんかよ？だつてこっちは無意識にやってるんですから」

「そつだろうな。んで何の用だ？」

「御風呂です。他のみんなが次に先輩が入って良いって言ってるん

で呼びに来ました」

「了解。んじゃ入ってくる」

俺はキンジにそう言うと、バスタオルと着替えを持ち、風呂場へ向かった。

ガチャン。

更衣室の扉を閉める。

誰も 居ないよな？

周りを見渡して再度確認する。

こんなところに潜伏されてちゃ、敵わないよな。

まあ、念には念を入れておくか。

洗濯機の下、洗濯物を入れて置くかこの中など怪しいものが無いか調べる。

よし、無いな。

………なんか、女の子と俺が逆な立場になった気がするがそれは置いておこうか。

盗撮。

なんて言葉が脳裏に浮かぶ。

武偵の情報収集の手段としての1つだが、本来の意味を考えるとあまり良くない行為のようだな。

そこまでして俺の素っ裸なんて見たいとは思わんが。

女とはよく分からない生き物だよ、ホントに。

なんて思いながら、有名なメーカーのロゴが入ったワンポイントTシャツを脱ぐ。

Tシャツの下から現れる、胸に浮き上がった十字のキズ。年数を重ねても、心のキズと共に癒えることのなかった。

背中には数発の弾痕、他にも数え切れないほどの怪我やキズを負ってきた。

この、並外れた身体能力のお陰で、幾度の危機を乗り越え、数々の猛者達を相手に死闘を繰り広げたこともあった。

身体中にあるキズは、その凄まじさを物語っているのだろう。

いつものようにズボンを脱ぎ、かごの中に入れて浴室に入った。浴槽には入らず、俺はシャワーのレバーを回す。勢いよく温水の雨が俺の頭へ降り注ぐ。

(……………)

何かと今日は疲れた。

体と髪を洗ってそのまま上がろう。

後にも入るやつらが詰まってることだし。

シャンプーとトリートメントのボトルを手に取り、シャンプーのポンプを押して液体を手に取る。

それを頭に付け、ゴシゴシと洗う。

そう言えば、来月アドシールドがあるって言っていたよな。

学校から今年のアドシールドの『総合格闘技』の推薦が来てたっけ。参加すれば評価は上がるらしいが、俺は卒業できるだけの単位は揃えてるから参加する必要は無いだろう。

まあ、格闘技は苦手な部類だし。

ボディーガードの件もあるから、学校の方も多目に見てくれるだろう。

一度、止めたシャワーをまた出して髪を洗う。と、なんと俺は手伝いをしなきゃいけないのか……。

何をするか考えてなかったな。

次にトリートメントのポンプを押し、液体を手に取って髪に塗りつけ、再び洗い流す。

ふう。

次は体を洗ってと。

体を洗う専用のタオル……なんて言っただっけ？これ？

細かい網目状のタオルみたいなのにボディーソープを付けてゴシゴシと隅々まで洗う。

後は背中だけだ。

はあ、そうだな……。

中途半端にベレとグロをメンテナンスするのは、自分なりに嫌だ。風呂を上がったら、もう一度メンテナンスするか。

「朱雀、背中洗ってあげる」

「ん？おお、サンキュ」

俺は振り返らず、手に持つタオルみたいなのを後ろに渡す。

やっぱりベレの・45ACP弾の三点バーストはちょっとマッド過ぎるか？

もしかしたらバレルが割れてしまうよな。

まずったなあ。

たしか、ベレの系列ってバレル弱いんだっけ？

熱田に無理して頼んだから、今更ながら直してもらおう訳にもいかんし。

ああ、めんどくせえ！！

頭をガリガリと両手で搔くと、深くため息をつく。

さてと、んじゃ背中でもあら……。

ん？

あれ？

あれれ？

誰だ？

俺の背中をゴシゴシと擦ってるのは？

やたらと上手いし、なんか気持ちいい。

「って、俺の後ろにいるのは誰だっ！？」

「ソフ やつと気付いた？」

「その声 嘘だろっ！？」

俺はその声を聞いた途端、泡だらけのままユニットバスにダイブする。

ちよつと待て!?

なんで風呂場の中につ

舞が居るんだよっ!?

俺は恐る恐る、ユニットバスのお湯の中から顔を覗かせる。

甘ったるいチヨコレートのような香水の匂いが浴室に立ち込めている。

湯気で把握できていないが、恐らくあれは舞だ。

絶対に。

「朱雀。なんで急にお風呂に逃げるの?」

「当たり前だっ!?お、女となんか一緒に風呂に入れるかっ!?俺は入る気なんてないぞ!?っ—かいっから居やがった!?!」

「ソフ 今さつき 良いじゃない、私たちは恋人関係なのよ?」

「俺はお前とそんな関係になった覚えは一度たりともないっ!?!」

「冷たいわね朱雀。ああん、寒くなってきた。ねえおねがい。一緒に暖まる?」

「全力で断るっ!?!俺は上がるからなっ!?!」

あらかじめ持つてきておいた手拭いを下半身に巻き、そそくさと上がる。

キレイな素肌を丸出しにし、バスタオルで美しい体を隠した舞。

俺は、その横を何気無い顔で通り過ぎて行く。

さすがに大人みたいで魅力的と言えば魅力的だが、まだ女性の体を見るのに不馴れな俺的に言えばテトロトキシンや青酸カリに匹敵するほどの猛毒だ。

こんなキレイな素肌に生で触れたら、間違いなく俺は即、失血死する。

ヤバイヤバイヤバイ!!

早くここから出ないと、他の連中に殺されるっ!!

こんなことで俺の生涯を終わらせて堪るかっっの!!

俺は舞に抑え付けられる体を挺して勢いよく浴室から脱出し、急いでバスタオルで体を拭く。

くそう!!

まだ体が変に火照ってやがる。

っーか何なんだよ一体!?

さっさと拭いて上がらねえと、俺が、俺が色んな意味でお陀仏になっちまう。

「逃げないでよ、す・ぎ・く 一緒に入りましょ」

「ぎゃ~~~~~~~~!! 来るなあ~~~~!!」

浴室から出てきた舞に絶叫する俺。

舞はそんな俺にお構い無し。

ずいずいと体をくっつけてくる。

ま、舞さん?

あの〜。

その豊富な胸がもろに背中に当たってるんだけど……

ああ〜ヤバイ、目眩がする〜。

先ほどの絶叫がリビングにまで聞こえたのか、ドタドタと廊下を走ってくる足音が聞こえつつある。

しまった!!

ドアが開けられるっ!!

殺されて堪るかっ!!

これじゃ死んでも死にきれん!!

っーかもしもそうなら死んだ親父にも合わせる顔がねえんだよ!?

俺の体にくっつく舞を無理矢理離そうと、腰に回された舞の手を掴

んで必死に引き剥がす。

「お願いだ舞っ！！手を離してくれっ！！」

「いやだっ！？一緒に入るまでいやだっ！？」

しかし、舞も舞で何故か必死に抵抗してくる。
そのまま激しい取っ組みあいになり

「は、な、せつつーの！！う、うおっ！？」

「きゃっ！？」

下に敷いていた足拭きタオルがずるりと滑り、俺は舞に覆い被さる
ように転倒する。

ドカッ！！

「何事じゃ、朱雀」

「スザク!? しつかりなさい!!! アタシたちが来たからには

「大丈夫ですか!? 鳳凰院先輩」

「何があつたんですか!? せんぱ」

M92Fを右手に握るキンジが更衣室のドアを蹴り開け、武装した残りの三人が更衣室へと雪崩れ込んで来る。

しかし、俺達の有り様を見ると、皆、台詞の途中で凍り付いたように動かなくなる。

タイミングが悪すぎる。

よりによって、地上最悪の構図が出来上がってしまった。

だって俺は、運悪くすつ転んでほぼハダカの舞に抱き付いてるんだ

……ぜ……

……ぐぶつ……

は、はな……ぢ……が……

「おのれえ……舞!!! 抜け駆けした挙げ句よくもわしの婿に色気を使い、自分の手駒にしおってっ!!! 断じて許すまじっ!!! 覚悟致せっ!!!」

「誰が貧乳のませガキに、愛しの朱雀の妻など勤まりますか!!! 挑むところよ!!! 返り討ちにしてあげるわっ!!!」

「この、バ、バカ朱雀っ!!! ド変態っ!!! セクハラっ!!! 強猥魔っ!!! アンタなんか」

「止めるアリアっ!!! 撃つたら先輩がホントに死んでしまうだろ!!! ……って、ああ!? 先輩!!! しつかりしてください!!! アリア、ティッシュを持ってきてくれ!!!」

「……ふ、ふふ、ふふふ」

「お、おい白雪!? お前、なんか怖いぞ!? つーかお前も手伝え!

！」

キンジの腕の中で、鼻血を大量に吹き出して横たわる意識朦朧の重症の俺。

ああ、多分俺はこのまま天国へまっしぐらか……。いや、恐らく地獄だな。

一触即発状態だった舞と楓は、俺を賭け、そして命まで賭けた死闘へ突入する。

他人ん家の更衣室で命懸けの乱闘は止めて欲しいと言いたい。

アリアは瀕死の俺にガバメントの銃口を向けたが、俺達のパートナーであるキンジの制止もあって、45ACPの鉛弾を何十発もらわなくて済んだみたいだ。

白雪は何やら黒い笑いを浮かべ、薄気味悪い笑い方をしていたな。

一体、何を考えていたのだろうか。

アリアと白雪はキンジの指示通り、リビングへティッシュボックスを取りに向かう。

「……キ、キン……ジ……」

「先輩！！しっかりしてください！！今、アリアと白雪がティッシュボックスを持ってきますから！！あと少し辛抱してください！！」

「……あと……は……任……せた」

「先輩！！先輩！！」

一度で良いや。

一瞬だけでも良いから、現実逃避をしようと思う。

これ以上、虚ろな現実を見ていたら、ホントに死にかねない。とりあえず今はキンジに任せた。

あとは意識が戻ったら、弁解を述べるとしよう。

弁解だけでは許して貰えんと思うが如何だろうか？

つか、俺は無実なんだから弁解を述べる必要は無くねえ！？

寧ろ、舞が弁解を述べるべき……

……アイツに言わせたら、確実に俺が殺されかねん。

……その前に女の子という生き物自体を嫌いになってしまった
かも知れないな。

で、そんな話はどうでもいい。

俺は薄れ行く意識の中、襲ってくる暗闇に自分の意識を手放した。

あ。

俺が気が付いたのは、もう夜中だった。

ソファアの上でグッタリと寝そべり、泥のように深い眠りに就いていたのだろう。

っ。

頭がやたらとガンガンする。

脳みそが激しくシェイクされた後みたいだ。

ん？

鼻にティッシュが詰まってるぞ？

あれ、少し前までの記憶がごっそりと抜け落ちているような気がする。

何で俺は、こんな所で思い切りノビているのだろうか。

痛む頭を押さえながらゆっくりと立ち上がると、鼻から詰まっていたティッシュを取り除き、ごみ箱へ放り込む。

歩こうとしたその瞬間、目の前の風景が揺らぐ。

しまった、眩暈かよ！！

……おいおい、貧血か？

まさか鼻血で貧血なんて言うなよ？

それよりも何で鼻血なぞ出してんだ？

俺の中からごっそりと抜け落ちた記憶が、ちゃんと俺の中に入った時、何かとんでもないことがあったとか。

ダメだ、全然思い出せない。

ゆっくりと見渡す限り、リビングルームの中はやけに静かだ。

もしかして、みんな寝たのだろうか？

俺はソファアに深く座り込み、背もたれに寄り掛かりながら、深呼吸する。

まあ、そうだろな。

もう深夜零時だもん。

仕方ない、もう一眠りするか。

「朱雀？起きたの？」

「うおっ！？」

「きゃっ！？」

「……なんだ、舞か……。驚かすなよ」

「ご、ごめんなさい。なんか、さっきのことがとても気になっちゃって、なかなか眠れなくて」

「さっき？」

舞の話からすると、どうやらこうやら俺が風呂に入ってる時に舞が乱入し、いろいろ大変なことがあって、俺が鼻から多量出血して気絶したらしい。

なるほど……。

ってなんで納得してんだよ俺。

気絶したなら、何故ここでノビてるか分からないわけだ。

！……もしかして、俺は舞と風呂に入ってしまったと言っことか！？

「おいおい、嘘だろっ！？」

「ホントだよ」

「……………」

「ご、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！朱雀のことしか考えられなくて、気が付いたら暴走してて……食べ終わった食器を洗ってた時に、お風呂に入ってるってキンジ君から聞いてさらに拍車が掛かっちゃって……サイコキネシスの発動練習もままならなかったし、食器を洗っていた時も裸の朱雀を妄想しちゃって気が散って、おおお大皿落として割っちゃいました！！ごめん

なさい!！」

なんかはちゃめちゃん謝られ方されるなあ……。
っーか早過ぎて何を言ってるか分からん。

顔を赤らめて早口で、土下座して謝る舞を見て、俺はそう感じる。
誰もそこまで謝れなんて言っていないし。

相変わらず、妄想激しいなコイツ。

まあ、お年頃なのは分かるが。

……… ちよつと待て。

あの大皿割ったのかよっ!!

はあ〜……。……。

高かったのに、あの大皿。

俺は深くため息をつく。

「ははは、分かった分かった。おっちょこちょいも大概にしるよな。
全く」

「うん……」

「んで、他に用は？」

さりげなく俺は舞に聞いてみる。

舞は恥ずかしそうに俯く。

「す、朱雀は私と楓ちゃんとアリアのことどう思ってるの？」

もじもじと正座する膝の上で恥ずかしそうに手を動かす。

唐突な質問に、しばし黙り込む俺。

「アリアは……ちっこいくせに生意気だけれど、なんだかんだ言っ
て俺を認めてくれるいいパートナーだ。楓はあの通り、辺りの空気が
読めない無神経な奴だけど、根はとても素直でいい奴。舞は面倒

見が良くて頭もいいし、かなりのおつちよこちよいけど、みんな、俺の大切な友達だよ」

「そう……」

「そんなに悲しそうな顔をするなよ。大切な友達の、優劣を決めるなんて俺にはできない。確かに良し悪しはあるかも知れないけど、誰も“特別”じゃないんだ。俺の中ではね……」

そう言った俺は、ハッと思い止まる。

誰も“特別”じゃないんだ。

いや、それは真つさらの嘘だ。

いつの間にか、あのちっこ可愛い奴が俺の中で特別なモノになっている気がする。

アリアは、純粹に、俺に似ているから。

どこまでも不器用で、真つ直ぐにしか進めない。

まるで弾丸のような奴だ。

でも、俺はその弾丸を狙い通りに撃ち出すための拳銃にすぎない。

弾丸は弾丸でも、弾丸だけじゃ、何の意味がない。

その性質を理解して撃ち出す拳銃が無ければ、真の力を思う存分に発揮できない。

それと同じで、俺はアイツがいなければただのガラクタだ。

ガラクタにしては上出来かも知れないが、俺がアイツと出会わなければ、こんな事に気が付くこともなかっただろう。

だから、俺はアイツのパートナーになることを決めた。

まあ、それでもアリアとは恋人以上にはならないはずだろうな。

お互い様、恋愛沙汰が苦手だからね。

「朱雀は優しいんだね……。会った時から何も変わってない。うん。ようやくスッキリしたわ」

「そうか」

「お休み。これでぐっすり寝れるよ」

「そう。んじゃお休み」

そう挨拶すると、寝室に戻って行った。
さてと、寝るか。

俺は再びソファーに横になり、眠りに就いた。

大変更新が延びた事を、続きを楽しみにしていた愛読者の皆様にお詫び申し上げますm(_____)m
すみませんでしたm(_____)m。
ちよつとスランプ状態に陥っていたものでなかなか続きが思い付きませんでした？

ですが、ようやく復活しました？

心配かけてごめんなさいm(_____)m

もう大丈夫ですからね？

ちなみに、とうとう作者の周りでも本作品のタイトルが耳に留まるようになりました？

いやはや、凄い有名になりましたね自分！！

嬉しい限りです！！

そして今月の4日、本作品は掲載一周年目に突入しました？

皆様のコメントなどの応援のおかげで何とか続けて来ました！！

これからも応援よろしくお願いします？

ちなみに一周年記念イベントを考えていますので、良い案があればメールください？

よろしくお願いします？

では、続きを楽しみください？

ふと、目が醒めた。

そこが夢なのか、現実なのか分からない。とても曖昧な空間の中に俺は立っていた。

しかし、ハッキリと分かるのは夕日が照る武偵高強襲科実習棟の屋上。

いつものように大の字になって昼寝をしていたようだった。

カラスが囀に帰るみたいに、群れを為して赤く染まる空を飛んでいた。

つまらなそうに起き上がると、背後から舞の声がした。

「おはよう朱雀。良く寝てたね」

「ん……どうやらこうやら気持ち良すぎて午後の授業を寝過ごしたようだ。お陰でまだ夢を見てるような感覚がする。はは、寝ぼけているみたいだ」

「ふふふ。朱雀ったら。まあ、良いわ」

「フーか舞、近くにいたなら、なんで起こしてくれなかったんだよ？」

「……これで朱雀を見るのが最期になるのかな……って思っちゃって」

「ハア？何言ってるんだよ？」

俺はゆっくりと立ち上がると、不思議そうに舞を見る。

俯きながら小刻みに肩が振るえ、微かに涙声に言う舞。

なんかおかしいぞ。

なんで……泣いてんだよ？

「俺らは三年だ、まだ後一年あるだろ。何泣いてんだよ？」

「ううん。今、此処で私とお別れなんだよ朱雀」

「ハア？何を言っ……」

「ごめんね朱雀。私、イ・ウー（あっち）に行くことになったの。

だから、朱雀を殺さなくちゃいけなくなった。殺したく無いけど仕方ないの。命令だから」

「お、お前。あっちって……殺すって」

「大好きだよ、朱雀。だから分かってちょうだい。苦しまないように私が殺してあげるから」

ブアッ！！ヒュッ！！

無数のナイフが、舞のスカート裾からサイコキネシスの力を得てまるで生き物のように飛び出す。

そして、俺の首や心臓を目掛けて、何の狂いも無く真つすぐに飛来する。

俺はこの状況が飲み込めず、身体を動かすのが遅れた。

紙一重で飛来するナイフを躲すが、右の頬と脇腹、左腕を掠る。

ピツと、紅い鮮血が弾け、傷口に鮮血が滲む。

なんでだよ舞。

イ・ウーに行くって。

俺を、俺を殺さなくちゃいけないって。

ふざけるな！！

なんでお前が俺を、俺を殺さなくちゃいけないんだよ！！

おかしいだろ！！

「動かないでよ朱雀。それじゃ殺せない」

「舞！！お前、正気か！？武偵は人を殺せない。ましてやお前が……

…心優しいお前が人様を殺せるわけがない！！」

「それは嘘よ、朱雀。人は『覚悟』さえあれば人を殺せる。刺し違える覚悟さえあれば誰にだって人を殺せるわ。私も例外じゃないの」

「ふ、ふざけるな！！舞は、舞はそんな事をするわけがない！！俺が知ってる舞は……」

「話してる時間は無いの朱雀。だからおとなしく殺させて」

「嫌だ……。正気に戻れ、舞。ならば俺は命懸けでお前を食い止める。舞は俺の大切な仲間だ。欠けさせるわけにはいかない」

「滑稽ね朱雀。今のあなたには誰一人守る事は出来ないわ。この私も。あの『力』さえ使えなければ、あなたは無力のクズね」

舞の言葉に反応するように、再び俺の首や心臓を目掛けて奴らが動き出す。

ちくしょう……ちくしょう！！

悔しさのあまり、唇を噛み、両脇に据えたロットを抜き放って連結させ、振り回して奴らを全て叩き落とす俺。

それを見計らうかのように、舞は鞘から虎徹を抜き放ち、その鋭利な切っ先を身動きが取れない俺の胸へ突き出す。

迫り来る切っ先。

再び死を連想させる映像。

死ニタクナイ、死ニタクナイ。

死ニタクナイ死ニタクナイ死ニタクナイ死ニタクナイ死ニタクナイ。

一度死ニカケタノニ。

二度モ死ニカケタノニ。

マタ死ヌノカ？

ナニ、答八簡単ナコトジャナイカ。

死又原因ヲ排除スレバイイ。

死又原因ヲ排除スレバ。

怖クモ痛クモ無イダロウ。

タダ、本能ニ従エバイイジャナイカ。

ソノ原因ハナンド？

原因ハ、アノ女ダ！！

不規則に脳内に並べられた命令。

それが一つの答に繋がり、身体がその本能にしたがって行動する。
回避不可能な状況。

それはその状況において最も最良の答を導き出したのだ。
無意識のうちに俺は目にも留まらぬ速さで左手に握るロットの連結を解除し、迫り来る切っ先に有りつた力の力を込めてその先を突き出す。

「!?!」

ガキン！！

激しく鳴り響く衝突音。

見事、虎徹の鋭利な切っ先と、ロットの先がかちあったのだ。
だが相手は女の子。

男の力に押し負けるのは当然。

押し負けた舞は、体ごと遙か後方にぶっ飛ばされ

ガッシャ　　ン！！

そして、舞の身体は転落防止のフェンスを突き破って　。

「はっ！？舞っ！！舞　　！！！」

俺は全力で駆け出すが遅かった。

「……………ク」

あれ、誰か俺を呼んでる。
誰だ？

バチコ　　ン！！

突然、凄まじい音と共に脳天へ激痛が走り、俺は無理矢理現実へ引き戻された。

「……………っ！！！」

「起きろスザク！！遅刻するわよ！！！」

頭を突き抜けた甲高いアニメ声。

なんだ、アリアか。

朝から五月蠅い奴だな。

しかし脳天が疼く。

「おはようございます先輩。朝から災難ですね？」

「お？おはようキンジ。全くその通りだ」

「何よ？せっかく起こしてあげたのに」

「我が殿よ大丈夫か？これアリア！！朱雀の頭に瘤が出来ているでは無いか！！！」

「なんですって！！よくも私の大切な朱雀に！！」

「何よ！！」

「こらこらアリア、楓、舞。朝から騒ぐなよ。頭に響く」

いがみ合う三怪獣娘。

俺が注意するも完璧にシカト。

ちくしょう、後で覚えてろよ。

そそくさと準備を済ませ、いがみ合う三怪獣娘を放置してコソコソとキンジと白雪を連れて部屋を出る。

全く、朝から何なんだよあいつら。

胸糞悪い夢の次に、三怪獣娘の大戦争か。

もう付き合い切れん。

大きいため息をつくとき、俺達は何もなかったようにバス停に向かった。

「大変だ！！朱雀先輩！！」

結局バスには乗れず、仕方なく歩いて登校した俺。

疲れつつも校門をくぐり、昇降口の下駄箱に靴を入れようとした時、アランの声がした。

「どうした？道端で運よくエロ本でも拾ったのか？」

なんて冗談混じりにアランへ言うと、アランは折れんばかりに首を横に振る。

そして女の子のような涙声で、途切れ途切れに言った。

「彩先輩が、昨日、例の“武偵殺し”に襲われて……入院してます

……」

「……彩がか！？」

「はい……命に支障は無いみたいですが、意識が戻らないみたいですよ」

「なんでだよ……なんで彩がつ！？」

入れかけた靴を下駄箱から引き戻し、タイルに思い切りたたき付ける。

ちくしょう。

なんで俺の周りの奴らが襲われなきゃいけないんだよ！！

……待て。

考えてみる。

格闘技最強と謳われた神童“夜桜 彩”が一方的に屠られたんだぞ。

それじゃあ、敵は彩以上の強者なのか。
そもそも、何故、彩を？

偶然、接触したのか？

それは後でいい。

今は彩の容態しんゆうが気になる。

殴り付けるように下駄箱の扉を閉めると、たたき付けた靴を履く。
それをびくつきながら心配そうにアランが見ている。

「朱雀先輩？」

「今日は授業フケる。アラン、彩が入院してる病院は？」

「都立総合病院です。まさか、先輩」

「ああ。見舞いに行ってくる。毎回迷惑かけてる俺の、ダチが死に
そうになってるのに、黙って放っておくわけにはいかないからな」

「……分かりました。気をつけて」

心配そうに見ているアランを落ち着かせるために優しく微笑み、踵
を返して昇降口を再び出ていく。

その時、校門から駆けてきたアリア達とすれ違う。

「スザク！？ちょっと待ちなさい！！あんた、どこに行く気よ！！」

「都立総合病院」

ぶつきらばつに言うとアリアは驚く。

「あんた、まさか具合でも悪いの？」

「そうだな。今朝、アリアにタンコブ出来るほど殴られたから頭痛
が酷くてね。診てもらいに行くのさ」

「な、アタシのせいなのそれ！？」

「アリアよ。わしの朱雀になんて事を……」

「許せない！！」

冗談で言ったつもりが逆効果。

激しく火花を散らして睨み合う三人。

まあ、構ってても埒があかない。

俺は睨み合う三人の横をそのまま素通りし、街の中に踏み入れる。

人が込み合う雑踏を縫うように突き進み、駅に着くと切符を買って電車に乗る。

内心、とても嫌な予感がしていた。

あの悪夢といい、いい加減にしてくれよと毒づく。

霞ヶ関駅で電車を降りると、そのまま都立総合病院に向かった。

「よう相棒。随分と白けた面してんな。見るよ、この不様な姿を」

病室に入ると、いつも学校で会う時のような挨拶をしながら上半身を起こす彩。

いつも明るい彩だが、今日はどこも無く落ち着いているように見えた。

彩は上半身、全て包帯で綺麗に巻かれていた。

「それはお互い様だろう彩。無事で何よりだ」

「確かに。んで？学校はサボったのか？」

「ああ。意識不明の重体ってアランから聞いてな。居ても立ってもいられなかったから見舞いに来た」

「ったく。どうしようもないヤローだな」

「どうしようもないって何だよ？これでも心配して来てやったんだぜ？それで、武偵殺しと戦ったんだよな？どんな奴だった？」

「紅い長髪の、殺人鬼。なりはそんなに大きくはねえが、身軽つつか、動きが早い。俺やお前ですら軽く凌駕する速さだな。ありゃあ、俺達が知ってる中途半端な殺人鬼じゃねえ。何十人と手にかけてきた“本物の殺人鬼”って目をしてた」

「……紅い長髪の殺人鬼？」

「ああ。俺の場合、背後から闇討ちに遭っちまってよ。見事に右側腹を刈つ捌かれちまった。反射的に身を捻ってなきや、今頃オダブツだっただろうな。それに奴の武器はナイフ。それも何にも斬れねえような刃毀れしてる、分厚いナイフだ。スッパリ切り刻むんじゃない、力任せに血肉を引き裂くような斬り方をしゃがる。だから縫合しても治るのに時間が掛かる」

悔し紛れに語る彩。

俺は椅子に座ったまま、黙って彩の話を聞いていた。

「ってなると魔剣とは繋がりは無いのか……魔剣は超偵ばかり狙う誘拐犯って聞いていたが……」

「そう考えるのが普通だ朱雀。魔剣はまた別に居る可能性は大。何か裏があるような気もする。過信は出来ないから注意して舞を見張っててやれ」

うう、と唸ると彩は右側腹を苦しそうに抑える。

「大丈夫か？彩？」

「ああ……たいしたことない……お前を殺しかけた時の苦痛よりは、な」

「水臭いな。まだ根に持ってたのか？」

「そう……だな」

「まあ無理はするなよ。ほら、横になれ。焦ったところで傷はどうにもならん」

と俺がいうと、珍しく素直に彩はベッドに横たわる。

「それと相棒。夜間、一人で出歩くことは控えた方がいい。奴は夜行性だ。特に女、舞とはな」

「……分かった。肝に銘じておく」

「って言ったところで無駄だろう？お前のことだからね」

「は？」

「今夜あたり、奴を捕りに行くんだろう？別に止めはしないが俺の二の舞だけにはなるなよ？」

「始めからお見通してか。さすがは三年間、俺とコンビを組んだ男だ」

「ふん。余計なお世話だ。俺も奴に仕返ししたいところだが、これじゃ当分動くことすら難しい。残念だ」

「心配すんなよ。俺が必ず奴を捕る」

「ふっ。頼んだぜ相棒」

よし、あと俺は寝るといって彩は布団の中に潜った。

起こしちや悪いと思ったので、俺はゆっくりと立ち上がると、病室を去った。

何やかんやあってから、例の武偵殺し未遂事件も、魔剣の噂も音沙汰無く、とうとうゴールデンウィークを迎えつつある。

俺はここんところ二日ほど、寝る間も惜しんでパソコンの前に座り、例の武偵殺しの犯人の手掛かりを追っていた。

自称“戦う情報科”インフォर्मことアランからの情報はまるでダメ。

諜報科の後輩・二階堂隼人の話もどれも信憑性に欠け、イマイチ使えない。

他人にこれ以上頼むのも癪に障るので、重傷を負った彩から聞いた情報を元に自分で調べていた。

学校から帰り、パソコンを操作し続けて、かれこれ二時間以上が経過していた。

「のう、朱雀？」

俺の背後から楓の声が聞こえた。

「んあ？」

「よく飽きないでやってるの？それにお主、寝不足であろう？一回寝たらどうだ？」

「うるせー。こっちの仕事が息詰まってるからよ。自分で調べなきゃ何も分からねえし、先には進めねえ。お前は白百合に付いてる。ボディーガードの意味が無いだろ」

「……そうじゃの。スザク、ちよいと良いか？」

俺はパソコンのディスプレイから目を離さず、背中越しに楓と会話する。

楓は恥ずかしそうに声を小さくしながら、再び俺の名前を呼ぶ。

「何だよ？」

「単刀直入に聞くぞ？ 覚悟は良いか？」

「……何の覚悟だよ」

「うむ。単刀直入に聞こう。5月5日にみんなで東京ウオルランド花火大会を見に行こうと思ったんじゃない。久々に朱雀と花火を見たいと思っただけ。チケットも全員分有るし息抜きにどうじゃ？」

「馬鹿かお前は。こんな状況に息抜きなんかしてられるかよ。行くのならお前らだけで行け」

「そんな固いことを言うな朱雀よ。たまには良からう？」

「悪いが当日、俺は部屋に残る。この調べ物を済ませてからじゃないと、休む気になれん」

「相変わらず強情じゃの。良い良い。仕事ならば仕方ないからの。」

ムリには誘わん」

ちつ、と露骨な舌打ちを響かせて楓は部屋を去って行った。

彩に教えられた情報を頼りに調べを進めていくとある事件が浮かび上がってきた。

19世紀初頭、イギリス全土を震撼させた『連続娼婦殺人事件』。

被害者はほとんど女性という、ロンドンを恐怖のどん底にたたき落とした最悪な殺人事件だ。

その犯人は不明で、斬り裂き魔ジャック・ザ・リッパーと呼ばれた伝説の殺人鬼。

未だに謎の多い事件だ。

今回の事件は、その殺人事件とほぼ同じように、負傷したのは大半がか弱い（武偵である以上そうは言えないが）女子である。

いろいろな俗説に因ると、斬り裂き魔はかなりの熟練者であり、普通に人間を解体できる技術を持っていたと言われている。

心に何かが引つ掛かっているみたいなのだが、それが何か未だに掴めていない状況だった。

何なんだろう、この嫌な胸騒ぎは。

「……………。目眩がする。さすがに二日も寝てないと辛いかな。明日からゴールデンウィークだし、今日はもう寝ようかな」

目を抑え、フラフラと立ち上がるとそのまま後ろにあったベッドに横たわる。

ダメだ……………身体が重い……………。
怠い。

あと少しでもディスプレイと睨めっこしていたら、間違いなく卒倒していたな。

無茶し過ぎた。

っーか、もう10時過ぎたのか。

この一週間、嘘みたいに奴の活動が止まった。

まるで、こちら側の様子を窺ってるかのように、ピタリと無くなった。

相変わらず、奴や魔剣のターゲットになっている白雪ちゃんや舞に変わったところは何一つ無い。

寧ろ、俺達と一緒に生活することを心底楽しんでるようだ。

……………ちよつと待て。

魔剣のターゲットは白雪と舞っていうなら分からなくも無いが、凄腕の殺人鬼のターゲットは一体誰なんだ？

女子生徒を狙う理由はともかく、何故、彩を襲った？

そもそも女子生徒は関係無いのか？

その真意が全く分からん。

ボスツと布団を右手による裏拳で殴り付けると、静かに天井を眺める。

まあ、どっちにしるまだ警戒しておいた方がいいだろう。

いつ襲われても対応できるようにな。

「花火大会……か」

楓に誘われて断った事をちよつと後悔していた。そつえば、まだ宮城に住んでいた頃。

兄の目を盗んで夜な夜な家を抜け出し、隣近所の武家屋敷に住んでいた楓や彩を連れて、川開き祭の花火大会を見に行ったことがあつたつけ。

そついう素行の悪いつていうか、不良チツクな嫌う楓だつたけど、そんな時はちゃんとついて来てくれたんだよな。

花火を充分に満喫して帰つたら、兄にこつぴどく叱られたよつな記憶もある。

小さい頃はやんちゃだつたな俺。

ノスタルジツクな気分浸りながら、好きなアーティストの曲を鼻歌で歌つてみる。

コンコン。

すると、ドアをノツクする音が聞こえた。

入つて良いよと声を掛けると、ドアが角度45度ほどゆつくりと開く。

「あ。ご、ごめんなさい。ごめんなさい。まさか起こしちゃつた？」

中に入つて来たのは、愛らしいハート柄が散りばめられたピンク色のパジャマを着た舞だつた。

何やら手をモジモジとさせながら、済まなそつに俯く。

「どうしたんだ？こんな時間に？」

「あのっ。ちよつと言つたの恥ずかしいんだけど……／＼」

「ん？」

「こ、ここ怖い夢を見ちゃって…… / / なかなか寝付けられないから、
そそ添い寝しても良いかなって」

「……何言ってるんだお前？」

とんちんかんな事を言う舞に呆れたように言う俺。

滅多にとんちんかんな事を言わない舞を見て俺は驚いた。

舞はそれに気付かないのか、なんか変に焦り出す。

「え、あ、ごめんなさいっ！！お気に召さないのであれば引き返す
んで……その、あの……」

「……？」

「こ、今晚だけ。わ、私を、だ、抱いてくださいっ！！」

「！？！？！？」

かああ、と耳まで真っ赤になりながら言う舞。

それを聞いた俺はまるで石膏像のように硬直する。

とんでもない事を切り出した舞に、逆にこっちがとても恥ずかしく
なる。

な、なんだって！？

「バ、バカヤロー！！お、お前正気か！！」

「はいっ！！こんな私で良ければ愛しの朱雀の傍らにつ / /」

「ふ、ふざけんな / / こんな話を聞かれたら変な誤解を招くだろうっ

！！ / / それにだな、この家にはお前の他にも訳の分からん女の子
がいる！！ / / ただでさえ一触即発状態なのに勘違いされたら俺は
袋だたきだっ！！ / /」

「だって私、朱雀の事しか考えれないんだもんっ！！朱雀が好きす
ぎて頭がおかしくなってるんだもんっ！！だから今晚だけ / /」

「こ、断るっ！！こんな事で俺の人生に幕を下ろさせるわけにはい

かないっ！！お願いだから諦めてくれ」

と言い聞かせるも頑としてその場を動かない舞。

こんなところをアリアに見られたら、十中八九、体中に風穴を開けられちまう！！

はたまた楓だったら、俺を殺したり、取り返しのつかない事を仕出かしそうだ。

「か、かか覚悟は出来てます！！」

そう言つと半泣きしつつ、舞はパジャマのボタンを外し始めた。

まずいますまずいます！！

脱がれてなるものかっ！！

俺は舞のパジャマの襟やらなんやらを必死で押さえる。

「ちょ、おま、ここでパジャマ脱ぐな！！」

「好きな朱雀だから裸見られても恥ずかしくくないですっ！！脱がせて下さいっ！！」

「アホっ！！お願いだから脱ぐなよ！！俺はまだ死にたくな

」

ガチャン。

と、ゆっくりとドアが開く。

俺の全身の血液が、サーツと引いていくのが分かった。

はい、俺死んだ。

「ちょ、アンタ達！！五月蠅いと思って来てみれば何やってんのよ

！！」

入って来るや否や子ライオンが吠える。

俺はもう誤解を解く事で頭が一杯になっていた。

「ち、違っただアリア!!!これには深いわけが!!!話せば分かるっ!!!」

「何が話せば分かるよ!!!バカスザクっ!!!ド変態っ!!!強狼魔っ!!!ロリコンっ!!!」

などなど叫びながらアリアは両手に握る黒銀のガバを俺に目掛けてバスバスと乱射する。

俺は慌てて立ち上がり、タップダンスを踊るかのように床を穿つ弾丸を躲す。

バカヤロー!!!

こちらら生身だぞ!!!

着弾したら一大事だ!!!

……あのさ、一ついいか?

最後の言葉は俺の事じゃないよな?

「見損なっただわバカスザクっ!!!一度もならず!!!二度も舞をっ!!!死ねっ!!!死ねっ!!!この変態っ!!!ウジ虫っ!!!バクテリアっ!!!」

半ば顔面を真っ赤に染め、バリバリと両手に握る黒銀のガバを唸らせるアリア。

こんな最悪な状況にも関わらず、俺の頭は即座にアリアを敵と認識し、何故か排除するという答を導き出した。ゆっくりと意識が闇の淵へ落ち込み始める。

降り注ぐ弾丸の雨をもるともせず、銃口の角度を見極めて無意識に、縫うように駆け出す。

が。

「止めてアリア！！負け惜しみは止めて！！」

と、パジャマの乱れを直しつつ舞は素早くアリアの懐に入ると、ガバを握る両手を掴み。スバーン！！

と一本背負いを見事に決める。

「みぎゃ！！！！」

踏み付けられた猫のような変な悲鳴を上げて床にたたき付けられるアリア。

それを見た瞬間、俺は闇の淵から落ち込み始めた意識を取り戻す。床にたたき付けられたアリアは、ピンク色の眉を潜めて舞を見上げる。

「な、な、な、何でアタシが負け惜しみなのよ！！」

犬歯を剥いたアリアが立ち上がりつつ舞に食いかかる。

「朱雀は無理矢理してたんじゃないの！！合意の上だったの！！」

「ご、合意？」

「そうなの！！あれは私が脱ごうとしてただけで！！朱雀は悪くないの！！」

「脱ぐって、あああああんたら一体何をしようとしてたのよ！！」

ぼふぼふぼふ、とさらに顔面を真っ赤に染めるアリア。

必死に押さえ付けようとする舞を振りほどき、再びガバの銃口を俺に向けた時だった。

ピュッ！！

風の如く、目にも留まらぬ早さでアリアの目の前に現れた俺は、両手に握るガバのスライドを握り、ガチャンと一瞬でそれを外す。

「な!？」

「悪いなアリア。しばらくスライド（これ）は俺が預かる。だから今日はおとなしく部屋に戻ってくれ」

「ふざけないで!! もともとはアンタらがこんなヤバい事してるのが悪いんでしょ!! 銃が使えなくとも武器ならまだあ」

背中に両手を回し、日本刀を抜き放つが俺がガバのスライドでそれを受け止めようとしたのでアリアは動きを止めた。

「あれは事故だ。これ、返すからおとなしく部屋に戻ってくれ」

「……次、見付けたらただじゃおかないわよ? 風穴祭にしてあげる」

「分かった。だったら舞も連れていけ。俺は疲れた。もう寝る」

と相変わらずぶっきらぼうに言うと、俺はベッドに潜り込む。

アリアと舞は言われた通りに、朱雀の部屋を後にした。

最近、どうも調子がおかしい。

頭ではそう思ってはいいのに、勝手に身体が動く。

それは良い意味ではなく、悪い意味で。

昨夜の一件でアリアと対峙して黒銀のガバの銃口を向けられた時、俺の頭は無意識に彼女を“敵”として判断していた。

もしかしたら、悪夢の中で見た俺のようにアリアを殺そうとしていたのだろう。

その寸前で、意識が戻り、なんとかスライドを外すだけに留めた。

最近の寝不足が祟ったのか？

いや、そんなはずはない。

調べ事をして寝ないなんて武偵の生活の中では日常茶飯事。

かれこれ5年間もそんな生活をしてきたので、慣れていてもおかしくはない。

しかし、あの悪夢を見たその日から俺の調子が狂い始めていた。

あの時の、羅列させられた死から逃げていた言葉。

死ニタクナイ死ニタクナイ。

ゆっくりと自分の手の平を見る。

何だったんだろうあれは。

まさか疲れてるのか俺。

「おはよう朱雀。はい、朝ごはん」

「サンキュ」

「お、今日はスクランブルエッグにトーストか」

「何か問題でも？」

余計な事を言つた楓を睨む舞。

白雪は台所で調理中。

静かにに俺の隣へ座り、トーストをはむはむと食べているアリア。
キンジはキンジで、まだ起きて来ない。

「とうか、今日からゴールデンウィークね。みんな何か予定はあるの？アタシは何も無いわね」

「私も無いです」

「左に同じです」

「ふふふ。決まっておろう。わしは三日間、朱雀とデーぐふおっ！
？」

この条件下でそれを言つたら終わりだよ楓さん？

このKY野郎め。

朝っぱらからためえらの喧嘩に付き合つてられるか。

そう毒づく俺の左肘が楓の右脇腹を突く。

楓は苦しそうに右脇腹を抑えて俯く。

俺は何もなかったようにトーストを一口かじる。

「そう。別に気にして無いけど。それでスザク、アンタは？」

「俺か？俺も特に無いが……」

「んじゃ、アタシについて来て。今日一日、アタシと過ごして貰う
わね」

「はあ？厭だぞ俺は。だいたい何で俺がお前と」

「五月蠅い！！アンタに否定権ははいの！！奴隷の分際で、アタシ
の言うことが聞けないっての？」

「ちよつと待てえい！！いくら何でもそれは卑怯だぞアリア！！し
かも、我が殿方を下僕扱いしおつて！！恥としれ無礼者め！！」

「抜け駆けも良いところねアリア。私から朱雀だけを引き離そうな

んで、百年早い事を思い知らせてあげるわ」

どんよりとした気まずい空気が漂う。

俺は、ゴンとテーブルに頭を打つ。

何だよ、せっかくの休みなのに。

たった一言でこんな状態に早変わりしてしまう。

戦場か、此処は？

三怪獣娘がいがみ合う中、さっさとトーストを平らげて俺は部屋を出た。

某ファーストフード店。

言われもなくそこはマクダったりする。

レジでメガコーラとハンバーガーのセットをオーダーすると、人目が付き難そうなテーブルを探して座る。

運悪く知り合いとか、例に倣って舞や楓に見つかったら尋問じゃ済まなくなる。

部屋でゆっくりとゴールデンウィークを過ごせないと悟った俺は、

此処で“ある人物”と待ち合わせをしていた。

ある人物とは、『レキ』だ。

はたしてそれが本名なのか、ちょっと怪しいところ。

狙撃科Sランクの武偵として有名ならしい。

ちまたでは崇拜する変態もいるとか。

知らないところだとかかなり人気があるらしいが、俺は別に興味はない。

まるでロボットのような、無口無表情の不思議っ娘。

話したのはついこの間のバスジャック以来だが、実はあれからしばらくメール程度で連絡を取り合っていたりする。仲は言い訳では無いが、アリア達と比べれば一目瞭然だと思っ。ま、喋ん無いし、何を考えてるかも分からん。今回の件で、協力して貰うために呼んだだけなのだ。

「よう。待ってたぜ」

「……………」

無表情でコクリと頷くレキ。

相変わらず喋ん無いな、お前と俺は笑う。

「んで、見ての通り部屋に居たら何されるか分からんからな。逃げて来たところだ」

「……………そうですか」

「お、珍しく喋るな。呼んだ理由は分かるよな？」

「……………。(無言で頷く)」

「遠隔からの舞や白雪の監視をお願いしたい。アリアからも頼まれてるらしいが、何せ対象が二人も居るからな。上手い事フォローに回れなくて。最近、切羽詰まってるし。頼まれて大丈夫か？」

「……………分かりました」

「すまないな。厄介な事に巻き込んでしまった」

「……………いえ。貴方の頼みなら仕方ありません」

と抑揚の無い台詞を無表情で言うレキ。

こんなに話すレキを見たのは初めてだと俺は思う。

まあ、コミュニケーション取れるくらいが一番良いさ。

「俺の頼みは以上だ。よろしく頼むよ」

「……………分かりました」

「……………後、帰っていいぞ？いつまでも居られたらマズいからさ」
「……………少しだけ、貴方と話がしたい」
「ああ。そう」

俺はちよつと驚きつつも、レキの頼みを聞いてあげようか。

無駄な話し合いも終わった事だし、こつちの頼みを聞いてもらつて
る以上、聞いてあげないわけにはいかない。

「……………んで、話とは？」

「……………前からずつと思つていたのですが、何故、あんなに凄い拳銃
の技術を身につけておきながら、狙撃科へ入らなかつたのですか？」

「ごもつとも。確かにあれだけの技術を持つていれば狙撃科でも問
題はないだろうな。でも、ただ単に俺はジツとしてるのが苦手だし、
まず持つて拳銃だけを使つてるわけじゃないからね。取り分け、ち
よこまか動ける強襲科に入ったわけ」

「……………」
「どう？理解出来たかい？」

コクコクと納得したように頷くレキ。

気が付いたら俺はメガコーラを飲み終えていた。

「ところで何でそんな質問するんだい？」

「……………貴方に興味があるから」

「あ、そうですね」

突拍子も無いことを言われて反応に困る俺。

だいたい、こんな怪物みたいな野郎のどこに興味を持ったんだ？

まあ、深い事は気にしない気にしない。

つて凄い気になる。

ドちくしょつめー！

どこに興味を持っているか聞こうと思ったのだが、聞いたら戻れなくなるような気がして聞くのを躊躇った。

「そうか。んじゃ、俺は用事があるからまた今度な」

「……………朱雀さん」

「ん？」

「……………今日は嫌な風が吹いている。出来れば一人で居る時を避けたほうがいいです」

と言うレキを見て、俺は大丈夫と言いながらゆっくりと立ち上がり、店を後にした。

さてと、今日はまだ帰るつもりもないし、^{アイツ}彩の見舞いにも行くことがな。

あれから一週間は経ったし、傷口もちゃんと塞がってるだろう。

なんて考えながら、人込みの中を掻き分けて行った。

その日の夕方。

彩の見舞い帰り。

すぐにでも家に帰る気がなかったのどこと無く人工島の沿岸の、波打際に一人で佇んでみる。

俺は夕日に赤く染まる空と波を、静かに見ている。

はあ、何故か落ち着く。

故郷の海を思い出すからか？

まだあつちに居た頃、兄と一緒に近くの海岸沿いへ連れて行って貰っていたな。

夏になれば海水浴……か。

今年で最後の夏休みになるな。

みんなで海水浴しながらバーベキューってのは良いかも知れないし。

……。

アリアや楓の水着姿ならまだ愛らしい小学生みたいで大丈夫だが、

その他諸々の水着姿は。

いや、考えるのは止めておこう。

考えただけで失血死しかねん、あれは。

特に舞は要注意だ。

あの豊満な胸に引き締まった魅力的な体。

清楚で優しい面影とは裏腹に、グラビアアイドルみたいなダイナ

マイトボディに水着はもはや反則技。

ビキニなんて着せたら、その辺の男なら一撃で悩殺できるだろう。

無論、俺なんてすぐさま病院行きだな。

うん、納得。

段差になっている場所に腰を下ろし、そんな事を考えていたら、途端に恥ずかしくなって自分の頬をぶん殴る。

ばきい！！！！！！！！！！

……つてえ……加減すりゃよかった……

スリスリと殴った頬を擦りながら思う。

つか、自分で自分を殴って後悔する俺って一体何なんだ？

「すゝざゝくつ！！」

「どおうっ！？な、なんだ！？」

「なんだって何よ？私よ私！！」

「何だよ舞……驚かすな」

噂をすればなんとやら。

よりによってこのタイミングで出くわすとはな。

両手を俺の首に回し、勢いよく抱き着いて来た舞。

抱き着かれた瞬間、あわよくば俺は段差から足を踏み外さずに済んだが、下手すれば海に真つ逆さまだったぞ！！

びっくりしてバクバクと鼓動を上げる心臓を落ち着かせようと、俺は深く、深く深呼吸をする。

「全く……心臓に悪いな。お前」

一通り落ち着いたところでそう言う俺。

それを聞いた舞は済まなそうに頭を下げ謝る。

「ごめんなさい！まさかそんなにびっくりするとは思わなかったから」

「わかったよ。だから今度からは止めてくれよな？」

「うん。わかった」

鮮やかなクリーム色のストレートヘアを海風に靡かせ、いつものように明るい笑顔で言う舞。

武偵高の臙脂色のスカートとセーラー服は変わりはない。

だけど、後ろを振り返った俺はすぐに舞の異変に気付いた。

舞は、そんなに身長は高くない。

あつたとしても、俺よりもちよつと低いはず。

なのに、目の前に立つ舞は俺よりも“大きかった”。

それに、男を魅力する胸は明らかにいつも見ている舞とは違って小さい。

俺はゆっくりと左手で右胸のホルダーから新調したGLOCK17を取り出して、その銃口を偽者に静かに向けた。

「な！？何の真似よ！！朱雀！！」

「まだ白を切る気か？この偽者め」

「！？」

「俺の目はごまかせねえぞ。舞の身体はそんなにスレンダーじゃねえ。まず舞は俺よりも身長が低い。声と顔を真似ても容姿がそれだけ違えばすぐにバレる」

「……。ちっ。バレバレか。さすがは我が主“ダンテ”の義弟だ。

こんなことじゃすぐに見透かされて当然か」

と、舞を模した偽者は薄ら笑いを浮かべながら、顔のマスクをベリベリと剥がす。

そこから現れたのは赤い髪の女だった。

とても女の子とは思えない凜々しい顔に、キリツと吊り上がった目尻。

臙腑の奥まで見透かされそうな深紅の瞳。

狂気に満ちたその表情はまさに獣だ。

そしてある言葉が、俺の脳裏を過ぎる。

赤い髪をした疾風の殺人鬼。

SSRの後輩達や相棒の彩に重傷を負わせ、白雪や舞を誘拐しようとしている輩。

詳しくは分からないが、恐らくそうだろうな。
こいつか……例の武偵殺し未遂犯。

「お前か？……例の武偵殺し未遂犯は？」

「アンタに名乗る名前は、はなっからねえよ。まあ、イ・ウーの連中は『ジル・ザ・リッパー四世』って呼ばれてたくらいかな？ 鳳凰院朱雀さん？ こっから楽しみなところなんだが、悪いけどアンタと戦うつもりは毛頭ない。分かったら拳銃を下ろしてくれ」

「ふん。俺が嫌だと言ったら？ お前は俺を殺すのか？」

「……ほほう。言うことが聞けないみたいだな。ならばその言葉通り、オレはアンタを殺してやるさ」

ニマリと不気味な笑いを浮かべ、口元を緩めるジル。
まさか、な。

あの殺人鬼に、孫娘がいたなんて予想できなかった。
しかし、今は驚いている場合じゃない。

ジルはゆっくりと腰に手を当てて、ククリ刀と呼ばれる大振りな刃物を出す。

あれか、彩の腹を刈つ捌いた刃物っていうは。
そして、ジルの真紅の瞳に殺意が灯り、ゆっくりとククリ刀を構えた。

俺を殺すと身構えたジルを見たその瞬間、俺はGLOCK17のトリガーを引いた。

ドンドン！！

銃口から火が吹き上がり、硝煙が舞い上がる。

ジルは目にも留まらぬ速さで身を翻し、飛来する弾丸を回避する。

銃音は二発だが、実際に撃ったのはその倍だった。

フォース・クイックドロウ

「四連速射か……並大抵の武偵じゃなかなか使えん代物だ。だが甘い」

ヒュン！！

ジルは再び高速で動くと、あっという間に間合いを詰めて俺の懐に突っ込んできた。

くっ……撃つ前に近接格闘戦に持ち込む気か！？

分厚い刃物が、俺の頭目掛けて振り抜かれる。

俺は即座にGLOCK17を右手に握り換え、左側腰部のホルダーにしまっているロッドを三本、左手の指に挟んで取り出す。

ガキンツ！！

ロッドを顔の前に出し、振り抜かれるククリ刀の刃を受け止める。

火花を散らし、ククリ刀とロッドはぶつかり合う。

「今、イ・ウーって言ったな？ だったらお前を捕まえればアリアの母ちゃんの刑が軽くなるんだったよな……」

ぎりぎりと鏝ぜり合いをし、ジツと睨み合う二人。

「他人の事を考えてる余裕があるとは、オレも嘗められたもんだな。だが残念、オレの武器はまだ他にもある」

ジルは武偵高の制服を強引に脱ぐと、黒いライダースーツに、同色の外套を着た姿になる。

その次の瞬間だった。

「がは！？」

赤い液体が、ビシャビシャとアスファルトに滴り落ちる。

く　そ。

カシャン、と左手に握っていたGLOCK17を手放し、俺はゆっくりと胸を触る。

ワイシャツが赤く滲み、胸が深く切れていた。
ジンジンと身体が熱く火照り、呼吸がしずらくなっていく。

「アハ、アハハハハ！！ざまあねえなあ朱雀さんよ！！見えたか？
見えたか？見えるわけがねえよなあ！！」

と狂喜に満ちた笑い声を上げながら、俺を見るジル。

俺はゆっくりと呼吸を整えながら、右側腰部のホルダーから取り出し、手に挟むようにロッドを握る。

なんだ？

あの一瞬、俺に何が起きた？

だが、まだ俺は戦える。

死ニタクナイ。

突如、混乱しつつある脳裏を過ぎる暗示。
その言葉に俺の身体は正直に反応を示す。

死ニタクナイ死ニタクナイ死ニタクナイ死ニタクナイ！！

「む？てつきり一撃で仕留めたと思ったらまだ生きてたか。運の良
い奴だな全く」

「簡単に俺を殺すな。その辺の柔な生き物と一緒にするのか？この
程度で勝った気ていると、お前が死ぬぞ？」

「はったりはよ！？」

バシユシユ！！

まるで弾丸の如く速さでジルの顔面に飛来するロッド。

何とか身を翻してロッドを躲したが、二段目の攻撃がジルを待っていた。

弾丸の如く速さで飛来するロツドの背後へつくように、俺がロツドと同じ速さでジルの懐へ飛び込む。

そのスピードにジルは驚愕した。

上手く懐に入り込んだジルを俺は思い切り蹴飛ばす。

ドカツ！！

「ぐー!?」

思い切り蹴飛ばされたジルは、足を踏み外してそのまま海の中に落ちていった。

「ハア　ハア　ぐううっ!!」

あまりの痛みに胸を押さえた瞬間。

意識朦朧と、バランスを崩した俺はゆっくりと海に落ちていった。

その時、俺の意識は既に闇の中だった。

キンジは疲れていた。

一つの部屋に大人数で住むのもそうだが、何よりも相手は女の子だ。目のやりどころによってはコッチが嫌でも強制的にヒスってしまう。そんな恐怖から逃げるように、俺は部屋から飛び出して海岸沿いを歩いていた。

まあ、朱雀先輩が居ない以上、いつもの如く小判鮫のようにアリアはついて来るし、それを嫌がるように白雪もついて来たのだが。

「ねえキンジ？もう夕方だし、早く帰ってご飯食べましょ？」

「そつよキンちゃん。早く帰ろうよ」

「……いや、俺はもう少し外に居るよ。夜風に当たるのも悪くはない。腹が減ってるなら先に行ってくれ二人とも」

「キンジが言うなら仕方ないわね。帰るわよ白雪」

「分かった。ご飯作って待ってるから早く帰ってきてね」

「ああ」

そつぶつきらぼうに言う俺を尻目に、二人は帰って行った。

ボディーガードの仕事もそうだが、アリアが居るから白雪は大丈夫だろう。

たまにはこうして、夜の散歩も悪くはないな。

なんて考えつつ、綺麗な夜景に見とれながら歩いていた。

「ん……何だ？この黒いシミは？」

ふと視線を下ろした時、海岸沿いのコンクリートの上に、黒いシミのようなモノを見つけた。

ライトも何も無いので、ハッキリとは見えないが、ゆっくりと屈んで触ってみる。

それは微かに、血の臭いがした。

……………血!?

まさか、これは血か!?

……………一体誰が?

ゆっくりと立ち上がり、辺りを見回す。

暗がりには隠れるように、見覚えのある拳銃が落ちていた。

「GLOCK17!?まさか、朱雀先輩の……………」

俺は急いで弾劄^{マガジン}を取り外し、残弾を確認する。

アタッチメント……………?

確か、GLOCK17ならば9ミリパラベム弾が17発入る。

それにアタッチメントを加えてさらに1発増える。

とすると、全部で18発。

さらにチャンパーに1発入れていると朱雀先輩自身が言っていたから合計19発。

しかし、弾劄の残っていた弾丸を調べると15発も余っていた。

つまり、先輩は4発しか撃っていないと言うことだ。

だが、遮蔽物がなく見晴らしが良い場所でドンパチしてれば誰か気が付くはず。

ヒスって無い俺の頭をフル稼働させて推理する。

だが、血が凝固してなく生暖かいとなるとまだ時間が経って間もないだろう。

それにこの血の量だと、おそらく致命傷のはずだ。

先輩は!?!先輩はどこに!?!

俺は頻りに辺りを見回すが、どこにも先輩らしき人影は見当たらない。

再び視線を下ろすと……………。

「……。血が点々と海に続いている……。まさか海に？」

と、海岸から身を乗り出すが、あるのは静かに揺れる波だけだった。俺はすぐに携帯電話を取り出してアリアの番号へ発信する。

『もしもし？いい加減早く帰ってきなさいよバカキンジ』

「今、それどころじゃないぞアリア」

『？』

「朱雀先輩が、何者かに殺られた」

『え？……ちょっと何を言ってるのよアンタは！？スザクが殺されるわけが』

「海岸沿いでGLOCK17と複数の血痕を見つけた。血痕は点々と海に続いていた。おそらくは犯人と相打ちになった可能性がある」

『……分かったわ。鑑識科の理恵をそっちに向かわせる。アタシ達も行くからそこから一步も動かないで！！良いわね！！』

「分かってる。早く来い」

そう言うと俺は通話を切った。

くそっ……。こんな事ってありかよ……。

俺は悔し紛れに、握り締めた拳をコンクリートにたたき付けた。

その日の夜。

結局、行方知らずになった朱雀先輩は部屋に帰って来なかった。とりあえず、俺達はその周辺を隈なく探したのだが、見つかったのはあの拳銃『GLOCK 17』と血痕だけ。鑑識科の理恵先輩の話だとあの拳銃から出た指紋は朱雀先輩の物と一致したらしい。

他の手がかりは何も見つからなかった。

朱雀先輩が行方不明という訃報を聞いた楓先輩と舞先輩は、キッチンのテーブルの周りに並べられた椅子に座って酷く落ち込んでいた。白雪はもちろん、意外にも1番スザクの事を気にかけていたアリアも。

どんよりと流れる気まずい雰囲気。

何よりも、第1発見者の俺がびつくりしているよ。

その時、俺のもとに着信が来た。

誰だろう、一体。

サブディスプレイに映されたのは見知らぬ電話番号だった。

フリックを開け、通話ボタンを押して耳にスピーカーを当てる。

「もしもし？」

『おう。遠山キンジか？』

「！？」

あまりにもびつくりして、スピーカーから耳を離す。聞き覚えのある低い声。

まさか、この声は……。

「そうですね、まさか貴方は……」

『随分とまあ畏まっちゃって。俺は夜桜彩だ。この番号登録しておけ。』

「彩さん！？でも、どうして電話なんか」

『決まってるだろう？朱雀を探すのを手伝ってやる』

「待つて下さい！！まだ彩さんは入院中じゃ……」

『うるせえ。状況は全部理恵から聞いた。俺のダチが死にかけてんだろ。黙って放って置けるほど俺は白状な奴じゃねえんだよな。とりあえず俺のことは心配無用。それより今どこにいる？』

「今？今は朱雀先輩の家に集まっています」

『分かった。今から行く。他の皆によろしくな』

ブツッ。

と電話が切れた。

俺は携帯電話のスピーカーから耳を離すとアリアが駆け寄ってきた。

「だれだったの！！キンジ！！」

「彩先輩からだ。捜査に協力するって」

「彩と言えば今入院中じゃの……」

「まさか！？病院から抜け出して来る気じゃ……」

「まあ、とりあえず落ち着いてください」

と俺は騒然とする四人を落ち着かせる。

そういえば彩先輩って、夜になると人格が変わるとかって言う噂を聞いたのだが。

詳しい事は分からないから、触れないでおこう。

ゆっくりとリビングのソファに腰を下ろして、上の空の俺。

アリアよりも高く、もしかしたらヒスってる俺でさえ足元にも及ばない戦闘力を有する朱雀先輩がやられるなんて考えた事がなかった。なんか凄い動揺してるな俺。

心臓が脈打つのがいつもより早い気がする。

ピンポ　　ン。

客が来たことを知らせるベル音がリビングに鳴り響く。

上の空だった俺はすぐに玄関に向かっていく。

ガチャリ。

チェーンロックを外してドアを開ける。

そこには、仁平に身を包んだ彩が立っていた。

いつものような脳天気で明るいイメージとは異なり、今の彩は落ち着きがある静かなイメージだ。

ゆっくりと俺に歩み寄ると、ワシヤツと頭を掴み、彩はこう言った。

「ここまで良くやったな。頑張った。感謝するよキンジ。後の事は俺にまかせろ」

その言葉に、なぜか俺は安心したような気がした。

そういつて彩は部屋に入って行った。

「彩!？」

「夜桜くん!？」

「待たせたな二人とも。なあに病院から抜け出すってなるとどうも骨が折れる。傷口に麻酔でも打たなきゃ激しい動きもできんしな。

して、朱雀の現パートナーはどいつだ？」

「アタシよ」

ズイツと踏ん反り返りながら彩の前に現れたアリア。
その瞬間、彩の目付きが変わった。
身の毛もよだつ程の殺気が、辺りに漂い始める。

「ほう。相方が死にかけてるのによくもまあそんな態度を取れるな。
この餓鬼が」

「!?!」

ズガッ!!

アリアの顔面をスレスレで彩の拳打が通過し、壁に減り込む。
アリアは一瞬の出来事だったので、身動き一つ取れずに突っ立っていた。

「てめえ、相方をなんだと思ってやがる？都合よいたただの下僕か？」
「……………」

「なんか言えよ？朱雀の相方なんだろう？」

「ア、アタシは……………」

「けっ。そんな感覚で朱雀あいつの相方だあ？全く反吐が出るぜ」

彩の気迫に圧されてアリアは言葉も出せないでいる。

「なあアリア。お前の時もそうだが、朱雀が何で他の奴らとコンビ
を組まないか分かるか？」

「……………分からないわ」

「相方に迷惑を掛けたくないからだよ。それに人一倍、仲間思いだ
から仲間を傷付けられたくないんだ。あいつは。だから自ら孤独と
言うことを選んだ」

誰かを守るために、誰かが傷つく。
誰かを守るために、自分が傷つく。

誰かを生かすために、自分の命さえ捨てる事を省みない。
故に、鳳凰院朱雀は“孤独”という辛く厳しい生き方を選んだ。

「昔、俺があいつの相方だった時。任務遂行中に奇襲を掛けられ、俺を庇って一度死にかけたんだよ。自分の身を呈してな。あいつの胸の十字傷はその時のだ。それでも俺のせいで死にかけたのに、あいつは俺になつて言ったと思う？」

「……………」

「生きててよかった」だぞ。自分が死にそうになってまで、相方の事を考えてんだぞあいつは！！そんであのバスジャック事件の時にまた死にかけたんだ！！そんな奴を下僕として使つて来たのかお前は！？」

「違うっ！！アタシは……………違う！！」

「どこがだよ。てめえは朱雀のパートナーにははなつから向いて無いんだ。“パートナー失格”だな」

冷めたような冷たい表情の彩から放たれた言葉の矢が、深くアリアを貫いたように見えた。

俯いたまま、もうダッシュでリビングを飛び出して行った。

突き当てた右手の拳を、ゆっくりと壁から離すと彩はため息をつく。

「ちよつと彩先輩。今のはいくら何でも言い過ぎじゃ無いでしょうか？」

「知らん。俺からアリアに言いたい事を言つたまでだ」

シン、と静まり返るリビング。

楓先輩は俯き、舞先輩は驚きを隠せないでいる。

白雪は白雪で、フローリングの上で正座して静かにしていた。

ゆっくりとリビングのソファに腰を下ろす彩だが、傷口が痛むのか時折、苦しそうに顔を歪ませている。

「ところで彩。ホントに傷口は大丈夫かの？」

「ああ。無駄に医療用の麻酔もすくねて来たから当分大丈夫だ。無理に動かなければ傷口が開く心配もない」

「夜桜くん、すくねて来たってどういう意味？」

「ん？えーつとだな……」

と困ったように頭を掻きながら考える彩。

あんだ、麻酔すくねて来るって……。

どういふ神経してんだよ。

「とりあえず彩が協力するとなれば鬼に金棒じゃ」

「言ってくれるね。まあ東にも協力の依頼をしてきたし、この怪我の治療は理恵に任せる事にした」

「はへ？怪我と言ったら救護科のソフィアちゃんに頼めば？」

「止めてくれ。アイツに任せたら傷口が壊死しかねん」

ソフィアと聞いてゾツとしたらしく、身震いしながら言う彩。

確か、ソフィアって言えば情報科一年の後輩・アランの双子の姉らしい。

傷口が壊死するって……どんな治療するんだらうな。なんかちよつと気になる。

それに、また気になる単語が出てきた。

『東』

おそらくは人の名前だろう。

俺はそれが気になるので彩に聞いてみた。

「先輩？東って誰ですか？」

「東？ああ、東あすま九龍くじゅうの事だ。やつは俺の従兄弟でね。同い年だ」

東 九龍……！？

聞いたことがある。

東北地方で唯一、海外の武偵局からオファーが殺到したという、諜報科Sランクの武偵。

破壊工作から潜入任務、ありとあらゆる諜報活動を極めた凄腕の男。その鮮やかなる手口はまさに一流のスパイに匹敵すると言われている。

確か、まだ東北武偵高に在学中だとも聞いた。

小耳に挟んだ事はあったが、そんな人物の従兄弟なのかアンタは！！内心、驚いている俺の気も知れず、彩はソファーに深く腰を沈ませる。

「作業は明日からにしよう皆。さすがに何も手掛かりがなきゃ動いても無駄だからな。もう既に東にも動いて貰ってるし。それに麻酔が効き過ぎたのか、やたらと眠い」

ゴシゴシと瞼を擦る彩。

彩の言葉に共感したのか、三人は部屋に行った。

確かにそうだな。

情報がなきゃ、動く事すら難しい。

今日は寝た方がいいかも知れない。

そう思った俺は、ゆっくりと踵を返して寝室へ向かった。

… 14 (前書き)

毎度御愛読ありがとうございます!!

こここのところ、寝る間を惜しんで必死に更新を続け、一日のアクセス数一万人を目指してる作者のKOH-SAWAGURAです!!
つきましては『第2回オリキャラ人気投票&イメージするオリキャラの声優は誰?投票会』を行いたいと思い、前書きにてご報告させていただきますました

第2回と言うことでたくさんの方に投票を頂きたいです

気軽に参加して頂けると作者は犬のように駆け回って喜びます

ちなみに自分の中では朱雀の声優は断トツで諏訪部順一さんが候補、彩は山口勝平さんが候補なんです。が如何ですかね?

こうすると何だかキャラクターがイメージしやすいですよ

皆さんの意見も聞きたいと思います!!

どしどし参加してください

よろしく願います

では、続きをどうぞ

ピチヨン……ピチヨン……。

遠くの方から、微かに水が滴る音が聞こえる。

ゆっくりと瞼を開けるが、ぼやけてちゃんと前が見えない。

……頭痛と、目眩が酷い。

此処は何処だ……？

それよりも、もっと驚く事に気が付いた。

俺は　生きてるのか。

そう考えた途端、俺の意識がハッキリと蘇る。

周りの様子を見るため、頭を上げようと地面に手を着ける　？

ガチャガチャ。

ガチャガチャガチャガチャ。

ちっ、手錠か？

……後ろで両手を塞がれてやがる。

足も動かそうとするが、同じように足にも手錠を掛けられていた。

くそ、動けんっ……。

「お？起きた見たいだな。朱雀さんよ」

「だ、誰だっ？」

「ジル・ザ・リップー四世だ。いい加減に覚えてくれよ。なあ？」

と、怪しげに笑うとジルは俺の顎を優しく掴んだ。

ジル・ザ・リップー　。

狂暴そうな名前とは裏腹に、その容姿は今にも枯れそうな花のように細くしなやかだった。

色白でキメ細やかな肌に赤く栄える赤毛のストレートヘア。

意外と綺麗な顔だな、ってそんな事を考えてる場合かっ！！

無理矢理、ジルの手を弾くと俺はジルを睨みつけた。

「俺に触るなっ!!! 此処は何処だ!?!」

「まあそう焦るなよ。傷口が開くぞ?」

「ぐふっ……傷口……?」

突然、胸に激痛が走り、そのままうずくまる俺。

ゆっくりと視線を落とすと、胸がジワリと赤く染まっていた。

「せつかく縫合したんだから、あんまり動くなよ朱雀。そんなに死にたいのか?」

「ぐっ……まさか……アンタが俺を助けてくれたのか?」

「まあね。殺すには勿体ないし、何よりも連れて来るように頼まれてるからな」

「連れて来る? 誰に?」

「アンタの兄さんだよ。オレはそいつの部下だからな」

「部下……へええ。兄さんが……」

と、俺はゆっくりと視線を上げる。

辺りには配水管のようなものだろうか。

時折、ゴーツと言う機械のような音が聞こえる。

部屋の中は配水管みたいなモノが所狭しと入り組んで並び、広くて暗く、気温が低いのか出血のせいで体温が下がったのか、やたらと肌寒い。

時々、世界が廻るような激しい目眩と吐き気に襲われる。はっ。

滑稽だな。

むざむざ敵に助けられ、拳げ句に身柄を拘束されるなんて、とんだ恥さらしだ。

俺はゆっくりと目を閉じて、自分を嘲笑った。

可笑しくて可笑しくて、気が狂いそうだった。

「大丈夫か朱雀？ 顔色が悪いぞ？」

「はっ。心配すんな。直に迎えが来るんだろう。死神のお迎えが」

「！？ 何の冗談だ！？ いい加減にしろ」

「脈拍がどんどん低下してる。悪寒も酷いし、出血の量も半端じゃない。傷口は縫合したものの消毒は無しと見えた。このままじゃ傷口から雑菌だのウイルスだのが入って来ておしまいつていうことさ」

「病院には連れて行け無い。公的機関に行けば確実に捕まるからな。まあ5月5日の午後8時、イ・ウー（あつち）から迎えが来るし、それまでにお前が持ちこたえればそれで良い」

5月5日……午後8時。

明日日か。

たしか、楓や舞達と東京ウォルランド花火大会に行く日だったな。

……………。

今頃、みんな必死になって俺を探してるだろう。

なんか知らないけど、またみんなに迷惑掛けちゃったみたいだな。もし此処から生きて帰れたら、アリアに蜂の巣にされる。

アハハ……覚悟しなくちゃな。

俯きながらそう考えてると、ジルは不思議そうに俺の顔を覗き込む。

「生きてるか？」

「ああ。何とかな」

「なんか大人しいから、まさか死んだのかと思った。んー腹減ったろ？ 今から飯を買ってきてやる。何が食いたい？」

「…………… 任せる」

「お任せか。オレに任せたこと後悔すんなよ？ んじゃ行ってくる。絶対逃げんじゃねえぞ？ 逃げたら殺す」

と言つとジルは姿を消した。

シンと静まり返る空間。

俺はゆっくりと仰向けに寝返り、天井を見上げる。

アイツ、馬鹿か？

公的機関に行つたら見つかるって言つてるそばから、明らかに人目が多いコンビニに行きやがった。

それに間違つても逃げれるわけ無いだろ。

深く傷を負つて半分死にかけてる上に、手足を手錠で拘束されちゃあな。

出来るわけが無い。

しかしながら此処は何処だ？

地下と言つことは分かるが、一体何の地下なのか検討がつかない。

ピチヨン……ピチヨン……。

再び遠くの方から微かに水が滴る音が聞こえる。

天井を這うように、入り組み、張り巡らされた無数のパイプ。

時折、聞こえる機械のような音。

以上を整理した上で下水処理施設と俺は推測した。

「だけど、東京の地下にこんな大きな下水処理施設があつたか？まあ、人口浮島なら話は別だけど……っ！？」

再び胸を貫いて駆け巡る激痛。

あまりの痛さに俺はのたうちまわる。

くそっ、痛すぎて意識が飛びそうだ……。

どうにかなっちまいそう。

すると次第に、強烈な眠気が襲う。

「ハハッ……とうとうお迎えが来やがったか……畜生。寝て堪るかっ」

格闘すること数分間。

俺は眠気に耐え切れず、静かに目を閉じた。

5月4日。

アリアは出て行ったつきり、帰って来なくなった。

まあ、そのうちひよっこり帰って来るだろうが。

と思いつながら、今朝早く起きた白雪と舞先輩が作ってくれた梅入りおにぎりを美味しそうに頬張る。

朱雀先輩の部屋のリビングは、フリーファイティングルーム作戦会議室のように物々しい雰囲気フリーファイティングに包まれていた。

テーブルの上には数台のノートパソコン、無数のLANケーブルがフローリングの床を這っている。

彩が呼んだ情報科の後輩・アランはその複数のノートパソコンをほぼ同時に扱い、まるでアニメや映画に登場する天才ハッカーさながらの指使いで器用に操作している。

こいつ、ホントに元・強襲科の野郎か？

俺はアランの適応力の高さにビックリしていた。

理恵先輩はソファアへ横になってる彩先輩の傷口の治療をし、アランの双子の姉のソフィアはその助手……なのか。
救護科なのに？

相変わらず、白雪と舞先輩はキッチンに籠りっぱなし。

この騒ぎを聞いて駆け付けた装備科のエース・熱田雪斗先輩は何やら物騒な箱を抱き抱えて、せつせとリビングへ運んで来る。

おそらくはこの箱、中に拳銃やら弾丸やらが入ってるんだろう。

このとんでもない武偵集団の陣頭で指揮を執る彩先輩は、頻りに携帯電話を耳に当てて、誰かに連絡を取っているみたいだ。

……っ！かこの状況で俺は何をすれば良いんだ？

「彩先輩？俺は一体、何をすれば良いんでしょうか？」

「ん？そうだな……俺と九龍とお前で朱雀^{ターゲット}を搜索して貰おうか。アリアが居れば頼みたいところだが、居ないのでお前に任せる。キンジは得意だろ？物捜しは？」

「は、はあ……苦手では無いですが」

「何だよ、その心配そうな顔は？心配するな。お前が思うほど怖い男じゃない」

「え、そうなんですか？」

俺はてつきり某ゲームのスークみたいな堅物な人を思い浮かべていたが、彩先輩の話によると不知火と熱田先輩を足して2で割ったみたいなとびきりの優男らしい。

結局、あまり変わらないような感じがするが、一体どんな人なんだろ。

まさか、ヒスった時の俺とか言うんじゃないだろうな。

「先輩。とりあえずこの人工浮島の地下の地図をあらゆる角度からネットで検索しましたよ。かなり複雑に入り組んでいます」

「おう。まず武偵高の地下は火薬庫^{ジャンクシヨン}だから除外するとして、海岸沿いにある排水溝の出口を全部調べろ」

「うーんと、全部で200ヶ所以上あります。それを辿ると全て地下水处理施設に繋がってますよ」

「……と言うことは彩先輩」

「言わなくとも分かるさ。いくら何でも俺はそこまで馬鹿じゃないぞキンジ。お前達がそこに先行して侵入し、中を探って来てもらう。雪斗、キンジにインカムを渡しとけ」

「はいはい」

彩に指示され、雪斗がインカムを二つ手に取ると丁寧^{丁寧}に俺へ手渡す。

「作戦は今日、午前9時に開始する。定位置に着き次第、俺の合図

を待て。俺と九龍、キンジは先行する。九龍とは現地で待ち合わせをしている。敵の増援に備えては楓と舞、アリア……は居ないから白雪に任せる。アラン、お前はインカムから地下水処理施設の誘導を頼む。異論は？」

「大有りじゃ馬鹿者っ！！怪我人のお前が先行してどうする！！」
「心配するな楓。前回みたいになんてへまはしねえし、何よりもいつもより麻酔を多く打っておいたから、しばらくは普段通りに動ける」

「……彩。……あらかじめ言っておくけど麻酔をいくら多く打っても、効果が切れるまで長くて3時間までが限界よ。覚えておいて」
「いつも世話になるよ理恵。わかった。覚えておく」

彩は何食わぬ顔で理恵に言う。

理恵は一瞬だけ、彩へ悲しそうに笑む。

先程、彩へ怒鳴り付けた楓先輩は先行をワシにしると言わんばかりで睨む。

舞先輩は気分が沈んでるようだった。

バックアップである白雪はと言うと、何故か妄想の世界に旅立っている。

少しは自重しろよ、お前。

と内心、そう毒づく。

「最後に言っておくが、俺は命に代えても朱雀を助ける。アイツには借りがあるし、死なれちゃその借りもちゃんと返せなくなっちゃう。敵はただ者じゃない。それは百も承知。この傷の痛みよりも、アイツを失う方がよっぽどいてえだろ。だから、俺は奴をサシで倒す。他のメンバーは余計な手は出さないで、朱雀を連れて逃げてくれ」

ハッキリと、彩は『自分が死ぬ』と宣言したのだ。

傷も癒えていないのは先刻承知済み。

足手まといになることは嫌でも目に見えて分かる。

なら、対象を奪還するまでの間、自分が『囚』と『盾』をやると言
った。

その時の彩の目に揺るぎはなかった。

「唯一無二等しい、我が盟友を救う為ならばこの命、喜んで捨てよう」ってな。さて、時間だ。九龍を待たせとくわけにもいかねえし。行こうかキンジ」

バサリと武偵高のジャケットを羽織り、ベルトにいつものように小太刀を挿してソファアールから立ち上がる彩。

正直、驚いていた。

ここまで仲間思いな奴は初めてみたからだろうか。

背筋がぞくぞくする。

名前を呼ばれた俺は、黙って彩の後に続いて行った。

ふと、自分が寝ていたことに気が付いた。

まるで魂が抜けたような虚脱状態から俺は目を覚ました。

ふう……どうやらこうやら死なずに済んだみたいだ。

焦点が合わず、視線がぼやける中、ゆっくりと辺りを見回す。

あ、そうか。

此処は……地下だったんだっけ。

そっいえばジルの姿が見えないけど……

ん？何か、背後から俺に覆いかぶさってるな。

何だよ一体。

俺はゆっくりと振り向く。

有り得んだろ。

俺はあまりに衝撃的な事だったので唖然としてしまった。

まさか、ジルが……ジルが、俺を抱いて寝てたのか！？

信じられないので後退りたいのだが、手錠が足にも付いているので身動き一つ出来やしない。

それに、だ。

ジルの細くてしなやかな手が、俺の両脇を通って胸の前でキュツと愛らしく握り合わさっている。

何故かガツチリと身体をキャッチされているので、俺は見ての通り何も出来ない。

動いたら起こしそうだし、離れたいけど捕まってるから動けない。

しかも、ささやかながら背中中にプニプニとしたとても柔らかいモノが接触してる。

うわ~~~~~……

って、考えるな……！

考えたら別な意味でホントに死ぬぞ俺……！

まるで漫画のように額から顎まで、滝のように汗が流れる。

こんな格好、舞や楓に見つかったらまずいし、いろんな意味であいつらにすぎ放題されてしまう。

ただでさえ俺の貞操が危ういのに、これであいつらに拍車が掛かったらもう誰にも止めれんだろ。

どうすんの、俺。

マズいでしょう、これは。

仕方ない……今のうちに見つかった時の弁明を考えておこう。

……。

なんで見つかる事前提なんだ？

などと考えつつもチラリと振り返ると、いつもキリツとした凛々しい顔のジルとは思えぬほど、愛らしい寝息を立て寝る少女のような寝顔が見えた。

ぬお…… なかなかかわいい……

って、何見取れてんだ俺！？

あくまでもコイツは敵だぞ！？

ときめいたりしちゃダメなんだぞ！？

ちくしょう！！

女の子って、なんか狡いぞ……

そう思いながら前に視線を戻す。

さて、どうしたものか……。

などと考えながら、不意に視線を下へ下ろすと、血の付いた抗菌ガーゼやら血まみれの包帯・綿布が散乱していた。

ゆっくりと胸の傷の所を見ると、新しい包帯が丁寧に巻いてあった。ちゃんと治してくれたのか……？

「ん……」

俺に抱き着いて寝ていたジルが、ゆっくりと目を開ける。

「なんだ……起きてたのか」

「ああ。お蔭様だね。それよりなんでお前は俺に抱き着いて寝てんだ？」

「再度傷口を縫合した際に、出血多量で体温が低下して危なかったからだ。周りにお前を温めるモノが無かったから、オレが抱き着いて温めてた」

「……そうか。それはありがたいが、離れてくれるか？暑苦しいから」

「……！？そ、そうだな。済まない」

突如、状況を悟ったように顔を真っ赤に染めたジルは俺から飛びのく。

ハハハ。

口調や性格は男勝りでも、ちゃんとした女の子なんだな。なんて考えてしまう。

「ジロジロ見るな！！殺すぞ！！」

「殺せるならやってみな。とても大事な人質を無意味に失うぞ？」

「……ちつ。それもそうだな。」

「んで、何でお前は兄さんの手下に付いてるんだ？」

「まだ小さい頃に、拾って育ててくれたんだよ。お前の兄さんが」

彼女の話によると浮浪者が集まる町で、行き先が分からず、ただ茫然としていた時に彼女は俺の兄と出会ったそうだった。

親に捨てられたせいで誰も信用出来ない彼女は、兄に出会った瞬間、不思議と身近にいた人のように思えたらしい。

兄へ付いて行くことにした彼女は、俺達の敵『イ・ウー』へ入った。物好きだなあ。

なんて思えて仕方ない。

「イ・ウーでダンテから直々に殺人術を教わったけど、怖くて一度も使った事がないんだよ、オレ」

「……んじゃ、俺を襲った時のはどう説明してくれんだよ？お前は明らかに俺を殺そうとした」

「あれは違う！！お前が武器を持ってたからだろ！！武器を見ると、身体が勝手に動いてお前を殺そうとするんだ！！」

「身体が勝手に……？どういう事だ？」

「半ば自動的に武器を持った相手を敵と認識して殺そうとするんだ」

……それが怖くて怖くて……。ダンテに相談しても何も答えてはくれないんだよ。それに、もう何人が殺してしまった……。」「……………」

なんでだ？

今の話だと、最近良く俺に起こる症状に、似てるような感じじゃねえか。

俺の場合は、置かれた危機的な状況を瞬時に把握し、その結果を論理的に統計して最良の答えを導き出すみたいだ。

原因はよく分からないが、ようするに俺とコイツは似た者同士らしい。

スイッチの入り方が違うだけけど。

もしそれが本当なら、彼女は意に反して人を殺していると言っことになる。

でも、彼女は俺達『武偵』の敵だ。

そんなこと……って見知らぬ振りなんか出来るかっ！！

ホントにお人よしだな、俺は。

ちくしょうが。

「それなら俺なんか放っておいて逃げれば良いだろ。なにもかも忘れられるように」

「でも、ダンテの命令は絶対なんだ。だからアンタを連れていかなきゃいけない。もし反抗する場合は、私の手でアンタを殺さなくちゃいけない。……もう少し時間が稼げる場所に移動するぞ」

「おい、移動するって……」

「大丈夫だ。足の手錠は外す。オレについて来い」

「……………わかった」

素直に返事を返すと、ジルは足の手錠を外して歩き始めた。俺はゆっくりと立ち上がると、ジルに手を引かれて行った。

地下下水処理施設内。

長い廊下を抜け、暗闇が支配する世界に俺と彩先輩は降り立った。さらに地下へ下りる階段の前まで来ると俺達は足を止めた。

藍色の潜入任務専用の密着度の高いライダースーツに、プロテクターを組み合わせたような服装、確か『スニーキングスーツ』って言ったっけ？

それを身に纏った銀髪赤目の青年が俺達を待っていた。

身長は俺達とほとんど変わらないが、たしかに彩先輩が言ったように、不知火と雪斗先輩を足して2で割ったようなクールなイケメンだった。

右胸には『東北武偵高』と青い刺繍が入っている。

鮮やかに染える銀色の短髪と、ルビーのような輝きを放つ赤い瞳に、鋭く尖った目尻。

それはまるで現代に生き返った『狼』を連想させる。

男にしては端正で凛々しい顔立ちに、外人のように高い鼻。

それなのに、立ち姿や背格好がどこか日本人の雰囲気醸し出す。

彼はゆっくりと歩み寄り、俺に右手を差し出す。

「はじめまして。遠山キンジくん。東北武偵高諜報科三年の東九龍です。従兄弟の彩から話は聞いていたよ。よろしく」

「会えて光栄ですよ九龍さん。よろしくお願いします」

「俺から挨拶は いららないよな。さてと九龍。任務の内容は分かるよな？」

「朱雀くんの救出、だよな。心配ないよ。ちゃんと把握してるから。電話での話だと彩とキンジくんの推理では、朱雀くんを襲って海に落とした犯人も此処へ来てるって事だよな？」

「もし海に落ちて運よく助かったとすれば、の話だがな。排水溝から上がって、地下から地上に出るには此処を通るしかない。朱雀を殺すとするならば、此処で待ち伏せしてた方が探すよりも都合が良
いからな」

と冷静に話す彩先輩。

それを黙って聞いていた九龍先輩は頷きながら聞いていた。

もし、朱雀先輩を殺すのが目的なら、彩先輩の推理は妥当だと考え
れる。

だけど、一つ矛盾がある。

今までの推理だと犯人の行動は白雪や舞先輩を拉致するためだと思
っていたが、今回の件は朱雀先輩を殺害するの目的になっていた。

……分からない。

何故、白雪や舞先輩を狙わないのかが。

「さあ、時間だよ。行こうか二人とも」

「よし。行くぞ」

「了解」

「アラン、聞こえるか？」

『聞こえますよ先輩。先輩達の位置はこっちのパソコンに搭載され
たGPS機能でバッチリ捕らえています。さすが雪斗先輩特製のイン
カムですね』

インカムから聞こえたアランの声。

マイクを通して聞くと、アランの声はやたらと女の子っぽく聞こえ
て仕方ない。

コイツ、ホントに男か？

「よし。下りるぞ」

と、彩が言うので俺はゆっくりと付いていく。
ドアを開けると、辺りには闇が広がっていた。

時折、水の滴る音が暗闇に響き渡る。

俺達三人は片手に持つライトを頼りに、朱雀先輩の姿を探す。おそらくはこのフロアが最下部で、複雑に入り組んだ地下排水溝へと続いていると思われる。

地上とは違い、吹き抜ける冷たい風が妙に肌寒く感じる。

俺は白銀に輝くベレを片手に、ゆっくりと暗闇を進んでいく。

まさかな。

人工浮島の地下に、こんなものが張り巡らされているなんて思いもしなかった。

先頭を無言で歩く彩先輩の手には、白銀に輝くゴツくてマブい拳銃『S & amp; W M 6 4 5』が握られている。

アリアが使うガバメント同様、45ACP弾を使う大型自動拳銃だ。

九龍先輩は……見たことがない拳銃を使ってるな。するとその思いが伝わったのか……

「ウィルソン・コンバット・センチネル。ガバメントと同じ・45ACP弾を使用する小型拳銃だ。僕のお気に入りだよ」

「！？何故教えて欲しいって分かったんですか!？」

「ふふふ。だってそう言う顔をしてたよキンジくん？」

「え!？そうですか……?」

握っていた黒いフレームのコンパクトな拳銃をチラチラと見せながら楽しそうに言う九龍。

まさかそこまで読まれるとは。

……顔に出るのか?

「おら。遊んでないで、とつとと探せ」

「ごめんごめん。そんなに怒るなよ彩」

「すみません彩先輩」

「全く。アラン、聞こえるか？今いるところからどっちに行つたほうが朱雀が落ちた場所に近いんだ？」

『うーんと……そこからだと左ですね。そのまま直進して次の分岐点で右に行つてください』

アランの声がインカムのスピーカーから聞こえる。

それを聞いた彩はゆっくりと向きを変えた時だった。

バンツ！！パキューンツ！！

突然鳴り響いた銃声と、俺の足元で弾けた弾丸。

一瞬で辺りに戦慄が走り抜ける。

「な！？」

「敵か！？」

「……なにビビってんだおまえら？ほれ。あれを見てみるよ」

いたって冷静な彩が、銃声の方にライトを向けた。

そこには……

「ア、アリア！？」

「何よ、大袈裟ね。ワイワイ騒いでるから敵かと思って撃つちゃったじゃないの」

「な、なんで此処にお前が居るんだよ！！」

「理由は一つ。アタシは」

「朱雀を助けに来た、だろっ？生憎、お前さんのポジションは此処じゃない。ちゃんと手伝わせてやるから大人しく引っ込んでろ」

事実なので何度も言わせて頂くが、無い胸を張って威張りつつ言うものの、やけに冷静な彩に冷たく一蹴されたアリア。出来れば“無い胸”を強調して読んで貰いたいな。一方、何が何だか状況が読めない九龍は啞然としている。

「彩！アタタに一言言っておくわ」

「なんだ？今、工作中だ。あとに」

「アタシがスザクを助けられたら、アタタもアタシの“奴隷”になりなさい！！」

「……ふ。何を言い出すかと思えばリアル貴族様が俺に決闘を挑むつもりか。良いだろう。それなら俺からも一つ条件がある。もし俺が朱雀を助けられたら、朱雀とのコンビを解消しろ。それなら乗ってやっても良いぞ？」

「……分かったわ。男に二言は無いわね？」

「お前こそ、自分の力を過信すんなよ？」

ああ〜……。

あの、一つ良いでしょうか？

何やってんの？

この人達は？

もはや本来の目的を忘れているのでは？

いつの間にか、賭け事になってるし。

これ知ったら朱雀先輩、相当悲しむよなあ……。

その時だった。

何故か辺りの空気がピンと張り詰める。

みんな一斉に闇が群がるトンネルの先を見る。

背中を掻きむしりたくなるほどの悪寒。

なんか凄いゾクゾクする。

何だよ、この感覚は！？

何だよ、この殺気は！？

「来たか……」

と彩は呟く。

すると、スーツと彩の目付きが変わり、細く鋭くなる。

ゾワッ。

また俺の背中に悪寒が走る。

それは彩から放たれた殺気だった。

シャキン。

暗闇の中、M645をホルダーにしまい、彩は脇に挿していた忍者刀を抜き放ち、ただ一点を見詰める。

白々しい刃が、闇の中に浮かび上がる。

後ろに立つ九龍はセンチネルを構え、辺りに注意しながら襲撃に備える。

途中から合流したアリアも臙脂色のスカートの下から黒銀のガバメントを抜き、襲撃に備えて身構える。

俺もベレを構えるが、その手が微かに震えていた。

何なんだ……。

このドロドロとした感覚は……。

しばらくの間、長い沈黙が流れる。

ヒュンッ！！

その沈黙を破り、敵は頭上から襲撃してきた。

降りて来る力を利用しながら、分厚くて重いククリ刀を彩の頭上に振り下ろす。

ガキンツ！！

後頭部越しに細くて短い忍者刀で、分厚いククリ刀を受け止める彩。赤い火花が、闇の中に咲く。

「さすがにやるな！！夜桜の末裔！！」

「五月蠅い。気が散るから喋るな」

ギンツ！！

低く鋭い声で降ってきた敵に、忍者刀でククリ刀を弾き返ししながら言う彩。

弾き返されたククリ刀を、再び薙ぎ払う敵。

暗くてよく分からないが、この声は女の子だ。

ライトで照らそうと彩の方に向けた時、バチツと言う音と共にライトが消えた。

畜生！！

ラ、ライトが壊された！！

これじゃあむやみに発砲したら仲間へ当たっちゃう。

迂闊に拳銃は撃てないぞ！！

「アリア！！拳銃は使うな！！」

「わ、分かっているわよ！！奴隷のくせに指図するな！！」

「賢明な判断だキンジくん。みんな近接武器に持ち替えて。……音を頼りに戦うしかないのか……」

「無理よ！！音だけじゃ情報が少な過ぎるわ！！」

「くっ……。まさかの展開だな」

俺は唇を噛み締める。

迂闊に動く事が出来ない以上、相手の情報得る手段が少な過ぎる。だが、それを打ち消すように彩と見えない敵が激しくぶつかり合う音がトンネル内に響き渡る。

ガガッ！！ガガッ！！ガガガッ！！

無数の火花が咲き、暗闇の中で散っていく。

何なんだ……。次元が違い過ぎるぞ彩先輩……。

ククリ刀を薙ぎ、突き出し、切り払う敵。

それを切り返し、受け止め、打ち返す彩。

微かに光る閃光で分かるが、今の彩の動きは異常だった。

体の捌き方は最小限、打ち出す斬撃は重く正確。

まるで、ヒスった時の俺を見ている見たいだった。

……。いや、違う。

あれはヒスってるんだ！！

感じるぞ、俺と同じ感覚。

ヒスった時とほとんど変わりが無い、あの感覚を。

「くっ……。これは明らかに不利だな」

「何だよ？もう観念したのか？つまらん野郎だジャック」

「何を楽しんでる夜桜？」

「ハッ、俺を笑わせるな。見ての通り戦いを楽しんでるんだよ。分かるか？」

「な……」

「久方振りに骨があるヤツと戦えて、頭が狂いそうなくらい楽しんだよ。戦いに置ける臨場感ってやつがよ。お前を倒せて疼きやがる。お前を蹴り殺ししろってな。お前も分かるだろ？なア？」

と低く狂言滲みた、薄ら笑いを浮かべて言う彩。

いつもと全然違う。
ホントに、ホントに彩先輩か？

「同類……か。まさかここで“あの能力”を持つ奴と会えるとはな。
夜桜！！」

ガガガガガガガガッ！！

再び激しくぶつかり合う二人。

アリアはそんな彩を見て、怯えていた。

ジャック……？

まさか、敵はあのジャック・ザ・リッパーか！？

「おらア九龍ッ！！ボサツとしてんじゃねえ！！俺がコイツを足止めするから、残りの奴ら連れて早く朱雀のヤローを探せっ！！早くっ！！」

彩の怒鳴り声が響く。

九龍は仕方なさそうに俺の方を振り向く。

「行こう。キンジくん。アリアちゃん」

「はい」

「うん」

そう言うと、激しくぶつかり合う彩を尻目に俺はアランが指示した方向へ進んでいく。

ズドッ！！

右手に握る分厚いククリ刀の切っ先が、彩の脇腹の傷に深く、深く突き刺さった。

身体を貫くような激しい痛み。

川のように流れ、滴り落ちる鮮血。

一瞬、時が止まったように思えた。

彩の口から吐き出され、とめどなく流れ落ちる血。

しかし、彩の目には、まだ戦えると言う思いが滲み出していた。

「うおおおっ！！」

唸る彩は右手でククリ刀の刃を直に握り、傷口から引き抜くと勢いよくジャックに前蹴りを打ち込む。

思い切り胸を蹴られたジャックは、苦しそうな表情を浮かべて後方へ吹っ飛んでいく。

息が荒くなる彩。

コンクリートの上を転げ回るジャック。

「朱雀が見付かるまで……俺はア……死ねねえんだよ……」

完全に息が上がリ、痛みを堪えて震える右手で、忍者刀を逆刃に持ち替え、峰に切り替える。

ぼやける視線、熱く火照る身体。

ジャックはネックスプリングで起き上がるが、口から一筋、赤い液体が流れる。

彩が放った決死の前蹴りが、ジャックの肋骨を折ったのだ。肋骨を骨折すると、激痛でまともに動けなくなると聞いた。

まあ、俺も似たようなもんだが、負けるわけには……。

前へ歩こうと、右足を出したのは良いが、そのまま態勢を崩し、左

膝を地面に着く。

彩の体力は限界を超えていた。

息をするたびに、痛みが身体を突き抜けていく。

いくら異能力を使っていたからと言って、身体は普通の人間と同じだ。

傷を負っていれば、それはなおさらだ。

ジャックもジャックで、立っているのがやっとだろう。

「野郎……往生際の悪い奴だな夜桜……」

「テムエも……言えた事じゃねえだろ……さて…………続きを始めるぞ
！！」

ゆっくりと立ち上がり、死力を尽くして走り出す彩。

先に奴を動けなくすれば、こっちの勝ちだ。

前傾よりの超低空姿勢から、一気にハイスピードまで駆け上がる。

『彩。よく聞け。良いか？これは夜桜にとっての禁じ手だ』

ふと、幼い頃に親父から聞いた言葉が脳裏を過ぎった。

優しく低い、懐かしい声。

ホントに小さい頃から、親父からスパルタで戦闘の訓練をさせられ、一通りの過程を終えた時のことだった。

『今から教える技は、我が夜桜の家系にとっての禁じ手だ。奥義と
言っても良い。彩も七歳だ。触りだけ教えてやる』

『ホントに！？』

『ああ。ただし、むやみやたらに使つな。お前が信じた仲間を守りたい時や誰かを救う時に使え。これだけは約束しろ』

頭の中に響く親父の声。

何だよ、もう潮時つてか。

……ふざけんじゃねえ。

まだやり残した事が沢山ある。

それに、まだ倒れるわけにはいかねえ！！

地面をスレスレに走る彩は、ジャックの数メートル手前まで来た。

ジャックの目の前に来たその時、地面を力強く踏み鳴らす。

「これで最後だつ！！目ん玉ひんむいて良く見てやがれ！！夜桜流殺人術奥義！！“夢幻鮮景・夜桜・真月”！！」

ダダダンッ！！

一瞬で人間の急所と言われる鳩尾、首、眉間を忍者刀で穿つ彩。

目にも留まらぬ豪速で、ほぼ同時に撃ち込まれた斬撃は躲すことさえ不可能。

過激に動く事ができないジャックには、これは回避不可能である。

空へ駆け上がるように飛び、それを打ち込むと宙返りをして元の位置に着地する。

技を喰らったジャックは、勢いよく遙か後方、暗がりへと転がっていった。

「へっ……ざまあ……みる……」

「彩っ！！」

「夜桜っ！！」

「夜桜くんっ！！」

「夜桜先輩っ！！」

崩れ落ちる彩の身体を急いで抱える理恵。
心配そうに駆け寄り、彩の顔を覗き込む楓達。

「なんだ……来るのが、遅いんじゃないのか……三人とも？」

「この馬鹿者っ！！お主がさっさと連絡を寄越さぬからじゃろうが
！！！」

「あ、あの。実はさきほど九龍くんから連絡があつて、急いで助け
に来たんだよ！！！」

「先輩。後は私達がやりますから、大人しく待っててください！！！」

「……バカヤロー。大人しくしてられるか……。ジツとしてるのは
性に合わねえんでね。早いとこ、九龍達と合流しなくちゃ……」

武装した巫女装束を纏う白雪がアワアワと口に手を当てながら言う。
それを無視してむりくり立ち上がりうとするが、彩の背後からガバ
ツと、思い切り理恵に抱き留められる。

「……無茶しないで。……死んじゃう」

「イダダダダっ！！傷がっ！！やろっ！！傷が裂けるっ！！痛いっ
！！死んじゃまうっ！！！」

「……行っちゃダメ。大人しくするの」

「ハイハイ……。仕方が無い。って事で俺はここいらで棄権するわ。
三人とも後は任せた」

理恵に抱き着かれ、ぐったりと頭を垂れる彩。

彩に言われた通り、楓、舞、白雪の三人が先行するキンジ達へ合流
するために駆け出す。

ふと、思い出したことがあったので、直ぐさま近くにいた舞を呼び
止める。

「あ、舞。一つ言うの忘れてた」

「何？」

「奴はまだ倒してない。ヨタヨタになるまでダメージは与えたが、奴の事だ。まだ動けるかもしれない。油断はするなって二人に伝えておいてくれ」

「分かった。んじゃ行くよ」

「おう。相棒をよろしく頼む」

満身創痍で先に行った二人を追い掛ける舞。

くそっ、結局こうなるんだよ。

俺にや、朱雀の相棒はつとまらねえみたいだな。

「……彩」

「なんだ？」

「……心配かけた罰。……受けて貰う」

「何だよ罰って……!？」

振り返った瞬間。

ちゅ!!

と唇へ理恵にキスされた。

Oh my god!

なんちゅうことしてくれんだよ!!

なに可愛いげにほっぺを真っ赤に染めてん

ああああ!!

全身に蕁麻疹がっ!!

痒いっ!!

搔けないっ!!

脇腹が搔けないっ!!

痒いし痛いので悶え苦しむ俺。

無事に帰って来たものの、理恵のキスでトドメを刺された彩であった。

作者よりお知らせです

一周年記念の企画として考えていた白石氏の『緋弾のエリア・防人の45口径 -』とのコラボ二次小説『緋弾のエリア・SECOND x CROSS』防人の45口径と漆黒の魔弾』を本日公開しました

本編とは全く違ったストーリーを楽しめると思っているので興味のある方は是非とも読んで感想を下さい
よろしくお願い申し上げます

「先輩……！！どこですか……！！朱雀先輩……！！」

「朱雀くん……！！どこだい……！！」

「早く返事しなさいよ！！馬鹿スザク……！！」

辺りに広がる闇の中、俺と九龍先輩、アリアの三人は朱雀先輩を探しながらただ歩いてた。

全く、目上の人を敬うっていうことを知らないのか？

この貴族様は？

一体、どういう教育を受けてるんだか……

なんて考えながら、ゆっくりとゆっくりと壁伝いに前へ進んでいく。ライトが無いため、慣れた目を頼りにこの暗い通路を進まなくちゃ行けない。

「ちよつとキンジ……！！どこ触ってんのよ……！！」

「知るかつ……！！俺は何処も触ってない……！！触ってるのは壁だぞアリア」

「ア」

「やれやれ。こんなに暗いと色んなキケンが一杯だね？キンジくん？」

「まったくですね。気を抜いたらもう一貫の終わりですよ九龍先輩」

「僕も同感だよ」

「ちよつと……！！さっきアタシのお尻触ったの誰……！！白状しないと風穴……！！」

相変わらず馬鹿だなあアリア。

風穴つつつても、真つ暗じゃあ拳銃は撃てないだろう。

脅しても脅し切れてないぞ。

「つか、何処にいるんだ？
お前は？」

「キンジ？クリユウ？何処よ？」

「僕なら此処だよ。キンジくんの隣」

「アリア。お前、先行し過ぎだぞ」

「だって暗いと何処が何処だが分からないでしょ！！何処にいるの
！！」

「10メートル後方に引き返して来い。俺達は止まって待っててや
る」

俺は足を止めながらアリアに叫ぶ。

分かったとアリアからの応答があり、俺は指示した通りに九龍先輩
と待つ。

カツカツと言うアリアが履いているローファアの音が響き渡ると…
…。

どっ！！どさっ！！

何かに引つ掛かるような音がし、アリアが転ぶ音がした。
なんだ？

「おい！！大丈夫か！！アリア！！」

「いったあゝゝ……何かに躓いたみたいだわ。大丈夫。たく誰よ
？こんなところに……キャっ！？」

「アリアちゃん！？」

「アリア！！」

緊迫した空気が漂う。

一体何があつたんだ？

「アリア！！返事しろ！！」

「……ヒト？……スザクよ！！スザクを見つけたわ！！」

「朱雀くんを？まさか……」

「でかしたぞアリア！！今から行く！！そこから離れるな！！」

と駆け出した時だった。

キン、と言う音と共に何か俺の爪先に触れた。

「行くなキンジくん！！それは畏だ！！」

九龍先輩の声が聞こえたが、もう手遅れだった。

バシユツ！！

まばゆい光が辺りを一面を照らす。

そのあまりにも眩しすぎる光のせいで、俺は視力を一時的に失った。

ちっ……閃光手榴弾フラッシュグレネードの設置型トラップか！！

くそっ……まんまと引つ掛かつちまうとは……。

俺は瞼を閉じながら、その場にしゃがむ。

畜生、周りの状況がまるで分からない。

とりあえず、アリアと朱雀先輩、九龍先輩は無事か！？

「アリア！！朱雀先輩！！九龍先輩！！みんな大丈夫か！！」

「アハハ……気付いておきながらこのざまとはね……見事にやられたよ。辺りが暗いんじゃないかなおさらだね」

「目が見えない……みんな何処にいるの？キンジ！！クリユウ！！」

ちっ……みんな食らったのか……。

これじゃしばらく間動けないな。

……隙だらけだ。

くそっ！！俺のせいで！！

「あらあら？揃いも揃ってみんなトラップに嵌まるとは情けないね

え。つーかマジでさ、あんたらホントに武偵？」

「「「！？」」」

聞き覚えのある声が響き渡る。

まさか……彩先輩と同等にやり合ってたあの怪物『ジャック・ザ・

リップパー』か！？

なんてこった！！

こっちが身動きが出来ない以上、皆殺しは確定だ！！

終わった。

そう覚悟した時だった。

「退け退け退け〜！！邪魔じゃ！！我が殿方はどこじゃい！！」

「はぁ……はぁ……はぁ。やっと追い付いたわ。みんなどうしたの

！！」

「キ、キンちゃん！！しっかりして！！」

……そうだった。

まだ諦めるのは早いぞキンジ。

この“侍三人娘”サムライガールズが残っていたのをすっかり忘れていた。

戦慄した空間。

殺気が籠る視線。

そこにいたのは、紅い長髪を振り乱し、黒い外套を身に纏った女だった。

右脇には両手を手錠で繋がれた朱雀が、ぐったりと首を折り、抱えられていた。

先陣を切って進んでいたワシが到着した時には、キンジや九龍、アリアは膝を床に着いて動けないでいた。

先ほどの光はやはり閃光手榴弾か。

まさかとは思ったが、案の定、見事に食らっていたとはな。

「その声は……白雪か？」

「そうだよキンちゃん!! どうしたの!!」

「閃光手榴弾で目をやられた。他の二人も同じ。見ての通りしばらく動けない。だから奴と戦って朱雀先輩を救出してくれ」

「無論じゃキンジよ。血生臭い“女子”^{おんな}に殿方を横取りされてはこちらとてかなわん。それに奴は“姉上の仇”じゃ。この場はワシが相手をさせて貰うぞ」

「ちよつと楓!! 何を勝手なことを」

「五月蠅い!! 白雪、舞!! そちらは黙ってキンジ達の看病をしておれ!! 案ずるな。直ぐに決着を着ける」

と、ワシが言う。

張り詰めたその声を聞いたキンジ達はシンと静まり返る。

これだけは譲れなかった。

「……勝手にして。どうなっても知らないわよ？」

「分かりました楓先輩！！わ、私はキンちゃんの側に居ます！！」

それぞれ返事をする、行動不能のキンジ達の手当を始めた。

「姉上と朱雀が世話になつたらしいの？」

「姉上……？さあ、誰だかね。昔の記憶は微塵も残ってない。それに、朱雀は連れていかねばならないのでね。簡単に返すわけには行かないんだよ」

「ふっ……一度斬り付けなければ分からぬ大馬鹿者のようだ……」

遠慮はせん。この長太刀で身動き出来んようにしてやる。力付くでも朱雀は返して貰うぞ？」

「やれるならやってみな。この身の程知らずが！！」

とククリ刀を抜き放ち、襲い掛かるジル。

ふうと深呼吸をすると、楓は素早く両手を背中に回し、麻で巻かれた柄を握ると勢いよく身の丈よりも長い長太刀を抜き放つ。

ガチンッ！！ギッ！！

一気に間合いを詰めて来たジルのククリ刀を軽々と受け止め、有りつたけの力を籠めて勢いよく押し返す。

気圧されたジルは態勢を崩し、一步後退する。

逃がさないと言わんばかりに大きく踏み込むと、頭上から一気に振り下ろす。

ヒュガッ！！

鋭利な白刃は宙を穿ち、頑丈なコンクリートの地面をいとも簡単に切る。

「どうした？まだ始まったばかりじゃと言つのに逃げ腰か？」

再び踏み込み、斬り掛かろうとした時だった。

ヒュヒュツ!!

何の前触れもなく、ワシの身体が斬り付けられたのだ。

右手、右腕、左手、腹を一瞬でほぼ同時に鋭く深く斬り付けられた。なんじゃ……一体!?

続いて両足を切られ、勢いよくコンクリートの上に崩れ落ちる。

しまった!?

迂闊だった!!

「アハハハハ!! 威勢のわりには随分と呆気ないな!!」

「くっ……力が入らん……」

「雑魚雑魚雑魚!! どの時もこいつも、みんな齒ごたえがないなあ!!」

「……なあジル。一人、一番ヤバい奴を忘れてないか?」

「ああん?……ぐふ!!」

ぐったりとしていた朱雀がいきなり身体を反らし、右足でジルの後頭部を蹴り付けたのだ。

蹴られた拍子に、朱雀は思い切りコンクリートに叩き落ちた。

その異変に気付いた舞が急いで朱雀に駆け寄る。

「朱雀!?! 朱雀!!」

「ああ……舞か……」

「ねえ!! 大丈夫!?!」

「アホ。大丈夫に見えるか……!?!」

な!?!

抱き着いたと思った瞬間、俺の唇に重なる柔らかくて、暖かい舞の唇。

ああ、なんてこった。

どさくさに紛れて何をしゃがる。

突如、俺の唇に触れた舞の唇はアリアとは違い、とてもしっとりとしていた。

俺の胸板にピッタリとくっつく舞のふくよかな胸。避けてきたが、とうとうこうなっちまったか。

つか、何だよこの状況？

絶対に狙っただろ！？

暗闇じゃ誰も見ていないとでも？

ジンジンと身体の芯に熱い何かが集中してくる。

アリアとは違って、ちよつとクラクラするぞ。

頭の中で、パンツと何かが弾け飛ぶ。

この感じ、エアジャック以来だな。

すうっと目尻が細くなる。

俺はゆっくりと舞の唇から自分の唇を離す。

「舞。どいて貰えるかい？」

「！？」

「心配かけてごめんな。だけれどもう大丈夫だ。“僕”は舞のいつも側にいるよ」

「え！！え！！」

「よし。お利口だ。後でご褒美をあげよう。白雪ちゃんとみんなを連れて下がって貰えるかい？それに、余計な出だしは無用だよ」

「う、うん……」

……誰だ？

これ、俺か？

……アハハハハ。

マズい事になったな。

甘い言葉を掛けながら抱き着く舞からゆっくりと離れると、ゆっくりと立ち上がる俺。

あまりにも激変した俺をキョトンと見上げる舞。

深呼吸をすると、ゆっくりと目を閉じる。
バキンッ！！

手錠のチェーンが勝手に抜切れた。
な、何なんだ？

「鳳凰院先輩？」

「ん？なんだい？白雪ちゃん？」

「髪の色が……クリーム色に……」

ライトを照らす白雪が恐る恐る呟く。

はっ……何の冗談だよ。

そんなに髪の色なんか変わるわけがないだろう？

「そう。気にしてないからいいよ。どうせ戻るだろうし、これも
舞との愛の証”さ」

……………。

よし、今すぐここから身を投げようか。

今ならいつそのこと溺死しますよ俺。

嫌な予感がしてちらりと舞の方を見ると、もっと言ってと言わんばかりに顔を赤くして見ている。

ダメだダメだ。

これ以上は責任取れん。

そんなこんなで俺はゆっくりと歩み始め、苦しそうに呻く楓をお姫様抱っこして壁際に寄り掛かせると、ジルの前に立つ。

「殺る気か？朱雀？恩を仇で返すつもりか？」

「恩に着た覚えは無いよ。元々、君は僕の敵だ。それに、君は僕の大切な仲間に傷を付けた。その代償はあまりにも大きすぎる」

「殺すのか？出来るのかお前に？」

「殺す気はない。罪を償って貰うために、大人しく捕まったほうがいい」

「ふん!!連れていこうかと思ってたが気が変わった。朱雀。お前をこの場で殺す!!」

ククリ刀を身構えるシル。

対する俺は無防備。

だが勝機は充分だった。

ゆつくりと闇の中に左手を翳すと、何処からともなく六本のギミッククロツドが朱雀の左手に飛来して収まった。

キンジや九龍、アリアの治療を終えてそれを見ていた舞は驚くように言った。

「……あ、あれは……まさか。サ、サイコキネシス!？」

「え!？」

「何だつて!!」

「朱雀先輩が、サイコキネシスを!？」

「ありえない……」

サイコキネシスは体質的なモノで、生れつき備わっている事が多い。そう言う舞も生れつきあの強烈なサイコキネシスが備わっていたものだ。

なのに朱雀は、元よりサイコキネシスを持っているわけでもなく、訓練も何もしないで舞に匹敵するほど強烈なサイコキネシスを使っていたのだ。

「さあ。準備は良いかい？」

「そんなハツタリが通用するか!!」

完璧に優男化した俺は優しく低い声で言う。

そう吠えるジルは猛スピードで突進して、朱雀の脳天へとククリ刀を振り下ろす。

朱雀は流れるように素早く二本のロッドを組むと、分厚い刃を軽々と受け止める。

分解した残りのロッドは、まるで生き物のように朱雀の手から離れて飛来し、ジルの背後に回る。

「ちっ！！背後かっ！！」

露骨な舌打ちをすると、素早く踵を返して振り返り、飛来するロッドをククリ刀で打ち払う。

弾き返されたロッドは地面や壁に突き刺さる。

「気を配り過ぎだよ。もうちよつとスムーズに戦わないとね」

なんて言いながら俺は左手に握るロッドで薙ぎ払う。

ガキンっ！！キンキンっ！！

とオレの攻撃を受け止めながら後退するジル。

すると、引っ掛かったなという不気味な笑いを浮かべた。

ヒュ！！

見えない何かが通過した。

しかし、俺にはそれが何か、ちゃんと見えていた。

ガキン！！

握っていたロッドをその何かが通過する瞬間を見極めて目の前に出し、ガキンと防ぎ切る。

暗闇に赤い火花が散り、ロッドの接触点が深く刻れる。

「何！？」

「同じ手を二度も喰らうと思うかい？そのマントの裾に、金属を薄く伸ばして研磨した“刃”が付いているんだよ。それを高速で振り

回して切り刻む。たかだか薄い金属を研いだ刃じゃ、致命傷にはならないけどそれを高速で振り回せば、当たった者は深く傷付く」

「……ちっ。とことん腹の立つ野郎だな!!朱雀!!」

「お褒めの言葉ありがとうございます。んじゃこっちも奥の手を使おうか。先ほど編み出したんだけど、こつも使う時期が早くなるなんてね」

というと、俺はサイコキネシスで地面に突き刺さったロッドを一本、引き抜いた。

ギューイイイン!!

紐が引つ張られるような音ともに。

「!?!」

ジルの周りに現れたワイヤーの蜘蛛の巣。

そのワイヤーは見事にジルの手足を縛り上げる。

ただ弾き返されてたんじゃなく、縫ったこのワイヤーを張るためにわざと弾かせていたのだ。

このワイヤーはギミックロッドに内蔵されているワイヤーだ。

普通のワイヤーよりも細くて頑丈なため、そつとやちよつとじゃ切れない。

「な!!何だつ!!離せつ!!」

「女の子を縛り上げる趣味は無いけど、今回は仕方ないか。これで楓の姉の敵も討てたし、一石二鳥だな」

「まだだ!!まだ終わってない!!」

「……そうだね。まだ終わってなかったよ」

俺はゆつくりとジルに手を翳す。

今の俺には見える。

他の誰にも“見えざる者”が。

次第に黒い瞳が、紫色に輝き始める。

ゆっくりと手の平を閉じ、握るとジルの首筋に俺の手形がクッキリと浮かび上がる。

「が……は……」

「少しだけ、痛いけど我慢してね。今、君の中の元凶を引きずり出してやるから」

メキメキと音を立てて、ジルの身体から引きずり出され、抜けていく白い影。

死ニタクナイ！！

いや、そうじゃない。

死ニタクナイ！！

違う。

それは俺の事じゃない。

アンタの思い上がりだ。

死ニタクナイ！！

死してもなお、現世に固執し過ぎだ。

子々孫々の恥と知れ。

初代『ジャック・ザ・リップー』！！

暗闇から呼び寄せた紫色の刃のコンバットナイフを取り出して安全カバーを抜く。

そして、空中でもがく白い影を一刀両断する。

スウツと消えていく、白い影。

それはまるで、咲き散る白い百合のようだった。

「ありがとう朱雀。これでオレは人を殺さずに済む」

「当然の事をしたまでだよ。礼には及ばない。まずは自分の犯した罪を、精算することだ」

「ジル・ザ・リッパ―4世!!」

ワイヤーを解きながら俺はジルの身体を支えてやると、背後から例の如くアニメ声が響き渡る。
やれやれ。

いちいち叫ぶ理由があるのか？

「武偵殺し未遂及び未成年略取の容疑で
逮捕する、か。」

と仕方なく続けてやる。

そうでもしないと、額に風穴開けられそうで怖い。

ジルの手に手錠が掛けられ、武偵局に連絡して迎えが来て、ジルを連行する。

「やったね朱雀!!カッコイイ!!」

「抱き着くな舞。傷に触る」

「さすがですよ先輩。感服しました」

「よく分らんが、そうかキンジ？」

「……まさか朱雀に仇を討ってもらうとはな……。まあ、いいかう」

「あんまり気にするな。協力するって言ったからな」

「やれやれ。付いて来たのに出番は無しか……。」

「九龍!!お前、いたのか!!」

「全く、最後までヒヤヒヤさせんだから!!どうなるかと思ったじゃない!!」

「耳元で騒ぐな。おでぼちゃん」

と帰りの通路を騒ぎながら帰る俺達。

エレベーターで地上に出ると、空は暗かった。

舞は楓を連れて先に帰り、キンジは珍しく白雪の買い物を手伝うらしい。

九龍は泊まっていたホテルに帰るそうだ。

なんだかんだあって、オレとアリアは海岸沿いのベンチに二人きりで座っていた。

黙っているとさすがに気まずいので、何と無く話を切り出してみた。

「もう夜か。地下にいと分らないもんだな」

「そうね。でもちゃんと帰って来たじゃない」

「まあな」

「そうだ。言うことがあったわ」

「ん？なんだ？」

恥ずかしそうに一度俯くアリア。
なんだよ。

「お帰りなさい。アタシの所にちゃんと帰って来てくれてありがとう」
「う」

「……………」

なんて事を言いやがる……………。

恥ずかしいだろうが！！

辱めも大概にしろ！！

……………まあ、返事ぐらい言っただけか……………。

「ただいま。心配かけて悪かった」

と不器用ながら言っただけ。

いつものようにボボボボ、と耳まで真っ赤に染まるアリア。
相変わらず、ダメだな俺達。

その後、二人で帰宅するや否やまた三つ巴の戦いが始まるのだった。しかし、ホントの戦いはこれから幕開けだと言つことを誰も知る由はなかった。

… 21 (後書き)

単行本2巻前半、オリジナルストーリー『ジャック・ザ・リッパー編』終了!!

これでもまだ単行本2巻前半なんだよな？

トホホ(T-T)

2巻終了までまだまだ掛かりそう(T-T)

その他もろもろの戦闘シーンはいかがでしょうか？

今回はかなり力を入れて書きましたよ

しかし、作者はとんでもない事を仕出かしてしまいました(T-T)

アランちゃんの通信シーンをとどころに入れる予定でしたが、

戦闘シーンを書くのに夢中ですっかり忘れていましたw

ごめんよアランちゃん(T-T)

次回から単行本2巻後半、読者の皆さん!!

待ちに待った『ジャンヌダルク編』が始まります

朱雀とキンジ、そしてアリアの武偵トリオがどうやって銀氷の魔女

『ジャンヌダルク』に挑むのか!?

次回更新をお楽しみに!!

ACT 6 ・対峙する最鋭の魔剣と必殺の魔弾（前書き）

とうとう単行本2巻、『ジャンヌダルク偏』がスタートしました
まずは前回の続きからご覧下さい

ACT 6 ・対峙する最鋭の魔剣と必殺の魔弾

5月5日。

昨日の事件は嘘のように、穏やかな日常に俺は舞い戻ってきた。俺はまだジルに付けられた傷がまだ癒えきっていないので、傷口が開かないようにベッドへ横になり、極力体を動かさないのでおとなしくしているつもりなのだ。

「な、なんじゃと舞！！貴様、朱雀と……朱雀とせ、接吻を交わしたじゃと！！」

「オホホホ 早い者勝ちですわ そんな魅力のないお子様相手に朱雀はキスをしませんのよ」

「ええ！！ス、スザク……アンタ、アタシに手を出しておきながら今度は舞！？」

「ええい！！朱雀！！舞やアリアが申すことは真か！！」

「え、あ、まあなんだ……アリアのは不可抗力ってやつで……舞は……その」

鬼の形相で詰め寄る楓とアリアに、しどろもどろの俺。だつてそうだろ？

身動き出来ない上に、相手が二人以上の一方的な尋問。

そりゃあ、誰だつて焦るぞ。

「さあ、何とか言ったらどうなんじゃ？」

「キスをしたのは事実だ。アリアには“した”だが、舞のは“された”だからな？変な誤解するなよ？」

「結局したのには変わりないであろう！！どいつもコイツも抜け駆けしおつて……。こんな時に怪我さえしてなければこの場で朱雀を

ワシの虜に出来たのにの」

「な!?!」「に!?!」

「……おいおい。暴れるなら外でやってくれ……」

再びいがみ合う三怪獣娘。

俺は深くため息を付き、彼女達に背中を向けた。

せっかくの休日が台なしだよ。

ピンポン

とベルが鳴り、下の階に住む彩のルームメイト・アランがひょっこり顔を出す。

「朱雀せんぱい 傷は大丈夫ですか?お邪魔します」

「ぬお!!この間の小娘か!!」

「誰が小娘だ!!僕は男だ!!」

「その容姿じゃ女の子にしか見えないじゃないの!!反則よ!!」

「いくら姉弟の双子だからといって、許すまじ!!」

「どいつもコイツも俺を女扱いしやがって!!ぶっ殺してやる!!」

……。

更に状況が悪化したな。

アランの禁止ワードをサラっと言ってのけるおまえらの気が知れん。

成りは女の子みたいでなよなよしてるかもしれんが、アラン(コイツ)

は俺達の母校『東北武偵高附属中学校』の元・強襲科卒業生。

コイツの姉・ソフィアも同じ強襲科卒業生だったな。

しかも、だ。

実は一年生の頃から俺や彩が鍛えてやってるから見た目によらず、なかなかやるぞ。

まあ、今は怪我を理由に情報科に入学したらしいが。

ちなみに禁止ワードを言った奴には例え先輩や先生だろうが、反射的に容赦なく襲い掛かるらしい。

おいおい嘘だろ!!

ソファーに横たわる俺とベッタリとくつつくソフィアに向けて、アリアと楓は黒銀のガバとUZIを臙脂色のミニスカの下から抜き放ち。

バリバリバリバリバリバリバリ!!

次の瞬間、無数の弾丸の雨が俺の眼前に迫ってきた。

間一髪、ソフィアが俺を抱えてソファーの背もたれを乗り越えて隠れる。

今まで座っていたソファーが蜂の巣になる。

……後で弁償してもらおう。

「くふふ 下心丸出しね」

と小悪魔な笑いを浮かべながら、ナース服の脇、武藤曰く“絶対領域”から見える綺麗な両足の太ももに付いているホルダーからガバメントの派生系『デルタエリート』を二丁、素早く抜いてクルクルと手の平で遊ばせた後、ソファーの影から顔を出してアリアさながら撃ちまくる。

ちくしょう、あれの生肌見て鼻血が出そうだ。

つてそれじゃあ、ただの変態だろうが!!

「先輩つ!!」

「アラン!？」

「姉貴、先輩を下へ連れていく。此処じゃろくに休めないでしょ？」

「そうね。貴方に任せるわ。突っ込まれる前に早く離脱しなさい」

「了解。んじゃ行きますよ先輩!!」

華奢な身体に似合わず、アランは無理矢理俺を抱えると、ベランダを目指して弾丸の雨の中を駆け抜け。

ベランダに着くと同時にアランは柵を越えて飛び降りた。
待て待て待て待て待て待て待て待て待て待て！！
此処は最上階だぞ！！

「うあ

！！！」

俺の叫び声が虚しく尾を引くのであった。

「なあアラン？」

「何ですか先輩？」

「ワイヤーで吊すなら先に言え！！真面目に死ぬかと思ったぞ！！」

「す、すみません！！咄嗟の判断だったんで言えないですよ！！こつちだつて！！」

「つたく……ヒヤヒヤさせやがって……」

ベルトのバックルに内蔵されたワイヤーを収納するアランをジト目で見ながら、ぶつぶつと呟く俺。

情けない叫び声を上げちまっただろが。

俺を抱えたアランは豪快にベランダから飛び降りたが、アランが瞬間に柵へワイヤーを掛けてくれたお陰で、上手いこと真下のベランダに着地した。

ちようどそこは、アラン達が生活している部屋だった。

「で？お前は何でこんな危険を侵してまで俺を連れ出した？」

「彩先輩からの指示ですよ。あんな気の休まらない場所よりはこつちで大人しくしていた方がいいだろうって」

「彩の野郎。余計な事しやがって。でもまあ、あのケンカに付き合わなくて済むならまだマシかな」

「そうですね。ゆっくりしてってください」

「んじゃお言葉に甘んじて、お邪魔させてもらうか」

彩の部屋は俺の部屋と間取りが同じで、ベランダから入ってすぐリビングになっている。

俺は先ほどみたいにソファへ横になり、まるで自分の部屋のように寛ぐ。

キッチンからコーヒーカップを持って来たアランは、テーブル越しにゆっくりと腰を下ろしてコーヒーをカップに注ぐ。

「……アラン？　そういえば彩の体調はどうなんだ？」

「縫合した所をまたやられたので、後3ヶ月以上の入院が必要って言われました」

「ったく。無茶しやがって。昔から何も変わっちゃいない……。でも、それがアイツの良いところなんだよな」

「はい！！　そうですよね！！」

などと笑いながらコーヒーを煎れたカップを俺の前に差し出すアラン。

サンキユー、と一言いうと俺はソファから身体を起こし、コーヒーを飲む。

実は、胸の傷はもうほとんど完治している状態に近い。

ジルの件の後、不思議な事にあんなに動いたのにも関わらず、何故か胸の傷口が見事に塞がっていたのだ。

だからまた開かないように、静かにしてるだけであって、そんなに痛いとか酷いわげじゃない。

そつと、自分の胸を撫でてみる。

深く剉られ、痕までくつきりと残った過去の傷。

これを見る度に、忘れていた過去の記憶が蘇りそうになる。

……ふう、たまには静かな所も良いな。

いつも五月蠅い所にいるから、この気持ちが悪く落ち着く静寂を忘れていたような気がする。

しばらく、此処でアイツらが落ち着くまで過ごして居ようか。

そうしたら少しは反省するだろ。

「そういえば先輩？」

「何だアラン？」

「今日、午後8時から東京ウォルランド花火大会ですよね？先輩は行くんですか？」

ピタッとコーヒークップを持つ俺の手が止まる。

そういえばそうだったな。

誰かと行く約束をしてたけど……。

誰だっけか？

「ああ。とりあえず行くつもりだよ。それ以前に誰と約束したか覚えてないが」

「よかつたら一緒にどうですか？彩先輩からチケットもらってたんで行くなら一緒に行きましょうよ！！確か姉貴も来るって言ったんで」

「ごめんな。今回は遠慮するよ。先客が居たような気がするから」

「そうですか……それじゃ仕方ないです」

と残念そうにうなだれるアランを優しく宥める俺。

あ、それともう一つ重要な事を思い出したぞ。

俺のケータイ、一緒に海に落ちて水没したんだよな……。

通りで何かが足りないと思ってたんだ。

ようやく思い出したぞ。

さてと、今日のうちに有り金はたいて新機種に交換しに行くか……。

…。

俺はゆっくりと立ち上がると、着崩れた臙脂色のジャケットを直して、ネクタイを整える。

「先輩？お出かけですか？」

「ああ。ちよつくらソフ バンクシヨップに行ってくる」

「待ってください！！そのまま出たらせつかく逃げた意味が無いじゃないですか！！」

「んじゃどつしろってんだよ……」
「変装しましょう。これで問題は解決します。」

と言うとアランはそそくさと部屋に戻り、何やら変装用の化粧ボックスを見たいなのを持って来る。
そして俺の顔に化粧を施し始めた。
一体、どうなるの俺。

5分経過。

ようやく化粧が終わり、衣装も彩が来ていた灰色のフォーマルスーツを借りて着替え終わる。

何故スーツ？

と思いつつも差し出された手鏡を見る。

おお…… ナチュラルな感じで俺っぽさが完全に消えてやがる。

しかし、どこかメイクの印象が不知火や熱田のような、爽やかさを感じる清々しいイケメンくんになっているのは気のせいだろうか。多分気のせいだね、うん。

それにしても流石だなアランは。

と内心、アランを褒めつつ灰色のスーツをビシッと着る俺。

「念には念を入れて、僕も変装して同行しますよ。」

「構わないが、他人の目に止まるような変装は止めるよ?。」

「わかってますよ。」

アランの変装はすぐに終わった。
ピンク色のパーカーに赤いロングパンツ。
他に変わった所は無いが、化粧をするとやたらと女の子っぽくなっ
たような気がする。

まあ、良いか。

こうすれば誰が誰だか分かるまい。

「よし。行くか」

「はい」

そう言つて玄関を抜けて外に出ると……。
運悪く買い物帰りのキンジと白雪に鉢合わせした。
ジーツと訝しげに俺を見たキンジは。

「朱雀……先輩……？」

「え、あ、人違いだ」

「……アランちゃん？」

「俺は男だ！……あ……」

「やっぱり。何でわざわざ変装してるんですか？」

「ちよっくらわけがあつてな。家に帰ったら俺に会つたつて言つな
よ？」

「は、はあ……」

と言つと俺とアランはそそくさとエレベーターに向かった。

午後7時30分。

溺死したケータイの代わりに新しいケータイを買いに行き、その後、アランのわがままに付き合っただの靴だのを買ってるうちにもうこんな時間になってしまった。

アランはウォルランド花火大会を見るために友達と待ち合わせして、るみたいで、途中で別れた。

あまりファッションには興味がない俺だが、アランに勧められて上下一式買ってしまった。

化粧を落としてから彩から借りたスーツを脱ぎ、今はそのファッションに身を包んでいる。

黒くて丈の短いジャケット、白い生地に黒いストライプ模様のワイシャツに赤いネクタイ、紫色と赤色のチェック柄のロングパンツと新作のコンバースの白黒チェック柄のスニーカー。

占めて2万4500円。

このチェック柄のロングパンツ、一着で7500円したんだぞ。

新しいケータイの購入代と合わせて4万円以上も浪費してしまったことを今頃凄く後悔している。

ただでさえ、あんな大人数で暮らしてるのに、なんてことしてるんだ俺。

ああ、泣きたい。

新しく買ったばかりのケータイを使うのに慣れないまま、基本設定だの壁紙だのをおっかなびっくりしながらしていると一通のメールが届いた。

『朱雀。今どこにいるの?』

それは舞からのメールだった。

慣れない手つきでテンキーを打ち、ウォルランドの近くと返信した。するとメールはすぐに返ってきた。

近くにベンチがなく、植木の柵に座ってメールを見る。

『それじゃ、一緒に花火見ようよ。一人じゃつまらないし。近くだから今から迎えに行く。そこから動かないでよ!!』

と書いてあった。

まあ、久しぶりだし、花火ぐらいなら見ても良いかな。

あ、舞をボディーガードするって仕事も今日だけ放棄してしまったな。

あちゃー……絶対に怒られる……。

分かった、待つてるとメールを送りつつ、頭ごなしに怒られる事を想像して深くため息をつく。

しばらくして、クリーム色の髪をキレイに結び、淡い青の生地に鮮やかな紅色の牡丹が描かれた浴衣を着て現れた。

亜麻色の帯をキレイに結び、赤い緒が据え付けられた黒い下駄をカラカラと鳴らしながら歩いて来る。

とてもキレイに着飾っている舞の姿を、情けない表情でポカンと見ていた。

見たこともない舞の姿に、俺はすっかり見取れていた。

気恥ずかしながら、舞の美しさを再認識されたよ。

いつも近くに居て、こんなにキレイだったのかと今まで気付かなかったのは、多分そんな感情を隠すために遠ざけていたからなのだろう。

そついう複雑な感情は、ややこしいし恥ずかしいから嫌いだ。

そしてしばらく辺りを見回す舞。

どうやらこうやら、俺の姿を確認していたのだらう。

再度、場所を確認するメールがケータイに届いたので返事を打つ。

『お前から見て右から4番目の植木の柀に座ってる。見付けたか？』
と返信すると、凄まじい早さでケータイのフリップを開き、メールを読む舞の姿が見えた。
どんだけ早いんだよお前？
そう内心毒づいていると、ようやく俺に気付いたのか恐る恐る歩み寄って来る舞。
何ビビってんだよ。

「朱雀？」

「気付くのが遅い」

「だってだって！！いつもそんな服着てないじゃん！！」

すぐに俺の声だと分かり、ビックリして泣きそうになりながら俺の右手を掴み、ピョンピョンと愛らしく跳ねる舞。

その時、俺は舞と一緒に揺れる胸に付いた二つの水風船と、魅惑の谷間にくぎ付けだった。

舞の胸ってこんなに大きかったか！？

間近で見るとこんなにもインパクトがあるとは……。

しかも、ちらりと隙間からブラジャーが開けて見えている。

情熱的な、あ、あああ赤いブラジャーが。

ぶおっ！！

鼻筋と身体の芯が、焼けるように熱くなってきた！？

あの感覚と同じだ……。

全身を流れるあのブラジャーと同じ色の液体が騒いでやがる。

それを堪えるために、微かにこめかみがピクついているのがハッキリと分かる。

お、落ち着けこの変態！！

これで鼻血ブーったら、変態がド変態になっちまう！！

……結局、変態なのか俺は……。

今はそれどころじゃないだろ！！

目を逸らせ！！

目を逸らせば何とかなる！！

「でもさ、案外ビジュアル系ファッション似合うね朱雀って私、二度惚れしちゃいそう」

「そ、そうか。そりゃあよかったよかった……」

目を逸らして半ば棒読み状態。

舞の方を向くな！！

向いたら俺が俺じゃなくなっちまう！！

「ねえ朱雀？実は他の女の子に内緒で買った浴衣なんだけど、似合ってるかな？」

「良いんじゃない」

「ちよつと朱雀！！どこ向いてるのよ！！」

「え、あ、それには深い事情が……」

「ちゃんとこつち向きなさい！！それから感想を聞かせて！！」

「あ〜う〜！！分かった分かった！！見るから首を擦ろうとするな！！イタいいタいいタいいタいい！！」

半ば強引に、自分の方へ向かせようと俺の首を擦る舞。

それに反抗するが痛みには耐え切れず、舞の言う条件を飲む俺。

「つか、舞にこういう事をされたのは初めてかもな。」

「アリアと逢う以前までは、どこにでもいるような大人しくてカワイイ子だったのに。」

まあ、妄想癖さえなければの話だが。

渋々、ゆっくりと舞の方に顔を向けると。

いつもは冷たく突き放しているのに、こんな時は何でこころも守りたい、安心させてあげたいと言う心情が嫌でも疼き出すのは。別に自分が想う理想の女の子を求めているわけではない。無論、一度も恋人みたいな関係を持った事はない。そもそも俺の中で女の子はとてつもなく嫌な存在だ。なのに何故、こんなにも献身的になってしまっただけ？ 相手はただの、俺のクラスメートじゃないか。

「朱雀？」

「ん？」

「花火、キレイだね」

「ああ。そうだな」

「朱雀は私と花火、どっちがスキ？」

という究極の質問を問われ、一瞬、思考が停止する俺。なあ、答えれないのは分かってるだろ？ でも答えないと、手の平で思い切りひっぱたかれそうなのでちょっと考えてから言った。

「舞の方がスキに決まってる」

「え……／＼／＼／＼」

「花火なんて一瞬、咲いた瞬間だけキレイって思うだろ？ でもそれよりも綺麗な舞だったら、この先もずっと輝いていそうだもんね。だから俺は舞の方がスキだ」

「……きゃ／＼／＼／＼」

「おいおい！！別に告白とかそういうのじゃないからな！！質問にそれ相応の答えを出したただけであって、舞を特別にす、すすす好きってわけじゃないからな！！誤解はするなよ！！いいか！！」

と急いで訂正する俺を余所に、一撃で妄想の世界へ旅立った舞。

それを見た俺は凄まじい後悔の念に襲われる。

ああ、余計な事を言わなきゃよかった……。

ただでさえ、アリアや楓が居たらこの場で袋だたきだぞ俺。

何でこんな事を予想出来るんだ？

男の勘って奴なのか？

なんて考えた瞬間、背後に凄まじい殺気を感じて振り向くが。

俺の予想とは裏腹に、そこには誰もいなかった。

ふう、と完全に安心してゆっくりと胸を撫で下ろす俺。

その時、どこからか美味そうな匂いが漂ってきた。

そういえば、アランに振り回されてお昼ご飯食うヒマが無かったな。

「なあ舞？」

「はひ？」

「この花火大会、屋台とかも出るんだろ？一緒に食いに行こうぜ？」

お昼ご飯何も食ってないから腹減った」

「もちろん 朱雀となら断る理由がないもん 行こ行こ」

「待てよ……そんなに引つ張るなって」

と強引に俺の手を握り、歩き出す舞。

澁刺とし、楽しそうに笑う舞の横顔に照る、花火の光。

まあ、その笑顔を見ただけでも、今日は良いとするか。

豪快に打ち上がり、キレイに咲き散る夏の夜の幽玄なる華を見上げながら、今晚だけでも楽しむかと心に決めたのだった。

なんやかんやあって、腹ぺこの俺と舞は子供のように無邪気に屋台を回って金魚すくいだの水風船釣りをしたり、タコ串（串にタコ焼きをぶっ刺したなんかヘンなヤツ）を冷ましつつ頬張りながら、特設されたベンチに腰を下ろして夏の夜に咲く幽玄な華を見上げる。幾重にも豪快に打ち上がり、咲いては儂く散る華は優雅でキレイだ。アリアと出逢ってから、なぜかこんなシチュエーションにも慣れてしまっている俺に正直驚いている。昔なら、とつと一人で帰ってるしな。

「ねえ朱雀？私と一緒に居て楽しい？」

同じタコ串を女の子特有の食い方で、チビチビと頬張り、俺の方をチラッと見る舞。

キレイな顔のモツチリとした口元に、青海苔とソースが付いていた。何してんだよ、お前。

「ああ。久々に楽しいと思ったよ。それに口元に青海苔とソースが付いてるぞ？」

「え！？」

「ほれ、ティッシュで拭いたる。ちよつとこっちに来い」

昼間、アランと行った洋服店で貰ったポケットティッシュを取り出すと、ぐいっつと顔を近付けた舞の口元を優しく拭いてやった。まったく。

「ごめんね朱雀」

「ん？」

「子供みたいに拭かせちゃって」

「いや、別に謝る事じゃないし。俺がやるって言ったんだから」

「うん、そっだよね！！」

と無邪気に笑う舞。

まあ、良いか。

俺は食い終わったタコ串の串を芝生に突き刺すと、ゆっくりとベンチから立ち上がる。

舞は俺の真似をして串を芝生に突き刺して俺を見上げる。

「どうしたの？」

「いや、何でもない。ジツとしてるのが嫌だから立つただけ」

「そう」

「今の時間が8時57分だ。花火も見た事だし、帰ろうか？」

「もうちょっと一緒に居たいな。ひさしぶりに二人きりなんだし。

そっだ！！花火しようか！！」

舞が思い付いたように言うのを見て、やれやれと頭を振る。

だが、朱雀よ。

今宵は我を忘れて楽しむと決めたではないか。

だったら少しだけでも、彼女の傍に居てあげるのが男だろう。

さて、そうなると花火が出来る場所を探さなくちゃな。

「よし。やるか花火」

「やるの！！やったあ！！」

「場所は移すぞ？まさか此処じゃ出来ないからな」

「わかった 私、花火が出来る取っておきの場所、知ってるよ 案内したげる」

「そっか、んじゃ任せる」

意気揚々と立ち上がり、俺の手を引いて駆け出す舞。

無理矢理引つ張られていく俺。

イタイイタイイタイ。

わりと力が強いな。

俺の手に舞の指が食い込む。

ま、ボディーガードの件もあるし、一緒に楽しんでいけば問題は無いだろう。

海水には浸かったものの、俺のM8000(ベレ)とGLOCK17(グロ)は無事に生きていたし、今もちゃんと携帯している。ロッドは無理だったが、舞から貰った紫色の刃のナイフは健在。

しかし制服では無いので所定の位置とは大幅に違うが。そのまんま駅へ駆け込むとそれぞれ切符を買っていざモノレールへ乗車して台場へ。

ゆりかもめで有明。

そこからりんかい線で新木場。

最後に京葉線。

ホイホイと乗り換えて目的地に着いたみたいだ。

葛西臨海公園駅、か。

なるほどな。

電車に乗るのが疲れたみたいに深く深呼吸すると、再び俺の手を握って駆け出す舞。

慌てて付いていく俺。

イタイイタイイタイイタイ。

引つ張られる手がイタイ。

と半ば涙目になりつつ、舞は俺を連れて駅から海の方に歩いた。

ちよつとした森みたいになっている葛西臨海公園に入ると、電柱が点々と海の方へ続いている。

いかにも夜の公園と言った風情があるな。

俺は一応ボディーガードなので周囲を確認するが、夜とはいえ此処

は売店も開いているし、ポツポツと人も見かける。ふむ、危険はそんなに無いだろう。出るとしたらカッブル狩りのヤンキーだが、あいつらも帯銃している武偵を襲うほど馬鹿じゃないし。

「ねえ朱雀？上を見て！！満月だよ！！」

「お、ホントだ」

シーンと静まり返る間の中、公園の道を海に向けて歩く。

子供のようにはしゃぐ舞に言われて空を見上げると、空は満月だった。

「キレイだね」

「そうだな」

「何かテンション上がる！！ね！！朱雀も楽しいでしょ？」

悪いが、お前を見ての方がよっぽど楽しいぞ俺は。

しかし、握られていた手が痺れている。

「まあな」

「よし、あれに負けないぐらいでっかい花火、打ち上げてやる！！」

「無理だ無理。そんな花火……あ……」

「……どうしたの？」

「俺としたことが、花火を買うのを忘れていた」

「ええ……」

「そんな顔で見るなよ。後で買ってくるから！！な？」

ジト目で俺を見る舞に、苦笑いを浮かべる俺。

何がおかしかったのか、突然、舞はプツッと含み笑いを浮かべる。

苦笑いを浮かべた時の俺の顔、そんなにヘンだったか？
ちよつと傷付いたぞ、今。

引き続き海へ向けて歩く中……舞はいつもの癖で少し顔を俯かせて

「幸せ……」

と、小さく呟くのだった。

人工なぎさに出た。

まさか、舞がこんな穴場を知っているなんて思いもしなかったな。
辺りを不思議に見回すが、誰もいない。

あ、そうか。

此処は見ての通り人工の砂浜だが、海水浴や釣り、バーベキューまでもが禁止されているので、人気が無いのか。
なるほどなるほど。

「終わったね。花火大会」

東京湾岸のウォルトランド上空に見えるのは、雲みtainな花火の煙
だけだった。

「そうだな。でも楽しめただろ？」

「うん！！一人じゃなくてよかった」

「そうか……」

「一年前の花火大会の時とは違うね。歩きながら思い出してたけど
やっぱり朱雀は変わったよ」

「一年前？ああ」

俺は変わった、か。

ちよつと記憶を遡り、戻ってきた俺はそう答えた。
そうだな。

一年前、俺が二年生の時だったっけな。

舞に誘われてこのウォルトランド花火大会を見ると約束した事があった。

しかし、急遽政府から依頼が入り、集合時間の1時間前にドタキャンした。

行きたくは無かったのは事実だが、せつかく誘われたんだし行くこうとして最善の努力はした。

だけれど、結局、思いも寄らぬ横槍を刺されてしまい、計画はお開きになってしまった。

「そんな事もあつたっけな……」

「でも、あの時の約束は守ってくれたじゃん。ウォルトランドで会ってくれた瞬間から」

と、あどけなく笑いながら、さくつと砂浜の上に立ち、海の方を向く舞。

その月夜に陰るその後ろ姿は、とても優雅で綺麗だった。

夜風に揺れるクリーム色の髪。

全く、会った時から何にも変わってないなお前は。

「いつも朱雀が私の傍にいてくれたから、実際、今日の花火が見れなくてもよかった。朱雀が私の傍に居て、楽しいって笑って言うてくれたから、私はそれでよかったの。それに……」

そついうと舞は、星を背に振り返った。

「朱雀が、私の事をスキって言うてくれたから」

それはちよつとした誤解だが。

その笑顔は、ホントに、俺を思っている表情で。

舞……………

俺は……………俺なんか……………

武偵としては完璧なのかも知れないが、大の女の子嫌いで。

いつも邪魔物扱いした挙げ句、見た途端に逃げたり、冷たく接した最低な男だぞ。

なのにお前は、そんな俺を慕ってくれる。

なんでそんなに優しいんだよ。

まるで母親のように、なんでこんな俺に優しく接してくれるんだよ。これじゃあ……………

何もせずにいらなくなるだろが。

「舞」

「ん？なあに？」

俺がちゃんと呼ぶように言ったので、舞はいそいそと近寄ってきた。

「寒くないか。寒いだろ。寒いはずだよな。よし、これを着て待ってる」

俺は買ったばかりのジャケットを脱ぐと、有無を言わず舞の肩へそれを掛ける。

「朱雀？朱雀は寒くないの？」

「大丈夫。これから暑くなる予定だから心配するな。少し行ってくる」

なんだか分からずにいる舞が何かを言い出す前に

俺は砂を蹴立てて、駅の方へ走り出した。

本当は護衛対象をだだっ広い場所に置いていくのは良くないのだが、まあ、どうせ敵なんていない。

大丈夫だろう。

思った通り　　此処は安全だったようだな。
ひとつ走りして戻って来ると、舞は砂浜から少し離れたベンチに座
って、俺の上着を着て大人しく待っていた。

「待たせたな舞。」

と呼び掛けるが……ありや？
反応がないな。

「おーい」

と舞が袖を抱きしめるようにしていた俺のジャケット越しに肩を叩
く。

すると舞は、ハッ　　と振り返った。

茶色い瞳には、怯えたような色がある。

……なんだ？

「どうした？大丈夫か？」

「え、うん。大丈夫大丈夫。なんでもないよ。これがあったから平
気」

舞は何かをごまかすように、俺のジャケットの袖を少し掲げた。

「このジャケット、朱雀のにおいがするから……朱雀がすぐ傍にい
るみたいだった」

俺は苦笑いする。

「今日買ったばかりだぞ。大丈夫か？」

「え、そうなの!?」

「そうだよ。それより、ほれ」

言いながら、ひよい。

と俺は舞に

さつき、公園の売店が全部閉まってしまったので駅内のコンビニで買ってきた花火セットを差し出した。

「……あ」

「ほれ。約束通り花火やるぞ」

シューー!!

砂浜にしゃがんで、俺達は花火をやっている。

凄いい勢いで先っぽから出ていく火花を、俺は睡魔と戦いつつぽんやりと見ていた。

先ほどのハイテンションな舞は、いきなりテンションががた落ちしたらしく、乗り気が全くない。

大人しく握っている花火の火を、ジーツと見詰めている。

ちよつと垂れ目の、まつげの長い、優しげな目が　その火で照らされて、星明かりの薄闇に浮かんで見える。

こうしてみると、やっぱり……美人だよな。

「朱雀？」

「んお？なんだ？」

「綺麗だね、花火」

「……ああ」

ふと、俺の足元を見ると、線香花火の残骸が落ちていた。誰がやったんだろう。

そんな事を考えながら視線を戻すと、二人の花火の火が消えていた。

「やるか？まだあるぞ？」

「うん」

なんだ？

不自然に会話が続かない。

黙ってモゾモゾと花火セットの中から、花火を取り出すと。

あれ、これで最後が？

2本入りの線香花火を取り出すと、一本ずつ分けて手渡す。

さつきついでに買ってきた100円のライターを出して先端に火をつける。

カミナリのミニチュアみたいな火がパチパチと音を立てる。

その可愛らしいカミナリをジーツと真剣に見る舞。

俺は線香花火を片手に、必死にあくびを堪えていた。

いかんいかん。

俺も集中しよう。

ふと前を見れば、和服と言うやつは色つぼい構造して……

前屈みにしゃがんでいる舞の 胸元が、かなり広く開いてしまっ
た。

パチ……パチ。

線香花火の明かりで、その白い肌が点滅するみたいに照らされてい

る。

(……………お、お蔭様で目が覚めたぜ……………)

先ほども、つい見てしまったが、隙間からまた赤いブラが顔を覗かせている。

そ……………そういえば彩が昔言ってたっけな……………。

和服とは、世界で一番脱がせやすい服だとかなんとか。

あ　　朱雀くん。

余計な事を考えるでない。

何か別な事を考えて気を紛らわせ。

頭の中で羊の数を数える。

1、2、3、4……………。

「朱雀……………ホントにありがとう。私、今夜は興奮して眠れなそう」

花火を見詰めながら舞がそう言ってきたので、俺はゆっくりと顔を上げる。

あ、危ない危ない。

マジで寝てしまいそうだったようだな。

そうだよ、会話だ。

簡単な方法を忘れていた。

何が羊の数を数えるだ。

本気で寝ちまうだろうが。

会話に集中すれば、赤いレースの下着のことから意識を逸らせるはずだ。

……………興奮して、って何に？

内心舞に突っ込むが、ホントに突っ込むまでの気力がないので諦めた。

「眠れなそう、か。ハハツ。相変わらず大袈裟だな。ただ屋台を回って花火見て電車に乗って、公園をブラブラ……っ……っ」

言葉の選択をいきなりミスった俺がちょっと言い淀んだので、舞はキョトンと首を傾げる。

「ぶら？」

「あ、え、い、いや、うるついて　　だな。そんで花火をやっただけだろう。たいしたことじゃない」

「……でもね。私にとっては特別なことだよ。誰にも邪魔されないで二人きりで楽しめるってことは」

線香花火の火は、だいぶ小さくなっている。

「朱雀は“あの人”みたいに、私に奇跡をくれる人だったんだよ。受験の日だって傷付いた私を優しく介抱してくれたし」

「あ、あれはその。フツー倒れたら放って置けないだろ」

「いつもドジで変な私を、朱雀は影から支えていてくれた。小さい頃、変な人達から救ってくれた“あの人”みたいに優しく支えてくれた。だから、私は武偵高で、あの人を探して恩返ししようと思っ
てたの」

「あの……人？」

「名前は分からないけど、『明智』って言ってた。その人に恩返ししたかったの。それが朱雀。貴方だったの」

「アハハ……」

確かに俺の旧姓は『明智』だ。

明智　朱雀。

だけれど、舞のような女の子にはあった覚えはない。
渋々後頭部を掻きながら、俺は首を横に振るう。

「恩に着るような事をした覚えもない。だから返す必要もないよ」
そういうと、舞は不思議そうな表情を浮かべたあと、先ほどのような笑顔になる。

「朱雀はやっぱり、朱雀だね」

「は？何だよそりゃあ」

……ポトリ。

最後の火玉が、落ちた。

ジジ……と、砂の上で消えて行く火を二人で見詰める。

そして、スツ　と、ため息が出そうなほど気品のある物腰で立ち上がる。

俺もそれに合わせて立ち上がる。

ざん……

ざざん……

人工なぎさに打ち寄せる、波の音　。

「実はね、この間。朱雀に黙って白雪ちゃんに巫女占札って言う占いをしてもらったんだ時に、ね……」

波打際の方に向いた舞ぬ、か細い声で言われて、俺は小さく頷く。

「朱雀がいなくなるって出たみたいなの。あと一年以内に、此処から」

「……いなく……なる？」

「うん」

「ハハッ。たかだが占いだろ。実際にそうなるはずないだろ」

「……私、それ……アリアがどこかに連れていっちゃうんじゃない」

かつて思ってた」

「まさか」

舞の言葉に、俺は半ば笑いながら応えた。

だが、舞の態度は何かに捕われているようで弱々しかった。

「アリアは、朱雀を変えたから。アリアと出会ってから、朱雀は明るくなったよ」

「……………」

俺は、それを否定はしなかった。

それは自分自身、良く分かっている。

女の子と関わりを持つことさえ、ままならなかった俺が、フツーに女の子としゃべったりして遊んでやがる。

それだけ、俺は変わった。

「……………いいの……………」

「何が？」

「朱雀が幸せになれるなら……………アリアのこと、好きなら……………アリアと一緒に、いいの。私は陰からでもいいから、朱雀を支えて……………ご恩返しがしたかった」

「は？一体何を」

「だから今まで、いろんなことに努力してきたつもりだった。勉強も部活も頑張って自分を高めようとして……………でも、そんなこと結局、何の役にも立たなかった」

舞が、俺の言葉を遮って言った。

なんだよ、いつもの舞とは全然違うじゃないか。

何か　今まで隠していた胸の内を、駆け足で俺に伝えようとして
いるみたいだった。

「……ヘンな事ばかり言うなよ。アリアとはただのパートナーだって前言っただろ。」

と、小さい声で言う俺。

そのあと、なんて舞に声を掛けていいか分からないまま、黙って聞いている。

ゆっくりと振り返る舞は……暗くてよく分からないが、その瞳を潤ませていたようだった。

そして、ぼすつ。

「朱雀　　っ!!」

「なっ、お、おい」

俺の胸の中に、飛び込んできた。

いつもべったりしていた舞だが、今回だけは違う。

ど、どうしたってんだよ!!

マジで!!

「ごめんね。ホントにホントにごめんね朱雀」

顔を上げた舞が何に対して謝っているのか分からなかったが

潤んだその瞳に、黙ってしまう俺。

月明かりに浮かぶその顔は、ああ、最初から分かっていたが。

本当に、綺麗で。

少し季節外れの浴衣も、アップに結った髪も、完璧に似合っていて。クラスメート　　会った頃から友達のように接してきた、水のように

大切な、しかし余計なものの介在を許さなかった関係……。

その関係に今、何か蜜のようなものが滲み、混ざっているのが分かる。

狂おしいほどに甘い、飲み干さずにいられなさそうなものが

「朱雀……突然、ごめんね……今さら言うのもあれだけど……私のわがままを一度だけ、一つだけ叶えてください……」

唇を震わせ、弱々しく言う舞は、次の一言を言ったら死んじやいそ
うなぐらいにいっぱいいっぱい、という表情をして……

「今だけでいいの、今だけでいいから 私を、私だけを見て……」

まだ夏には早い涼しい夜風が、ふっ、と俺達を撫でたその時
静かに、前髪の下、穏やかな、愛らしい目を
つむった。

「……もう一度だけ……キス……してください……」

はぁ……

俺は深くため息をついた。
とても動揺していた。

聞き間違い、じゃないな。

小声は小声だが、こんな至近距離だ。

ど、どうしたら良いんだよ俺。

気が付けば俺の手は、俺の意識とは別に、本能のままに 舞を止
めるためのなかどうなのかも分からないままに、その浴衣の背中に
そっと触れて。

ギュムツと、ちゃんと舞を抱き寄せた。

「……朱雀？」

「……ハハッ。頼み通りキスは出来ないが、こうしてやるぐらいな
ら俺にだって出来るさ」

「……………うん」

「落ち着くまでこのままでいてもいいからな？だから泣くんじゃねえ」

「……………うん」

か細い声で返事をする舞。

とりあえず一件落着いてか。

落ち着いたように、啜り泣く声が止んで来る。

俺は身動きが取れないので、仕方なく舞が満足するまでそのままです。

それが、別れの時になるとは思いもせず。

連休が終わり、いよいよ高校生活最後のアドシードが始まった。

俺は元・拳銃射撃競技の優勝者と言うこともあり、本来なら近接格闘競技や拳銃射撃競技の武偵高特別監督として教師達と試合を観戦する予定だったのだが、閉会式のアルカタのバンドのメンバーだった不知火が急に風邪を拗らせて寝込んだらしく、ヴォーカルを代わってくれと言うことで仕方なく放課後を返上してボイストレーニングにみっちり励んでいた。

まあ、可愛い後輩^{キンジ}の頼みなら仕方が無いか。

歌はそんなに下手では無いし、東北武偵高附属中学にいた頃は趣味で彩と後輩達でバンドを組んでヴォーカルをやっていた事もあり、そんなに苦では無い。

何やかんやでこれからしばらくは短縮授業とちょっとした手伝いぐらいで日々が進んでいく。

こんなハードなスケジュールは、三年間で初めてかも知れないな。昨日あのあと、舞はしばらく俺に抱き着いて離れなかったが、何かを思い出したように自分の元いた女子寮に帰って行った。

無理もないよな。

一人になりたい時だって、誰でもあるさ。

もう正直、いもしない敵に休みなく備える馬鹿馬鹿しさには辟易していたし……。

実際、あれだけ無防備に夜遊びしていたのに結局何も無かったただだから。

とは言うものの、昨夜は敵の舞が居ないことを良いことに、安眠妨害してきた楓やアリアもそうだが、なんでかうまく寝付け無かった。そういえば、昨日帰った時も白雪も見なかったような気がするが、キンジも俺と同じ状態だったのであえて何も聞かなかった。

何が何だかよく分からん人工なぎさの件もあつたし、上手く言えな
いが妙な胸騒ぎがしたのだ。

その胸騒ぎの正体が何なのかまでは分からなかったが。

で、二人の安眠妨害のせいも重なって完璧に寝不足だ。

今の俺は迫り来る睡魔と戦いつつ、強襲科の実習棟にて近接格闘競
技や拳銃射撃競技の代表者たちのコンディションチェックやトレー
ニングの相手をしている。

監督の仕事の一つだが、眠気覚ましも兼ねて熱心に身体を動かす。
このあと、まだ歌詞を覚えきっていないので仕上げのボイストレー
ニングも詰まっている。

久しぶりに射撃のレーンに立ち、M8000を取り出して右往左往
するターゲットにウィークハンドで構え、銃口を向ける。

だんだんと落ち着いていくのが分かる。

ダダダッ！！

トリガーを目一杯引くとスライド勢いよく三回後退し、ノズルフラ
ツシユがパパパツと起きる。

銃口から放たれた・45ACP弾は吸い込まれるようにターゲット
の中心に集まり、三発全弾、ターゲットのど真ん中を撃ち抜いたの
だ。

シン、とあんなに煩かった部屋の中がいきなり静かになり、やがて
それは歓声へと変わった。

後ろにいた競技に出場しない後輩達は、尊敬の眼差しで俺を見る。

しかし、そんな事も気にかげず俺は黙々と、次から次へと出て来る
ターゲットを簡単に仕留めていく。

タクティカルリロードを鮮やかに決め、再び黙々と撃ち続ける。

よし、これくらいにしておくか。

ときな臭い部屋を後に屋上に出て、その場に横になる。

はあ……いい天気だ……。

ふと、胸ポケットから歌詞カードを取り出し、この間演奏した時に
録音したメロディーを今流行りのiPodで流して耳にイヤホン

嵌める。

「I'd like to thank the person . . .」

とキンジが掻き鳴らすギターのFマイナー和音で始まるフー・シヨット・ザ・フラッシュの原曲カバー、更にコピーして歌詞を変えたメロディーを寝そべりながら目を閉じ、言葉に出してハッキリと歌う。

そもそも歌うのは嫌いじゃないし、間違っても誰も此処には来ないだろ。

そしてあれから8時間が経過した。

午前9時に此処にきたので、もう午後5時になっていた。

俺は陽気な陽射しにやられ、睡魔に大敗を期してすっかりうたた寝していた。

アリアがプールであっぷあっぷ溺れている夢を見ると。

「ちょっとバカスザク!!何してんの!!」

「うっ!!」

どこからともなく微かにイヤホンの隙間から聞こえたアニメ声とともに、どむっと顔面に物凄い衝撃が走った。

恐る恐る、ゆっくりと目を開けると、アリアが仁王立ちしていた。

「痛いな……どうした?」

低く呻きながら、ゆっくりと身体を起こすと、アリアは犬歯を剥き出しにして吠えた。

「どうしたじゃないわよ!!ケースD7よ!!よくのうのうと寝て

れたわね!!」

ケースD……!!

眠気が吹き飛び、やたらめったらにポケットを漁る。しまった!!

俺としたことが……

ケータイをロッカーに入れたままだった。

ケースDとは、アドシールド期間中の、武偵高校内の事件発生を意味する符丁だ。

だがD7となると『ただし事件であるかは不明確で、連絡は一部の者のみに行く。なお保護対象者の身の安全のため、みだりに騒ぎ立ててはならない。武偵高もアドシールドを予定通り継続する。極秘裏に解決せよ』と言う状況を表す。

しくじった。

一体何が起きたんだ？

それを聞くよりも早く囁くように耳元でアリアが答える。

「白雪と舞が失踪したわ。昼過ぎから連絡が取れてないみたい」

「お、お前はキンジと一緒にじゃなかったのか？」

「そんなことはいいの。それより今は」

二人の搜索が先か。

M8000とGLOCK17の装弾数を確認し、ナイフ、ロッドを確認する。

よし、全部揃ってる。

目の前で携帯を見て、再び閉じてポケットに突っ込むアリア。

「キンジから連絡が来てるけど、それは後よ。今から白雪と舞を探すわ。手伝ってちょうだい。パートナーでしょ？」

「無論だ。急ごう」

と言うものの、ケースD7だ。
みだりにちよこまかと動けば、保護対象者である二人に危険が及ぶ
可能性がある。

「なあアリア？迂闊に動けない以上、どうしようもないぞ？場所が
分からなければ見つけようが……」

「大丈夫よ。そのためのキンジなの」

「はあ？」

「安心しなさい。すぐに分かるわ」

言っている意味が分からない俺。

アリアはずっと屋上から風景を眺めている。

そのまま20分、30分と虚しく時間だけが過ぎていく。

俺は落ち着かないのでロッカーに携帯を取りに行き、武偵高のメー
ルを読みつつ戻って来る。

舞からは一通もメールは来てなかった。

「ようやくキンジが動いたわ。後を追うわよスザク」

「ああ。急ごう」

俺はアリアに続いて、階段を急いで駆け降りる。

内心、とても焦っていた。

舞の性格からすると、心配を掛けたく無かったのだろう。

メールを送らなかったのはそのため。

なんで気付いてやれ無かったんだよ！！

俺は！！

その気持ちが焦りにさらに追い打ちを駆ける。

無事で居てくれ、舞。

ごめんよ、ホントに。

地上に降り立つと、アリアへ続いて俺は南方方向に向けて再び駆け出した。

そんなこんなアリアに連れられるまま、キンジを追い掛けて第9排水溝まで来てしまった。

案の定、第9排水溝のフタは無造作に開けられっぱなしだった。

この下にキンジと、白雪と舞がいるのか。

確か、第9排水溝のした地下倉庫に繋がっている。

まあ、地下倉庫と言うのは対外用の柔らかい言い方で、ようは火薬庫だ。

隅から隅まで物騒な東京武偵高でも、強襲科・教務科と並んで三大危険地域の一つに数えられている……が。

三年も此処にいたので、俺の感覚がズレたのかほとんどビビりもしない。

隣に立つアリアもそのようである。

武偵高の地下は船のデッキみたいな多層構造になっていて、地下2階から水面下になっている。

俺達はそのまで階段を駆け降り、さらに下の禁止区画に続くエレベーターがある。

案の定、動かない。

俺は変圧室に入ると。

マンホールのように床に設置されている梯子用の扉は浸水時の隔壁も兼ねているため、3重の金属板で出来ている。

パスワード認証、カードキー、それと武偵手帳に内蔵されている非接触ICを使って扉を開けるのだが、先にキンジが使ったらしく梯子はそのまま下ろされていた。

俺達はそれを使い、一気に地下7階まで降りていく。

途中、梯子は錆びびていて手を切ったりしたが、大切な仲間を失うよりは痛くない。

地下倉庫の片隅、今はもう使われていないらしい資料室に降り立った時だった。

暗いな。

音を立てないように忍び足で開いていた扉を潜り、廊下に出るが、やっぱり暗い。

「電気が落とされてるわね」

と隣に続いて来るアリアが呟く。

言わんでもそれくらい分かる。

内心、アリアにそうツツコミながら辺りに注意を向けて歩いていく。点いているのは、赤い非常灯だけだ。

俺はジルの件もあったので予め裏ポケットに忍ばせておいたマグライトを手に取り、辺りを照らす。

廊下は広く、左右に弾薬棚を連ねている。

俺の勘だと、この先は大広間みたいなただっ広い空間になっている。さしずめ、地下倉庫の中でも最も危険な弾薬が蓄積されている大倉庫と呼ばれる場所のはずだ。

その時、微かに会話する人の声が聞こえた。

ゆっくりマグライトの明かりを消し、大倉庫の扉を少しだけ開けて中を覗く。

すぐ目の前にキンジの姿が、赤い光の下に微かに見えた。

やっぱり先に来てたのか。

「誰かと話してるみたいね」

「もうちよっと様子を見よう。相手が動くかもしれない」

途中でキンジと合流して、敵にバレたら元も子もない。

此处は慎重に、行かなくては。

襲撃に備えて右胸のホルダーに入っているGLOCK17のグリップ

ブに手を掛けて、ハツと思い出す。
ちよつと待て。

ここは曲がりなりにも火薬庫だ。
拳銃をぶつ放して弾薬に当たって爆発したら、この学園島が大惨事
になりかねん。

上には大勢の人もいるしな。

ゆっくりと手を戻し、腰の脇の特製ホルダーからロッドを三本、指
に挟めてシュツと取り出す。

アリアもアリアで、背中にある寸詰まりのポン刀をゆっくりと抜き
放つ。

しばらく耳を傾けていると。

「どうして私を欲しがるの、魔剣？大した能力もない、私を」

「そうよ。なんで私達を欲しがるわけ？」

怯えきつた、白雪の声と舞の声。

それを聞いたアリアは魔剣に反応するようにピクツと身体を動かす。

魔剣　！！

実在していたのか……。

「裏を、かこうとする者がいる。表が、裏であることを知らずにな」

少し古風な、男喋りの　　女の声。

隣で出る幕を窺うアリアと俺。

ロッドを握る俺の手は微かに汗で滲んでいた。

極度の緊張からか、息が出来なくなっていた。

「和議を結ぶとして偽り、陰で、備える者がいる。だが闘争では、
更にその裏をかく者が勝る。我が偉大なる始祖は、陰の裏　すな
わち光を身に纏い、陰を謀った者だ」

「何の、話……？」

「……………」

「敵は陰で、超能力者を練磨し始めた。我々はその裏でより強力な超能力者を磨く。その大粒の原石。それも、欠陥品の武偵にし、か守られていない原石に手が伸びるのは、自然な事よ。不思議な事ではないのだ。白雪、舞」

「欠陥品の武偵……？誰の事」

「欠陥品……ふざけないで」

二人の声に、怒りの色が混じる。

対する女は、少し嘲るような声になった。

「ホームズと伊達には少々手こずりそうだったが。あの娘と男を遠ざける役割を、私の計画通りに果たしてくれたのが遠山キンジと鳳凰院朱雀だ。ヤツらを欠陥品でなくて、何だと言うのだ？」

「キンちゃんは。キンちゃんは欠陥品じゃない！！」

「朱雀もよ！！朱雀のどこが欠陥品なのよ！！」

「だが現にこうして、お前達を守れなかったじゃないか」

「それは……それは違う！！キンちゃんは貴方になんか負けない！！迷惑を掛けなくなかったから……私が呼ばなかっただけ！！」

フンツと言う笑い声が白雪の叫びを遮る。

「迷惑を掛けたくない、か。だがな二人とも。お前達も、私の策に一役買ったのだぞ？」

「私……が？」

「電話を覚えているだろう？」

嘘だろ。

あれは正しくキンジの声だ。

「すぐに来てくれ白雪！！来い！！バスルームにいる！！」
「っ！！」

「お風呂空きましたよ。いま朱雀先輩が入ってます」
「！！」

なるほど。

あの時、キンジの声を使って舞を風呂場に誘導したのか！！

「ホームズは無数の監視カメラを仕掛けていたが お前たちの部屋を監視していたのは私のほうだ。あの時、白雪はリビングの窓際において、遠山が入っていたバスルームの明かりが消え……ちようどそこに神崎アリアが帰ってきた。舞の場合は朱雀が先にバスルームへ入ってる事を知らせたら、まず行くだろうと推測してね。私はそういう好機を逃さない性格でな」

「キンちゃんの振りをして」

「私達を動かして、仲間割れさせようとしたってわけね……？」

「ジルを使って分断を謀ったのは失敗したが、楓は傷付き、アリアは数日も経たずして、お前から離れた」

ジル？

そうか、初めに戦力的に自分を有利にするため、俺や楓、彩を襲わせたのか。

そもそも、だ。

自分から目を背けるために、ジルを陽動として使い、俺達はそれに関与しなかったというわけか。

キンジの時は分からんが、とりあえず見ていたのか。
忍び寄って、いたのか。

俺達に。

俺と楓、キンジとアリア、ターゲットの舞と白雪に。

そして、まず守りの要になるアリアと楓を遠ざけ。
俺に隙が出来るのを待ち。

そして今、二人を連れ去ろうとしているのか……。

「私に続け、白雪、舞。だが……お前は我々の一員になる前に、遠山と鳳凰院に幻滅すべきだ。お前たちのような逸材が見も心も捧げる人物は、別にいる」

女の次の台詞に、俺の頭の中は真っ白になった。

「私が今から、連れて行ってやる　イ・ウーにな」

イ・ウー。

神崎かなえさん　アリアの母に懲役846もの冤罪を着せ、何の罪もないジルに人を殺させ、そして優しく強かった、憧れていた俺の義兄『鳳凰院 清隆』を別人に変えた　！！

ゼツタイニ、許ルセナイ　！！

「どうしたの？スザク？」

隣にいるアリアが驚きつつ、心配そうに俺を覗き込む。

それくらい、俺の身体は怒りで震えていた。

胸が焼けるように、焼けるように熱い。

胸の傷口が、魔剣の言葉に反応して……。

あの時の、ジルと対峙した時のような何とも言いようがない感覚に襲われる。

呼吸が荒い。

落ち着け、落ち着くんだ俺。

「だ、大丈夫だ。俺の事より、魔剣の方に集中しろ」

深く、深く深呼吸をし、無理矢理身体を落ち着かせる。

頭の中が、思考がごちゃごちゃだ。

正常な判断が出来ていない。

ゆっくりと中を覗くと。

「白雪、舞さん！！逃げろ！！」

とキンジが動いた。

緋色のバタフライナイフを構え、物影から飛び出す。

あの、バカ野郎が。

俺は扉を開け、真っ先にキンジを追う。

薄暗くてよく分からないが、大体キンジの性格からして、突っ込む気だろっ。

敵がいるのは分かっているが、迂闊に飛び出して罠にはまったらどうすんだよ。

「キンジくん!?!」

「キンちゃん!?!」

驚いた二人の声が、大倉庫に響く。

「来ちゃダメキンちゃん!!逃げて!!武偵は、超偵には勝てない!!」

悲鳴のような白雪の叫び声に続いて、

何かがキンジに向かって飛来するのが分かった。

俺は。

勢いよく背後からキンジに体当たりをした。

「わっ!?!」

案の定、キンジは前のめりにつんのめり、リノリユームの床に大転倒する。
どっ。

飛来した何かは、俺の右肩に勢いよく突き刺さった。

俺はそのまま態勢を崩し、滑るように床を転がる。

押し殺した声で呻くと、ゆっくりと右肩に視線を向ける。

優美に湾曲した銀色の刃物が、深々と突き刺さっていた。

ジワジワと、刺さった所から血が滲む。

ヤダカン フランスの銃剣か。

細い古式銃の先端に付ける、サーベルのような小剣だ。

『ラ・ピュセルの枷』

罪人とされ枷を科される者の屈辱を少

しは知れ、武偵よ」

女の声に続いて、銃剣を中心に何か白いものが、軋むように俺の肩に広がっていく。

柄を握って銃剣を引き抜こうとするが、抜けない。

くそ。

こんなん気にしてられるか!!

もうやけくそだっ!!

俺はありつたけの声を張り上げてキンジに指示した。

「走れキンジ!!まだ間に合う!!」

「小癩な。それも想定内だな」

ガッツ!!

遠くで何かが響く。

ドタン、と倒れる音がし、シンと静まり返る。

くそっ!!

やっぱり無理だったか!!

再びヤダカンが俺の足元に飛来し、リノリユームの床に突き刺さった。

間一髪、俺は避けたのだが。

!!!

足が……身体が、動かない。

このシャリシャリとした冷たい感触。

氷か!?

「迂闊だったな武偵。大人しく隠れてれば済んだのに。我が一族は光を身に纏い、その実体は、陰の裏 策士の裏をかく、策を得手とする。その私がこの世で最も嫌うもの、それは『誤算』でな」

「ほう なら既にお主の演算は狂っておるのではないか？」

「 !? 」

とどこかで聞いた古風な落ち着きのある口調の声。

この声は 。

大倉庫の暗がり。

リノリユームの床に響くローファアの音。

その時、部屋の隅で明かりが灯り、ぱぱぱと体育館のように広い大倉庫を一周するように次々と灯っていく。

漆黒の闇が、純白に塗り替えられていく。

「ふむ。人質はワシが引き取った。嫌な予感が見事的中と言っ訳じやが、まあこれくらいお主の言葉で言うなら“想定内”じゃ」

と俺の前に現れたのは

「楓! ! 」

白雪と舞を連れた楓の姿があった。

そして、でそびれたアリアものこのこと現れ、俺の隣に立つ。

「そこにいるわね『魔剣』 ! ! 未成年略取未遂の容疑で、逮捕するわ! ! 」

「ホームズに、伊達か」

どこからともなく、姿無き女の声。

火薬棚の後ろか ?

なんて考えた時、その火薬棚の隙間から。

シヤシヤッ! ! と、アリア目掛けて銃剣が2本飛来した。

アリアはギギンっ! ! !

その場で風車みたいに日本刀を振り回したかと思うと、それを2本

とも撥ね飛ばす。

「何本でも投げてくれれば？こんなの、バッティングセンターみたいなモノだわ」

アリアが刀をバットみたいに構えると
がちゃん……

とどこかの扉が閉まる音がした。

……しばらく、静寂があつてから……

「逃げたようじゃの」

と楓が呟く。

アリアはやれやれ、首を鳴らすと床に突き刺さった銃剣を引き抜いて、ポイツと投げ捨てる。

そして俺の傍らで、きゅ。

しゃがむ。

「毎回無茶するわねスザク？それじゃあ身体が持たないわよ？」

「分かつてる……それよりこれを抜いてくれ……力が入らん……」

「どれ、貸してみる」

と楓は

ズポッ！！と思いきりヤダカンを引っこ抜いた。

「……………」

凄まじい激痛を堪えるように表情を歪める俺。

くそっ、もうちょい優しく抜けてんだ。

と内心毒づきながらゆっくりと立ち上がる。

はあ……身体に力が入らん……膝が笑ってやがる
キンジはキンジでアリアに地面から剥がされる。
何かに気が付いた楓は長太刀を抜き、ブンブンと振り回す。
すると何かがプツプツと切れる音がした。
トラップか……。
ところで一つ疑問に思ったのだが

「楓。お前いつから此処に？」

「ふむ。ワシはいまさつき着いたばかりじゃ。朱雀を探してて、
またま此処に来たのじゃが、第9排水溝のフタが開きっぱなしだっ
たのでの。もしかと思って入ったらこの状態じゃ」

……………それは嘘だ。

そうしたら俺らと途中、あそこの入口で会ってるはずだ。

………そういえば段ボールに入れるくらい小さいんだよなお前。
だったら簡単に予想出来る。

お前、あらかじめ此処に隠れてただろ？

それに、魔剣が此処に来る事が想定内と言ってたしな。

「とにかく、じゃ。舞と白雪はワシが救出した。後は奴を捕まえる
のみ」

「私も追うわ。朱雀を怪我させた借りはキッチリと返さなくちゃ」

「私も戦います！お供させて下さい！！」

「こらあんたたち！！みだりに勝手な行動をしない！！」

サムライガールズwithアリア再び。

こいつらが一緒なら大丈夫だな。

ふう、と息をつき、リノリユームの床に座り込む俺。

「俺は後から行く。お前らは先に行行っててくれ」

「朱雀先輩、大丈夫ですか？」

「ああ、少し休んでから行く。心配するな」

「そうですか……」

「早くしなさいキンジ！！朱雀！！」

梯子にぶら下がり、アニメ声で急かすアリア。

キンジはぶっきらぼうに返事をするとう上に上がって行った。

その途中、キンジは一度振り向いた。

力無く、壁際に寄り掛かる俺を心配そうに見つめて。

ゴウン。

そして、静かに金属板の扉が閉まった。

それが後の戦いの分岐点となることを、誰も知らずに。

俺とアリア、白雪や舞先輩、楓先輩と共に魔剣を追って上の階へ上がった時だった。 。
ズズウン

と、どこからともなく、くぐもった音が遠くから聞こえる。
急いで辺りを見回すが、何も変化はない。
どうやら此処は大丈夫らしいな。

近くにいるアリアは、何だったのと言う顔で俺を見上げる。
壁のように巨大なコンピュータが無数に立ち並ぶ、HPCサーバ
ー 俗に言う、スーパーコンピュータ 室だった。
チカチカ、と、あちこちでアクセスランプが点滅している。

だが、『DANGER』や『CAUTION』と言うサインボード
は見当たらない。

俺はベレッタを抜き、残りの弾を目で確認する。

よし、まだあるな。

情報科のアランには申し訳ないが、拳銃も解禁だな。

集積回路とシリコンで挟まれた壁を、アリアと共にゆっくりと進んでいく。

火薬棚の隙間からナイフを投擲される心配は無いが、どこに誰がいるのか分からない。

楓先輩の指示で白雪と舞先輩は後援、念には念を入れて伏兵を頼んだみたいだから問題はない。

もしもの襲撃に備え、後方をアリアに任せた俺は、ゆっくりと奥に進んでいく。

二つ、三つ目の角を曲がった時だった。

「 キンジカ」

反射的に拳銃を向けて一瞬、動きが止まる。

そこには左肩を血に滲ませ、腕をダランと力無く垂らした、朱雀先輩の姿があった。

俺がベレッタを向けたの同時にあちらも身構えたのだろう。

右手に握るGLOCK17の銃口が、俺のベレッタを握る右手を狙っていた。

ゆっくりと拳銃を下げると、アリアが朱雀に駆け寄る。

「ちょっとスザク！！アンタ来るのが遅い！！心配したんだからね！！！」

「ああ、ちょっとね。心配かけて済まない」

「右肩の傷、大丈夫ですか先輩？」

「何とも無い。ただ右手に力が入らなくなってしまった」

いつものように低い声で言う朱雀先輩。

左胸のホルダーに握っていたGLOCK17を戻すと、ゆっくりとした足どりで俺達に近付いて来る。

その時、微かに俺の身体が反応した。

ん？

ワイシャツから透けて見える鉄板のようなモノ。

鎧か……？

そういえば、怪我をしたのは右肩だったはず。

怪我をしている肩とは真逆の肩に傷。

一瞬間いたと同時に、背筋が凍り付く。

ヒスって無い俺だが、その偽装はあまりにも容易過ぎた。

素早く下ろしていたベレッタを構えると、朱雀の近くに立つアリアへ叫ぶ。

「離れるアリア！！そいつは偽者だ！！！」

叫ぶと同時に、俺はその朱雀目掛けて発砲した。

朱雀も　それは想定済みだったらしく、バツ

！！

「！！！」

先程までダランと力無く垂らしていた左腕で俺の腕を弾き、初弾を外させた。

床に当たった跳弾が、近くの巨大コンピューターに当たって火花を散らす。

「キンジ！？」

驚くアリアの側面に、朱雀が　目にも留まらぬ早さで回り込む。

くそっ！！身体が追いつかないっ！！

目で追うが、身体がついて来れず、そのまま朱雀はアリアの背後に回り込む。

その朱雀を　俺は、もう撃てない。

アリアの身体を盾にされた。

アリアは状況を頭では理解出来ないまま、しかし動物的な本能で危険を察したらしく、

「　！？」

反射的に両手で銃を抜き、振り返ろうとした。
その首を

「うつっ！？」

朱雀が、背後から左腕で締め上げる。

右手で左胸のホルダーから素早く抜いたGLOCK 17の銃口をピタリ、アリアのコメカミに当てている。

トリガーを引いたら、放たれた銃弾は頭を貫通し、即刻死に至る。

一撃でアリアを仕留めれる、急所に。

生唾が喉を下る。

自分の無能さ加減に腹が立つ。

唇を噛み、助け出す案を模索するが浮かばない。

どつする、キンジ。

くそっ……意識が朦朧としやがる……。

クラクラとする頭を左手で抑え、ゆっくりと立ち上がる。

その時、ズズウン

とくぐもった音が大倉庫の中に響き渡る。

辺りを見回すと排水口から、あるうことに水がブクブクと湧き出す。臭いからすると海水だ。

野郎……。

魔剣の奴、どっかの排水系のパイプを壊しやがったな。

ハハッ、まあアリアを上に向けて、残って正解だったかもな。

もし残っていたら今頃、あたふたしているアリアを想像して俺はクスツと笑う。

「さてと、始めるか……居るんだろ？隠れてないで出てこいよ？お互い様、溺死は御免だろ？」

「溺死するつもりは無いがね……どうせ、こうなる事は目に見えていた」

と、俺と同じ声か、水浸しの大倉庫に響き渡る。

俺は寸分も違わぬその声に、自分の耳を疑った。

すると、大倉庫の奥に人の気配がした。

半信半疑になりつつも、ナイフを左手に構えると、ズブズブと水を掻き分けながら進んでいく

「なっ!?!」

俺はあまりにも信じ難い事実を目の当たりにして、動揺してしまっ

た。
水に浸かったその火薬棚の上に “俺がいた”

有り得ない!!

同じ武偵高の制服を淫らに着崩し、不知火ばりの優男な雰囲気醸しだし、火薬棚の上に格好良く屈んでいた。それを見た俺はドン引き。知らないうちにちよっと後退りする。

はっ。

もしかして。

舞とか楓、アリアから見ると俺ってこんな風に見えるんだ、なんて考えるぐらいに動揺してしまっている。

「やあ、兄弟？人生、楽しんでるか？」

目を細め、俺らしからぬ、優男らしい低く透き通る声で奴が俺に尋ねる。

俺は若干、背筋に寒いモノを感じつつ、ムツとして睨む。

「ああ、真つ当な人生を歩んでるならね」
「ソイツは安穩な。まあ、此処で一緒に心中するってのも悪くは無
いね。そのために此処へ残ったんだろう？」
「誰がお前と心中するかよ気色悪イ。俺はお前を倒すために残った
んだ。いい加減、姿を曝せ。偽者め!!」
「良いだろう。殺し合おうじゃないか俺自身。^(ニセモノ)ウォーターデスマツ
チと行こうか」

そういうと、ゆっくりとした動きで、奴は嚙脂色の制服の裾を靡か
せながら、火薬棚から下りる。
ジャブンと水に落ちる俺のニセモノ。
しかし、同じ、左手には紫色のナイフ。
構え方、態勢、どれをとっても俺と寸分も違わない。

完璧に、俺と同じだ。
だが、違いが分かるのは目の色。
奴は目の色が紫だ。

多分、明らかにそれは俺とは違う。
負けてなるかよ、こんな優男に。
気色悪いつたらありやしねえ。

なんか疲れてきた。
気が付いたら、水は脛を越えて膝まで来ている。
まじすか……。

この体育館みたいな広さの大倉庫が水没するまであと数分ってか。

「来ないのか？ならばこちらから行くぞ」

「っ!？」

ズシャシャッ!!

まるで水の上を走る蜘蛛のように、凄まじい速さで奴は俺に距離を

詰めてきた。

俺は無我夢中で振り抜かれるはずのナイフを予測し、迎撃の態勢に入る。

ギギンツッ！！ジャッ！！ギンツッ！！

急所の頸動脈を狙って薙ぎ払う奴のナイフを、上手く捻り返して払い、再び袈裟斬りのように振り抜かれたナイフを受け止めて互いに斬り結ぶ。

さきほどのダメージが残る上、水に足を取られるため、俺は奴の受けるので精一杯だった。

何だよ、何なんだよお前はっ！！

「俺は本来のお前だ兄弟。胸の奥に“バンドラ・ボックス禁忌の匣”を秘めた禍の種。それがお前だ」

俺の顔を見て悟ったように奴は言い放った。

何を　わけの分からない事をつ！！

ギチギチと音を立て鏢ぜり合いをする互いのナイフ。

俺は無理矢理、ありつたけの力を籠めて奴を押し返し、ようやく動くようになった右拳を顎部へ打ち込む。

それを見切っていたらしく、頭をずらしていとも簡単に躲すと奴は傷を負った右肩へカウンターを打ち込む。

突き立てられた紫色の切っ先が、深く右肩へ突き刺さる。

ブシッ！！

赤い鮮血が、綺麗な飛沫を上げる。

ポタポタと貯まっていく水を、赤く染め上げる。

ザブン！！

あまりの痛みに、低く呻きながらリリユームの床に両膝を着く。

「やはり無能だな。“あれ”をお前に託したのは間違いみたいだった。自分自身の本来の“力”を持って余し、使えぬまま、その身朽ち

るか。この“欠陥品”め。興醒めた。これで幕引きとしようか」

ズブツと、豪快にナイフを引き抜き、俺の首を目掛けて振り抜く。

欠陥品、無能。

そう、だな。

女から見て見れば、男として欠陥品かも知れない。

無能の男かも知れない。

仕方ないだろ、女の子が苦手なんだから。

それより“力”って何だよ。

“禁忌の匣”って何だよ。

何ナンダヨ、オマエハ！！

「朱雀！！朱雀っ！！何をしておる、このたわけ者！！早く……っ
！？」

遠退いていく意識の果て、楓の叫び声が聞こえる。

「邪魔が入ったな。今はトドメを刺す気にもなれん」

と奴が言うと、水は爪先まで浮かぶくらいの深さになり、スツと潜り、俺の手足に何かを括り付け、近くのパイプに反対側を付けた。何をしゃがるっ！！

「溺死が“欠陥品のお前”に相応しい死に方だ。今まで生きれた事を幸せと思って死ね」

と言い放つと、奴は深く潜り、浮いて来なくなった。

くそっ！！

何をしゃがった、あの野郎！！

その間にも、どんどん水は貯まっていく。

もう、水面には顔を出せなくなるまで水が貯まった。
ちくしょう！！

ありったけの力を籠めて暴れてみるが、身動きが取れない。
こ、このまま死ぬのか……俺。

覚悟を決めてスツと目を閉じた、その時だった。

俺の身体に、触れる暖かい手を感じた。

目を開けると、そこには黒髪を揺らしながら、必死に見えない何かを解除しようとしている楓の姿があった。

バカヤロー！！

俺に構わないでアリア達を助けてやれ！！

そんな俺の気も知らないで、楓は息継ぎを繰り返して必死に外そうとしている。

くそっ……息が……。

ゴポゴポと口から大量の息を吐く。

それを見た楓は

一度、水面へ上がり、息継ぎをして。

俺の口へ、口で移した。

何の躊躇いもなく、彼女は俺にキスをしたのだ。

アリアに近い、小さくて可愛い唇。

比べるのは失礼かも知れないが、アリアよりそれは肉厚で。

それは紛れも無く、俺が力を発揮するトリガーであって。

身体の芯に熱い、熱いなにかがどんどん集まる。

滾る血液、凄く高ぶる感情。

じゅくじゅくと、俺の中を疼き回る。

そして、頭の中で何かが弾け飛ぶ。

完全に覚醒モードになった俺は、前を泳ぐ楓が背負う身の丈ほどある長太刀『大俱利伽羅』の柄を口で加えて引き抜く。

そしてそのまま、上に放り投げて

刃の重さで逆さまになった長太刀を背中へ、繋がれた手へ落とす。

ガキ

ン！！

薄かったのか、脆かったのか、手を繋いでいたモノは簡単に“斬れた”。

手が自由になつた俺はそのまま長太刀の柄を左手で掴むと、身体をグンツと足の方へ屈ませて。

一瞬で見極めてズパツ！！

と繋がれていた手錠のチェーンを一刀両断する。

その一部始終を見ていた楓は、目を真ん丸にして俺を見る。

そして楓と一緒に浮上して、梯子を指した。

「大丈夫か？楓？」

「見ての通りピンピンしておる。そういう朱雀こそ大丈夫かの？」

「たわけ。人の心配よりも先に此処から出ることが先決だろう」

「っ！？」

「まあ、そんなにビツクリするな。俺が出してやる。今の俺はいつもの俺とは違うからな」

背中の鞘に長太刀を戻しつつ、目を細めて笑う俺。

何だよ、ずいぶん古風な口調だな。

それよりも、だ。

と俺は視線を切り替え、梯子に掴まり、ゆっくりと上がっていく。

水位はもう天井まで迫っていた。

素早く楓を抱え上げると、肩車して隔壁へ近付ける。

抱き抱えられた楓は、普段見せないくらい顔を真っ赤に染めていた。

まあ、俺も恥ずかしいと言えば恥ずかしい。

このニーソックスと尻の感触、そして眼前にスカートの裏が見える

……

いかんいかん。

振り向くなよ俺。

これ以上は自殺行為だ。

素早く隔壁を開けた楓を、俺は勢いよく真上へ放り投げる。

「きゃうつ！？」

猫みたいな悲鳴を上げ、可愛く尻餅を着く楓。

その時、再びズズウンと言う音がし、水嵩が一気に増す。

くそ、何かのスイッチを押してしまったみたいだ。

この速さじゃ、この階まで水浸しになっちまう。

俺は勢いよく隔壁をくぐり抜け、リノリウムの床をべしゃーっと転がる。

しまったー！！

早く隔壁を閉めなきゃ。

俺はユラユラと立ち上がると、隔壁を閉めようと押す。

しかし、水はそれを押しつけようと溢れ出してきた。

「　　っ！！」

左手一本、体重を掛けて隔壁を閉めた。

右手は相変わらず、力が入らない。

再びリノリウムの床に両膝をついて、倒れ込む。

「朱雀っ！？」

「大丈夫……だ……」

「う、嘘を申せー！！現に動いていないではないかー！！」

「誰が助けてくれなければ、俺は此処にはいなかった。生きる事に諦めていた。自分が欠陥品で、無能だと。だが、今はそうではない。欠陥品なら欠陥品なりに、無能なら無能なりに生きて、生き抜いて“お前達を守る”。楓が諦めずに助けてくれた。だから俺は全力で戦う。感謝している。ありがとう」

「……………／／」

と低く透き通る声で言うと、楓は嬉しそうに頬を染めて俯く。
俺は濡れた手で、優しく撫でてやった。

「行くぞ。魔剣を確保する」

俺は深く深呼吸すると、再び立ち上がる。

楓もそれに付き添うについて来る。

案外、可愛い顔するじゃないか。

なんて思いながらホルダーからM8000とGLOCK17からマガジンを取り出し、弾丸を抜き取って、薬室の水分を息で吹き飛ばす。

現代の銃は水に浸かっただけで使えなくならない。

復活したM8000とGLOCK17を両手に、迷路のように立ち並ぶスーパーコンピューターの影を進んでいった。

「ス……ザク！！何よ！！どう、したの！！」

喚くアリアの、拳銃を握ったままの右拳に
朱雀は、フツ！！
肩越しに息を吹き掛けた。

「うあっ！！」

びびんっ！！と、アリアが焼きゴテでも当てられたかのようにけ
反る。

そして自慢のガバメントから手を放し、落としてしまった。
ぱき……ぱきつ。

落ちた銀色の拳銃の周囲が、氷に包まれていく。

「くっそ……」

俺がそう呟いた時。

ヒュッ！！

さらに朱雀が、アリアの左手にも息を吹き掛けた。

「きゃあっ！？」

またのけ反ったアリアは漆黒のガバメントも放し、両手を前に寄せ
た。

その手には 霜が降りたように、氷が張り付いている。
超自然的なその光景に、本能的な恐怖が背筋を走る。

今の やったのか、この朱雀が。
超能力 で！！

「只の人間ごときが」

もう朱雀のものではない、声

「超能力者に抗おうとはな。愚かしいものよ」

その声に、ようやく気付いたアリアが、凍らせられた手の痛みに震えながら呻く。

「……魔剣……！！」

「私をその名で呼ぶな。人に付けられた名前は、好きではない」

「あなた……あたしの名前に、覚えがあるでしょう！！あたしは神崎・ホームズ・アリア！！ママに着せた冤罪、107年分は あんたの罪よ！！あなたが、償うのよ！！」

「この状況で言うことか？」

フツッ、と『魔剣』が囚われのアリアを嘲笑う。

「それに、お前の名 たかだか150年ほどの歴史で名を誇るの
は、無様だぞ。私の名はお前より遥かに長い 600年にも及ぶ、
光の歴史を誇るのだしな」

そして朱雀の顔のまま可笑しそうに目を細め、アリアの口元に唇を寄せた。

「なるほど、お前は『双剣双銃』が リュパン4世が言った通りだ」

今……リュパン4世、の名を出した。

理子の事だ。

やっぱりコイツは 武偵殺し、峰・理子・リュパン4世の仲間か。ここまで完璧な変装は、アイツの技術がないと出来ないだろうと察しはつく。

「アリア。お前は偉大なる我が祖先 初代ジャンヌ・ダルクとよく似ている。その姿は美しく愛らしく、しかしその心は勇敢」
「ジャンヌ・ダルク……!？」

アリアが、呻くようにその名を繰り返す。

(……ジャンヌ・ダルク、だと……!?)

俺も その名を知っている。

一般教科の世界史で習った。

15世紀、イギリスとフランスによる1000年戦争を勝利に導いた、フランスの聖女。

コイツの今の台詞は、自分が、その子孫だと言う意味だ。

……だが……

いま目の前にいる『魔剣』がジャンヌ・ダルクの子孫で有ることは有り得ないのだ。

なぜなら、オルレアンの聖女と呼ばれた彼女の結末は

「嘘よ!!ジャンヌ・ダルクは火刑で……十代で死んだ!!子孫なんて、いないわ!!」

「あれは影武者だ」

フンッ、とまたアリアを鼻で嗤う声。

「我が一族は、策の一族。聖女を装うも、その正体は魔女。私たちはその正体を、歴史の闇に隠しながら 誇りと、名と、知略を子々孫々に伝えてきたのだ。私はその30代目。30代目 ジャンヌ・ダルク」

魔剣

彼女の言に従えば、ジャンヌ・ダルクが、言う。

「お前が言った通り、我が始祖は危うく火に処せられるところだったものでな。その後、“この力”を代々探究してきたのだ」

ジャンヌの手が毒蛇のようにアリアの太ももに伸びると また、アリアが激痛に身体を振った。

「きゃうっ!!」

見れば、その小さなひざ小僧に氷が張り付いている。もう疑いようがない。

コイツは俺達武偵とは異なる、想像もつかない力を持っているのだ!!

「Follow me . アリア。リュパン4世が浚い損ねたお前も、ジャックがさらに損ねたあの“出来損ない”も貰っていく。が、生きているか怪しいな。それとも “死ぬか”？そういう展開も、私は想定済みでな」

「……アリア……!!」

俺はベレッタを単射に切り替え、ジャンヌの頭を狙って威嚇をしようとした時だった。

「 誰が “出来損ない” だって？ ジャンヌ・ダルク？」

低く透き通る、あの人の声。

朱雀の顔をしたジャンヌは訝しげに視線を辺りに向けた。

「どこを見ておる。俺はお前の後ろだ」

「ブラフだな。私の背後を取るなど 無理に等しい」

「どうかの？ ブラフだと思うなら見てみな？」

「何？」

朱雀の顔をしたジャンヌは、何かを背後に感じたのが後ろを振り向く。

ジャツ！！

いきなり振り上げられる長太刀。

リノリユームの床を斬り付けながら振り上げられた刃をジャンヌにたたき付ける。

ジャンヌはアリアを連れのまま大きく退く。

が、背後に気を取られていて。

ババババツ！！

前からの銃撃に反応が遅れた。

しかし、その弾丸はジャンヌから逸れて辺りのスーパーコンピューターに着弾。

チユイーンと見事に跳弾した・45ACP弾がジャンヌの握る拳銃を撃ち落とし、唯一、防弾制服出ている左手に着弾してアリアを

離す。

その時、脇を挟む3メートルはあるコンピューターな上から分銅付きの鎖が伸び、アリアから放した左手に巻き付いて身動きを封じ。ジヤン又はそれを右手で払おうとするが、反対側から飛来した蒼い閃光を引いたスローイングナイフが、制服ごと突き抜いてコンピューターに突き刺さる。コンピューターからバチバチッと火花が散る。

「な、何が」

おどおどする俺に、サムライガールズの声が響き渡る。

「キンちゃん!!」

「キンジくん!!」

「早くアリアを助けるたわけ!!!」

ハッ、と気が付いた俺は指示された通り、無我夢中でリノリユームの床に転がるアリアを助けに、スライディングの要領で飛び込んだ。

「アリア!!」

アリアを抱えながらリノリユームの床を滑って行き、壁を蹴ってようやく留まる。

それを庇うように、スローイングナイフを辺りに浮遊させ、虎徹を下段で構える舞。

八相の構えをし、キンジの前で身構える白雪。

身の丈よりも大きな長太刀を担いでキンジの前、白雪の右隣りに立つ楓。

完全武装したサムライガールズが集結したのだ。

そしてその反対側に。

硝煙が吹き上がるM8000の銃口をこちらに向けた
土砂降りの雨を浴びたような、ずぶ濡れの制服で立っている“本物
の朱雀”の姿があった。

「　　っ！！」

ジャンヌは無理矢理、分銅付きの鎖で搦め捕られた右手を解き、制服のポケットから筒みたいなモノを投げ捨てる。

しゅっしゅっしゅ　　！！

発煙筒！？

煙幕か！！

ばっ。

ばっ、ばっ。

煙を感知したスプリングラーが次々と水を撒きはじめる。

M8000を構えていた俺は、左足太ももにあるホルダーへそれをしまつと、胸ポケットからナイフを取り出して構え、ゆっくりと煙の中を進んでいく。

煙の向こう側には、サムライガールズと顔を真っ赤に染めてキンジの両腕に収まるアリアと

ヒステリアモードのキンジがいた。

全く、どさくさに紛れてイロイロするのがやたらと上手いなキンジ。なんて内心そう毒づく。

舞は能力を使いすぎたのか、その場に頭を押さえて座り込み、楓は先日、ジルにやられた傷が開いたのか、片膝をリノリユームの床に着けて、息を荒げている。

「大丈夫か？二人とも？」

「朱雀……案ずるな。これくらいの傷、なんと……もない」

「平気平気！！ちよつと能力を使いすぎただけ」

「動くな楓。傷口が開くぞ。舞、お主は楓を介抱してやれ。してキンジ。アリアの状態は？」

「大丈夫です。白雪が何とかしてくれてますよ」

優男スマイルで俺に言うキンジ。

舞は楓を抱えて怪我を治療するために物影に移動。

楓は、黙って家宝である長太刀『大俱利伽羅』を俺に預けた。

「済まない。俺が早く来てればこんな事にはならんはずだった」

「まさか先輩に化けられるなんて想像してませんからね。でも、勝機はまだありますよ」

「ああ。策を巡らせる奴ほど、意外な展開に弱いはずじゃ。今頃、奴は相当焦っているかも知れん」

「今現在戦闘可能なのは俺と朱雀先輩、そしてアリアに白雪。俺達は超能力者を逮捕した経験が無い以上、俺達が頼りに出来るのは、不意ながら超能力者である白雪とアリアのみ」

「そうか。アリアは別として、白雪を一人で行かせるには厳しいが、時間稼ぎにはなるか」

とキンジと話していた時。

いつもと違う口調の俺とキンジの変化に気が付いたのか、戻って来たアリアは赤紫色の目を真ん丸にして言う。

「二人とも なれたのね!？」

キンジと俺は黙ってアリアを見る。

確か、アリアから俺達の能力についての見解を聞いた事があった。

キンジが二重人格で、俺のが多重人格だそうだ。

キンジは戦闘によるストレスで能力が発動するらしく、アリアいわゆる覚醒状態。

俺の場合は強力な自己暗示によって多数の人格を作り出していて、それぞれ能力が違う覚醒状態になる、という見解だ。

そのせいでキンジは酷い目にあつてたらしいが、今は置いて置こう。まあ、俺のはどんな仕組みになっているのか分からないが、アリアの見解はどう考えても外れている。

自己暗示なんて必要無いしな。

しかし、二人とも発動するトリガーはだいたい似ているんだが。

俺達は何も答ええない事で、アリアの問い掛けを肯定した。

アリアは少し強気になったのか、そのキバっぽい犬歯を剥いて叫んだ。

「魔剣！！ あんたがジャンヌ・ダルクですって？卑怯者！！どこまでも似合わないご先祖さまね！！」

挑発するようなアリアの声に、煙の向こう、だいぶ離れたところから

「お前もだるうホームズ4世」

声が、返ってきた。

だいぶ離れた所、エレベーターホールの辺りだ。

俺達はそっちに向き直りつつ 気付く。

心なしか、ではなかった。

この部屋の室温は急激に下がってる。

煙の向こうでは、スプリングラーから撒かれる水が空中で氷の結晶となり、雪のように舞っている。

ダイヤモンドダスト

一度だけ、小さい頃に見た事がある。

宝石が舞うような、超常的なまでの美しさ。

それが逆に、言い知れぬ恐怖を募らせる。

アイツは

ダイヤモンドダスト
銀氷の、魔女だ

「キンちゃん……鳳凰院先輩……アリアを守ってあげて下さい。アリアは、しばらく戦えません」

刀を右手に持ったまま、白雪が退がってきて　キンジが抱えるアリアの右手を、左手でそつと包んだ。

「魔女の氷は、毒のようなもの。それをキレイに出来るのは修道女か　巫女だけです。でもこの氷はG6からG8ぐらいの強い氷。私の力で治癒しても、元に戻るまで……5分は掛かると思う。だからその間、鳳凰院先輩とキンちゃん、アリアを守ってあげて下さい。敵は、私一人で倒します」

「何を言ってるんだ白雪」

「さすがに白雪を一人で戦わせるわけには行かないだろう。此処は俺が」

「私が戦うわ」

「舞先輩!!」

「白雪はアリアの治癒をしててあげて。此処は私と朱雀で先手を打って、ジャンヌの気を引き付けておくわ。隙を見て、援護に来て白雪」

なるほど。

陽動作戦　ってわけか。

それを聞いた白雪が納得したようにゆっくりと頷く。

俺は楓から預かった『大俱利伽羅』をベルトに挿し、キン!!と鞘から抜き放つ。

舞は虎徹を鞘から抜き放ち、笑顔で俺の隣に立つ。

「役に立て嬉しいよ。こんな事しか出来ないけど」

「本気でやり合う気か？」

「少しだけね。ちよっとでも時間を稼ぐよ」

「ムリはするな。限界がきたら俺が相手をする」
「ありがとう」

なんて会話を終わらせ、舞は俺より一步前、敵の方へ一步出て

「ジャンヌ。もう……やめよう。こんなこと。私は誰も傷付けたく無い。例えそれが、敵である貴方であっても」

ハッキリと伝えた舞に、フン、という笑い声が煙の向こうから聞こえてくる。

「笑わせるな。原石に過ぎぬお前が、イ・ウーで研磨された私を傷つけることは出来ん」

「どうか。私はG22の超能力者なんだよ」

という舞の言葉に、今度は
笑い声が、返ってこない。

俺には分からないが、今の舞の言葉は超能力者には相当の威嚇だったらしい。

「ブラフだ。G22など、この世には存在しない」

「ブラフだと思うなら試してみる？」

「……仮に、真実であったとしてもだ」

ジャンヌの声には、今度は少し緊張感が籠っていた。

「舞。貴様は朱雀の前では使えないはずだ。なぜならそれほどまでに強力な、お前のサイコキネシスは」

「ジャンヌ 策士、策に溺れたわね」

アハハ、と嘲笑う舞の声。

「それは前までの私。今の私のサイコキネシスは“他人には影響を及ぼさない” たった一つの、いつもそばにいる、大切な存在が、昔の私を変えてくれた。その気持ちまでは、貴方には見抜けなかった」

舞の台詞に、ジャンヌは 黙った。

やはり策を弄するタイプは、予想外の展開に弱かった。

楓が出てきた時から、敵の計画に誤算が生じているのだった。以前とは全く違う、舞によって。

次第に舞の体へ、青い発光体が集まっていく。

それに反応してか、発煙筒の煙が消え、スプリンクラーが、一つ、また一つと止まっていく。

「 やってみろ。直接対決の可能性も予想済みだ。Gの高い超偵はその分、精神力を早く失う。持ちこたえれば私の勝ちだ」

意を決したジャンヌの姿が、晴れていく煙の向こうで……
とうとう、明らかになる。

臙脂色のスラックスとジャケット、ワイシャツを脱ぎ捨てた下には部分的に身体を覆う、西洋の甲冑。

「リュパン4世による動きにくい変装も、終わりだ」

べりべりっ、と、被っていた薄いマスクを剥いだその顔

刃のような切れ長の目は、サファイアの色。

2本の3つ編みのつむじの辺りに上げて結った髪は、氷のような銀色。

どこか古めかしい日本語とは裏腹に、ジャンヌ・ダルクはまさに西洋の歴史映画に出て来そうな　美しい、白人だった。

「私が動きを封じるわ。朱雀、ジャンヌの動きが止まったら」

「任せる舞。今は、何も考えるな。躊躇いや雑念は己の行動に出してしまうからの」

「　うん。ありがとう。任せるよ」

そう言うと、スーッと大きく深呼吸する舞。

舞の回りに纏う青い発光体は、次第に輝きを増す。

キンッ！！と楓から預かった大俱利伽羅を上段に構え、スーッと腰を落とし、切っ先を下に構える。

こめかみ付近に、俺の両手、そして金色の鍰がある。

チャンスは一度きり。

舞は持ち前の力を、最大出力でサイキネシスを放ってジャンヌの身体を封じるつもりだ。

人に作用しないと行っていたが、自分の意思一つで人に作用させる

事は出来るとも言っていた。

サイコキネシスは確か、思念波の一つだ。

いくら魔女とて、舞の最大出力のサイコキネシスを解く事は出来ないだろう。

ゆっくりと目を閉じ、胸の前で両手を合わせる舞。

まるでメデューサのように、ざわめくクリーム色のストレートヘア。

俺はその時が来るまで待つ。

「ここに来て怖じけづいたのか舞？ならばこちらから行くぞ！！」

と、背中に隠していた華麗な洋剣を取り出し、一気に間合いを詰める。

まだか……まだか舞！？

「先輩」

「キンジ、アリア。遅かったな」

「ハハハ」

「スザク。良い案があるわ」

ジャッ！！ガキンッ！！

すると、隣から白雪が飛び出し、迫るジャンヌの魔剣を受け、切り結ぶ。

「？」

「彼女の意思を尊重して、まずは白雪に突っ込ませて足止めします。そのあとのトリプルブラフ、いけますか先輩？」

……そうか。

舞がサイコキネシスを使うためのエネルギーを溜める時間を稼ぐために、俺達がジャンヌを抑えるのか。

そのためのトリプルブラフ。

アリアとキンジ、俺の息があっていなければ成功しない。

しかし、俺は迷いは無かった。

無言で頷く俺を見た二人は、所定の位置につく。

ジャンヌが脱ぎ捨てたジャケットを拾ったアリアは、何の躊躇いもなく豪快に駆け出す。

その背後、ベレッタを構えてキンジがすぐに続く。

激しく打ち合い、切り結ぶ白雪とジャンヌ。

背後から近付くアリアに気付いたジャンヌは、白雪の日本刀を弾き返すと、急接近するアリアに切っ先を向ける。

アリアは先程拾ったジャケットを、バツとジャンヌの前に投げる。

しかし、ジャンヌはそれを予想していたのか、スパンとその洋剣を斬り落とす。

アリアは素早く身を呈して、背後にいるキンジの射線から離れる。

ババババババツ！！

キンジの握るベレッタがマズルフラッシュを閃かす。

斬ったジャケットが視界を遮ったジャンヌは、それに対する反応が遅れた。

大きく身を引くと、再び白雪が、焰を纏ったイロカネアヤメを振りかざして切り結ぶ。

「炎　　！？」

ジャンヌの表情に恐怖の色が滲む。

ここまで俺はだいたい予測出来た。

後は

「朱雀！！今よっ！！」

舞の掛け声と共に俺はありったけの力を籠めて駆け出す。

その瞬間、青い発光体がパアツと散り、ジャンヌに纏わり付く。

「な、なんだ!?!」

白雪がジャンヌの洋剣を弾き、大きく横に移動する。

と、ジャンヌの身体が硬直した。

焦るジャンヌ。

そこへ

漆黒の影を纏うように、俺が間合いを詰め

「ハアツ!!!!!!」

気合いと共に、大俱利伽羅を下から上へ振り抜く。

ズパンツ!!!

揺らめく黄金の剣閃。

ジャンヌが握る洋剣が弾き飛ばされ、一回転、二回転と宙を舞い、リノリユームの床に深く突き刺さり

ジャンヌの胴体を覆う甲冑が、スッパリと斜めに斬り飛ばされた。

「な、に　!?!」

と、さらけ出された胸を両手で覆うジャンヌ。

力を使い切った舞は力無くリノリユームの床に崩れ落ち、能力を使い切った俺は、ゆっくりと片膝を着く。

キンジ、アリア、白雪はその想定外の事態にア然とする。

ハハハ、これは俺も想定外の事態だった。

甲冑を斬り飛ばされたジャンヌは、見ての通り身動きが取れないでいる。

まあ　とりあえず良いか。

捕まえれば。

「魔剣!!!」

しばらくア然としていたアリアは、正気を取り戻して 叫ぶ。

そして、ガチャン!!!

さらけ出された胸を隠す両手に、対超能力用の手錠が掛けられていた。

「逮捕よ!!!」

部屋の中に響くアニメ声。

アリアは肉食獣のようにジャンヌへ襲い掛かる。

俺は気恥ずかしさを紛らすために視線を背けるが

さすがに上半身真っ裸にしたのはまずいと思い

ジャンヌへ視線を合わせぬように近付いて行き

動いて乾いたばかりの、自分が着ていた臙脂色のジャケットを被せる。

「 貴様!!! 私によくもこんな辱めを」

「悪かった。だから今度、まあ、それは無いと思うが、もし俺と会ったら、俺を殺しに來い。俺はいつでも受けて立つ」

「 !? 」

「んじやな。 “お嬢さん”」

「な、お嬢」

ととりあえずそう言って微笑むと、頬を赤らめて俯くジャンヌ。

俺は何も無かったようにその場を離れた。

そして、ジャンヌを綴の元へ連行しつつ、舞を背負い、ゆっくりと地上を目指す。

が

「こ、これはどういう事よスザク!!説明しなさい!!」

「先輩、逃げられませんよ」

「分かってる。弁明で逃れられないのは百も承知だ」

「早く!!喋らないと風穴!!」

「やれやれ……」

頑張つて地上に出ると……。

あつ　世界が　回る!!

疲労がピークに達し、挙げ句の果てに怪我した上に無理に動いたから、思つた以上に出血したらしく
俺は舞を背負つたまま、アスファルトの上に卒倒する。

「ちよ、ちよつと!!?スザク!？」

「大丈夫かつ!!?朱雀つ!!?」

「先輩つ!!?」

「鳳凰院先輩つ!!?大丈夫ですかつ!!?」

遠退いていく意識の中、聞こえるみんなの声。

頼むから、ゆっくり寝かせてくれ。

ただでさえ、稼動限界を超えたんだからよ……。

と思ひながら、消え掛かる意識を迫り来る闇に手放した。

「I'd like to thank the person . . .
」

俺の歌声と、キンジが掻き鳴らすギターのFマイナー和音で、アドシールド閉会式のアル＝カタが始まる。

この間の地下倉庫で起きたジャンヌ・ダルク逮捕劇の、揉み消しの案を考えつつ、流れるメロディーに乗せて歌を歌う。

隣でギターを掻き鳴らすキンジも、半ばヤケクソ気味である。

ああ。

……どう言い訳しようか……

ジャンヌだったっけ　彼女を素っ裸にしたのも、覚醒状態の俺が原因だし。

アリアの尋問を受ける前に、舞を背負ったまま卒倒したし。

あれ以来、白雪には変な目で見られるようになったし。

悪い夢でも見たのか、覚醒状態の“俺”に会って殺されかけるし。

そいで手足を手錠で縛られて溺死しかけて………

思い出すだけで死にそうになる。

いや、むしろあの時死んでおけば良かったなんて思う。

……すっげえ鬱だわ。

「Who shoot the flush . . .」

っーか、武偵高なあ……予算ケチんないで、ちゃんとバンドぐらい雇えっっーの。

などと今さらながら八つ当たり気味に思いつつ、第2グラウンドのステージの上でひたすら歌声を響かす。

はあ、天気が良いじゃねえか。

「Who flush the shot like bang bang
a bang bang a?」

曲が急にアップテンポになると同時に、左右からポンポンを持ったチアガール姿の女の子が笑顔で舞台上がって来た。まあ、どうでもいいが。

「いつくわよ〜!!白雪ちゃん!!」

「せ、先輩……で、でもやっぱりこんなの……」

「あーもう!!ここまで来て何言ってるの!!ほら出る!!」

「朱雀先輩……助けてください!!僕は男」

「ほらほら早く出る ダメ弟ね〜アラン」

「呪ってやる、姉貴」

「何をやっておる!!早く行けいたわけ!!後ろがつかえておるわ!!」

という声を聞き、歌いながら横目で見れば、舞台袖で待機していたチアガール姿のアリアを始め、アランやソフィア、楓、舞もそろそろと登場する。

な、なに!!?

アラン、お前も出るのか!?

お前 男だろ!!

このチア、運動神経が1番良いアリアと、アリアの強力な推薦により土壇場でメインのペアに抜擢された白雪がリードする 事になったのは分かるが、まさか、バックダンスでアランがソフィアのペア、舞と楓がペアで出るとは……。

もしかして……情報科の男どもの仕業か?

もはや男か女か分からなくなってるぞお前……。

なんて思いつつ、舞台上で踊る皆を眺めて歌っていた。

「Each time we're in froooooon
t of enemy's!! We never hide n s
neak away!!」

さてと……なんて言い訳するか……

まあ、その場凌ぎで良いか。

そういえば、舞や楓はあんなに仲が悪かったのに仲良くチアなんか踊ってやがる。

なんだよ？その営業スマイルは？

と毒づきながら、何気なく二人を観察してみる。

しまった！！！！！！！！！！

観察なんてしなきゃ良かった！！！！

ヒスるヒスるヒスるヒスるヒスるヒスる！！

その起伏に満ちたプロポーションにピッチリと密着したチアのユニホームを着た、舞の肢体に無意識にいつてしまい

ゆさつ。ぷるんつ。ぽよんつ。

双子の富士山が、大変な、事に……

ヤバイヤバイヤバイヤバイ。

つか、キスがトリガーなのに、これを見て鼻の奥が熱いのって緊急避難だ。

アランを見る、アランを！！

はあ、助かった。

無いものは無い。

男だからな。

これで鼻血ブーったら、俺はマジで自殺するよ。

まあ、そういえばボディーガードの任期も満了だな。

俺の元から舞も楓も離れてくれる事だし、清々するよ全く。

「Who flush the shot like bang
bang babang a?」

そう、だな。

30代目ジャンヌダルクだが、アイツは警視庁と東京武偵局の取り決めに下がって、尋問科の綴先生の取り調べを受けているらしい。

「Who was person, I'd like to hug
the body.」

アリア達が、ポーン！！

とポンポンを空高く投げ捨てると、会場が一気に盛り上がった。

奴らはみんなポンポンの内側に拳銃を持っていたのだ。

そして空砲の歌詞の通り、空に向けてバンバンぶっ放す。

ウケたのが嬉しいのか、練習よりも多めに撃ってるなあ。

……あーあ。

イメージダウンは必至かこりゃ……

そして

アリアと白雪を中心に舞達が、一斉に組体操みたいなポーズをキメて。

舞台上にセットされていた銀紙の紙吹雪が、その女の子の周囲にパツと巻き上がり

「It makes my life change at dramatic!
matic!」

俺の透き通った歌声が、会場に響き渡り、アドシールドは、これにて一件落着、か。

高校生活の最後を飾るにはちょうど良かったかな。

まあ、楽しかったし。

キラキラと舞う綺麗な紙吹雪を見て、淋しい反面嬉しいような気も
した。

人付き合いが苦手な俺は、バンドの面々との打ち上げ会には参加せず、そのまんま帰路に着いた。

まあ、一人で過ごしたいと言う事もあるのだが、今日は疲れ果てたので寝たいのが第1だ。

アリア達はクラブ・エステラーレで、キンジ達はファミレスで打ち上げだそうだ。

どのみち、ただでさえ金欠の俺は参加するつもりも無いが。

誰も居ない部屋に着き、玄関でスニーカーを脱ぎ捨てると、リビングのソファアへ崩れ落ちるように座り込む。

はあ……休まるぜ……

「あれ？朱雀、帰ってたの？」

ガチャン、とドアを開けつつ、制服に着替えた舞が入ってくる。

「お前、打ち上げは？」

「えへへ チアして疲れたからキャンセルしたの。朱雀も？」

「まあね。第1に金欠だし」

「そっかあ……」

など何気なく会話しながら、舞は俺の隣にちゃっかり座った。

何も気にはしていなかったが、じりじりと俺との間隔を詰めて来る舞。

気が付いた時には、俺の左肩に舞の頭があった。

ハニーレモンのような、清々しくも甘ったるい匂いが、俺の鼻を撫

「ねえ、朱雀？」

と上目遣いで俺を見上げる舞。

その時、あまりにも綺麗過ぎる舞の顔を見て、身体が硬直してしま
う。

「私のこと……好き？」

突然の質問に機能及び思考停止。

な、なんでそんな事聞くんだよ……

ちよっと焦って顔を逸らした時、舞が抱き着いて俺を押し倒した。

「な、ちよ、おま」

「恥ずかしがらなくていいよ朱雀。私は朱雀の本音を聞いて見たい
の」

完全に舞のペースに巻き込まれる俺。

たしかに、前にもこんな事があったような気もするし、なかったよ
うな気がする。

記憶があやふやだが。

「バカヤロ！そんな事、恥ずかしくて言えるか！！」

「そう。だったらキモチいい事、してあげてもいいよ？」

慣れた手つきで俺のネクタイをぐいと引っ張り、自分の顔を近付
ける舞。

そして、ゆっくりと俺の背中に手を回す。

その瞬間、俺の脳裏にある閃くモノがあった。

抱き着かれた事なら何回もあるが、“舞は俺の身長と大して変わり

が無い”。
座っているから、なのかも知れないが、明らかに俺よりも身長が数センチ高い。

グラビアアイドル並の、抜群のプロポーションを誇る舞だが、明らかに胸が小さい上に、とつてもスレンダーだ。

どこかで見たことがある。

舞に抱き着かれたまま、俺は彼女の本当の名を、耳元で囁いた。

「ジル。誰に教わったか知らないが、いい加減、俺で遊ぶのは止めてくれ」

その一言を聞いた瞬間。

ジルと呼ばれた少女は、不気味に口元を緩めると、薄いマスクを顔から剥ぎ取り、かつらを剥ぎ取った。

赤い長髪に、赤い瞳。

ジル・ザ・リッパ―4世。

俺を連れ去ろうとした、兄の刺客。

なぜ、ここに　　？

「良いとこまでいったのに、ばれちゃ仕方が無いか」

「俺に何のようだ？」

「ん？ああ、用件は一つだけだ」

「なんだ？」

また攻撃されるのか、と思い、俺はジルを押し退けると、懐からコンバットナイフを取り出して身構える。

しかし、ジルは安心しな、武器はねえと言わんばかりに両手を真上に上げる。

「用件は、だな……………」

と息詰まったように咳き込み、しばらく沈黙する。
やれやれ……俺の中で危険を察知して警鐘が鳴りまくってやがる。

「オレと」

「ジルと？」

途中で止まった。

なんだよ一体？

『オレと、オレと“結婚”してくれ!!』

な、なっ!?

俺はジルの唐突な発言に、面食らって後ずさる。

耳まで真っ赤にしながら、俺を睨むジル。

何が何だが良く分からん。

なんで、また、そんな事を？

「ま、待ってくれジル。なんでまた唐突な　ど、どっいうことだ？」

「お前はオレを闇の淵から救ってくれた。その時からお前の事が“どうしても忘れられない”!!どうしてくれる!?!」

「い、いや。俺に聞かれても」

「だから決めた。オレもお前の傍に居ようと。そうすれば“この感情”の“答え”が分かるんじゃないかと考えた」

「それはちよつと強引じゃ……」

俺はおろおろと提言するが、ジルは全く耳を傾けてくれない。

ただでさえアリアや楓、舞と言う3怪獣娘に付き纏われているのに、一人増えるとさらに強烈なるとばっちりが俺に襲い掛かるだろう。

「オレが決めた事だから、お前に指図される筋合いは毛頭ない。よってオレの婿になることを拒むのはオレが許さん」

おいおい。

俺の人権が保障されてねえだろ！！

「ちょっと待て！！いくらなんでもそりゃ酷いぞ！！」

「アリアにこき使われるよりはマシだろう朱雀？それともなんだ？この場で肉片にされたいか？」

と、あの時使っていたククリ刀をぎらつかせ、不気味にせせら笑うジル。

ウヒャー……あの目は、ガチだ……。

「悪いがジル。俺はアンタの婿になる気は毛頭ない。手を引いてくれ」

素直に従ってしまうよりはマシだろう。

殺されるのがオチだが、これ以上怪獣娘が増えてもらっては困る。

「そつか……よし」

来るか、来るかと身構える俺。

ゆっくりと歩み寄るジル。

すると……

「うえ……ひっ……ひっく」

はい？

再び拍子抜けする俺。

ジルは俺の前で止まり、突然泣き出してしまった。
こうなっではお手上げだ。

女の子の涙ほど、苦手なモノはない。

「お、おいジル？泣くな。泣かれちゃ手も足も出ないぞ俺」

「どうしてくれる！！お前のせいだ！！」

「え、あ、まあ」

だんまりする俺。

さて、アリア達が帰って来るまで、どうやってこれに決着をつけるか……

これじゃ、どうもあっちが折れてくれなさそうだ。

とりあえず、あの3怪獣娘に目をつけられる前に、何とかしなくちや……

こうしてまた一つ、俺の悩みの種が増えたのであった。

… 15 (後書き)

どうも 作者のKOHです!!

これにて原作『緋弾のアリア』の単行本二巻分を書き終えました!!
いや、疲れましたよ(^ - ^) ;

相変わらず朱雀は大変な目にあってますねw

ここからはジャンヌやジル、理子が司法取引を済ませて加わり、話
が迷走しまくりますw

ここからブラド編に行くまでの間、しばらくオリジナルストーリー
をお送りします

では、続きをお楽しみに!!

ACT7・Girls be ambitious (前書き)

いよいよ始まりました新章です

まあ、ダラダラと面白おかしく書き上げるので楽しみにしていってください

泣きはじめてたジルをようやく宥め、大人しくソファーに寝かしつけた俺は、真剣に悩んでいた。

奴隷、彼氏、許婚、憧れ……そしてプロポーズ。なんつー負の連鎖だ。

俺的に言えば、そうなる。

ツンデレなアリアといい、妄想が激しい舞といい、自己チユークYな楓といい、小悪魔なソフィアといい、今度はヤンデレですか。

ソフィアはあまり深く私生活までは突っ込んで来ないが、あの三怪物娘、特に舞と楓なんかプライベートなんて関係無しだ。

アリアは俺と似た者同士だから上手く行くわけ無いのは分かりきってるし、曲がりなりにも俺のパートナーだ。

これにもし、三怪物娘が四怪物娘、狂暴なヤンデレ娘のジルが参戦したら、もう喧嘩どころか争奪戦になりかねん。

まずもって、求婚宣言を取り除かなければ……。

アリアや楓の二の舞になる。

問答無用で襲われるのは明白だ。

どうにかこうにか、俺の平穏な私生活、プライベートを取り戻すにはコイツを隔離しなくちゃいけないな。

そうなる……答えは一つ。

「軟禁……か。いや、縛るのは嫌いだし、縛られるのも嫌だ」

手錠は懲り懲りだ、手錠は。

なんかアブノーマルな方へ行ってるな。

はあ……一刻も早く現実から逃げ出したい……。

「……ただいま」「」

打ち上げだの何だのに行っていた舞、楓、白雪、アリアの四人がごつそりと帰って来た。

俺は何食わぬ顔で床に胡座を掻き、テレビを点けて『HEY! HEY! HEY! HEY!』を見ている振りをした。

たまたまりビングに足を運んだアリアは、俺を見つけて隣に座る。

「なによスザク。アンタ、先に帰ってたの?」

「ああ。打ち上げなんか、金欠の俺にとっては自殺行為だ」

「ふーん」

と俺の文句を隣で聞き流すアリア。

「朱雀よ。今宵はとても清々しい気分じゃ。どうじゃ?お主との同棲生活も今宵が最後。今晚ぐらいは一緒に寝てくれぬか?」

ギョツ、と突然後ろから俺へ抱き着く楓。

その台詞を聞いた舞が、険しい表情を浮かべながらすっ飛んで来る。ヤバイ。

戦争が始まる。

「なんですって楓!! 私の朱雀に手を出すなどあれだけ言ったのに!! この裏切り者!!」

「言ったであろう舞よ。朱雀はワシの殿方じゃ。そちのモノでも、他の誰の者でもあるまいと」

「交渉決裂ね。この場で決着を着けようじゃないの!!」

「ちよつとアンタたち!! 何のことで騒いでんのよ!! 五月蠅いわね!! 風穴開けるわよ!!」

ああ〜あ。

テレビの音がノイズで聴こえない。

ジルも寝てる事だし　　しまった！！

ジルがソフアーに居たんだ！！

すっかり忘れていた。

どうにかこうにか、これを止めなくては……状況がさらに悪化しちまう！！

一戦交えようとする三人を、俺が意地でも止めなくてはいけない。

一か八か、だ。

臙脂色のスカートの下から黒銀のガバメントを抜き放ち、双方に素早く標準を合わせるアリア。

撃たせてなるものか！！

俺は腰の右脇の、特殊なホルダーから左手でロッドを素早く三本引っこ抜き、目にも留まらぬ速さで連結してから、アリアが握る二丁のガバメントを一瞬で叩き落とす。

たたき落とされた銃を拾うのを諦めたアリアは、背後に隠した寸詰まりの日本刀に手が伸びる　　が。

「あれ！？刀が無い！！」

それもそのはず、だ。

さつき勢いよく立ち上がった時に、あらかじめ鞘から抜き取っておいたから。

アリアの背後から抜き取っておいた寸詰まりの日本刀を右手の指に挟み、爪のように持って今から舞と競り合おうとしている楓に強襲を掛ける。

疲れ果ててくるくせに、よくもまあこんなに動けるな。

なんて毒づく。

「な！！朱雀！！」

「お願いだから大人しくしてくれ」

右手に握るロッドを口にくわえ、再び右手で腰の左脇の、特殊なホルダーからロッドを素早く三本抜き取って、目にも留まらぬ速さで連結し、口にくわえていたロッドも連結して瞬く間に間合いを詰めて楓の首筋にロッドを寸止めする。

案の定、楓はビックリして動きを止めた。

「朱雀！！動かないで！！楓を仕留める！！」

「そのつもりは、毛頭ない」

高々と天を衝いた舞の虎徹が、動きを止めた楓に牙を剥く。
ガキンツ！！

が、俺の左手に握る寸詰まりの日本刀が、その牙を受け止める。
片手で渾身の一撃を食い止められた舞は、その場に茫然と立ち尽くした。

よし、止めた。

やればできるじゃないか、俺。

「なんじゃ朱雀よ……お主の今の動き、ワシには見えなかったぞ……」

「……流石よね。朱雀にはまだまだ勝てないや」

「ホント、ビックリするわ。それよりも早くアタシの日本刀、返しなさい」

「ほれ。いい加減、ヒトン家で暴れるのは止めてくれ。ただでさえ“危ない人物”が寝てんだから」

「……？」

アリアへ寸詰まりの日本刀を返して気が付く。

あ。

いかん　口が滑った。

三人は顔を見合わせ、キョロキョロと辺りを見回す。
ヤバイヤバイ。

問答無用で殺される！！

「おや？ソファ―に誰か寝ておる」

「あー！ホントだ」

「スザク……どういうことよ？」

「俺に聞くな。来たら此処で寝てたんだ」

と、言うことにして開き直った俺はそっぽを向く。

殺すなら殺せ。

これが俺の罪と言うなら潔く死んでやる。

まあ、武偵は人殺しなんて無理だが。

納得がいかないような表情で俺を睨む三人。

「見たことが、ある顔ね」

「そつえば、ねえ？」

「ま、まさか！！」

そう、そのまさかだ楓よ。

すぐ目の前に、お前の姉さんの仇が寝てやがるぞ。

「……ジル！！」「」

「全くうるせーな……誰だ？オレを起こしたやつは？」

「な、なな、なんで此処にいるのじゃ！！貴様は！？ま、まさか脱獄してきたのか！！」

「そうよ！！アンタはあの時、確かに捕まえたはずなのに！！」

「また朱雀を拉致しに来たのね！！」

三人の猛口撃に、振り返った俺へジルは助けを求めてアイコンタクトをしてくる。

しかし俺はそれに応じず、むしろ説明しろと睨み返す。
ちっ、と露骨な舌打ちをすると、ゆっくりと口を開いた。

「司法取引、だ」

「司法、取引……？」

「聞いたことがないの。なんじゃそれは？」

「司法取引ってのは、オレは武偵局に機密の情報を提供するする代わりに、その捜査に協力すること承諾した。だからオレは武偵高の一生徒として此処にいる。尤も、オレの目的は他にある」

「目……的？何よそれ？」

アリアの問いに、ふ、と不敵な笑みを浮かべ、胸を張り、俺の方を指差し

「朱雀を、オレの“婿”にすることだ」

と、言っちゃった。

はい？

俺を見る彼女たちの視線が、ものすごくイタいんだが

「ちよつと!!!どういうこと!?!朱雀!?!」

「落ち着け舞。これはあつちが勝手に決めたことで俺は何も……」

「ふふふ。ワシの許婚である朱雀を横取りする気か? いい度胸じゃのジルよ……」

「別に、ア、アタシはそんな関係じゃないけど、パートナーを連れていかれちゃ困るわ」

三怪物娘の背後からブアツと、ドス黒いオーラが放たれている。

うわー…再び一触即発状態かよ……

に、逃げなきゃ……

俺の本能が、そう告げている。

察知されぬようにゆっくりと歩き、外にある防弾倉庫へ向かう俺。

「良いだろうジルよ。その喧嘩、買ってやろうではないか。ただし、条件がある」

「……条件?」

「ただ暴れて決着を着けるのは面白みに欠けると思わんか? だってらいつそのこと、どちらかが朱雀のことを思ってるか、朱雀と一緒に任務を受けて、それで決着を着けようではないか」

「ふつ。面白いな。……内容はなんだ?」

「そんなに焦るでない。明日発注される任務を見て決めようではないか。言っておくが、ワシは手強いぞ?」

「臨むところだ。泣かせてやる」

「私もやります！！私の朱雀は誰にも渡しません！！」

「とことん付き合ってられないわね……まあ、とりあえずアタシもスザクのパートナーだし。もしかして私も参加しなくちゃいけないわけ！？」

「結果的に、そうなるじやろ」

「し、仕方ないわね……やる、やってやるわ」

あれ？

とりあえず今回は話し合いで済んだのか？

と、窓の外から恐る恐る中を覗く俺。

何かとつても嫌な予感がするんだが……。

「もう入って来て良いわよスザク。今回は話し合いで済んだわ」

と珍しくアリアが呼びに来る。

「そうか……そりゃあよかった」

「ただし、明日、覚悟しておいた方が身のためねスザク？」

「明日？何かあるのか？」

「朱雀を賭けて行く任務があるわ。誰のものなるかなんてどうでもいいけど、パートナー失っちゃったら、残るは頼りにならないバカキンジだけになるわ。それだけは絶対に阻止するの。絶対にね！！」

「は、はあ………」

やる気満々で言うアリアを見て、うなだれる俺。

戦利品は、俺なのか……

ああ。

明日はマジで学校フケようかな。

もう、逃げるので精一杯だ。

なんて考えながら部屋に戻る。

さてと、風呂にでも入って寝るとするか。

一応、舞達が寝ているベッドルームへ行き、一言、あらかじめ言うてから風呂場へ向かう。

そうでもないとまたやられるからな。

二度あることはなんとやら。

俺が無事に風呂場から生還することを祈って、更衣室へ入るのであった。

俺は更衣室に入ると、とりあえず念のため隅々まで調べる。

よし、危なそうなものはないな。

ゆっくりとワイシャツを脱ぐと、中に着ていた無地のTシャツを脱ぎ、靴下、ズボン、トランクスを脱いでカゴに入れ、恐る恐る風呂場に入る。

案の定、お風呂には誰も居ない。

胸に残る生死をさ迷ったぐらい致命的だった大きな十字傷。

身体の至る所に、今も残る複数の傷や弾痕。

アリアと喧嘩したり、舞と喧嘩したり、色んな奴の喧嘩の仲裁に入ったりして出来た傷もある。

見ないうちに増えたもんだな。

ホント、物騒なところだよ　武偵高は。

今さら言っても仕方ないが。

シャワーのノズルに左手をスツと伸ばし、きゅ、と右に捻る。

雨のように俺の顔、頭、身体に注ぐシャワー。

その無数の水の粒は瞬く間に俺の髪を濡らし、身体を濡らす。

ふと背後に視線を感じ、まさか、と俺は勢い良く振り返る。

「むぐ!？」

小さな手が悲鳴を上げようとする俺の口をすぐさま塞ぐ。

そこにいたのは、恥ずかしそうに胸を隠すようにバスタオルを巻き、いつも結っている後ろ髪を解いた楓が居た。

楓は周囲を再三確認すると、俺の耳元で囁いた。

「騒ぐでない朱雀。ワシは、別に変なことや襲うなど下劣で破廉恥なことは絶対にせぬ。心に誓おう。同棲生活のシメに、ワシはそちと風呂に入りただけじゃ」

「お、俺は入りたく無いね！！もう舞のでトラウマになってるわ！！」

「これ、大きな声を出すな。そんなにワシのことが嫌いか？朱雀よ？」

「う……」

と上目遣いで言う楓を見た時一瞬、たじろぎ困惑する俺。き、嫌いでは無い。

でも、好きだと言うわけでもない。

それより、いつも見ている楓と、ロリ体型で一枚上手をいく大人びた雰囲気醸し出す妖艶な今の楓とでは、そのギャップに度肝を抜かされる。

キレイと言うか、その恥を凌ぐために赤らめた頬がとても可愛い。

こんなにも清廉で、愛らしいと思ったのは初めてだった。

なんか俺も恥ずかしくなってきたので、不意に視線を反らす。

楓は振り返った時に見えた、俺の胸の十字傷を見て、優しく指で触れる。

「そうか……これが、“あの時”の……」

「……ああ」

「さぞ、辛かっただろう？」

「まあ……でも今は平気だ」

「傷は治っても、心についた深い傷は、なかなか癒えぬものじゃ。

ワシは、傷ついた朱雀の心に優しく寄り添えるような、そんな女の子になりたいのじゃ。やっぱりワシでは無理なのかの……」

「……楓……」

キュツと、俺の背中に両手を回し、俺に渾身の力を込めて抱き着く楓。

もう身体と身体が密着するほど、力強く抱きしめる。

俺の両腕に収まるほど、小さな楓の身体。

絹のように白い肌、桜の花びらのように小さな唇。

手や身体からほんわかと伝わる温もりと、早くなっっていく鼓動。

……どうして、こんなにも切なくなるのだろう。

俺はただ、ただそんな楓を眺めているだけで、抱きしめることはできなかつた。

……怖いから。

なんか、取り返しのつかないような、後悔をしそう。

つか、俺だって健全な男子だ。

「……離れるのが怖かつた……」

「……朱雀から、離れるのが怖かつた。中学三年の頃、そちが東京武偵高に強襲科の指定推薦で進学すると聞いた時は、正直離れたく無いって思ったのじゃ」

「……」

「今のままの生活が、ずっと続けば良い。そうどこかで願っていた。彩と朱雀、九龍、アラン、ソフィア。このメンバーで馬鹿やっとな笑いしてた方が、よっぽど楽しいと思っていたのじゃ」

悲しげに小声で、彼女なりの言葉を必死に投げ付けて、俺に伝えようとしている楓。

俺はただ、黙って聞いているしかできなかつた。

「親や弟の反対を押し切って東京へ着て、久しぶりに会おうと思っていた矢先、朱雀の周りに女の子が居ると知って、盗られたくない、意地でも奪い返そうと躍起になっておった。自分が馬鹿じゃったの

う。でも今もその気は変わらん。これからもずっと、朱雀へ嫁ぐまでは今まで通りワシは朱雀の許婚じゃ」

そう言う楓を見て苦笑いを浮かべる俺。

変な嫉妬してたのも、アリアや舞が居たせいだったのか。

「……そうだ。早く風呂に入ろう朱雀？湯冷めしては風邪を引いてしまうからの」

「……」

と楓は俺から離れると急いで湯舟へ入った。

これだけでもしんどいのに、楓はニコニコしながら手招きをする。

この狭い浴槽に、二人で入るのか！？

「今日は出血大サービスじゃ。朱雀もワシを気にせず入れ」

そう言われてもねえアンタ。

楓が入っちまったら、明らかに俺が体育座りでも収まらないんだよ、この浴槽に。

ヤバいな……寒くなってきた……

「バカヤローだなお前は。お前を抱えて入らなくちゃいけないだろ」

「構わぬ。朱雀の温もりを感じればそれでよい。して抱っこして貰いながら風呂に入るのは、幼少の頃以来だの」

「はしゃぐなアホ。色んな意味で危ないだろうが」

恥ずかしそうに俯きながら、楓を抱き上げると、俺は自分の前に楓を下ろす。

恥ずかしい話だが、幼少時代、風呂のボイラーが熱暴走を起こして大破し、修理するのに一ヶ月は掛かると言うことで、すぐ隣の楓ん

家に寝泊まりしていたことがあった。

風呂に入るとなると、何でかんで楓は俺と一緒に入りたがるもんだから、兄さんはそんな楓を見て苦笑いしてたな。

そんな兄さんも、楓の姉さんに気に入られてたし。

幼いから女の子とか気にしてなかったが、今になってみるともうヤバい。

ヤバすぎるぞ。

そんなこともお構い無しで、楓は俺へ寄り掛かって来る。

やめろ、やめてくれ。

鼻血マグナムが血を噴くぞー！！

「今宵は満足じゃ朱雀。ぐっすり眠れるかも知れん」

「はっ。この件について俺は責任を一切負わないからな？バレても俺のせいにはするなよ」

「構わぬ。ワシは朱雀と一緒に居れば何も言うことはない」

「……満足ならもう上がれ。逆上せちまいそうだ」

「左様か。承知した」

そういうと、楓は何食わぬ顔で、何もなかったように風呂場を出て行った。

くっそ……完全に逆上せた……

フラフラと湯舟から上がると、楓で更衣室を出たことを音で確認し、ゆっくりとした足取りで風呂場を出て、更衣室で寝間着に着替えると、急いでそこを後にした。

皆が風呂に入った後。

俺はリビングのソファでいつものように寝ようとしたのだが舞や楓、ジルが言うので仕方なく、彼女達が寝ている部屋に布団を敷いて寝る事になった。

そろそろソファで寝ることに、身体も限界が来ていたので俺は『夜這い厳禁』と白雪以外の四人に釘を打って話を快諾した。

理由は知らないが、ジルも此処で寝ると言う事なので、五つ空いていたベッドは満員。

そこに何故かヒスったまま帰ってきたキンジが加わり、部屋にいるのは女子五人に男子が二人 合計七人。どう考えても二人、床で寝ることになる。

この部屋の入口から見て右側の二段ベッドに舞と楓、前まで俺が寝ていた奥のシングルベッドをアリアが陣取り、左側の二段ベッドにキンジと白雪。

まず床で寝るのは俺と、そうになるとキンジが打倒なのだが……

「人が寝ていた場所で寝ると朱雀？どうやら貴様はククリ刀で一度刺されなきゃ
」

というわけでキンジはいつものようにベッドで寝て貰う事になった。ジルと俺が寝る敷布団を二つ敷きつつ、俺は辺りをチラッと見る。舞や楓、アリアの視線がものすごく痛い。

何でそうなる？

俺は脅されただけだぞ！！

いいかお前ら、あのガチな目で、しかもククリ刀をチラッと閃かせられてみる！？

もし逆らったら最後、四肢分断された拳げ句、東京湾に投げ捨てられるぞ俺！！

……誰だって命は惜しいだろう。
わかってくれよ、そこはさ。

「寝る前にもう一度言っておくジル。夜這いは厳禁だからな!？」
「心配するな朱雀。オレはそんなことはしない」

火が点るような赤い瞳をこちらに向け、ふふふ、と不敵な笑いを浮かべるジル。

「何故そんな事が言えるのじゃジル!! 怪しい笑いを浮かべおつて!! 何か企んでおるのじゃろう!？」

「そうよ!! 朱雀と“イイ事”する気だわ絶対!! うん、絶対そうよ!!」

「イイ事って何よスザク!! 今度他の女の子に手を出したら風穴開けるわよ!!」

「アリア……俺は断じてそんな事をするつもりはない!! っーかお前ら、話がいきなり飛躍し過ぎだ!!」

「……すび〜」

……。

なんて言ってるそばから、俺の隣の布団に潜り込み、寝息を立てているジル。

なるほど、そういう事だったのか。

眠たかったのか お前。

一体何だったんだよ、あの前フリは……。

まあ、これじゃ俺に夜這いなんかできるわけがないよな。

よし、残る危険な猛獣は後3匹。

獲物を狙うように眼光を光らせ、俺の両脇、はたまた一方的な不純

異性交遊を狙う獣達。

さて……俺は貞操を無事に守り切れるのだろうか。

消灯してから30分後。

シンと静まり返った部屋の中、俺はiPodで大好きなアーティスト『UVERworld』の曲『オトノハ』をイヤホンで聴きながら、夢見心地でいると

人の 動いている気配がした。

俺はジルに背を向けて寝ている。

頭上はアリアが寝ているベッド、俺が向いている方向は舞と楓が寝ているベッドで、ジルの向こう側は、白雪やキンジが寝ているベッドだ。

俺の背後の方。

ジルの向こう側から 気配がする。

気の、せいかな。

なら大丈夫かな？

布団の中に、誰が入って来た。

背中に、ささやかながら柔らかいものが当たる。

俺を包み込むように、胸へ伸びて来る手。

さすがにびっくりして振り返ると

目の前に、くつつきそうなくらい近くに舞の顔があった。
さらにびっくりして布団から飛び出しそうになり、勢い余ってイヤホンが耳から外れる。

「ま、まままま舞!？」

「しっ。他の人にはれちゃうでしょ？」

「夜這いは厳禁って言っただろ!!」

「んふふ。夜這いじゃないよ。添い寝だよ」

「添い寝って……お前な……」

と突っ込むと

また布団に入ってきて来る気配があった。

再び首を反対側に振ると　そこには楓がいた。

「な、な楓!？お前まで」

「添い寝じゃ添い寝　深いことは気にするでない朱雀よ」

「便乗してんじゃねえ!!」

「でも今晚で同棲生活最後よ？別に良いじゃない？ね？」

「……もう知らん。好きにしろ!!」

とヤケクソに気味に言っていると、俺は目を閉じた。

… 4 (前書き)

新作のお知らせ!!

創作小説『Midnight Blade 夜刀の契り』も公開
しました!!

笑いあり、シリアスあり、戦闘あり、ラブコメなのにかなりエロい
!?

“ヘタレな主人公”が偶然(必然的に)出逢った“ツンデレ半妖娘”
と織り成す異能・妖怪ラブファンタジーです!!

随時更新中なので気になる方は是非とも読んでください!!
ちなみに随時オリキャラも募集してますのでメールください!!
よろしく願います!!

朝が、来た。

カーテンから零れる朝陽を浴び、意識が現実に戻される。大きな窓の脇にある、アタシが寝ているシングルベッドはよく、カーテンから朝陽が零れて来ることがある。いつものようにアタシこと神崎・H・アリアは重い瞼をこじ開け、ゆっくりと目を覚ます。

枕元にあるケータイを手探りで探り、フリップを開けて時間を確認する。

現在の時刻、午前7時半。

しまったわね、寝過ぎたわ。

急いで飛び起き、ふとベッドから部屋を見渡すと

「み、にゃ!?!」

朱雀の布団の中に　あろうことか、舞と楓が寝ていた。

朱雀へ抱き着くように、両脇からヒシツと密着して寝息を立てていた。

朱雀は朱雀で、寝苦しそうに顔を歪めて寝ている。

な、な……何をやってるのよアンタ達!!

などと内心叫びながらバババツ、と枕元に置いていたホルダーから銀黒のガバメントを抜き取り、寝ている朱雀の頭に銃口を向けるが、トリガーに指を掛けてるが動きが止まる。

……………。

まったく、何でこんなにもコイツの顔を見るとイライラするの!!
なんで胸の奥でジリジリと焦らしたような感じがするのよ!!
なんで朱雀に女の子が近寄ると、こんなに焦っちゃうの!!

朱雀の頭に銃口を向けた二丁のガバメントを静かに降ろし、ゆつくりとしゃがんで朱雀の寝顔を覗く。
よく見てみると……朱雀の寝顔ってなんかかわいいわね……。少年っていうのかな……無垢なカンジで……なんかすごい幼く見えるわ。

いつも仏頂面で、眉間にシワを作って厳つい表情をするけど、何もしていない時の、普通の顔ってこんなにも間抜け面でかわいいんだ……。

よし、腹いせよ。

寝顔を写メつてやる……！

ジーツと観察(?)し、ホルダーへガバメントを戻す。

ケータイのカメラ機能で写メを撮ろうとすると。

突然、カツと朱雀が目を見開き。

「暑いっ……！蒸し暑いっ……！」

と上半身をカバツと起こす。

びっくりしたアタシも

「みぎゃっ……！」

と尻尾を踏み付けられた猫みたいな悲鳴を上げてジャンプしながら大きく飛び退く。

「……あ、ありあ？」

眠たげに瞼を擦りながら、朱雀はアタシを見る。

「な、何でもない……！あ、あんまり起きるのが遅いから蹴飛ばそうと思ってたところだったの……！ほ、ホントよ……！」

「アハハ……通りで殺気を感じたわけだな……」

なんて苦笑いを浮かべる朱雀。

それを見た時に、アタシの胸の奥がキュンって鳴ったような気がした。

「ん………煩いわねもう。朱雀う………もう起きるのぉ?」

アリアの叫び声で目が覚めたのか、舞が眠たげに瞼を擦りながら、ゆっくりと上半身を起こす。

当たり前だろ、と苦笑いしながら舞の頭を優しくナデナデする朱雀。なんか、やたらと舞の声に色気が籠っているような気がした。

イラッ。

自然とガバメントに手がいったが、アタシは心の中で、何故か朱雀にガバメントをぶっ放すことでそのモヤモヤを治めた。

「何じゃ………朝から煩いの………もうちょい静かに起きれんのか?このたわけ」

「うゝるゝせゝなゝ。まだ寝てんだぞオレは。声のトーンぐらい考えろ」

と、ご機嫌ナナメの楓とジルも目を覚ました。

後は、このバカキンジを起こすだけ。

「おいキンジ!!早く起きろ!!遅刻するぞ!!」

と冗談半分にワイシャツへ袖を通していた朱雀が叫ぶと、びっくりして起きたキンジが降ってきた。

べしや。

見事に床へ大の字で着地する。

それを見た朱雀と舞、楓、ジルが腹を抱えて笑う。
アタシもそれを見て吹きそうになったのを堪える。
先に起きていたのか、エプロン姿の舞が何事かと言わんばかりに部屋に入ってきて来る。

「大丈夫？キンちゃん？」

「ああ……なんとかかな」

「ほれキンジ、掴めよ。立たせてやる」

「すみません朱雀先輩」

「情けないな〜キンジくん」

「舞先輩まで……」

とキンジを立たせる朱雀。

アタシはただ、それを黙って見ているしかなかった。

これが、仲間……。

朱雀が言っていた、“信じ合える仲間”なんだ……。

まだ仲間としては認めれない人が一人いるけど。

着替えをするために部屋を出ていくキンジと朱雀をじっと見ていると。

「どうしたアリアよ？そんなにキンジが羨ましいのか？ん？」

「ち、違う！！羨ましいとかそんな感情はない！！ないないない！！ないの！！」

「そんないきり立つなアリア。実は朱雀を取られたく無いから嫉妬してるんだらう？」

「してない！！してないの！！絶対に！！アンタ達ホントにバツカじゃないの！！」

「全力否定するか。そうか。それじゃワシが朱雀を貰い受けようぞ」

と意地悪な笑みを浮かべながら言う楓。

それに食いついて来る舞とジル。

「忘れたとは言わせねえぞ楓……今日こそケリを付けさせて貰うぜ？」

「良いだろう。受けて立つぞジルよ」

「私も参戦させて貰うわ！！あなたたちに朱雀は絶対に渡さない！！」

などと口論が勃発する。

あまりにもバカバカしくなったアタシはそそくさと制服に着替えて、部屋を出てリビングに向かった。

リビングにいたのは朱雀とキンジ。

何やら楽しそうに会話しながら、朝食のピザトーストを頬張っている。

朱雀は学校指定のワイシャツの上に、ジャケットではなく、灰色のフードパーカーを着ていたのだ。

不思議に思い、何気なく朱雀の隣に座りながら、会話に入ってみる。

「おはよう。何よ？ずいぶんと楽しそうに会話して」

「おう。アリアか」

「おはようアリア。ついはまだ6時半だったぞ？まあ良いけど。今さ、先輩の武勇伝を聞いてたんだよ。小さい頃のね」

キンジに言われ、今の時計を見る。

ホントだ、まだ6時半だ。

急いでケータイのフリップを開け、ディスプレイを覗くと、デジタル時計も同じ時間を刻んでいた。

なに、アタシ？

まさか寝ぼけてたの？

とか思いつつも、あえて突っ込まずに会話を戻す。

「武勇伝？何よそれ？」

「アリアには難しいか？ようはその人を象徴させる伝説的なエピソードだよ」

「ふーん。あんまり興味はないわ。それより朱雀？上着はどうしたの？」

「ジャンヌにあずけっぱなしですよ……仕方ないからこれを着てるんだ」

「大丈夫ですか先輩？防弾じゃないですよねそのパーカー？襲われたりしたらどうするんですか？」

「まあ、そんな時はそんな時だ」

「ホントに大丈夫なの？前もそういつてて痛い目に遭ったわよね？」

と言うと朱雀は苦笑いしながらアタシの方を向く。

キンジは一瞬、表情を固くするが朱雀に何の変化もないことを確かめると、再び笑顔で話を続けた。

「あの時はまずったと思ったよ。でも、今で考えると笑い話だな」

「そうですか？正直、あれは焦りましたよ……」

「でもさ、俺が盾になることで、“アリアが傷付かずに済んでホントによかった”よ」

と、言った朱雀をアタシはまともに見ることはできなかった。

恥ずかしい。

なんてことを言うのよ……！
ぽかっ。

「あだっ……どうしたアリア？何故殴る？」

「うるさいうるさいうるさい……！風穴開けるわよアンタ達……！」

「は、はあ……？」

「何かしたか俺達!？」

ジャキジャキ、と臙脂色のスカートの下から黒銀のガバメントを抜き放つ。

銃口を向けられたキンジと朱雀は、目を大きく見開いて椅子から立ち上がり、ジリジリと後退していく

また、撃っちゃう。

嫌いでもない、好きでもないアンタ達に。

でも、この二人に挟まれてると、いつも以上に落ち着く自分がある。何故、そう感じるのかは、アタシにはよく分からない。

「風穴祭り!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

バリバリと音を立てて銃口から火を噴く二丁のガバメント。

キンジと朱雀は似たような動きをしながら飛び交う弾丸を躲して逃げ惑う。

その銃声を聞き付けて、残る四人も

「何事じゃ!?アリア!まさか貴様ツ!」

「アリア……また貴女……私の朱雀に手を出すなあ!」

「キンちゃん!!アリアを捕まえて!!」

「良い度胸だアリア、今度こそお前を血の海に沈めてやる!!覚悟しろ!」

三者三様の決まり文句を言いながら、アタシへ襲い掛かって来る。

それでも、アタシはここに居たいと思ってる。

なんか複雑ね、ホントに。

朱雀やキンジを盗られるのはイヤだ。

でも、素直になれない自分がある。

「いい加減にしてくれ……」

朱雀とキンジの心の叫びが、虚しく喧騒の中へ消えていくのであった。

朝からツイてないな。

ピザトーストを食べてだべってただけなのに、何故かアリアにガバの乱射を浴びせられた。

何が風穴祭だあの野郎。

こちらら防弾制服じゃねえんだぞ。

普通のパーカーだぞパーカー。

下手すりゃ死んでたかも知れん。

なんて内心、文句を垂れつつ下駄箱へコンバースのスニーカーを強引に突っ込む。

すると、背後から肩を叩かれた。

「おはよう。朱雀くん」

「あん？なんだ。熱田か？何の用だ？」

「いや、別に大した用はないよ。いつものように朝の挨拶をしただけ。機嫌が悪い見たいんだけど、僕が何か気に食わない事でも言ったかい？」

「ああ。気にするな。朝からアイツの事で頭に来てるから」

「アイツ？もしかしてアリアちゃんのこと？」

と何食わぬ顔で爽やかに笑むイケメン・熱田。

はあ。

もう俺＋アリアのカップリングは学校でもっとも有名らしい。

“どこかの誰かさん”が毎日のように俺の教室を尋ねて来るからな。まあ、それが嫌でいつも逃げるように休み時間は強襲科実習棟の射撃レーンでもくもくと撃っていたりする。

俺は疲れたような表情を浮かべると、再び爽やかに笑む。

コイツ、何か知ってやがるな。

「何だよその笑いは？何かマズイこと知ってるだろ熱田？」

「うん。そりゃあ知ってるさ。アリアちゃんと“同棲”してるんでしょ？僕の予想だとそのままゴールイン、とか？」

「……勘違いするな熱田。誰がアイツなんかと……」

「それがダメなら僕と同じクラスの楓さん、それに舞さんに、救護科一年のソフィアちゃんでしょ。朱雀くんはモテ男だから守備範囲が広い上に、選択肢が多くて羨ましいよ」

「俺がモテてるようには思えん。俺のような仏頂面のどこがモテるんだか。むしろお前がモテるはずだろ」

と俺は総力を以て全否定して熱田をぐいぐい持ち上げる。

「噂では舞さんと楓さん、見た感じいつもべったりしてるアリアに嫉妬して喧嘩したらしいからね」

「へえ。珍しいこともあるんだな」

いやがおうでも毎日見てるわ、と言いたくなかったが、言ったら言っただけのものすごく後悔しそうなので言わないでおく。

何気なくだべりながら廊下を歩いていと鉢合わせした武藤が挨拶をしてきた。

「おはようございます！！朱雀先輩！！熱田さん！！」

「おはよう武藤くん。相変わらず元気だね」

「おはよう武藤」

「はい！！元気と運転だけが取り柄ですから！！朱雀先輩！アドシアードのバンドのヴォーカル、良かったッスよ！！これでまた朱雀の株が上がりましたね」

「余計なこと言うな武藤。キンジに頼まれたからやったただけだ。そ

れともなんだ？俺のベレで蜂の巣にされたいのか？ん？」

とヘラヘラと笑う武藤にヘッドロックを掛ける俺。

それだけは勘弁して欲しいツス、と俺の腕の中でもがく武藤。

「でも、前よりも今の朱雀くんの方が、なんか打ち解けやすいよ。

前の朱雀くんってなんか鋭い刃物を向けられてるようで近寄り難しい雰囲気があったからね？」

「そうツスよ！！なんか怖いイメージがあったツス」

「そうか熱田？俺はいつもと変わらんが……武藤、思い切り締め上げられたいか？」

「お願いします、勘弁して欲しいツス」

「変わったよ朱雀くん。この一ヶ月、随分とね」

意味が分からん、と俺は首を傾げる。

熱田はまた爽やかに微笑む。

俺はもがく武藤を離し、熱田と共に再び教室に向かって進む。

「そういえば朱雀くん。また転校生が来る見たいだよ」

「転校生……？こりやまた随分と季節外れだなあ」

「噂だと、また朱雀くんを狙って来たり、とか？」

「どんな噂だよ……俺はもう面倒見切れんぞ……」

「ふふふ。さあね」

と不気味に笑いかける熱田。

こう見えて、熱田の恋愛情報網は凄い。

武偵高のありとあらゆるカップリングを全て把握していると言つ。恋愛に疎い俺には関係ないが。

途中で熱田と別れて教室に入ると、珍しく入院中だった彩が登校していた。

俺はいつものように中央の列の1番後ろ側、彩の右隣にどっかりと座る。

「よう相棒？久しぶりに会ったな。怪我の具合はどうだ？」

「見ての通り、まだ治りかけだ。強襲科の実習には当分の間、ドクターストップ掛けられてるから免除してもらった」

「ふーん」

「で、お前はどんなんだよ？どこまでいったんだ？ん？」

「何の話だ？」

「惚けんじゃねえよこの色男。アリアとだよ、アリアと。もしくは舞か楓」

と、はぐらかすようにニヤニヤ笑いながら聞いてくる彩。ぶっ。

「バツカヤロ！！何もしてねえよ！！」

「嘘だあゝまさかの全否定かよ。あんなにイチヤイチャしてて何もしてねえっておかしいぞ？健全なイチ男子としては。っーことはなんだ？まさか女の子を抱くのにはビビってんのかお前！？」

「アホくさ。お前の話聞いとると呆れ返るわ。この脳天気色ボケ野郎」

「な！？脳天気色ボケ野郎とは失礼な！！変態と呼べ！！変態と！！」

「どつちも一緒だろうが」

俺のツッコミがこんなにも虚しいなんてな。

「なア朱雀？アランの噂、知ってるか？」

最近、巷で噂に上がるようになったのは俺の後輩で、情報科の美少

年のアランだ。

美少年、と言うより美少女の部類に入る……のか？

まあその辺については分からないが、おそらくは情報科一年の変態野郎どものせいだろう。

アイツ、ただでさえ女の子って容姿だから女装しても違和感がない。納得するほどにな、うん。

あのチアガールのせいで、その噂はうなぎ登りだ。

「見たかったぜ。チアガール姿のアランちゃん」

と彩はニヤニヤしながら言う。

「彩……………」

「むづ…………背後から痺ましいほどの殺気が……………」

彩の背後から、殺気の籠った理恵の声がある。

ほらな？

変な発言するからだ。

「理恵！？」

「彩…………ちよつと来なさい……………」

「え、朱雀！！た、助けて！！Help me！！」
「逝つて来い。俺に止める権利はない」

理恵に耳を抓られ、廊下まで引つ張られていく彩。

退院したばかりなのに、ご愁傷様だな。

俺は天井を眺めていると、ホームルームが始まる事を知らせるチャイムが鳴った。

まさか、な。

謎の転入生がジルだということには、正直幻滅したと言っか何と言っか。

別にわざわざ俺と同じクラスに、しかも同じ科にまで転入しなくても良いだろ。

明らかに俺を狙ってるなコイツは。

全く嫌になるな、ホント。

そして自己紹介をしたジルの一言で

女子からは不潔だと軽蔑され、全校の男子生徒諸君を敵に回してしまっただらう。

思い出すだけで、衝動的に死にたくなっちまう。

これで学校内の俺の評価はただ下がり。

もう不登校になりそう。

ジルが転入してきただけでも大騒動なのだが問題はまだあった。

俺は珍しく、ぽつんと一人で食堂のテーブルに座り、なけなしの銭をはたいて買ったお昼ご飯のきつねそばをズルズルと啜っていた時だった。

つかの間の、俺の静寂なひと時はいつものように、あの怪獣娘達のせいで見事に崩壊した。

「スザクー!!」

「ぶっ!?!」

「済まないな。ちょっとだけ任務に付き合ってくれ」

「え? ちょ、ジル!? ちょっとまだ昼飯が……」

「つべこべ言うな朱雀。すぐに終わる」

「ごめんね朱雀。大事なことから付き合っって貰っよ」

と言いながら、まだそばを睨っていた俺の両脇を抱え、強引に引きずっていく。

ああ、もったいない。

なけなしの銭で買ったきつねそばが、どんどん遠退いていく。

それを、物珍しそうに見ていた周りの生徒たち。

見せもんじゃねえぞこら。

「なあ？こんなに大勢で何するんだ？」

「依頼よ依頼。昨日、スザクに言っただでしょ？」

「ん？ああ、俺を賭けて……まじすか？」

「マジよ。これだけはハツキリさせたいからね」

「はぁ………で、内容は？」

「緊急任務じゃ。『過激派のグループと思われる強盗団が、品川の銀行で武装して籠城。中に残された人質を救助及び犯人の捕縛』が任務の内容じゃの」

と楓が手に持つコピー用紙を見ながら、俺に伝える。

「みんな念のためC装備に着替えて。役割分担はアタシがやるわ」

「アリアに任せて大丈夫か？」

「文句言っな！！分かったらさっさと着替える！！」

「はいはい」

女子四人は女子更衣室で、俺は男子更衣室でC装備に着替え、一度昇降口へ集まる。

アリアと楓は容易に想像できる姿だが、舞がC装備を着るのは想像するのにとて違和感があった。

ちなみにジルは今日から転入してきたばかりだから、もちろんC装備を着ている姿には違和感がある。

早く着替えを終わらせた俺は、同伴する新米武偵（？）のジルのために、熱田から詭えていた拳銃のメンテや予備マガジンを用意して昇降口へ向かった。

案の定、先に来ていたのはジルだけだった。様になってるな、意外と。

プロテクターを着てヘルメットを被るジルの姿は、意外にも似合う。

「早かったな。ジル」

「ふん。のろのろ着替えるのはオレの性に合わない」

「ふーん。んで、拳銃は持ったか？」

「持ってない。使ったこともないからな」

「やっぱりな。今日の授業見てたら嫌でも分かるさ」

今日の四時限目。

拳銃の射撃訓練があつたんだが、使い慣れた事のないモノをアタフタしながら使つてたジルの姿を見てたしな。

「なッ！！貴様！！まさかそれを見て影で笑つてたな？」

「んな馬鹿な。ほれ。これ、お前にやる。熱田が調整してくれたからジルにピッタリだと思う」

「……………／／」

俺はさつと、手に隠し持っていた『SIG P228』をホルダーごとジルに差し出す。

ちよつとびっくりした後、ゆっくりと手を伸ばしてそれに触れる。

「悪いな。そこまでしてくれて……／／」

「曲がりなりにもお前は俺達の仲間だから。それくらい当然さ。それに、武偵はつねに帯銃しておかなきゃいけない決まりがあるからな。持つてて損はしない」

「……そうか」

SIG P228を手に取って不安そうに俺を見るジル。
大丈夫、と俺はジルに笑って見せる。

「使い方が分かんなきや毎日放課後、強襲科実習棟の2階の射撃訓練室に來い。俺がちゃんと一から教えてやる」

「……ホントか!？」

「武偵が銃の使い方分からなくちゃ恥だからな。近接格闘しかやった事のないジルには良い経験だろ？」

「オレは嬉しいぞ朱雀。でも、スパルタでなくて優しくお願い／＼」

なんて俺の前で頭を下げるジル。

頭を下げられちゃ、仕方ないか。

そうこうしているうちに、C装備を着た楓とアリア、舞が合流した。舞C装備姿は……ノーコメントにしておこう。

プロテクターの間隙から微かに生乳と黒いレースのブラが見えてい
るが、これはご愛嬌と言っことで。

どっだけでつけえんだよ……。

つか、マジで鼻からマグマが噴火しそう。

もしくはジェットエンジンの火か？

なんて目を反らしながら考えている俺。

「みんな揃ったわね。それじゃあブリーディングを始めるわ。時間
が無いから手短かに説明するわよ？」

アリアの話によると、強盗団が籠城している銀行はビル8階建て。

強盗団の人数は不明、目視で確認できる人数は恐らく軽く50人は
越えていると推測される。

武装はAK-72やUZIなどのマシンガン系が多く、バイナッブル手榴弾や投

擲ナイフ（スペツナズナイフ）を持つ者もいるそうだ。
人質は推定15人から30人程度。

ちっ……予想していた人数よりも遙かに多いな。

入口は裏口、正面、ビル両側部にある4つのエアダクトが侵入口になる。

まず、裏口と正面は間違いなくバリケードを張られて突破出来ないし、屋上には見張りが数人いるから、ヘリでの屋上から侵入は不可能。

と……なると残された入口はエアダクトのみ。

一カ所から入ると後でめんどくさい事になるので両サイドから侵入する。

しかし、初心者のジルを任務に同伴させるため、誰かのアシストが必要になる。

「誰かジルのアシストをやる人は？」

「俺がやる」

「ちょ、ちょっとスザク！？アンタは攻撃の要なのよ！！」

「そうじゃたわけ！！そちが外れたら誰が穴埋めするじゃ？」

「お前ら三人で仲良くやれば良いだろう？お前ら三人でやれば、軽く俺の戦闘力は上回るさ。それに近接格闘しか取り柄のないジルをお前らと組ませたら大変な事になるし、危なっかしくて組ませるわけにいかない。もちろんの事ながら喧嘩もしかねん。どうだアリア？」

「う……スザクの言う通りね……分かった。今回だけジルの面倒を見なさい」

不満げに顔をしかめるリーダーの許可が下りたので、アリアと舞、

楓が前衛、ポイントマンジルと俺は後方支援バックアップをすることになった。

別にこの三人が前衛ならさほど問題はないだろう。

主に問題なのは初心者であるジルだ。

初代の霊がついていたからあんなにも強かったらしいが、今のジルはどこにでもいる普通の女の子と何ら変わりはないのだ。

近接格闘のセンスと腕の力だけを除けばの話だが。

迎えに来た東京武偵局のトラックに乗り込み、俺を囲むように四人が座る。

俺の隣に座るジルは、どこと無く不安で一杯の表情を浮かべていた。時折、触れる肩が小刻みに震えていた。

励ましてやりたい……

でも、そんなことしたら今ここで拳の嵐が俺を襲うだろうな。

その反対側には舞が座っている。

直視出来ない。

なぜなら、自然とプロテクターの隙間から見えている舞の乳に視線が行くからだ。

まだ見なければどうにかなるものもあるが、これだけはどうしようもならない。

だって、トラックの揺れを耐えるために舞が腕にしがみつくその時、俺の肘に舞の大変なモノが触れているのだ。

もうダメ……鼻血噴火しそう……

いろんな意味で悶えるトラックに揺られながら、俺達5人は目的地まで向かった。

AM16:00、東京都品川区。

突然の騒動に、町は騒然としていた。

緊迫感ある、シリアスな場面なのに、俺はとても違和感を感じている。

なぜなら、今、俺はプロテクターを身に纏う女の子とエアダクトの中で二人きりだ。

どういうシチュエーションだよ、全く。

『こちらアリアからスザクへ。所定の位置に着いたわね？』

とインカムのスピーカーから俺達の動きを確認するように、アニメ声がする。

ため息混じりに俺は応答する。

「こちらスザク。所定の場所まで後120秒で到着する。任務開始時間までは問題無く到着できる。心配無い」

『こちら楓より朱雀へ　じゃ。ジルとイチャイチャしてたら後で』

「こちら朱雀。それなら大丈夫だ、問題無い。人ひとり入るのがやつとの狭さだからイチャイチャするスペースがない。後、私事は謹め楓。今は任務中だ」

『こちら舞より朱雀へ。大丈夫？朱雀？変なことされてない？それよりこの任務が終わったら、私と』

「こちら朱雀。安否確認より自分の仕事をしる舞」

立て続けにインカムから聞こえる関係の無い話を呆れながら応答しつつ、匍匐前進をしながら狭いダクトの中を進んで行く。

おいおい、とうとうインカム越しに喧嘩を始めやがったぞアイツら。どこまで仲が悪いんだよ、ホントに。あまりにも五月蠅いんで、一時的にインカムの電源を落とし、後ろをついて来るジルに声を掛ける。

「大丈夫かジル？」

「ああ。大丈夫だ。しかし窮屈だな。胸がつつかえてなかなか進まないぞ」

「胸」

「ん？どうかしたか？」

「いや……何でもない……」

ジル。

胸とか言わないでくれ。

胸とかつて。

あの、地獄のようなトラックの中の事を思い出すから正直止めてほしい。

そういえば、思い出してみれば楓ともこんな事があつたっけな。なんて考えてひょいと頭を上へ上げたら
がんっ！！

……いったあ……言わんこつちやない……

ダクトの天井の、凹凸に気が付かず額を打ちまっただぞ……

あ~~~~~イタイ！！

俺の大バカ野郎め！！

「大丈夫か？どこかぶつけたか？」

「し、心配無い。大丈夫だ」

とは言うものの、痛すぎて悶えつつ、額をゴシゴシ擦る。

そして俺達は、所定位置の、一階のロビーの東側の通気口の前に到

着する。

アリアは西側、舞は北側、楓は南側の通気口で待機している。格子越しに客席やソファーが見え、何人ものお客が壁際に追いやられて両手を上げているのが見えた。

目視で数えて人質がザッと20人以上、見張りが10人以上、持っている武器はAK-72が一丁に複数個の手榴弾か……。

バイナッブル

手榴弾を使われちゃ人質にも死傷者が出ちゃう。

極力、披弾させないように発砲は控えた方がいいな。

今、掴んだ情報を皆に伝えるべく、インカムの電源を入れる。

実はこのビル、構造の特徴から東側の通気口以外は見栄えを良くするために物陰にあり、中の情報を得るには乏しく、俺から指示が出るまで待機しているしか無いのだ。

「こちら朱雀からALLへ。今、東側通気口に到着し、敵の人数と人質の人数を確認した。目視で確認したところ敵は10人以上、人質は20人以上。しかも敵は手榴弾多数所持。迂闊な発砲は極力控える」

『こちらアリア。了解したわ』

『こちら楓。了解じゃ』

『こちら舞。了解しました』

『こちらジル。了解した』

それぞれの返事を確認して、追って強襲するタイミングを伝えるとだけ言っておく。

つかジル、近くににいるなら使わなくてもいいだろ。

だって声が聞こえるくらいの距離だぞ。

なんて考えながら、中の様子を静かに窺う俺。

どうやらこうやら、見張りは一定のルートしか回らないみたいだ。

人質の様子を見つつ、辺りの様子を見たりして忙しく動いている見張りの男達。

見てるだけで、だいたい巡回ルートが分かってきた。
目を凝らして他の通気口の格子を探す。

……あつたあつた。

一つは真つ正面、職員よりのロッカーの上にある。

後は、右側のソファアの後ろ、左側の植木鉢の上に壁と同色だが微かに金属特有の光沢があるので分かった。

強襲するタイミングは、その三つの通気口から見張りが大きく離れた時だ。

ひたすら観察すること10分。

珍しいな、さつきまで喧嘩している声が響いていたインカムのスピーカーから、嘘のように止みやがった。

なんて考えていた時

見張りの交代なのだろうか、三つの通気口付近から見張りが大きく離れた。

「こちら朱雀からALLへ。強襲開始!!」

「こちらアリア。了解したわ」

「こちら楓。了解した」

「こちら舞。了解しました」

と言つ返事とともに、アリアや楓、舞が格子をほぼ同時に突き破つて、スカート裾、緋色のツインテールを靡かせて降り立つ。

アリアは出るな否や臙脂色のスカートの下に手を伸ばし、ホルダーから素早く黒銀のガバメントを抜き放ち、流れるように2階へ続く部屋から出ていく見張りへ早撃ちを見せる。

ドゥーン!!ドゥーンドゥーン!!

アリアが放つた三発の銃弾は、アサルトライフルのマガジンを撃ち抜き、残りの弾は見張りを手足を撃ち抜く。

楓も出るな否やアリアと同じそぶりで漆黒のmicrozaiを二丁、臙脂色のスカートの下のホルダーから素早く抜き放ち、トリガ

―を目一杯引き絞る。

ズガガガガガガガガガガガ！

マズルフラッシュを閃かせ、無数の弾丸を雨のように銃口から撃ち出す。

机、壁、パソコンなどありとあらゆるモノを蜂の巣にする。

見張りは悲鳴を上げて物陰へ隠れる。

舞は通気口を突き破って出ると、目の前に居た見張りのアサルトライフルを愛刀・虎徹をしゅらっと抜き放ち、鮮やかに一刀両断する。そして、アタフタと驚いている見張りへ、ごめんなさい！！と言わんばかりの勢いで虎徹の刃を峰に換えてズドツ、と峰打ち。

見張りの男は力無く床に崩れ落ちる。

俺がその一部始終を見届けると、三人は上の階へ上がり、進攻を続ける。

そしていよいよ俺達の出番だ。

俺は格子へ拳をたたき付けると、格子を止めるネジが緩かったのか、簡単に格子は外れて吹っ飛んでいく。

急いでダクトの外へ出ると、右胸のホルダーからGLOCK17を左手で抜き放ち、ウィークハンドで残った強盗犯が隠れている方へ構えると、出て来たジルへすぐに指示を出す。

「　　ジル。人質を全員外に出せ」

「分かった。朱雀は？」

「俺はまだ残ってる連中を捕まえる」

「そうか。くれぐれも深追いするな。朱雀」

「ああ。忠告ありがとう」

冗談混じりに右目だけを閉じてウィンクすると、ばぼっ、と頭から湯気を出すくらいジルの顔が真っ赤になる。

まるで茹蛸だこりゃ。

全く、こうしてみると何だかアリアを見てるみたいで面白いな。

しげしげと見ていると、笑いながら見るな！！と睨まれたので、いそいそとジルから逃げるように、隠れている強盗犯達を探し始める。壁に背を向けてしゃがみ、迷路のように入り組んでいる机へ愛銃を向けて、一つずつ隅々まで探す。

ひたすら低姿勢で歩き、周囲を確認しながら進んで行く　と。

通り過ぎたロッカーの中から　奴が飛び出して来やがった。
気が付くのが遅れた俺の背後に回ると、右手で俺の首を背後から締め上げ、素早くコメカミにやたらと太いナイフをヒタリと押し付ける。

一応、ある程度の訓練は受けてるみたいだな。

なかなかデキル。

だが　絞めが甘いッ！！

スパッ、と絞めが緩んだ隙に俺は屈み、その勢いを使って踵で奴の足の甲を踏み付ける。

どむっ！！

俺の全体重を乗せられた踵に踏み潰された奴の足は、ミチ、と言う柑橘系の果実を握り潰した時のような音がした。

それもそのはず、俺が履いてる編み上げブーツは自作の魔改造ブーツで、近接格闘するときに蹴りの威力を上げるため、底が全て厚さ5?の合金で出来ている。

それで60kgあんの重さを掛けた踵で踏み付けられてみる。
足が見事に潰れるのは当然だろ。

あまりのイタさに屈み込み、呻く奴の胸倉を両手で掴み上げる。

ふと背後に殺気を感じたので、振り向きながら掴み上げたソイツを、巴投げの要領でありったけの力を込めて投げ飛ばす。

どかつ！！

俺に向けて銃を撃とうとしていたもうひとりの強盗犯に、投げ飛ばした奴が命中する。

ビンゴ、とガッツポーズをすると、悶え苦しむ二人の両手に手錠を掛ける。

「ふう……次は……」

と愛銃を構えてロッカーを開けつつ、中に隠れて居ないか確認しながら探していく。

誰も居ない事を確認すると、引き返してジルと合流する。

「ジル、人質は？」

「言われた通り全員外に出した。上に行くのか？」

「ああ。アリア達と合流しよう」

「分かった。急ぐぜ」

「あんまりはしゃぐなよ。後で疲れるぞ」

と言いながら扉をくぐり、安全を確認しながらゆっくりと階段を上がって行った。

朱雀達が階段を上っている頃、あっという間に全ての階を制圧したアリア達は屋上に到着していた。残るは目の前にいる奴で終わり。黒いスニーキングスーツを身に纏い、顔をガスマスクで隠している。背丈はそんなに大きくは無い。アリアは犬歯を剥いて叫ぶ。

「大人しく捕まりなさい強盗の主犯格！！逃げようたってそうはいかないわー！！」

「そうじゃ。そちの周りにはワシらがある。逃げようにも逃げれん。悪いことは言わぬ、観念して早くお縄につけ」

「どうしても逃げるといふなら私達がお相手します！！覚悟してくださいー！！」

アリアはガバメント、楓はmicrouzi、舞は愛刀の虎徹を下段で構えて、主犯格を一齐に取り囲む。

こうなったらもう最後なのだが、奴は何の躊躇いもなく腰に付けていたホルダーの拳銃へ手を回す。

それを見逃すはずの無いアリアは、素早くガバメントで狙いを定め、引き金を引こうとするが
パン！！

「きゃんっ！！」

「な……！！？」

「アリア！？」

アリアよりも早く、瞬時にアリアの握るガバメントを二丁、それも正確に撃ち落とす。

銃声は一回だが、銃口から放たれた弾丸は二発。

ダブルクイックドロウ
二連速射。

引き金を瞬間的に二回引き、一回の銃声で二発の弾丸を撃つ、才能に恵まれた者でしか使えないという神業中の神業。

アリアはしっぽを踏まれた犬のような悲鳴を上げ、握っていた自慢のガバメントをガシャガシャ、と床に落とす。

それを見ていた舞と楓は啞然とした。

これを使えるのは、アリア達が知っている中で一人しかいない。

仮に他に使える人はいたとしても、正確に、ほぼ同時に二丁の拳銃を狙い撃つなんて無理に等しい。

「なかなかやるじゃない。上等よ！！こうなったら意地でも、とっ捕まえてやるわ！！」

「待てアリア！！早まるな！！もしかしたらワシらじゃ相手にならぬかもしれない！！迂闊に手を出したら怪我をするぞ！！」

「みんなで協力すれば絶対に勝てる！！捕まえられる！！アタシはそう信じてるわ。だから余計な心配しないでアタシに手を貸しなさい！！アタ達！！」

「アリア……」

「全く……この鉄砲玉娘はちゃんと言う事を聞かぬから困るのう。まあ捕まえなければいけないのは変わらない。一度言い出したら何が何でもやり遂げる。仕方ない、やるしかないじゃろ」

ジャキツ、とmicrOUZIEの銃口を奴に向けて一気に引き金を引き絞る。

ズガガガガガガガガガガ！

濁いた連射音をビルの屋上に轟かせ、弾丸の雨が奴を襲う。

しかし、奴には飛来する弾丸の動きが見えるのか、有り得ないほど

最小限の動きでバラ撒かれた弾丸を躲していく。

躍りになって撃ちまくる楓だが、装弾数は30発から50発程度なのですぐに弾切れを起こす。

ジャキツ、と奴は紫色のナイフを抜くと凄まじい早さで距離を詰めて来る。

背中に手を回し、愛刀の柄を握ろうとするが。

（しまった！？ダクトに入るのに邪魔になるから置いてきてしまったのじゃー！！）

くっ、と楓は防御の態勢を取る。

すると。

ギンツ！！

舞が楓を庇うように、奴のナイフを愛刀で切り結び、歩みを止める。しかし、次に飛んで来る奴の右足に舞の反応が遅れた。

どかつ！！

薙ぎ払われるように繰り出されたミドルキックは、舞の右脇腹を刺り、いとも簡単に舞を吹き飛ばす。

「舞ッ！！」

「うつ……」

まるで雑巾のように軽々と飛ばされた舞は、低く呻いた後、たたき付けられたコンクリートの上に力無く体を沈めた。

動きを止めて背を向けた奴に、チャンスだと言わんばかりにアリアは二丁のガバメントを素早く拾い上げるながら、小さな獅子の如く、物凄い勢いで間合いを詰める。

相変わらず背を向けている奴に、風穴祭をお見舞いする。

バリバリバリバリバリバリバリ！！

勝利は確定だ。

ートル以上あるぞ。

「油断するな楓!!!早くリロードをしろ!!!」

そうジル叫ぶジルは、自分の予備マガジンを投げる。

楓は投げられたマガジンを素早く受け取る。

そうだ、マガジンの形状は違えど弾の大きさは同じ9ミリパラベム弾。

弾を詰め替えれば、撃てるはず。

急いで楓は物影に隠れてリロードを始める。

「貰ったア!!!」

アリアは先程の銃声で我に返ったのか、背中に隠している寸詰まりの日本刀を、しゅらっと二本とも抜き放ち、奴へ詰め寄り切り掛かる。

ぱしっ。どかつ。

しかし、手を掴まれて赤子を捻るかのように軽々と一本背負いをキメられる。

コンクリートへ背中を思い切りたたき付けられたアリアは、苦悶の表情を浮かべて転がり回る。

その時、奴は頭上に何か気配を感じたのか、素早く上を見上げる。
すると

ドカドカドカドカッ!!!

まるで銃弾を思わせるような凄まじい速さで、長さ30センチぐらいの金属の棒が奴を目掛けて降り注ぐ。

難無くそれを避け切るが、奴はそれより先を読む事ができなかった。
突如、降って来る人影。

ガキンッ!!!

奴は咄嗟に拾い上げたナイフで、降って来た誰かのロッドを受け止

める。

しかし、あまりにも威力が強かったのか、地面を滑るように後退する。

「なぬツ！？防ぎやがった！？」

どこかで聞いた優しく低い声。

みんな、どこかで彼が来た瞬間、安心感を覚える。

「スザク！？来るのが遅いッー！！」

「悪い悪い。残党狩りしてたら遅れちまって。っーかお前らが進むのが早いんだろっが！！」

「朱雀ッー！！駄弁ってる場合じゃないぞー！！奴は 強い！！」

「はっ。見りや分かるってーの。ジルー！！舞を中へ運べ。アリア、立てるか？」

「大丈夫……なわけないでしょ……身体に力が入らない……」

「ったく……ほれ、掴まれ。連れてってやる」

と俺はアリアの手を取ると、お姫様抱っこして楓のところまで連れていく。

そして、戻って来て奴の前に立つ。

「俺としか、殺る気はなさそうだな？“兄弟”？」

「ハハッ。やっと挨拶が出来るようになったか。俺は嬉しいぞ」

「っっ！？」

楓とジル、アリアが驚いて顔を合わせる。

声が寸分の狂いも無く、朱雀と同じ。

楓の頭の中に、先程の光景が蘇る。

ナイフの捌き方、構え方、拳銃の構え方、神業に匹敵する銃技。

出で立つ姿も、その背格好も、違和感を覚えるほどに奴は朱雀に似ていた。

背筋がゾクゾクするほど、冷たいモノを感じる。
と、鳥肌が立っておる……。

近接戦での立ち振る舞いと言い、完璧に朱雀と同じだ。

こんなことって……

有り得ない！！

「今回で二度目だな。真面目に張り合うのは？」

「あの時に大人しくくたばっておけばよかったものを……まさか生き延びてるとはね……一族の強運も甚だしいぞ」

と朱雀の声で、若干時代遅れ気味の、ニヒルな口調で言う奴。

ゆっくりとガスマスクのベルトを外して手で取ると、そこには瓜二つ、朱雀の顔があった。

黒々しい髪に、吸い込まれそうなほど透き通った紫色の瞳。

完璧なまでに朱雀と同じだった。

先程まで赤々と空を照らしていた太陽も沈み、闇が這う夜に様変わりする。

「いつ見ても気持ちいいもんじゃないなア。自分の面を見るなんて
よ」

「俺も同感だ。潔く死んでおけばいいものの、この期に及んでまだ殺らせる気が。クククク。此処まで来ると、運命と言うものは実に滑稽だよ」

「スザクー！これは一体どういう事なのよー！！」

「俺に聞くな……むしろ俺が聞きてえ……」

「さあ、続きといこうか兄弟。心配は無用、夜はまだこれからだ。
互いに愉しく殺し合おうじゃないか」

ヒュン、とナイフを逆手に持ち替える奴。

俺は二本繋ぎにしたギミッククロッドを手早く分解して腰の専用ホルダーにしまつと、右肩のホルダーにしまっていたナイフを取り出す。正直、近接戦は苦手だ。

どうせなら愛銃を使いたい。

が、無意識に俺の左手はナイフを握っていた。

互いに、サツと身構える。

「うう……はつ。犯人は？」

「目を覚ましたか舞！？大変なんじゃ！！朱雀が……朱雀が二人おる！！」

「な……ホント！？」

「そうよ。アタシ達を屠っていたのは、紛れも無い朱雀の贗物」

「やっぱり……そうだったのね。今、どうなってるの！？まさか……」

「朱雀と戦っている」

外を見ていたジルがぶっきらぼうに言つと、舞があわてふためく。それにビックリした楓とアリアは、舞を宥めようとする。

「落ち着けい舞！！どうしたのじゃ！！」

「どうしたの舞！！落ち着いて！！」

「だめ！！戦わせちゃダメだよ！！朱雀と贗物を戦わせちゃ、だめ

！！」

「な……どうしてじゃ！？」

涙目になりながら訴える舞を宥めながら、楓は静かに問う。

一瞬、黙ると舞は息を整えるように深呼吸しながらこつ言つた。

「朱雀が贗物を倒すと、
“本物の朱雀”が死んじゃうの。だから戦
わせちゃダメ。お願い、誰か二人を止めてきて!!」

みんな、表情が凍りつく。

朱雀が……死ぬ？

何故　　？

朱雀が 死ぬ？

何故？

なんで？

「どういう事じゃ！？舞！？」

「朱雀が……死ぬ！？どういう事よ！？」

「落ち着いて聞いて。恐らくあれは“呪詛”の一つだと思う。その辺は白雪が詳しいと思うけど、あれは朱雀自身に掛けられたとても強力な呪い。朱雀が贖物に傷付ければ、朱雀が傷つく。贖物も朱雀自身なんだよ」

「ちっ。つまりもし贖物が死んだら朱雀も死ぬってか……」

「……あれは朱雀の深層心理の奥にある最も怖いと感じた者の表れ。多分、朱雀自身が贖物を自分として受け入れない限り呪いは解けないわ」

「……よく分からないけど、とりあえず朱雀を連れ戻すわよ！！ア
ンタ達！！」

意を決したように黒銀のガバメントを握り締め、アリアが立ち上がる。

弾をリロードし終えた楓と、虎徹を握る舞、P228を握り締める
ジル。

物影からゆっくりと、屋上の様子を見る。

それを見た時、四人は息を呑んだ。

無数に弾ける火花と、激しくぶつかり合う金属音。

まるでぶつかり合う稲妻のように、二人は壮絶な死闘を繰り広げて
いた。

奴の薙ぎ払うナイフを紙一重で躲し、カウンターとして切っ先を突き出す朱雀。

見えたように奴は背をのけ反り、突き出されたナイフを躲し、屈んで立ち上がる勢いを利用してシヨルダータックルを仕掛ける。

反応が遅れた朱雀は、ドン、と肩をたたき付けられ、後方へ大きくのけ反る。

それを見た奴は好機と言わんばかりにナイフで俺の胸を狙って薙ぎ払う。

が 身体を反らしたままバック宙をして奴の追撃を躲して、サマーソルトキックを繰り出す。

間一髪、腕を犠牲にしてサマーソルトキックを受け止め、地面を滑るように後退する奴。

この一連の動きはまるでアクション映画さながら。

遠巻きに見てる四人には、それがあつという間の出来事で、何がどうなったのか全然分からない。

俺は綺麗に着地し、あらかじめ拾っておいたロッドを素早くホルダーから抜き取り、振り向きざまに思い切り投擲する。

そこまでの動きは想定内だったのか、いとも簡単に奴に弾かれる。

奴は電光石火の如く、一気に俺まで間合いを詰めると、瞬く間に懐に入り込んで胸倉を掴み、俺の身体を巻き込むように捻りを効かせ一回転、奴から見て前方のコンクリート壁を目掛けて俺を勢いよくぶん投げる。

な、なんて怪力なんだ！！

ドオン！！

「ぐうっ……」

俺はまるでボロボロになった布切れのように軽々とぶん投げられ、コンクリート壁に投げられた態勢のまままで激突。

ものすごい勢いで突っ込んだのか、コンクリート壁がクレーター状

に凹み、ズルズルと力無く、地面へ頭から落ちていく俺。
それを見た四人は急いで駆け寄る。

「スザクツッ!!しっかりしなさい!!」

「朱雀!!大丈夫か!!」

「おい!!朱雀!!しっかりせい!!」

「朱雀!!死なないで!!」

「……勝手に……殺すな!!まだ生きてる!!」

舞に抱えられた俺は静かにそう言い、骨が軋み、感覚が無いままの
状態でもなお、ゆっくりと立ち上がる。

脳天を打ったのか、ジワジワと赤い液体が俺の額を伝わり、顎まで
流れていく。

たたき付けられた衝撃のせいで脳震盪を引き起こし、焦点も定まら
ない。

吐く息も荒く、意識が朦朧としつつある。

しかし、朱雀はフラフラになりながらも必死に立ち上がった。

自分の臍物を倒すためだけに。

「朱雀!!よく聞いて!!」

「何……だ……?」

「あれは貴方自身。つまり“影の朱雀”よ」

「……俺……自身?どういう事だ?」

「アイツを倒しちゃダメ!!そうしたら朱雀まで死んじゃう!!」

「俺が……死ぬ?」

舞の必死の訴えに俺は耳を疑った。

俺が、死ぬだと?

何をでたらめを……

なんて思いながら奴の方を睨むと、奴も片膝を地面に着き、苦しそ

うに左手で頭を押さえていた。

「強力な呪いの類よ。だからダメ!!」

「わかった……手は出さないでおこう……」

「ふっ。ようやく信じてくれたみたいだ。伝えづらかったらありやしないよ、まったく」

「影の朱雀。貴方はどうして此処に現れたの？」

「なあに、答えは簡単さ。時が満ちたから、かな。それに相応しい人間か、見てやったわけだが……大丈夫だな」

「時が満ちた、じゃと……何の事じゃ？」

「君達を知る必要は無い。朱雀が朱雀、本来、光が光であるために影は存在する。もう呪詛に縛られるのも懲り懲りだ」

地面に横たわる力無く朱雀に歩み寄り、影の朱雀。

みんなただ、彼を見ていると、次第に身体が月明かりに透けてきた。

「最後に一つ、良いことを教えてやろう。君達に危険が迫っている。狼と鬼、幽霊には気をつける。んじゃ」

スウ、と消えると、黒い霧になり、朱雀の体内へと入っていく。

朱雀の傷は消えて無くなり、何事も無かったように元通りになる。

一体何だったのだろう、とみんなボンヤリしている中、俺はゆっくりと起き上がる。

なるほど。

これが“本来の俺”だったのか。

ようやく分かったぞ。

この力の使い方、名称が……

“ヒステリア・サヴァン・シンドローム・ノワール”。

それが俺が持つ能力の名称だ。

トリガーは相手との免疫接触。

つまり、キスかそれ以上の性行為をする事によって能力を発揮するらしいが、まさかキス以上はしないだろう。

話的にR 18指定されちゃうよ。

皆に悟られないよう、生まれた時に強力な呪詛を掛けて俺の記憶から掻き消して、この時が来るまで影として封印してたんだ。

父親は、歴としたこの能力者で、ちゃんと俺に遺伝した。

曖昧だった小さい頃の記憶も、鮮明に思い出した。

あんまり嬉しくは無いけど、ようやく謎が解けてスッキリしたよ。

「何だったのじゃ……あれは？」

「さあね。まあ、任務も終わったし、帰ろうか。結局、誰も達成してないから、戦利品である俺は誰のモノでも無いっていうことで」

「……え……」

「ちょっと待ちなさいスザク!! それどういうこと!!」

「だって結局そうでしょ? 誰も俺のフォローしてくれなかったし……」

……

「した!! オレはしたぞ!!」

「ジルは足引つ張ってただろ？」

なんて四怪獣娘に揉みくちやにされながら、俺達は帰路についた。

まあ、俺が誰のモノでも無いっていうことを証明できただけでもよしとするか。

さて、今晚はコイツらが居ないし、ルームメイトのキンジ君と飲み明かそうかな。

……なんてね。

… 9 (後書き)

意外とピユアでさみしがり屋な古風美少女・伊達楓が大好きだ！！

どうも、最近寝不足気味のKOHです

可愛過ぎでしょ楓っち

実は舞やアリアよりも好きだったりするw

ステータスがほぼアリアとおんなじだがw

今回の朱雀とのラブラブ混浴シーンなんてうらやましいぜ(泣)

そんなこんなでオリキャラ達に愛情を注ぎまくっているKOHですが、とうとう来ましたくせ者！！

ヤンデレなジルちゃん

早く書きたい書きたいとウズウズしていたんですが、書いてみたらとんでもないキャラだよな！？

いきなりプロポーズっていう朱雀にとってひど過ぎる仕打ちw

しかも独占欲フル回転w

さてさて、朱雀はあの四怪獣娘とどういう風に折り合いをつけていくのか！？

そして今回の、ブラド戦の前戯をようやく終了

あとはブラドVS朱雀&アリア&理子ね

キンジも入れたいけど、四人はちよつと多いなw

はたして朱雀は“執事”に成れるのか？w

今回はオリキャラは控えて話の中にはちよくちよくジャンヌやレキなどを出すつもり

ようやく朱雀の能力の名称も判明したが……(ニヤリ)

それだけでは、終わらないんだよね〜これが(ニヤリ)

まあ、楽しみにしていて下され。

まだまだ未熟者ですが、これからも応援して下さい！！

よろしくお願いいたします!!

く皆様が飽きないで、ずっと楽しめる二次小説でありますようにく

b y K O H S A W A G U R A

ACT 8 ・ 蜂蜜色の罠と紫色の弾丸 - Honey trap and Purple

いよいよ始まりました

ブラド編!!

さて朱雀たちはどうやって立ち向かうのでしょうか!!
お楽しみ!!

あのあと、任務を終えてあの四怪獣娘との同居生活にも終止符を打った俺は、アリア達がいるせいで下校拒否していたキンジと部屋で祝杯を上げていた。

まあ、Aランク以上の任務をこなして値段は言えないが高額な金も入ったことだし、この機会に奮発しておくのも悪く無いと考えた俺は、帰り際、銀行で金を下ろして来つつ、コンビニに寄ってこっそりカクテルやりキールを買ってきておいた。

案の定、キンジには遠い目で見られたが、帰ってきたのがテメエの運のツキだ。

今晚は付き合って貰うぞキンジ君

東北武偵高附属中学に居た頃は、ちゃっかり彩ん家に集まって、こっそりビールとか飲んでたな。

で、彩の母ちゃんに見つかって頭ごなしに怒鳴られた挙げ句、一時間説教されて……。

けっこつ、悪い子だったんだな。

なんて思い出して笑う俺。

「ようやく出てったな。あの怪獣娘ども」

ソファーに深く腰を沈めながら、グラスを片手に、ぼんやりと天井を見詰めて呟く俺。

久しぶりにカクテルなんか飲んだな。

なんか、酔いの回りがやけに早いぞ。

「そつれすね〜。でも静かになったからよかったじゃないですか〜」

テーブル越しに、向かいのソファでぐでんぐでんになっているキンジが言う。

顔は真っ赤で、完璧に酔っ払ってやがる。

「何だキンジ？ だらしねえな。呂律回ってねえぞ？ 大丈夫か？」

「そ〜いうすえんぱいこそ、顔が茹蛸みたいに真っ赤れすよ？」

「そうか？ でもまだまだこれからだぞ」

「ええ〜もうギブアップれす〜」

とソファに頭をたたき付け、寝息を立てるキンジ。

コイツ、もしかして酒に弱いのか？

まあ、体質だろうし、別に構わないが。

グラスを口に付け、クイツと傾ける俺。

テーブルの上には、空になったカクテルの缶が5、6本、乱雑に置いてある。

確か、キンジが飲んだのが1〜2本だから、半分以上が俺が飲み終えた缶だ。

カクテル2本でぶっ倒れるって、相当弱いみたいだな。

まだアルコール7%だぞ？

その上には上があるが。

グラスの中が空になったので、無意識のうちにテーブルの下にあるビニール袋からカクテルの缶を取り出して、ぷしゅつ。

あ、また開けちまった。

仕方ない、キンジも寝た事だし、これで終わりにするか。

そう思いながら、とくとくとテーブルに置いたグラスに注いでいると、テーブルの上にあった俺の携帯が鳴った。

サブディスプレイを見ると、見知らぬ番号が表示されていた。

ただのいたずらだったらシカトしてやるうと思っただが、番号は03で始まっている。

ちよつと訝しげに思いつつも、フリップを開けて通話ボタンを押し、耳元にスピーカーを当てる。

「もしもし」

『スザク？アンタ、どこいんの？』

ぬあ、アリアだ。

噂をすればなんとやら。

「今、部屋にいる。どうした？」

いつものように平静を装い、答える俺。
まさか飲酒してるなんていえねえだろ。

『すぐに来なさい。女子寮、1011号室にいるわ』

「ど、どうした急にッ！？っか今、夜中の9時だぞっ！？こんな時間に女子寮って」

『うるさい！！アタシがすぐと言っただけにすぐに来る！！来ないと風穴！！』

がちや。

議論の余地無し。

ご主人様は一方的にお切りになられてしまった。

はあ、酔い覚ましにひとつ風呂入ってから行くか……。

酔いも覚め、酒の臭いを消すためにブレスケアを飲みつつ、嫌々ながら男子寮を後にした俺は、暗い夜道を歩いて女子寮の1011号室へ向かうと……鍵は開いていた。

女子寮は男子寮よりも個室率が高く、ここもそうらしい。ふと表札に視線が行く。

曲がりなりにもここは女子寮、間違っただら申し訳ないからな。念には念をいれて 案の定、白紙。

表札にぐらいは名前書いておけよ。

神崎・H・アリアってね。

はあ、とため息混じりにドアを開け、中に入る。

「おい。呼ばれたから来てやったぞアリア」

「もー遅い。でも今日は許してあげる」

玄関に上がると、セーラー服姿のアリアが洗面所からとてと出て来た。

そして、ぎゅ。

いきなり俺の手を握ってくる。

な、何だよ急に？

「こっち。来て」

引っ張られて入ったリビングの光景に、俺は

「う……………?」

思い切り引いた。

キャンドルポットで桃色に照らされた室内には、足の踏み場も無いほどに様々な衣服が散らかっている。

その衣類の数々が、フツーじゃない。

どこかのウエイトレスの制服。

白雪が着てるような巫女装束。

いわゆるメイド服。

大きめに作られた幼稚園のスモック。

猫の耳みたいな髪飾り。

しっぽ飾り。

リコーダーの飛び出た赤いランドセル。

カボチャみたいな形状の、おそらく下着。

その他もろこし。

いや、その他もろもろ。

なんだよ、もろこしって!!

「スザク、どれがいい？」

「は、はア？どれがって……何がっ!？」

「んもースザク。アンタ、“こういうこと”避けて生きてきたからって、ニブすぎよ？どのコス着てほしいか、って聞いてんの」

この場の雰囲気完全に飲まれた俺が、言葉を失っていると

きゅっ、とそのツリ目を細めたアリアが、一歩、二歩、俺に近付いてきた。

「えい」

アリアは黒ニーソあんよで俺の爪先を踏むと、トン!!

と、テンパって棒立ちだった俺を突き飛ばしドサッ。

背後にあったでかいベッドに、仰向けに押し倒してしまった。

「スザクー？」

素早い動作で子供みたいに俺の胴に跨がったアリアは、そのまま、いきなり

ちゅ。

上半身を覆い被せ、唇を、付けてきた。

身体の芯にまで染み込みそうなバニラの香り。

マシユマロみたいな胸の感触。

腰に跨がるプニプニした太ももの感触。

様々な要因が折り重なった拳げ匂、不意打ちでやられたせいで一瞬で“なつてしまった”。

“ノワールモード”に。

そして俺の能力発現のトリガーは、異性との粘液接触。

いくら自制すると言っても、こんな状態ですてやられちゃ回避しようがない。

「!？」

その瞬間、俺の脳裏に閃くモノがあった。

同時に全身が凍り付く。

失礼を承知で言わせてもらえれば、アリアの胸はこんなに盛り上がっていない。

抱き着かれた事はあるが、こんな感触じゃなかったような気がする。それに、アリアはバニラみたいな甘い匂いはしない。

クチナシの匂いだ。

日頃から近くに居て、自然と鼻に染み付いているから、その違いすぐに気づいた。

思い付く人物の名はただ一人　　！！

「峰・理子・リュパン4世、だなあ？」

と唇を離しつつ、いつもとは違う、陽気で明るい、はっちゃけたような面白い口調で俺は問う。

「びんごおー！！やったやったあー！！スザク先輩がヒスったあー！！クララが立ったー！！」

アリア　の姿をしたソイツが、理子の声になって、上半身をガバツと起こす。

ゆさつ、と制服の下の大きな胸を跳ね上げるように揺らしたかと思うと、右手で顎の下を掴み、左手でツインテールの片方を掴み……。顔に付けていた薄いマスクみたいな特殊メイクと、ピンクブロンドのツインテールを取った。

中身は予想通り

「りっこりっこりんでえーす！！くふふっ！！たっだいまあー！！」

理子。

あんなに優しかった清隆兄さんを変え、キンジの兄を殺し、俺のチヤリや武偵高のバスに爆弾を仕掛け　ハイジャックで俺とアリアと戦った末に逃亡していた　初代『武偵殺し』こと、峰・理子・リュパン4世。

憎い。

憎いと言えども、とつても憎いが、俺は武器を握る事さえできない。

なぜなら、俺の両手は、胴へ跨がる理子に制されているからだ。

右胸のホルダーにしまっているGLOCK17も、右太ももにあるホルダーにしまっているM8000も、両手が動かない今はムリだ。

力づくでも動く気があれば動けるのだが、狡猾なまでずる賢い理子の事だ。

何か隠してるかもしれない。

キラキラと星でも瞬いていそうな二重の目を細めた理子は、ウィツグで巧みに隠していた、長い蜂蜜色のウェーブヘアをふあさつと下ろしてくる。

「スザク先輩、理子を助けて」

はっ。

誰が助けるかよ、と心で呟くが、身体はそれとは反対に働き掛けようとしていた。

おいおい、冗談だろ……

コイツを助けるってか!!

今までこんな事はなかったぞ!!

「ていうかそもそもねえ、せっかく理子がダブルスクールしてたのに　アリアとスザク先輩のせいで、イ・ウーを退学になっちゃったんだよ？　ぷんぷんがおー」

イ・ウーを　『退学』……？

「理子、スザク先輩にお願いがああるの。だからお母様が教えてくれた、男の子に言うことを聞かせる方法、初めて使っちゃう。くふっ。ここから先は、理子ルートパッチをお買い上げ下さったお客様専用の、甘い甘ぁーいイベントシーンなのでえーす」

何をわけの分からない事をつ　な!?

興奮したケモノのように息に熱いもの交えて、理子がフードパーカーのチャックを開けてしまう。

この状況で、次に言われる事は明らかだろうな。
どうする。

理子は　ぐいっとその愛らしい童顔を俺の顔に近づけてきて、誘
惑な唇で　言った。

「スザク先輩い。理子とお、えっちいことしよ？」

どうするスザク。

どうする……

どうするよ、朱雀。

「スザク先輩、ぎゅってして」

ギョツとしてるのはお前の方だろう。

峰・理子・リュパン4世！！

ベッドに押し倒された俺は、心の中でその名を呼ぶ。

「くん……くん。はあああ……スザク先輩の二オイだあ……理子これ好き、大好きい……」

理子は俺の頭を抱きしめ、髪に顔を埋めてくる。

背丈に似合わず発育した胸が、思いつきり俺の顔面に押し付けられる。

普段の俺なら間違いなく卒倒するぞ。

大量の赤い液体を鼻から噴いて。

だが、今の俺はその予兆が感じられない。

しかし、このままでもかなりヤバイ。

ま、参ったな。

「理子ね、この間戦った時からスザク先輩のこと忘れられなくなっちゃったんだあ。初めて 本当の恋つてももの、したみたい。スザク先輩スザク先輩、好き、好き、大好き……」

理子は俺の眼前まで、童顔を下げてくる。

大きな二重の目が、幸せそうに俺を見つめてくる。

蜂蜜色の緩いウェーブヘアが俺の前髪と溶けるように絡み合い、その柔肌からは……バニラみたいな香りが漂ってくる。

頭がポーツとしそうな程に甘い、甘い、女の子の子したニオイだ。

「だからスザク先輩、今は何も考えないで。ただ、理子の『好き』を受け入れて欲しいの」

洗脳するように、「好き」を連発してくる理子。

だが

だがな。

そもそも理子は、事故で死んだはずの兄さんを、この間のハイジャックの時のような冷血な兄さんへ変えた。

ANA600便のハイジャックで、俺達を殺そうとした。

それにこの子は、この部屋にだって……アリアに化け、俺を騙して引き込んでいる。

なるはずもなかった、このノワールモードにだって、無理矢理させられた。

信用できるワケがない。

「くすっ。さすがあ。冗談が上手いねりこりん」

と、面白おかしそうに笑いながら言う俺。そう。

今の俺はノワールモード。

アリアに化けた理子にキスされたおかげで、いやがおうでもそっちに切り替わっちまった。

しかもこのチカラ、今判明したのだが相手の能力を写す他に、髪色、性格までが俺へ転写されてしまう。

つまり、今の俺は“理子”が転写された俺、なのだ。

今の俺は本来に意思に反して、俺の上へ跨がる理子と“じゃれ合おう”としている。

このチカラのデメリットは、キスされた異性に、都合よい男の子になっってしまうらしい。

今の状態を示すならばバカ×バカ、つまりバカップルってことになる。

多分、この感情は理子の計算通り　なんだろうな。

「スザク先輩ひどーい。理子の気持ちはウソじゃないもんっ！！その証拠に、そこにあるお洋服……スザク先輩が着てほしいの、何でも着てあげちゃっようよ？」

理子は床のメイド服やナース服、園児服などのマニアックなコスプレ衣装を示す。

「そのカツコで、何でも言うこと聞いてあげちゃっう。くふっ。“なあーんでも”、だよ？」

「ふむう、このままの方が可愛いよお。りこりん。このままで良いからあ、まずお話をする時間が欲しいなあ」

「それはダメな仕様なのです！！今、理子の脳内はもうスザク先輩でいっぱいなんだもん！！理子はもうスイッチ入っちゃってるの、自分で自分を抑えられないの！！」

薄桃色に上気した顔で、理子は俺の下っ腹に跨がったまま上体を起こした。

「だけどさあ、りこりん」

と言う俺の声を遮るように、理子は自分の制服のタイ留めを、ぱちん。

むしるように、外してしまう。

「心配しないで。理子さつきちゃんとシャワー浴びたからっ」

「キ、キレイ好きなのは良いけどお、ちよつとねえ？」

「ごめんねスザク先輩、強引な理子を許して。理子は悪い子なの。欲しいものは、誰かの物でも盗っちゃう子なの。だって、ドロボーなんだもん！！スザク先輩がアリアの物でも、盗んじゃうー！！」

「だけどさあ、理子」

「なーに？」

「『武偵殺し（きみ）』ってさあ、俺の兄さんを盗んだよねえ？」

「まだ、ヤキモチ妬いてるの？」

くふっ、と笑う理子は

とうとう、セーラー服の白いブラウスをたくし上げようと手を掛けた。

「……それって、どういうことお？」

とん。

理子の胸元に指を押し当て、俺はその制服を止める。

「あんっ」

触られた理子はそれだけで嬉しいのか、ぴくん、と切なげに目を細めた。

「そのままのイミ。っていうか、お兄さんはスザク先輩ラブになる前の理子の恋人さんだし。あっ。でも安心して。理子、スザク先輩のお兄さんとは　こういう事はしてないから」

そりゃあ
そうだろうな。

兄さんは、普段の俺と同じで“こういう事”は出来ない人だから。

「だから理子は正真正銘、まだ穢れ無き乙女なのでえーす」

「証拠はあるのかあ？」

「くふつ。このあとすぐ分かるよ」

「違うなあ。“あれ”が俺の兄さんである、その証拠だよ」

「左胸の弾痕」

！！

俺の背筋に、稲妻のような衝撃が走る。

「理子は誰も殺してないもーん。だから、『武偵殺し』なんて言うのは間違ったあだ名。正確には『武偵攫い』かなあー？」

『武偵殺し』とあだ名された、峰・理子・リュパン4世はかつて、何人も武偵を姿を消している。

その犠牲者の一人となった兄さんは、地下鉄事件、いわゆるトレインジャックで理子に襲われた。

で、仲間が誤って発砲した流れ弾が当たって、死んだはずだ。

この目で、葬式のために、死んだ兄さんを俺は見た。

棺桶に収まった、兄さんの姿を。

病院でも、手術後の兄さんの姿を見たことを今でも鮮明に覚えている。

左の胸　ちようど胸骨に左側辺りに、ライフルで撃たれた痕があった。

このことを知っているのは、遺族である俺だけだ。
俺だけの、はずなのに

理子が、知っていた。

それに、ハイジャックの時にあった、あの人の雰囲気は、兄さんそのものだった。

あの人は俺を見て、俺を弟と言った。

間違いない。

しかし、なぜ……？

なぜ死んだはずの人間が生きているんだ？

「はい！！ここで選択肢でえーす！！」

理子は俺に跨がったまま、両手の人差し指で自分の両頬をついた。

「スザク先輩は、りこりんを今から“受け入れ”ますか？『はい』か『いいえ』を選択してね。『はい』なら、イベントシーンの後で

お兄さんの話をしちゃう。いっぱいしちゃう」

くふっ、と笑った理子は

再びベッドに手をつき、甘い吐息のかかるような距離にその童顔を近付けてきた。

「スザクすえんぱーい。このまま理子をカノジヨにしちゃおうよお。理子とはーってもおトクな女の子だよ？スザク先輩は何時でも好きな時に来て、理子に好きな事をして良いの。何時でも待ってる。お外でも理子はOKだよ？何時でも、したい時に、したい場所で、理子に何をしても良いの……」

誘惑するように、理子はピンク色の唇を俺の耳元に寄せ

「そうすれば、よく分からないけどスザク先輩の覚醒状態。あのチート状態にも、何時でもなれるでしょ？」

と、囁いた。

さあ どうする。

どうする朱雀、だ。

今度こそ。

本当に。

今までの遺恨を理由に理子を受け入れなければ、俺は兄さんに関する恐らく唯一の情報源を失うことになるだろう。

逆に、今ここで 流れに身を任せて、理子を受け入れてしまえば

……

(兄さんの……話を……聞ける……!!)

ああ、兄さん。

俺の憧れであり、超えるべき壁であり、しかしあまりにも突然に逝き、俺の人生を180度変えてしまった人。

ああ ダメだ。

俺は、兄さんの事になると、正常な判断が出来なくなる。

それは恐らくこの状態でも変わらないだろうな。

理子。

お前はさすが、怪盗リュパンの血を引く女の子だよ。

お前は俺の、兄さんへの崇拜にも近いこの想いを分かった上でその選択肢を突き付けたんだろう。

だが、甘いな。

今の俺は “お前自身” だ。

次に起こる事も、この選択肢を“答えない”方法も、今の俺ならば容易に出来る。

むう、と困った顔を作りつつ黙り込み、何気なく時間を稼ぐ。

俺の胸に跨がる理子は今か今かと返答を待っている。

さすがに、俺の“御主人様”は、自分のモノを盗まれるなんて思ってもいないだろうな。

人に縛られるのは嫌いだが

やむを得ないだろう。

あとすこしか？

イチ、ニー、サン。

がっしやああああん！！

「アタシのドレイを盗むな!!」

SWATみたいにガラス窓を蹴破って、神崎・H・アリアがワイヤーを伝って、外から突入してきた。

ばんっ!!

理子は身を振るようにしてベッドを降りる。

理子が降りたのを見計らい、俺はベッドの上でずばんっ、ネックスプリングで起き上がり　アリアの着地点を予測して回避行動を取る。

アリアはベッドでワンバンしながらワイヤーを切り離し、アクロバットみたいな動作で、じゃきじゃき!!

閃く臙脂色のスカートの中から、二丁拳銃を抜いた。

バツ!!バババババツ!!

まばゆいマズルフラッシュと共に、問答無用の・45ACP弾がぶっ放される。

ざあっ!!

理子は転がりながら銃弾を躲し、舞い上がる衣装の中から　赤いランドセルを掴み、起き上がりざまに背負った。

「ああんもー。アリアが出て来るまで、もうちょっとかかると思ったんだけどなあー」

その一瞬でさらに、でかい懐中電灯も拾い上げている。何をする気だ　？

ベッドから降りつつ不審に思った俺は、素早く右胸と右太もものホルダーから、左手にGLOCK17、右手にM8000を抜き取り、

静かに構える。

ちっ……無意識だが、さすが理子のコピーだぜ。

こんな状況でも冷静な判断ができる。

それに、俺の第1の禁じ手の、二丁拳銃ダブラを使うなんて……。

「この……汚らしい、ドロボーの一族!!あたしの“モノ”は盗めないわよ!!」

おいおい。

モノ扱いかよ俺は。

まあ良いか。

モノ扱いされている事はともかく、ベッドの上に仁王立ちするアリアは、なぜか最初っから……かあああああつ。

赤面モード、全開である。

頭から湯気をだしそうな真っ赤っ赤ぶりだな。

これ、ある程度、俺達の光景をのぞき見していたんだろうな。

「アリアあー?イベントシーンに別ヒロインが飛び込んで来るなんて……ちょおーっとシナリオ的に無理があるんじゃない?」

ぷううう。

理子が、ほっぺを膨らましてる。

「スザク先輩だって“その気”だったんだよお?アリアだって見たでしょ?スザク先輩、後少して理子の胸に溺れる3秒前だったんだからあ」

「お……おぼっ!?!」

色恋沙汰が大の苦手なアリアは、わたた、わたわた。

拳銃を落っことしかねない勢いで動揺している。

何を想像したんだ？

「そう。女の子の胸の前にひざまずかない男子はいないのでーす。あつ、でも」

にやー。

理子は嫌みつたらしくその大きな目を細め、

「くふつ。アリアには関係ないか」

と、アリアの平らな胸をみた。

アリアは、わあー！！

という口になり、ぎぎん！！

形のいい眉を思い切り吊り上げる。

言葉が出なかつたのは、絶句していると言うことらしい。

まあ、女の子の胸の大きさやなんやは、ヒスる引き金となる“粘液接触”では無いから俺は触っても大丈夫なんだが、それ以上の事をされたら危ないな。

……何を言ってるんだ？俺は？

アリアを慰めようとしてんのか？

あのな、良く考えてみる俺。

慰めようにも慰められんぞ、こればかりは！！

「か、か、風穴！！あけてやる！！あけてやる！！あけてやるからつー！！」

がん、がん、ががん！！

アリアはお得意の、オリジナル地団駄を踏みはじめる。

ベッドの脇にしゃがみ込み、二丁拳銃を構える俺は、半ばアリアみたい顔に顔を赤くしながら、危ない妄想しかけた自分に呆れている。

「胸だけじゃない。理子は男の子の好きなもの、ゲームでいっぱい勉強してるんだもん。お子様アリアと違って、男の子を喜ばせる知識、いーっぱい持つてるんだからあ」

無数のコスプレ衣装を示してから、理子は、ぴき。
頭に指で二本ツノを作った。

「それを初めて実践しようとしたのにジヤマするなんて、ぶんぶんがおー。だぞっ！！」

そして、ぽい。

その手に持っていた懐中電灯を、宙に投げる。

その瞬間、ベッドの脇から飛び出し、アリアの前に転がり出た俺は宙に放られた懐中電灯を、バスン！！

バババババスッ！！

と、両手に握る二丁拳銃の鮮やかなマズルフラッシュを閃かせ、あつという間に蜂の巣にする。

容赦無い・45ACP弾、9ミリパラベム弾を真っ向に受け、がしやっ、と音を立てて落ちる懐中電灯。

「ざあんねーん、りこりん。それ、フラッシュグレネード閃光手榴弾っしょ？」

ニヤリ。

と不適な笑いを浮かべ、アニメであるような面白おかしな口調で言う俺。

そう言われた理子は、露骨な舌打ちをして腕を前に組む。
フラッシュグレネード閃光手榴弾。

いわゆる強襲科ではお馴染みの“目眩まし兵器”だ。

アルミ、チタン、マグネシウムの合成粉末を瞬時に燃烧させて強烈

な光を放ち、相手の視力を奪って動きを封じる。
どんな強力な相手をも萎縮させ、その隙に強襲を掛けたり、逃亡したりするときを使う便利なモノである。

何故あんなものをわざわざ拾ったのか、不思議に思って注意を向けていたところ、案の定、閃光手榴弾だったな。

点火装置を集中的に狙ったから爆発せずにすんだよ。
ゆっくりと両手に握る二丁拳銃の銃口を理子に向ける俺。

「スザク先輩のいじわるう！！なんで理子のジヤマをするのお？そんなに理子のこと嫌いなのか？」

「俺ア、積極的な女の子は嫌いじゃないよお。だけどね、今の俺にはご主人様がいるんで今回ばかりはジヤマしちゃうぞ。にししし」

にししして、なんつーキモい笑い方すんだよ俺。

まあ、今回のノワールモードは少し役には立ちそうだな。

しばらく俺の背後で硬直していたアリアもガバを構えて俺の隣に立つ。

今の状態の俺に、少々困惑している。

アリアの視線が俺の顔ではなく、髪に行ってるな。

何？また色が変わったのか？

なんなんだよもう！！

「俺の髪がそんなに綺麗かい？セニヨリータ？」

「セ、セ、セセ、セニヨリータあ」

「あれまあ、どったの？そんなに顔真っ赤にして？サウナでも無いのに逆上せた？」

「う、うるさい！！うるさいうるさい！！このマヌケ面！！トンチンカン！！顔に風穴あけるわよ！！」

「どうどう、どうどう。落ち着けよハニー。いちいち怒ってちゃ、人は本来の能力を発揮出来ないんだぜ？今晚は気楽に行こう」

俺は右手の人差し指をぎゃーぎゃー騒ぐアリアの唇に当て、クルクルと左手のGLOCK17を器用に回しつつ、隣のアリアを横目で見つつ、ニツと無邪気に笑って見せる。

それを見たアリアは、ぐぬっ、と顔を俯かせて大人しくなってくれた。

それを何やら不満そうに見ている理子。

さあ、ノワールモードの俺よ。

アリアをじゃらしている場合じゃないぞ。

「さあて、りこりん。もう逃げられないぞ。それとも、俺と“続き”がしたいから此処にいるのかい？もしそうならシてやっても良いが、俺の小さなご主人様が許してくれそうにないよ？」

「ちよ、スザクー！アంత」

「分かってるよご主人様、今のはほんの戯れ言さ。さあ、俺達とやり合つかい？大怪盗さん？」

「くふっ。くふふ。大好きだよスザク先輩。でも逃げる方法ならまだあるもんね！！」

にいつ、と俺達を嘲るように理子は笑うとスカートの中から、何か
が落ちた。

落ちた瞬間、ボシユ、と音を立てて白い煙を巻き上げる。

俺は咄嗟に、手で口と鼻を覆う。

アリアも同様に、素早くポケットからトランプ柄のハンカチを取り出すと、口と鼻を覆う。

その白い煙はたった数秒で部屋に充滿した。

ちっ………迂闊だった。

スモークグレネード
煙幕手榴弾を使うなんてな！！

まさか、睡眠ガスとか毒ガスじゃねえよな？

「大丈夫かあ？八二一？」

「ハ、八八八八二一！！なんて呼び方するのよ！！」

「バアロー、ハンカチを取るな。それに細かい事は気にしない。煙が晴れてから動くのは時間が掛かるから、今のうちに……ってあれえ？逃げたか？」

「逃げた！？ちよ、何してんのよ！！早く追いなさい！！」

「心配するなよ。行くところはだいたい分かるさ」

「きゃー！！」

と俺は嫌がるアリアをお姫様抱っこすると、煙を巻いて勢いよく玄関まで突っ切る。

そのままドアを蹴破ると、急いで非常用階段へ行く。

久しぶりだな、コイツをこうやって抱っこするのは。

なんて想いにふけながら、非常用階段を二段飛ばしで駆け上がる。

アリアは何故、俺が此処に来た事が分かったと言うと、なんと数分前、入り口で俺を見たらしい。

話し掛けようが迷ってるうちに見失うが、時間的に怪しいと思ったので、直ぐに監視室に行き、防犯カメラの撮った映像を調べて俺を追跡し、居場所を特定してから強襲したと言う。

さすがはシャーロック・ホームズ卿の曾孫だな。

推理力はからつきしだが、鋭い勘と凄まじい行動力にはさすがに感服するよ。

非常用階段の最上階まで上がり切ると、がしゃっ！！

と俺はそのままドアを蹴破る。

大人しいアリアをゆっくりと下ろして、二人揃って満月が照らし出す、幻想的な雰囲気の屋上に出る。

「理子！！」

がう、と犬歯を剥き出しにして叫ぶアリア。

屋上のフェンスに座り、理子は子供のよつに足をぶらぶらさせていた。

夜空に輝く、満月。

月明かりが、理子の笑顔を　どこか妖艶に照らし出していた。

「ああ……今夜は良い夜。オトコもいて、硝煙のニオイもする。理子、どつちも大好き」

ちい、と月明かりを反射させたその瞳が短い光の尾を引く。
それは、獲物を前にしたケモノのような瞳。
ハイジャックの時に見た、あの目だ。

「峰・理子・リュパン4世 今度こそ逮捕よ!!! ママの冤罪、償わせてやる!!!」

アリアは、じゃきつ。

白銀のガバメントを理子に向ける。

そのガバメントの握把グリッパに飾られたカメオの女性 アリアの母親・
神崎かなえさんは、イ・ウーという集団によって何件もの冤罪を着せられている。

その組織のメンバーを捕らえようと、アリアは世界中を駆け回って来た。

そして この峰・理子・リュパン4世は、その組織の一員なのだ。

「やれるもんならやってみな。ライム女ライマー」

にやぁー、と白い歯を見せて笑った理子が、ぼん、とフェンスから屋上に降り立つ。

「言ったわね。カエル女フロッキ」

と二人はイギリス人とフランス人の蔑称を応酬する。
21世紀のホームズとリュパンによる、英仏戦争の幕開け、か。
見物だなこりゃ。

横からで実に失礼だが、日本で誇る名探偵『明智小五郎』の子孫ごと……日本も、参戦させて貰う。

正直、怪物同士の戦いだからか、全くと言っていいほど乗り気は無いが、どうせご主人様のアリアのことだ。

絶対に、絶対に「やれ」なんて指示されるんだろうな。
それを無下に断ったりしたら、俺の命はないなこりゃ。

そんな事を考えながら、一度しまった漆黒の双銃を静かにホルダーから取り出して握る。

6月の重い雲に、月が遮られた時
ばっ！！！！

理子が、駆けた。

速いっ！！！！

「スザク！！アル！！カタ戦で行くわ！！離れ際に援護しなさい！！」
叫んだアリアが、二丁拳銃を発砲しながら理子の正面に突っ込んでいく。

「くふっ！！！！」

初弾を側転で躲した理子が、屋上の中央でアリアと交錯した。
たんっ！！！！

そしてその場で月面宙返りを切り、アリアの頭上を飛び越える。
がちっつ　と、理子が背負うランドセルが空中で開いた。

開いた中からは小振りな拳銃　ワルサーP99が二丁滑り出てきて、ぱしっつ。

理子の小振りな両手に握られる。

バツ！！
ババツ！！

振り返りざまのエリアと理子の銃弾が、お互いの脇を通過する。閃く銃火が、暗闇をまるでストロボのように照らした。

（アル〓カタ、か……）

武偵同士の近接戦には、通常のような拳銃戦とは全く異なる戦闘技術　アル〓カタというスキルが用いられる。

先月のアドシールド閉会式ではチアに応用されていたが、アル〓カタは元々武術。

防弾服の着用を前提とし、銃弾を“打撃技”として使う格闘術なのだ。

そして、俺のようにアル〓カタが非常に高いレベルまで達すると、

複数のAランク以上の武偵を同時に相手できる超高等近接戦闘技術

対複数掃討用近接格闘銃術『銃道』と名前が変わる。

アル〓カタをベースに、難易度の高い“銃技”を組み合わせ、銃を撃つと言う行為で生じる隙間を埋めるように不規則に拳打や蹴りを組み込み、まるで“乱舞”しているように戦うアル〓カタの派生技。命名したのは俺の、亡きはずの兄さんで、彼に教わったありとあらゆる銃技が全部折り込まれている。

エリアが使うバリー・トワードにヒケを取らないほどの、新世代型の、最凶の格闘術だ。

これをキチンと扱えるのは俺が、世界で逸材と言われた人物でも数人しかいないと言われている。

まあ、今回は見せ場ではないから使う必要は無いだろ。

「ハッ！！」

その場でスピンするように振り返ったエリアが、低い姿勢から理子

を撃つ。

ひゅらっ。

長いピンクのツインテールが、二重螺旋を描いて本体の動きに続く。理子はそんなアリアのおでこを掠めるようにまた宙返り、くりん。身を捻りながらアリアの背後に着地した。

「くふふっ!! 鬼さんこっちら!!」

「こッ……このっ!!」

アリアは地面を転がりながら、反撃の銃弾を放つ。

だが がきんがきんっ!!

左右同時に弾切れを起こした銃が、スライドをオープンさせてしまった。

アリアのガバメントは理子のワルサーよりパワーで勝るものの、装弾数では劣るのだ。

アリアが側宙をしながらっこよくリロードを始めた瞬間、突っ立ったまま二人を鑑賞していた俺は理子へ突っ込むように駆けた。

「仲間外れはナシ、だぜ!! 俺も混ぜろよ!!」

意識とは別に身体が勝手に動き出したのだ。

理子は理子でびっくりしたのか、茶色い瞳を真ん丸にして俺を見る。

そうだった!!

今の俺の格好は武偵高指定の防弾制服じゃないぞ!!

武偵高指定の防刃ワイシャツの上に、パーカーを羽織っただけだ!! 撃たれたら、間違いなく死ぬぞ!!

「ちょ、何してんのスザク!!」

呆れたアリアが叫ぶ。

耳には届いていたが、身体がいうことを聞かない。

ニヤリと白い歯を見せ、不気味に笑う俺は両手に握る漆黒の二丁拳銃の銃口を向け、理子に発砲しながら駆ける。

月光を反射して輝く俺の瞳は、なぜか紫色に灯る。

それは、俺が動きたびに不気味に、本体に続くように長い紫色の光の尾を引く。

バスンッ！！

バババババツ！！

漆黒の双銃がマズルフラッシュを閃かす。

凄まじい速さで撃ち出された数発の銃弾を、理子は咄嗟に横っ飛びしながら地面を転がって器用に躲す。

いまだに驚きを隠せない理子は、両手に握る二丁のワルサーで反撃の銃弾を放つ。

俺は素早く右手の拳銃をホルダーに戻し、紫色の刃のナイフを取り出すと、飛来した弾丸を簡単に切り落とす。

しゃっ。

理子に似た金色の髪を靡かせ、俺は素早くターンして残りの弾丸を屈んで躲し、そのまま四つん這いになると、ケモノを思わせるようなスピードで疾走する。

地面スレスレに、超低滑空しているとしか言えないような、有り得ない態勢で屋上を滑るように駆け抜けて理子との距離を詰める。

有り得ない、むしろ人間とは思えない躍動的な動きにたじろぐ理子。理子を射程距離内に捕捉した俺は、紫色の刃のナイフを振り抜く…

…が

どくん！！

鼓動が一際、高く鳴り響く。

な……んだ？

見ていた景色がぐわん、と歪み、激しく揺れる。

はぐあぁ！？胸が裂けるっ！！

突然、激しい痛みに襲われた俺は、握っていたナイフを落とし、前

のめりになつて転倒する。

「ど、どうしたのよ!!スザク!!」

「分からない。なんでか身体が勝手に動き出したんだ……」

両膝を地面につき、右手で胸を抑える俺。

くっそ……何だよ……落ち着いたか。

でも止まってよかった。

あのまんま戦っていれば、もしかしたら俺は、無意識に理子を殺していたかも知れない。

とりあえず、今はアリアに理子を任せるか……

ちよつと待てよ俺。

もしかしてこれって……

「アリア、俺達、なんか重要な事を忘れてないか？」

「は？何よ急に？」

「やっぱり気付いてないか……アリア。理子と戦ってはダメだ……」

「ど、どういふことよスザク!!」

「お前も知っているだろ……『司法取引』だよ。ジルが武偵高にいる理由と理子が此処にいる理由は恐らく同じ。それに、理子が本気なら、メデューサみたいな双剣双銃を使うはず。……早合点し過ぎて重要な事を見落としていた」

悔しそうに俺がそう言つとアリアは、赤紫色の瞳を真ん丸にして俺を見た。

「あつたりー!!さすがスザク先輩!!分かってくれちゃった!？」

理子は背中のレストランを振ってカバーを開け、落ちてきた二丁の拳銃を見もせず中に受け止め 振ってカバーを閉じた。

そしてぼんぼんと手を叩きながら、理子はその場でぐるんと一回転した。
ふわっ。

制服のプリーツスカートが、理解できていないアリアを茶化すように広がる。

「理子とスザク先輩、カラダだけじゃなくてココロも相性ピッタリだねー!!」

ねー、と首を傾げて俺に笑いかける理子。

そんな理子を見ながら、ゆっくりと俺はあぐらをかく。

「司法取引……嘘でしょ!!そもそもジルと理子は……違う!!あたしがそんな手に引つ掛かるとでも……」

「のんのん、甘いよアリア。スザク先輩が言った通り、理子もう4月の事件についてはとくに司法取引を済ませてるのでえーす!!きやはっ!!」

と笑いながら言う理子。

ふと、俺はだらし無く垂れ下がる右腕に視線を落とした時、ぞぞぞぞ、と生き物が這うような動きで、紫色の痣が不気味に動いて袖に引っ込んでいった。

なんだ、幻か……?

それとも疲れたのか?

一度、目を擦って右腕の袖を捲ってみると、右腕には何もなかった。

「つまり……理子を逮捕したら、不当逮捕になる……それだけじゃない、暴行罪、不当強襲罪などなど数え切れんほどの罪が重なる。分かったかアリア」

とりあえず気を取り直して、息を整えつつしゃべる俺に、アリアは
ぎりぎり、ぎりり。

悔しそうに歯軋りをして、二丁拳銃を握り締めたが、ジルの件もあるし、アリア自身理解しているのか、これ以上は何も言わなくなつた。

司法取引もそうだが、何より理子は “ 兄さんの事を知っている ” 。
お前を制止した理由は、正直そっちのほうか八割以上ある。
済まない、ホントに済まないアリア。

ノワールモードも次第に解けてきたのを感じつつ、そう心の中で懺悔していると……
じゃきつ……

それでも懲りないのか、アリアは白銀のガバメントの銃口を理子へ向けた。

「でも、ママに『武偵殺し』の濡れ衣を着させた罪は別件よ!! 理子!! その罪は最高裁で証言しなさい!!」 「いや」「嫌というなら、力づくでも……って……え?」

きよと。

アリアはセリフの途中で割り込んだ理子の声に、その紅い瞳を真ん丸にした。

「証言してあげる」

「ほ……ほんと?」

再び言った理子に、アリアは疑う振りをしながらも嬉しさを隠し切れていない。

基本的に人の話をすぐに信じやすい子なんだな、アリアって。

悪い男に目を付けられたりしたら、騙されて落っこちるところまで

落ちるタイプだなこりゃあ。

『都合の良い話は必ず裏がある』って言うだろ。
今度、彩と一緒にそれを教えてやるつか。

「ママ……アリアも、ママが大好きなんだもんね。理子も、お母様が大好きだから……だから分かるよ。ごめんねアリア。理子は……理子は……」

そこまで言うと理子は顔を伏せ、

「お母様……ふえ……えう……」

ぼた。

ぼたた。

足元に、キラキラ光る涙を落とし始めた。

「……ふえええええええ……」

理子はいきなり、泣き始めたのだ。

ぐじぐじ、と、手の甲で目元から溢れる涙を拭っている。

そんな理子に、アリアは……

「え……えっ……えっえっ？」

自分の目の前で何が起きているのか分からず、オロオロ。
これ、あたしが泣かしたの？って顔で困り果てる。

「ちよ、ちよつと。なに泣いてんのよつ。ほ、ほら……何よ。ちやんと話さない」

制服の背に寸詰まりの日本刀を収めると、アリアは泣きじやくる理子に母性でも目覚めたのか……宥めるような口調になっている。

武偵は闇、毒、女に墮ちる。

お前、今その瞬間からその“女”に騙されてるぞ？

一番危ないのは俺だって自覚しているが……

ほら、今、理子の口の端がニヤツて笑ったぞ。

まあ、どちらにせよ、とりあえず闘争の気配はこれで完全に霧消したな。

とりあえず一件落着、ってか。

(だが気になるな……理子は一体、何が目的なんだ?)

と、胸を撫で下ろしつつ、フェンスに寄り掛かり、満月を遮る雲を見上げながらも、アリアに背中を撫でられている理子に眉を寄せる。理子はなぜ、俺とキンジ、アリアがトリオを組んでいる武偵高にノコノコ帰ってきたんだ？

そんな俺の疑問に答えるように、理子はえうえう泣きながら語り出した。

「理子、理子……アリアとスザク先輩のせいで、イ・ウーを退学になっちゃったの。しかも負けたからって、“ブラド”に　理子の宝物を取られちゃったんだよぉー」

ピリっ……

と、周囲の空気が張り詰める。

フツと視線を月からアリアに戻すと、今の一瞬で、紅い目に殺気を漲らせていた。

「……ブラド。『無限罪のブラド』……!?!イ・ウーのナンバー2じゃない……!?!」

ナンバー2……？

イ・ウーにも階級みたいなもんがあるのか？

「そーだよ。理子はブラドから宝物を取り替えたいの。だからスザク先輩、アリア、理子を“たすけて”」

キラキラ、と涙に濡れた瞳を向ける理子。

「……“たすけて”……って。何をしろっつーんだよ？」

とフェンスに凭れながら聞くと

理子はゴシゴシと手の甲で涙を拭い、「泣いちゃダメ理子。理子は本当は強い子。いつでも明るい子。たがら、さあ、笑顔になるっ」などとわざとらしく独り言し、
す、と雲間から再び現れた満月を背に

「スザク先輩、アリア、一緒に」

ニヤツ、と笑顔になって
言った。

「...」 “ふじゆぎ—ボロボ”

… 6 (前書き)

遅れて大変申し訳ありませんm | ∙ ∙ m
ようやく続きがまとまりました
ごめっくりどござ) * ∙ ∙ (∙ ∙ ∙

少年武偵法によると、未成年が罪を犯した時に、名前などの個人情報公開されない。

ニユースとかでもある『少年A』とかって奴だ。

まあ、武偵同士の個人情報交換はタブーだが、どうもこういうのはいけ好かない。

昨夜の理子の件で、アリアと俺の間に再び深い溝が出来たような気がする。

その方がかえって都合が良いのかも知れないが、アイツとパートナ―を組んでいる以上、それはあつてはならない事だ。

それ以上に気を付けなければイケないのが山ほどいるっていうのはあ……とため息をつき、いつものように、誰も居ない強襲科実習棟の屋上で寝そべりつつ、さっき食堂で買ったカスタードクリームがたっぷり詰まったカスタードクリームパイを頬張りながら空を眺める。

今日は中間テストがあり、一般教科で午前中ぶっ続けて教室に缶詰だったので、気分転換に、と一人で此処へ来ていた。

案の定、誰にも言ってる居ないのでついて来る奴も、探す奴も居ない。したがってあの怪獣娘どもは来ないはずだ。

ああ、絶好の昼寝日和だぜ……と言いたいところだが、ちよつと雲行きが怪しい。

そつえば、今日から東京は梅雨入りしたらしいが、降るはずはないよね、きつと。

午後は学年合同でスポーツテストがあるって聞いたが、アリアと鉢合わせするのはとてつもなく気まずいから寝てようかな。

なんて考えながら、ゆっくりと流れていく灰色の雲を静かに目で追う。

「平和、だね……」

とカスタードクリームを口元に付けたまま呑気に呟いてみる。

実際、武偵高そのものが平和って柄じゃないが、これだけ静かだと誰だってそう思ってしまう。

まるでナマケモノみたいな、まったりとしたスピードで左から右へ流れていく雲。

見ている俺が癒されて、日ごろの疲れが抜けるような、そんな気がした。

ごしごしと口元についたカスタードクリームをティッシュで拭く。雲間から射す、微かに温かい麗らかな陽に、うつらうつらとうたた寝をしていると、背後に人の気配がして目を覚ました。

「相変わらず此処が好きなんだな、お前」

入口の方から聞こえる、溜め息混じりの男勝りな女の声。

なんだ、ジルか。

足音が近付いてきて俺の背中越して止んだ。

ドサツ、と座る音がする。

「良いだろ別に。こうやって誰にも邪魔されずに、のんびり昼寝出来る場所は此処しか無いんだから」

「此処しか無い？他に無いのか？」

「良く考えてみな？強襲科実習棟なんて、他の科の連中は寄りもしない。それは危険なバカどもが集まる実習棟だから。そんな場所の屋上に来ようなんて誰も思わないだろ」

「んじゃ、此処へ来たオレはバカと言っことか？」

「……。そうなんじゃねえの？」

殴られるか、と思いきや、意外にも殴りに来ない。ちよつとビックリしつつ、イタイ視線を背後に感じながら、邪魔する気が無いジルを尻目に、俺はもう一度眠りに入る準備をする。右腕を頭の下に敷き、痛いコンクリートの地面から頭を守りつつ、再び降り注ぐ陽を浴びてうつらうつらとうたた寝し始めると、ジルは言った。

「ほら、頭上げる朱雀！コンクリの上じゃ腕も痛くなるだろ」

「ん……？構うな……」

「良いから！せっかくだから頭上げる！」

「……何がせつかくなんだよ……こつか？」

「よし。そのままオレが良いって言つまで動くな」

ぐいつと頭を上げ、その位置のまま固定。

く、首が。

とてつもなく首が痛い。

何か敷くのか、と思いつつ、ジルの指示を誠実に待つ俺。

「降ろして良いぞ」

「ん？ああ」

言われた通り、頭を下ろすと……

とても柔らかい感触が、俺の側頭部を包み込む。

そして、温かい。

どこかで感じた事があるような、とても懐かしく、とても優しい温もりがある。

な、なんだ？

俺は内心、慌ててつつも冷静を装い、目を閉じたままにいる。

鼻を掠めていく、甘酸っぱく爽やかなレモネードの匂い。

続いてフワリと香る甘い、女の子の子した匂い。

そのおかげで、なかなか寝れない。
寝るにはサイコーなのだが、余計な事を考えてしまつので寝るに寝れない。

「ど……どうだ？」

「……な、何が？」

「オレの……ひ、膝枕ノ！」

「……わ、悪くはないな。うん」

「……ただか膝枕してるだけなのに、何故こんなにも恥ずかしいんだ？」

「俺に聞くなよ」

と恥ずかしさを紛らわすように呟く俺。

これ、舞や楓、アリアに見つかつたら地獄に即行だ。

もしかしたら、生きて帰れないかも知れないな。

まあ、実際はそんな心配もないだろう。

中でも一番ヤバい舞は、一週間ぐらい前に羽田空港から海外へ行つてるらしい。

SSRでは超能力の訓練に必要な設備が整っていないため、充実した専用の設備がある国へ行つて訓練してくるとの事だ。

正直、怪獣娘の中でも一番厄介なヤツがいなくなって清々してるよ。確か、今日の午後に帰つて来るって言つてたっけな。

そんな事はどうでもいいが。

アリアとはあの件以来、ちゃんと話した事はないし、なんか避けられてる気がする。

あんなところを見られたら、誰だつてそうだよな。

アリアとのコンビ解消も、時間の問題だな。

「なあ、朱雀？」

「ん？」

「お前、最近、アリアと仲悪いな？」

「ああ……それは否定しない。肯定もしないけどな」

「そうか。もし、もしも……だぞ？アリアと朱雀が別れたら、どうするんだ？」

アリアと別れたら？

付き合ってもないのにその言い方はないだろう。

せめてコンビを解消したら、と言ってくれ。

もしもアリアとコンビを解消したら、か……

どうするんだろうな。

また、一人に戻るのか。

だったら武偵なんかやめて、はなから普通の学校に行くまでだ。

(……………)

考えた事もなかった質問をされ、悩むように黙り込む俺。

それを見たジルはちよつと頬を上気させ

「もしもアリアと別れたら、オ、オレのパートナーになってくれよ」

「……………。なんで？」

「お前の傍にいと落ち着くからだ。何より、お前はオレを変えてくれた。だから……………その……………」

「気持ちは有り難いが……………断る。アリアとコンビを解消したら、俺はもう誰とも組むことはないな。そうなったら、既に俺は此処にいないだろう」

「……………いない？どういうこと？」

「普通の学校に転校して、今のような常日頃から危険と隣り合わせの生活よりも、どこにでもあるような、純粹に平和な生活をしてると思うよ」

と目を閉じたまま、ジルに言った。
多分、アリアとコンビを解消したら、そうなるだろうと推測して出した答えだ。

俺の答えを聞いたジルは、逆に黙り込んでしまった。
なんか、この沈黙も気まずい。

「で？お前は何しに来たんだ？」

黙り込むジルに俺は言う。

大概、他に絡むヤツが俺とか、彩ぐらいしかいないジルは、いつも教室で一人だ。

浮いてる、って言えばそうかも知れない。

まあー、同じ強襲科で拳銃が下手っぴなものもそうだが、性格が性格だ。

男勝りで負けず嫌いな性格のせいで女の子が怖がって寄って来ないらしい。

しかし、強襲科の男子からは好評みたいだ。

俺的に言えば、もうちょい大人しくて言葉遣いが綺麗なら、なお良いな。

スタイルも雑誌モデルみたいに良いし、何よりも綺麗だ。
舞にヒケを取らないくらいにな。

女子も女子だよまったく。

典型的な武偵娘のくせに、何コイツごときにビビってんだよ。

「き、気分転換だ！！べ、別に変なイミはないからな！！」

「そうかあ……テストの出来栄えはどうだった？」

「え……ああ、まあまああってとこか」

「ふふふ。そういうってことは、全然出来てなかったんだな？」

「な……バカにするな！！あんな問題、全然平気だ！！」

「っ！！おいっ！！耳元で騒ぐな！！っうお！！」

耳元で叫ばれ、耳鳴りをする耳を抑えながら飛び起きる俺。
立とうとするとその拍子に手の着き所が悪かったのか、バランスを崩してしまい、ジルへ覆いかぶさるように倒れてしまう。
気が付くと、俺はジルの胸に顔を押し付けて倒れていた。

「ちょ、ちょっと／＼」

「あ、ああ。悪い悪い。別に悪気があってやったわけじゃない／＼すまん／＼」

慌ててジルから離れる俺。

ジルは恥ずかしそうに、胸の前で綺麗な手を小さく組む。

その直後。

振り向いてはいけないと言う、俺の感覚が警鐘を鳴らす。

悍ましいほどの殺気を俺の背後から感じる。

冷や汗が、額を伝わり、頬から地面に滴り落ちる。

まさか……そんなはずは……

ヤツが……ヤツが、来たか……

「ジルよ……随分とワシの殿方を横取りしようとするぞ……」

抑揚無く、もはや怒りさえ感じるその声。

多分、さっきの状態を見ていたのだろう。

シャツと何かを抜く音が背後から聞こえる。

まさか……！

此処でやり合う気か！？

ギシギシ、と回りづらい首を回して背後を見る。

背中に背負う身の丈ばかりある太刀を抜き、正眼の構えでジルを睨み据える強襲科三年……アリアに次ぐ怪獣娘・楓が立っていた。
わ、忘れてた。

舞がないだけで浮かれていた自分を呪うよホントに。
こりゃ、弁明する余地はなさそうだな。

「そこを退け朱雀！！ たった今からジルを斬る！！ これ以上野放しにしておくとワシの朱雀が取られてしまうからの！！」

「あんな、毎回言うが、いつから俺はお前のモノに……」

「ふふふ。接近戦だけは負けないぜまな板おチビちゃん。朱雀は誰のものでもない。因ってオレのモノだ。良いだろう。この機会にでも引導を渡してやる！！」

「げ……」

こっちもこっちで戦うスイッチが入ってしまったな。
どうしよう……

これって俺も巻き添えを喰らうパターンか？

「朱雀！！ オレを援護してくれ！！」

「何を言うジル！！ 朱雀はワシを援護するのじゃ！！」

同時に問い詰められる俺。

何かなんだかわからんが……

どうすりゃ良いんだよ！！

たじたじの俺を見たジルが色目を使ってこっちを見る。

「迷うことはないだろ。悪いことは言わない。俺を援護してくれたら、報酬として今晚、オレの体を好きにして良いぞ朱雀？」

「なっ！？ 自らの体を売るか貴様は！！ 良かろう朱雀！！ 夜伽はワシも脱ぐぞ！！ このAカップの胸とちいちゃい体で良ければ好きにせい！！ だからワシを援護しろ！！」

「な、なんでそうなるんだよ！！ いくら何でもおかしいだろ！！」

わけの分からん話の飛躍にツッコみつつも、右手に紫色の刃のコンバットナイフを握り、左手で腰のホルダーからギミックロッドを抜き、素早く連結する。

まあ、言うなれば自分が身を守るためなのだが。

ジルもククリ刀を両脇のホルダーから両手で抜き取り、クルクルと器用に手の平で回す。

ニヤリと口元を緩ませ、ちゃきちゃき、とククリ刀の柄を握り、楓を睨み返すジル。

楓は微動だにせず、身の丈ばかりある太刀を、正眼の構えでジルを睨み据える。

二人の間にいる俺は、二人がかちあうのを阻止するべく、ナイフとロッドを身構える。

こいつらが暴れたら、怪我じゃ済まないぞ。

誰もいないから良いかも知れないが、間違いなく俺が死ぬ。

それだけは嫌だ。

絶対。

「せつかくの二人きりの大切な時間が台なしだなあ。良いところまで行ったのだけど……」

「ふ。何を言っておるジルよ。ワシとてバカではない。カチ合う“敵”と戦う前に予め下調べは済ませておる。貴様はアルカクタが大の苦手で、影ながら朱雀に手取り足取り教えて貰っているのも知っておるわ」

不敵な笑みを浮かべながら言いつつ、カシヤンと太刀を背中に背負う鞘へしまい、アリアみたいにならない胸を突き上げるように体を反らして言う。

それを聞いたジルはククリ刀の柄を握り締め、ちよつと顔を引き攣らせる。

かなり動揺してるな、あれは。

事実、ジルは近接格闘戦で鬼武偵と名高いアリアや能力発動時の彩俺に匹敵する戦闘力を持つ『近接格闘戦のスペシャリスト』だが、防弾制服の着用を前提とし、銃撃を打撃技として使う“アルIIカタ”に關してはまったくダメである。

銃器を使い慣れていないのもそうだが、何より動きが問題だな。

近接格闘戦で慣らした動体視力と体の身のこなしはもはや完璧としか言いようがないのだが、銃器を使うと言うことに直結しているためか、どうも正しい判断ができないらしい。

だからとても悔しがる本人の希望で放課後、極秘のトレーニングしてあげていたが、こつも筒抜けだったとはな。

ちよつとシヨックだ。

そしてゆっくりとした動きで、楓はスカートの下、両足の太股にあるホルダーから愛銃である『microuzi』を抜き放つ。

アマガニスタンの名器、漆黒の輝きを放つ小型機関銃が姿を現す。

その時、突然吹き抜けたそよ風に、フワリ、と楓のプリーツが綺麗に浮き上がり、咄嗟に俺はそこから目を逸らす。

危ない危ない、あれを見てたら二人の確実に標的は俺になっていたな。

「それはどうかな楓。オレはそんじょそらのヤワな女とは体の鍛え方が根本的に違う。結論から言えば防弾制服を着てる上に、弾丸程度の衝撃を与えられたぐらいじゃびくともしねえ。撃たれる前に懐に飛び込めばオレの勝ちだ」

「ナメられたものじゃのう。ワシの使う『microuzi』は弾丸は9ミリじゃが、弾数が普通のハンドガンとは違うのである。通常は一丁30発じゃが、今回は大サーブスで一丁50発じゃ。二丁で100発じゃのう。どうじゃ？ 全身に浴びて、その綺麗な肢体を痣だらけにしても良いのか？」

「っ……」

それを聞いたジルは、静かに息を呑む。

静かに見ていた俺は、ジルが息を呑むの事に頷ける。

通常のアルカカタ戦でどちらかの勝敗を決める基準となるのは、持ち手の銃の弾数だ。

楓の持つ『microuzi』はただでさえ弾数が30発と多い。

互換性がある他のマガジンを交換すれば、さらに倍以上も弾数は増やすことが出来、今の状態では、もはやチートとも言える。

銃を使わないとなれば、圧倒的にジルが不利になる。

かといってジルに助太刀するとなれば、それで話は別になるが、正直なところ、二人とも仲良くしてくれることを願って、俺は中立的な立場を選ばせて貰う。

しかし、女同士の喧嘩、時に発砲するなり、剣で切り合う武偵高ならではの喧嘩は、止めてほしいの一言に尽きる。

仲裁役の俺が死ぬ思いをするから。

などと考えながら、二人の動きを見極める。

ピリピリと張り詰めた緊張感が、強襲科実習棟の屋上に広がる。

どっちが先に動く……？

そう思った矢先、バツ、とジルが疾風の如く駆け出した。

さすがに早いなこれは！！

「ふむ。なかなか早いが、我が殿方の朱雀には足元にも及ばぬ。ワシが来ないと見切った上での先制攻撃。ならば迎え撃とうではないか」

ガシャシャ、と楓は二丁の『microuzi』の銃口を迫るジルへ向けて、トリガーを目一杯引き絞る。

乾いた連射音がけたたましく鳴り響き、無数のマズルフラッシュが、曇天の薄暗い中で鮮やかに煌めく。

ジルはジグザグに直進しながら、列をなして飛来する弾丸を躲し、時には斬り落しながら、楓の懐を目掛けて突っ切って行く。

楓も楓で、遠慮無しにトリガーを引きつぱなしで突っ込んで来るジルに弾幕を張る。

ヤバいな、これでカチ合ったら大怪我じゃ済まない。

そう思つて勢いよく駆け出した俺は、弾丸の雨を難無く躲し、颯爽と駆け抜けるジルを追い越して二人の間に割り込む。

三本を連結したロッドで、マズルフラッシュを閃かす楓の二丁の『microuzi』を瞬く間に上空へ弾き飛ばし、勢いよく楓との間合いを詰め、背後で振り下ろしてきたククリを振り向きざま、片膝を着いた状態で、右手に握るコンバットナイフを器用に動かして受け止めて切り払い、一瞬で頸動脈が通る首筋にピタリと刃を当てる。

左手に握るロッドは楓の眉間に突き出され、二人とも身動きが取れなくなった。

「つ、強い……」

「また邪魔をするのか朱雀!! 貴様はどちらの味方なのじゃ!!」

「ああ。仲良くしてさえくれれば、こんな事はしないさ。仲良くしてさえくれればね。それよりも、次の時間割はなんだ?」

「スポーツテストだけど……あ!!」

「着替えなくてはいけないのじゃ!! ジル!! 今何時じゃ?」

と慌てて聞いた楓だが……

その時に、五時限目を始めるチャイムが鳴り響く。

「しまった!! 着替える時間が!!」

「だったらさっさと行け。俺も行くからよ」

「急げジル!! 遅刻じゃぞ!!」

などと、さっきと打って変わって、凄まじい形相で走り出したジルと楓の二人。

やれやれ、ろくなヤツがいないな。

武偵高つて場所はよ。

でも、もしこれが一般校なら、面白くて充実した生活だったかもな。
なんて考えながら、オレは実習棟の階段を下りて行った。

… 7 (前書き)

長らくお待たせしました!!
今回はちょっとHですw

放課後。

地獄のような体力テストと身体検査を終わらせて更衣室に戻り、直ぐさま着替え（変装し終）えて情報科棟の大視聴覚室へ向かう。え？なんで変装するかって？

野暮なことは聞くなよ。

今日、ここで探偵科と救護科の自由参加の生物の小テストがあるらしい。

言うまでもないが強襲科である俺には関係無い。

しかし、理子の野郎が話したい事がある、どうしても来て欲しいと言うのだ。

だからあらかじめ、実在しない探偵科の生徒を装って潜入して待つことにしたのだ。

両手をポケットに突っ込み、のそのそと大視聴覚室へお邪魔すると……探偵科と救護科しか生物の小テストを受けるのか映画館みたいにただっ広い室内はガラガラだった。

救護科が多いのか、見た感じ女子の割合が多い。

絡まれるのが嫌なので、後ろ側の端っこの方に静かに座って待っている。

とりあえず、変装にはアランに協力してもらい、大人しそうな眼鏡男子に成り済まして座っている。

誰か分からなくなると困るので、理子には先程写メを送って置いた……ふ。

我ながら完璧な変装だ。

俺が鳳凰院朱雀とは誰も分かるまい。

なんて思いながら辺りに目を配ると、ちょうど真反対の端っこの席に、遠山キンジくんの姿が見えた。

なんだ、キンジも受けているのか。
そういえばアイツ、この間単位がどうのこうのって嘆いていたな。
と、一人で考えているといつの間にか隣にキンジがいた。

「お、どうしたキンジく……」

「朱雀先輩。何してんすか？眼鏡なんか掛けて……」

「しっ！！」

「！？」

キンジには俺の変装はバレバレだったのか、いとも簡単に見破られてしまった。

俺は慌てて人差し指を口に当てて、これ以上バラされないようにキンジを抑止する。

キンジもキンジで驚く。

「詳しい話は後だ。今は別な人物だと思って話し掛けてくれ」

「は、はあ……分かりました」

「実は大事な話があるって理子に呼ばれててな。仕方なく探偵科の生徒に変装して来たんだ（小声）」

「そうなんですか……お疲れ様です」

「ああ。理由が分かったら前座ってたの席へ戻ってくれ。コソコソしてるとかえって怪しまれる」

とキンジからプリントを貰いつつ元の席に戻すと、プリントの目を通す。

何々？

プリントによれば、これから武偵高の非常勤講師が監修した『遺伝学』についてのDVDを上映するとある。

ちゃんと見て、問題文の空欄に当て嵌まる内容を書き取れ、だとき。
ちくしょう、強襲科の小テストよりも楽勝だなこれ。

「ほらほら、皆さん。騒がないでちゃんと着席してください。ほら、TPOを弁えて」

ポンポンと手を叩きながらの、先生の声。

ちらりと横目で見れば、何人かの女子が教壇を囲んできゃあきゃあ盛り上がっている。

その中心にいるのは

確か、救護科の非常勤講師の小夜鳴って先生だ。
なるほど。

どつりで女子の割合が多いわけだ。

小夜鳴は海外の大学を飛び級で卒業したとかで、どう見ても二十歳ぐらいなのに武偵高の非常勤講師をやっている遺伝学者だ。

メガネの目は明らかにイケメンのそれで、スラッとした細身で長髪が似合い、背は高く、鼻も高く、ブランド物のスーツにネクタイをキメてる

まあ簡単に言えば、 트렌ディード라마に出て来るような、完璧な美青年なのである。

性格は 聖人のように優しい。

しかも礼儀正しく、誰にでも敬語で喋る。

武偵高の教師の中では希少種だ。

歩くモチ要素とも言えるこのイケメンは、非常勤と言つこともあつてこつ言つ特別講義にしか顔を出さない。

が、来る度に今みたいに女子が集まってキヤーキヤー騒ぐ。

正直、うぜえし、何故か知らんが相棒の彩は、あのイケメンを心底毛嫌いしている。

見てて腹が立つんだと。

分かる気がしないでもない。

それで、女子どもが付けたあだ名は『王子』ときている。

っーか女子が付けるあだ名は納得いかない。

本人の気も知らず、不可抗力だと言い張っても俺のあだ名は『女たらし』だし、あつちは『王子』だときた。

いくら同じイケメンでもそりゃあ差別し過ぎだろう。

自分でイケメンというのはどうかと思うが、体質的な問題もあるからモテたいとは思わないが、酷いに尽きる。やっぱし人間、見た目重視じゃなくて中身だろう。

「ほらほら君たち、これじゃあDVDを始められませんよ。席に戻らない子は……単位、あげませんよ?」

困り果てたカンジで言う小夜鳴に、女子たちは単位を落としちゃかなわないとしぶしぶ席に戻って行った。

ブスツと不機嫌になりながらその一部始終を見ていた俺の……左隣に。

「お待たせダーリンっ」

いま来たところらしい理子が着席してきた。ふわわん。

一度しか見たことがないが、ヒラヒラ制服のスカートが広がって、俺の黒ズボンの左腿を包むように乗っかる。

「誰がダーリンかつ!!」

「だって理子、朱雀のカノジョだもーん」

「変な誤解を招くから止めてくれ理子。っーか俺達はいつからそんな関係になっただんだよっ!!」

見上げ目線で俺の顔をわざとらしく覗き込む理子に小声で文句を言い終えた時、室内が薄暗くなり……DVDの上映が始まった。

『遺伝。親の特徴が子に伝えられる遺伝。その法則について学ぼう』
DVDに録音された土井先生みたいなナレーターの声が響く中で、
理子は俺の左腕を抱いた。

むに、と左肘に何か夢のように柔らかいものが押しつけられたので
慌てて体を傾け、そのみずみずしい物体を必死に避ける。

このシチュエーション、あの三人、いや、あの四人に見つかったら
ただじゃ済まないな。

そう考えるだけで冷や汗がナイアガラのように吹き出る。

まあ、知り合いはキンジぐらいしかいないから大丈夫だ。

「俺に触るなっ」

「いーじゃんいーじゃん んじゃダーリンも理子のこと、触って」

「な 何でそうなるっ」

「触って欲しいから」

「おかしいだろッ。なんでいきなりそんなこと」

「いっぱい、いっぱい……触って。どこ触っても良いんだよ？」

擦り寄る理子から漂うバナナみたいな香りに、俺は呼吸量を減らして
対抗する。

「で、大事な話ってなんだ？」

「それはダーリンに理子のオネガイを聞いてもらってから くふふ
っ。理子、悪い子なおー」

「おいつ。話が違うじゃないかっ」

俺は再び小声で文句を言うと、じゃれるように、理子は俺にほお擦り
なんかをしてくる。

「やめろい!!!お前はネコかっ!!!」

「にゃ〜にゃ〜」

理子は手首をネコみたいにくネツと曲げて引っ掻くフリをし、

「ハグして、ハグしてよダーリン……抱っこ、だーっこおー」

と、長机の下でヒラヒラ靴下の足まで絡めてきた。

俺はちよつとびっくりしつつ、DVDを観ているフリをして気を紛らわす。

俺は何のために此処に来たか、分からなくなりつつある。

どうしろってんだよ。

とりあえずテストと言うノルマをクリアしつつ、コイツのオネガイを叶えなければ話は聞けないみたいだ。

めんどくさいヤローだな。

ブスツと不機嫌そうにスクリーンに映る映像を観ている。

「あー、ダーリン我慢してるう。ガマンはカラダに良くないよおー」
「？」

ふあさつ、と。

理子は上半身を倒し、俺の膝の上にしな垂れかかってきてしまった。無視モードに突入していた俺も、さすがにこれはびっくりしてびくついてしまう。

ロリータだかなんだか良くわからんが、フリフリに改造された制服がやたらとくすぐりたい。

「なでなでして」

「するかアホ」

「してくれなきゃ悲鳴上げて、スザク先輩に変なことされたって先生にばらしちゃっぞぞ」

「…………なん…………だと…………？」

真っ青になる俺。

変装はばらしても問題はないが、変なことをされたとチクられちゃ、俺の名誉にキズがつく。

ただでさえ『女たらし』っつー悪いあだ名が広まってるんだからな。これ以上、評判だけは下げたくない。

そんな俺の膝の上で寝返りを打つように上を向いた。

その結果、俺が理子を膝枕しているような姿勢になる。

「がおー。マジで叫んじゃう5秒前えー。さーん、にーい、いーち」
「わかったわかった!！」

せ、背に腹は代えられんっ。

がば。

俺は………… ボールを掴むように、理子の頭を左手でわしづかみにした。緩くウエーブした蜂蜜色の髪に、俺の五指が埋もれるようになる。

「あぁん。ちょっとイタイ。もう少し、優しくして…………」

思ったよりも柔らかな理子の髪はアリアほどツヤツヤしてなくて、毛先はいたずらっぽくピョンピョン跳ねるくせっ毛で…………

だが、そのアバウトさが理子の性格と相まって

こんちきしょう。

腹立たしいぐらい、コイツはコイツで可愛いんだ。

まあ、一般的に言えばだが。

なでなでっ。

半ばヤケクソ気味に撫でてやると、理子は、ふにゅっうー。

心底幸せそうに、その大きな二重の目を細めた。

「ん……いいかんじ。でも、もうちょっとゆっくりして」
なで……なで。

「これで良いか。もう勘弁してくれや」
「もつともつとおー」

幼児退行したような理子を、俺は赤くなりながらあやす。
なで……なで……なで。
なで……なで……なで……なで。
こんなところアリアに見つかったら七回ぐらい殺されるぞ。
いや、もつと殺されそうだな。
あふう、と理子はもう天使にでもなったかのような幸せそうな溜息をつく。

『あるパーティーで、女優のマリリン・モンローがインシュタイン博士にこう言った。「私の美貌とあなたの頭脳を兼ね備えた子供ができたら、素晴らしいとは思いませんか？」プロポーズとも取れるマリリンの言葉に、インシュタイン博士はこう切り返した。「やめておきましょう。私の顔とあなたの知能を持つ子供が生まれるかもしれないですよ？」……このジョークは我々に、「遺伝」と「変異」を学ぶ上でヒントを与えてくれる』

DVDのナレーションに続く、カリカリ、と言う音。

(……しまったー!!)

前方を見渡すと、他の生徒達が上演されている映像の内容をプリントに書き取っている。
まずい。

出遅れたぞ。

こんなに簡単な小テストで一問も落とすちまうのか、俺は!!
それに何にも書かないで提出したら、先生に変に思われちまう。
変なプライドとプレッシャーが途端に俺を焦らせる。

俺は慌ててシャーペンを手には……あり?

シャーペンシルがない。

さっき机の上に置いたのに、落とすちまったか?

「くふふつ。ダーリンのシャーペンなら、かくれんぼしてるよー
?」

腹の下から、理子が小声で言ってくる。

「ヤロー……盗みやがったな。いつの間に」

「理子はドロボーさんですから」

「早う返せっ」

「はぁーい」

と、理子は……胸を反らすように突き上げてくる。
な……何してんだよ。

と思った俺の目玉が 飛び出しそうになった。

いや、飛び出しちまった。

もうマンガばりにびよよよ〜んと。

小柄なカラダに似合わず、やたらに体積のある理子のけしからん胸
の谷間から……俺のシャーペンの先端が突き出ていたのだ。
む、むむ胸に、挟まっとなる。

「はい。取って良いよ」

「ちよ、ちょっと待て、こりゃあやり過ぎ……」

「ほらほら、DVDがどんどん進んじやいますよー? D・V・D!

「! D・V・D! !」

理子は小悪魔っぽく笑って小さく手拍子なんかしゃがる。
コイツう…………。

あ、ありえんだろ!!

「つか、大事な話って、この件のせいで忘れてないか？」

「もしやこれも理子のオネガイとやらか？」

「ふざけるな!!」

「とは内心で言うもの…………このままじゃテストが書けん…………」

「ノルマならず大事な話も聞けなくなる。」

「や、やるしか、ないのか…………」

理子の静脈が透けて見えそうに白い肌から顔を反らしつつ、俺は。
鼻血が出そうになるのを、右手で鼻を必死に押さえて。

強襲科の実習や実際の事件で時限爆弾を解体した時のような、いや
それ以上の決死の覚悟で、セーラー服の胸元に、すす、す…………と左
手を入れていく。

「だ、大丈夫だ。」

「ヒスつたりはしないが、俺が多量出血で病院送りになるだけだ。
大丈夫じゃねえよそれ、冷静になれ。」

「すす、すす…………うわあ。」

「こんちきしょう。」

「や、柔らかい。」

「暖かいけど…………なんだこれ。」

「んっ…………ちなみに今、理子はノーブラなんだあー」

な に イ ！！

余計なことを言うなあ！！

顔が一気に熱くなり、変装するために掛けていたメガネがずり落ちる。

鼻の奥に、何やら血の匂いが立ち込めて来たぞ。

なんだか鉄の味もする。

ヤバイヤバイヤバイヤバイ！！

しかし、やったんなら最後までだ。

俺のシャープペンを奪取するまで諦めん。

俺の理性よ、耐えてくれ！！

お願いだ！！

ごそ……ごそ。

か、顔を逸らしてて、目で見えないから良く分からない。

こ、これかな？

「あ、あつ。それ違うつ」

理子が少し本気で焦った声を出したので、俺も慌てて手を引っ込める。

「な、なんだよっ」

「スザク輩　　ってば、意外と大胆。い、今のは理子もちよつとび
つくりしました」

なぜに敬語？

まあ、先輩後輩同士だから間違ってはいないか。

シャープペンのケツの消しゴムの部分を触ったかと思っただが。

「でもスザク先輩、心配しないで。理子、スザク先輩になら何でも
させてあげちゃう。みんなあげちゃう。だから、もっぺんがんばる
？」

「……なにゆえ、こんな過激なことを頑張る必要があるんだよ……
！」

「これはスザク先輩が理子を使つてチートモードになる訓練なんだ
よ。一緒に大泥棒を成功させるには、適切なタイミングでチートモ
ードになる必要があるからね」

そついう……こと、か……

だが理子、お前も勘違いしてるみたいだな。

俺の、ノワールモードに切り替わるトリガーを。

まあ、教えるつもりはないし、理子の訓練のうんぬんは置いておこ
う。

それよりも今、一番重要なのはシャープペンの奪取だ。

ノルマ不達成は俺のプライドが許さん。

俺は改めて背を向け、鼻血を噴きそうになりながら理子の胸へ左手
を伸ばす。

俺の手が、マシユマロのように柔らかい谷間に改めて差し込まれた

その時。

ぱっ。

と、明かりがついた。

「…………？」

前方のスクリーンを見れば、『終わり』の文字が。

…………お、終わり…………？

ハッ　と気配に振り向く。

俺達の横には、小夜鳴先生が立っていた。

り、理子に夢中で気が付かなかった。

1番後ろの列に座っている理子と俺の姿は、他の生徒には角度的に見えていないが…………

先生は、俺の手が理子の胸元に突っ込まれているのをバツチリと目撃していらっしやる。

「は、はい先生！！理子は全て回答済みです！！じゃ、そういうことで！！ばいばいきーん！！」

理子は、ぼーん！！

と起き上がって先生に自分のプリントを押し付け、両手を上げて逃げ出した。

スカートを一ヒラヒラさせて視聴覚室から出ていく、くまさん型のリュックサックを呆然と見送った俺は…………

こめかみに血管を浮かせてメガネを光らせる小夜鳴の、

「す、須藤くん。TPOって言葉…………知ってますか？」

に始まる説教と…………後日、鑑識科や装備科に混じってDVDを見せられるという即席追試の命令をコンボで喰らうことになるのだった。まあ、実在しない生徒に変装してるから、行かなくてもいいのだが。

… 7 (後書き)

いやあ、散々な目にあつたね朱雀くん W
次回はもっと大変なことに W
お楽しみに!!

… 8 (前書き)

(祝) 100話達成!!

いやあ、睡眠時間と僅かな休憩時間を削って書いた甲斐がありましたよ!!

今回は大変長い仕様になってますので読みごたえがあると思います!!

では、どうぞ御覧あれ!!

その後、もう誰もいない情報科棟の出口ロビーへ向かい、トイレで着替えた変装の衣装が入ってる、パンパンの鞆を重そうに担いでトポトポと歩いてると……
かちかち。かちち。
憎くき理子がPSPをやって待っていた。

「あ」

俺に気付いた理子はゲームをスカートの中にしまいつつ、慌てた様子で廊下の角の影に隠れる。
そして『ねえねえ、さっきのこと、まだ怒ってる？』ってカンジに角から半分だけ顔を出して俺を見る。
俺は知らん顔をしてその横を通り過ぎようとする……

「てへっ」

とか言つて舌を出し、自分で自分の頭をちっこくゲンコツなんかしやがった。
なんかキメーんだよ、ちくしょう。

「……大事な話って、何だよ」

冷やかな視線を横について来る理子に向けながら、外へ出ると雨が降っている。
しまった。

そういえば俺、傘持ってない。

と思つたら、バサッ。

俺の頭上に、手を向けた理子が折りたたみ傘を開いた。ピンクでフリルだらけの、少女趣味満載の傘だな。

……んで？

「半分貸したげる。相合い傘しよっ」

や、やっぱし。

「あ、ありえねーだろ……」

「明日の『大泥棒大作戦』会議から仲間外れにされたくない人は、傘にお入りください」

「……」

我慢……するしかないか。

兄に関する情報もかかっているわけだし。

と、俺は仕方なしに理子の傘に入る。

「スザク先輩と相合い傘、うっれしいな。あつめあつめ降っれ降っれもおーっと降れー」

もう雨なんか降らないでくれ。

理子と肩を合わせて歩く俺は、こんな光景、アリアや楓に見つかったらとんでもないことになるぞ……と、大きく溜息をつく。

が、その考えは砂糖の入った餡蜜のように甘すぎた。

今日一日中、あまりに散々なことがありすぎて、ソイツの存在をすっかり忘れていた。

見つかったら、もっと最悪なヤツをね。

「くふつ。スザク先輩ってふだん女の子から凄い距離おいてるけど
おー、実際二人つきりになるとけっこう面倒見いいんだよねー。ベ
ッドの上でも優しくかったもんねー？で、誰だお前？」

急に鋭い声で男喋りになった理子が
ばっ！！

と傘を真上に投げ、ガッ！！

俺の胸倉を掴んで、自分と共に屈ませた。

「！？」

一瞬前まで理子の首があったその高さを、

シュバツ　！！

……に、日本刀っ！！
の、刃が通過した。

慌てて振り向くと、俺達へ目掛けて

紫色に輝くナイフが青い燐光を放ちながら、まるでガ　ダムのサイ
ミュやらファ　ネルさながらの、機敏で複雑な軌道を描き、今に
も突き刺さんばかりに理子を威嚇するように周りを旋回する。

っーか、ここは宇宙世紀じゃねえんだよ！！
どーにかしてるぜっ！！

冷や汗をかきながら紫色の刃のナイフから視線を外す。

どうやらこうやら、びっくりして身動き一つしない理子には危害を
加えるわけではないみたいだな。

と安心する間もなく、振り返った俺達の後ろには　　やっぱり、

「ま、舞っ！！」

が、臙脂色のセーラー服姿で立っていた。

右手には抜き身の名刀『虎徹』、左手には市販で売ってる、600

円ぐらいの安物の、空色の傘をさしている。

「こっちにいらっしやい、朱雀」

と、黒い笑みを浮かべながら、恐ろしい声で俺を呼び、手招く彼女。そ、そういえばコイツ、超能力捜査研究科の海外合宿から今日帰って来るとか言ってたっけ。

白百合 舞。

前・生徒会長で女子剣道部主将で超能力捜査研究科首席で三年生学級委員長で偏差値は後輩の白雪とかわりないぐらいあるお世話好きの超お節介やきで、イマドキ珍しい女の子だ。

だが時々、俺が他の女の子と話していると何故か鬼神のようなバーサーカー少女に変貌して容赦なく襲い掛かる、かなり困ったクラスメートだ。

つーか今の横薙ぎ、避けてなかったら俺まで胴真っ二つされてなかったか!?

なんて思いつつ、呼ばれてるのでシカトするわけにもいかず、しぶしぶ舞の隣に行く。

「りこりんとスザク先輩の甘い甘あーい時間を邪魔するなんてえ〜?だあれえ〜?」

わざとらしいい〜くレディースみたいにガンを垂れる理子に……

ぴゅん。

怒ってるのか何なのかよく分からない、黒い眼差しを返しつつ、刀を一振りして雨水を払う舞。

この刀捌きを見ると、なんか時代劇とかに登場する女サムライを思い浮かべちまうな。

まあ、俺の知り合いにもっとサムライっぽい女の子がいるが。

「私は、超能力捜査研究科三年の白百合舞。貴女こそ誰？付き纏われる朱雀の身にもなりなさいよ。それとも……私の大事な大事な朱雀を、横取りしようとする女狐さんかしら？ふふふ……今の一振りには警告よ。次から朱雀に近寄ったら、容赦なく切り捨てるわ」

と黒い笑いを浮かべつつ、口を不気味に緩めながら俺の斜め前に立つ舞。

おっかねえ……マジで怖い……後ろからどす黒いオーラが出てます！！

だ、誰か……俺を助けてください。

毎度毎度突っ込むんだが、いつから俺はお前のモノになったんだ？

「なんでえー？鳳凰院スザク先輩と峰りこりんは、彼氏・彼女なんだよお？相合い傘するぐらい、あつたりまえじゃーん」

ぷくう、と頬つぺたを膨らませた理子は、ひら、ひら、とつむじ風に乗って滞空していたフリル傘を上手くキャッチする。

よく見ると、理子の腕時計と傘は　細いピアノ線で繋がっているようだった。
なるほど。

あの腕時計がリールになっていて、傘を引っ張り寄せられる仕組みになんだな。

「彼氏・彼女……？ふふふ、ふふふふふ……それは本当かしら？ねえ朱雀？」

いきなり振り向き、焦点の合わない虚ろな目で俺を見ながら問う。
さすがの俺もそれは焦る。

「し、知るかつー！！コイツが勝手にそう言ってるだけで俺には何も

関係無い!!」

舞、やっぱり怖いってお前。

俺は嘘はついてません、勘弁してください。

……お願いします。

「……前言撤回するなら今のうちよ、峰ちゃん？」

時代劇のような手捌きで刀を鞘にしゃきんとしまい、スツと右腕で俺の左腕を優しく抱く舞。

しかしまだ顔から黒い笑いは消えていない。

ヤバい、この笑い方はヤバいつて!!

なにやらとてつもなく嫌な予感がするぞ、俺は!!

「私と朱雀は……キスしたことだってあるんだから。誰が貴女なんかと……」

「ぶぶつ!!キス止まりですか!!理子はスザク先輩と、もうBまでしちゃったもんねー」

「びい　　っ!!」

いきなり瞳孔をかつぴらいて絶叫する舞。

「あはみはらたあ#ぶえ\$うま*うか%!!」

「お、おい舞つ!!壊れるなつ!!　　あと理子も誤解を招くようなこと言っつなつ!!」

俺のツッコミは
スルー。

精霊流しのように、音もなく流されていき。

「こ、ここ、このっ！！ 私のです、朱雀にこれ以上の破廉恥行為は誰がなんと言おうと私が許さないっ！！覚悟しないさい女狐っ！！」
じゃきんっ！！

若干、涙目になりながら震える右手で再び鞘から日本刀を抜き放ち、理子の周りを旋回するナイフを自分のもとに呼び寄せる。
お前も言えなくは無いが、なんで泣く必要があるんだ？

と思いつつ、隣に立つ俺は念のため、いつでも防御できるように身構える。

「来な。りっこりにしてやんよ」

戦闘狂のケがある理子は、にやー、と好戦的な笑みを浮かべた。
や、闘るきだぞこれ。

二人とも……！！

痺れるような殺気が、雨の降る周囲に満ちた
ばっ！！

舞は傘を投げ捨て、刀を下段に構え直す。
舞の胸を斜めに切り上げる、“逆切り上げ”の速度はハンパなく速い。

一度見たことがあるが、あの速さは俺でさえ躲せれば、運が良い方なぐらいで、あの速さは並大抵のヤツじゃ躲すことはできないだろう。

舞が動いた時には、もう死んでるなあれは。

「くふっ！！」

それを見た理子は傘を盾のように突き出し、舞の視界を塞ぐ。

「！？」

パンっ！！

いきなり自分の足元に撃ち込まれた弾丸に、踏み出そうとしていた舞の足が止まる。

理子のフリル傘は、先端が仕込み銃になっていたのだ。

傘を地面に転がした理子は、舞の背後に回り込みながらぶわあっ！！

舞のスカートをめくりやがった！！

「きゃああっ！！」

と日本刀を放り投げ、その場にしゃがみ込む舞。さくっ。

飛んできた刀が俺の頬を掠め、傍らにあった木を貫通し。

ひゅんっつ！！

集中力が切れたのか何なのかで、舞の周囲に滞空していたサ コミ ュバリの動きをするナイフが、コントロールを失ったかようになぜか俺へ向かって一斉に飛んできーの。

「うおおおうっ！？」

バスバスバスッ！！ガガガンッ！！

俺は咄嗟に右胸のホルダーから左手でGLOCK17を素早く取り出し、飛来するナイフを全て撃ち落とす。

その直後、まるで死人のように俺の顔は青ざめ、木を背にフニャフニャと脱力して座り込む。

き、肝を潰したぜ、今のは。

「おおー！！ゆりちゃん“黒”だあー！！『白百合』なのに矛盾してるよー！！」

理子は自分を追い掛けるように転がってきた傘をキャッチして、パンパン手を叩く。

てか……ゆりちゃんって誰だ？

ああ、舞のことか。

『白百合』だしね。

「じゃーねスザク先輩！！明日の会議デートの場所と時間、後でメールするねー！！」

ちゅー！！

投げキッスなんかして、理子は……スキップで逃げて行った。

噂通りだな。

逃げ足の速さだけは継いでるようだ。

さっすが怪盗リュパンの曾孫だよ。

(……んで、こっちはどうなったんだ……？)

ゆっくりと立ち上がり、右胸のホルダーに拳銃を戻しつつ、尻に着いたゴミを払いながら、地べたにしゃがんだままの舞に近付き、恐る恐る見ると……

耳まで真っ赤にした顔を両手で覆い隠し、ひんっ、ひんっ、と泣きじゃくっていた。

「ぐすっ、ぐすんっ、こ、殺してっ！！私を殺して朱雀っ！！こ、後輩達の模範である、三年生学級委員長の私が、ぐすっ、色気付いたからからって、こんなはしたないクロパンツを、ひっく、コッソリ履いているのを暴露されたからには、も、もう嫁にいけないっ！！す、朱雀のところ、嫁にいけないよっ！！うわああーん！！」

そのまんま、来ない方向でお願いします。

理子は舞のスカートを後ろからめくっていたので、俺の方からは何にも見えていない。

「うーか、その時、俺はそれどころじゃなかったし。

……危うく人間ダーツの的になるところだったな。

故にその内側に隠された色が黒だろうが赤だろうが無関係だったのだが……舞はこの件が相当ショックだったのか、立てないほどへなへなになっていたのだ。

それを雨の中に見捨てていくわけにもいかないでおぶってやると、気分が悪いから救護科に連れて行ってという。

ので、連れて来た。

救護科棟、10階。

応急室なる狭い部屋に入ると……ありゃ？

誰も居ないぞ？

舞が連れてってと言うので、てっきり先生か誰がいるのかと思ったのだが。

「うーか、さつきからとてつもなく柔らかいモノが俺の背中に、わざとらしく押し当てられてるのは気のせいかな？

気のせいってことにしておくか。

そっちに気がいったら大変な事になりかねないからな。

「……ほ、他を当たろう」

「うー、うん」

舞は俺におんぶされたまま、がちゃ、と、ドアのノブを後ろ手に掴んで……

ん？なんかかちんって変な音がしたな？

「あ、あれ」

「どした？」

「あ、開かないよ。出られないね。困った困った」

なんか棒読みつぽく言う俺の背中から降りる舞。

ありゃりゃ、お前、もう立てるじゃん。

「足、大丈夫か」

「う、うん。もう平気だよ！ありがとう」

いつものような笑顔で言う舞に、俺はそっぽを向く。

俺は何もしてねえよ。

さてと、どうしたものか……。

とドアノブを見ながら考え込む。

拳銃でノブを撃ち壊すことも考えたが、後々自腹を払って直すことが目に見えている。

ただでさえ金欠で今月苦しいのに、臨時出費は手痛いしっぺ返し、だ。

それでこそ今月末まであんパン一つも買え無くなる。

しかも、案の定、いつも武偵手帳に挟めておいたお手製の解錠ツールキットもなぜかこんな時に限って不在だ。

しばらく、ドアノブの鍵穴と睨めっこする羽目になる。

「舞。お前、解錠ツールキットって持ってないよな？どつやらこつやら閉まった衝撃で鍵が掛かったらしい」

「そ、そうなの！？ごめんなさい。解錠ツールキットは持って無いわ」

ちくしょう、今日に限ってどんだけツイてないんだよー！！

「参ったなあ。拳銃で壊すと後が怖いし、窓から出るにしてもワイ

ヤーが足らん。降りれたとしても7階までが限度だな。……情けないけど大声で誰か呼ぶか」

「……そういえば、今思い出したんだけど……今日は救護科、ほとんど誰もいないかも」

「……はア？何でさ？」

「今日は非常勤の小夜鳴先生が、小講堂で遺伝子工学の講義してくれててね……救護科の子は全員出席だった……かも」

「はぁ……今日はとことんツイてねえなあ俺は。もっと早く思い出せよ」

「ご、ごめんなさい」

「……謝るな。別に舞が悪い訳じゃない。こうなったのはしゃあないんだよ……」

と謝りながら今にも泣きそうな舞を仕方なしに、不器用ながら優しい言葉をかけて宥めてやる。
うううむ。

仕方ないなこれは。

しかし、いつまでも閉じ込められているわけにはいかないぞ。装備科の天才・熱田に電話して、専用工具で開けてもらおうかと、俺は溜息混じりにポケットから携帯電話を取り出すと……

「ごめんなさいっ！！」

舞がその携帯をむしり取って、しゃっ、とカーテンの向こう側に入ってしまった。

俺は舞の唐突な行動に面食らいながらも、

「お、おいっ！！何すんだっ！！携帯返せ！！！」

しゃっ。

と、カーテンを開くと。

舞は……奥にあった白いベッドの上に正座していた。俺の携帯を両手で握りしめ、背を丸めている。

絶対返すもんか、のポーズか。

……どいつもこいつも何なんだよ一体。

「おい、どうした？」

舞の長いクリーム色の髪は白いシーツの上に優美な曲線を描き、俯く前髪の下には影が出来ている。

その影で、目は隠れている。

「……しょうがないでしょ……だって朱雀が……知らぬ間に色んな女の子と……」

は……何だって？

声が小さくてよく聞こえん。

「……だから監禁して……今だけでも……私の朱雀に……」

な、なんかものすごく怖い単語が混ざってませんでしたか今？

「また海外に行く前に『既成事実』を作っちゃえば良いんだわ……」

あの女たちにも負けない、スゴイ既成事実 既成事実、既成事実

既成事実、既成事実……！！」

「舞っ。なにぶつぶつ言ってるんだよっ！！」

壊れたレコードみたいに同じ言葉を繰り返し始めた舞を、俺はちょっと揺する。

「ひゃいつ!!」

びくっつ!!

慌てて顔を上げた舞は、テンパってはいるものの……一応、こつちの世界に戻ってきたらしい。

「携帯、返してくれ」

手を突き出すと、舞は携帯を握った両手を胸の前でいやいやさせた。

「そんな事よりも朱雀さまっ!! 重要なお話が!! ふ、二つあるわ!!」

「なんだよ朱雀さまって。……わかった。聞いてやるから話し終わったらちゃんと携帯は返せよ?」

「はいっ!! えっと、一つ目は、白雪ちゃんに朱雀の事を調べ……じゃない、占ってもらったの」

……調べてもらってたんじゃないのか?

最近、ちよくちよく白雪がキンジを尋ねて来るついでに俺の予定を聞いていたし、現に情報科の前で待ち伏せしてたみたいだか。まあ話が長引いても仕方ないので、そこは聞かないでおこう。

「そしたらその……普通じゃない結果が出ちゃったみたいで……」

「もうすでに普通じゃないけどな。俺の身体といい生活といい。んで、何だって?」

「白雪ちゃんの話によると、朱雀は『狼と、鬼と、生きる屍に会って出たみたいなの。それも、近いうちに……』」

狼と、鬼と、生きる屍?

なんか前にも聞いた記憶があるが、こつだっけか?

うる覚えだが聞いた覚えはあるぞ。

確か オオカミは絶滅した。

鬼と生きる屍は空想の産物。

いつも見てきたから超能力までは許すぞ。

だが、俺の世界とお前の世界は違う。

そこまで人間社会からおさらばするつもりは毛頭ないぞ。

とは言え、舞曰く白雪の占いはよく当たるらしい。

ずいぶん前にキンジと一緒に占ってもらったが、確かに当たるなあれは。

そもそも占いなど一度も信じた事は無い俺だがちよつんとそれはマズいな。

なので、少し考えてみて……すぐに思い浮かんだのが……

オオカミのミニとシッポを生やして、がおーとか言うソフィア。

トラジマのビキニを着て、角を付けた鬼のような形相で俺を刀で突き刺す楓とジル。

ボロボロの服を纏い、下半身腐った血肉まみれで餌を探してはいずり回る舞。

……なんか1番最後のヤツがむちゃくちゃ怖いんだが。

「わ………わかった。とりあえずその警告は心に留めておく。んで、

二つ目は？」

「その……私、また今夜からしばらく海外訓練に行くの。今度はフランスに行ってきます」

え、また？

「……フランスに、か？」

「う、うん。あとすこしで仕上げれるから、多分、一ヶ月ぐらいは帰って来ないと思うの。もっともっと強くなって、私の朱雀を誰からも盗られないように頑張るー!!」

「そ、そうか。そりゃあ厳しい訓練になるかも知れないけど俺の頑張ってる。一ヶ月と言わずにな」

うっしゅあぁあぁあ!!

俺は心の中でガッツポーズ。

これで周囲から一番危険な女の子がいなくなるぞ。

だが喜びを顔に出してへソを曲げられても困るな。

ここは我慢だ。

「私からのお話は以上です。それにしても……このお部屋寒いね朱雀。あつ、ヒーター壊れてる」

何で見ただけで分かるんだ。

と思っただけで分かるんだ。確認してみたら、確かに壊れてた。

「なんかこのヒーター……無数のナイフで突き刺したような跡があるんだが……」

「寒いよね!!」

「ん? ああ、まあ、今日は寒いな。梅雨冷えてヤツかな」

と言っでも、肌寒い程度だが……

思い出してみれば俺達はこの部屋から出られないわけで、寒さはちよつと辛い。

「くちゅんっ!!」

「……お、おい。大丈夫か?」

白いベッドの上に座る舞が、両手で顔を隠しながら、くしゃみをしたのでビククリする俺。

まさか、さっき雨に濡れたので風邪でも引いたのか?

俺は壊されたヒーターから離れ、舞の隣に腰を下ろす。

「……寒いなら布団に入って体を温めろ。それとも俺のパーカー、貸すか？」

なんて視線を窓に逸らしながら一応、聞いてみる。すると何とも恐ろしい答えが返ってきた。

「……い、一緒に寝て……」

「……はいい！？な、何を言ってる」

「寒い。寒くて寒くて、ホントに死んじゃいそう。だからお願い朱雀、今だけで良いから私を“抱いて”」

「~~~~~っ！！」

後ろから抱き着きながら耳元で甘く、まるで俺の脳に直接問い掛けるように淫猥な言葉を囁く舞。

微かに首筋に触れる吐息が俺を全神経を徐々に麻痺させる。

「……や、ヤバい。」

て、手足が動かないっ！！

う、嘘だ！！

必死に手足を動かそうにも、舞の言葉に洗脳されたのか手足が動かない。

くそっ！！まさかサイコネシスか！！

そんなはずはない。

なぜなら舞のサイコネシスは人体に影響しないのだ。

どういうことだよ！！ちくしょう！！

この状態でキスなんかされてみる。

ランプの魔人のように何でも言うことを聞く俺のことだ。

取り返しのつかないことになる。

「……な、何を、した……？」

「私は何もしてないわよ？ただ私の思いを伝えただけ」

一体何なんだよ！！ちくしょう！！

見たカンジ、身体の自由を奪う呪縛みたいな業だが、一体どうやってたら俺は開放されるんだ？

眉間にシワを寄せながら必死に考え込む俺の後ろで、しゅるしゅる、しゅるしゅる。

ん？

なんの音だ？

俺は俯き加減だった視線を、ふと前に向けると

パサツ。

眼前に、セーラー服のスカーフが投げ捨てられる。

武偵高の女子制服のスカーフは、タイと一体化した世にも珍しいデザインをしている。

このセーラー服は世間でも意外と人気があり、ネットでもかわいいと評判なのだが、その複製・販売は武偵法に基づいて規制されており、臙脂色というカラーをしているのも、一般の高校生と武偵高の生徒を識別しやすくしているためで……っておいツ！！

ナニ詳しく説明してるんだ俺ってヤツは！！

コイツ、何でいきなりスカーフ外してるんだよ！！

と、再び色んな意味で思考がめぐりめぐって青ざめていると……ふあさつ。

今度はブラウスを眼前に投げ捨てやがった！！

「ちょ、ちょっと待て舞！！何で脱いでるんだよ！！」

「な、何でって、か、かか風邪を引いた時は、人肌で温めると治るのが早くなるの！！だから朱雀と私が裸で体を温め合っの！！」

何言ってやがるコイツは！！

た、確かにそうとも言つかも知れんが、いくら何でもムリがありす

ぎやしませんか!!

むっちりしたダイナマイトボーディーを持つ舞の全裸を拝めるのは、世間一般の男子生徒諸君が嬉しいがる光景だろうが、俺からすればちつとも嬉しくない。

それどころか、多量出血で病院へ緊急搬送されて入院する羽目になるんだよ!!

今だに活発な鼻血活火山が大噴火して。

まだまだ子供なんだよ、こう見えても。

そんな俺の気も知らず……あ、あああ、今度はスカートを投げ捨てやがった。

「……お、お願いだっ!!お願いだから脱ぐのだけは止めてくれえっ!!」

とテンパるあまり叫ぶ俺を尻目に、背後からゆっくりと俺の首に巻き付く舞の両腕。

そして、強引に俺をベッドに引きずりあげて押し倒す。

……た、立場が逆じゃないか?

「うわっ!!」

ベッドに仰向けになった俺の上に、ゆっくりとまたがって俺の腹に座る舞。

俺は真っ向から見ないように、ギュッと目をきつく閉じて顔を横に反らす。

のしかかる舞の、豊満な胸と下の感触が嫌でも感じてしまう。

「や、やめる舞っ!!お前正気か!!」

「ええ。正気よ。心配しないで朱雀。私も初めてだから。お互い優しくやりましょうね」

誰がやるかよ、と無意識に左手を動かす。

動かされたせいなのか、いつの間にか体の痺れが治っていた。

俺のパーカーを脱がせてワイシャツのボタンを外し始めている舞の両手を俺の左手で制止する。

その時、必死になったあまり目を開けてしまった俺は息を呑んだ。

(……うわ、さすが。思った通りの美少女だよ舞は)

まだ下着姿だったので良かったのだが、過激な黒いランジェリーを着ている舞は、紛れも無く大人の女性だった。

雪肌で細く品かな肢体に、女性らしい、魅力的な腰のくびれ。

豊満な胸とか細い撫で肩。

年齢とは掛け離れたほど大人びた美しい姿を見て、改めて認識させられた。

そのお陰で一瞬、俺の思考が止まる。

「わ、悪いっ!!」

「きゃっ!!」

腹の上のしかかる舞を、強引に俺と入れ替えて、素早く枕元にあった俺の携帯とパーカーをむしり取るとそのままベッドから飛び下りる。

テンパっているのか、何も無いところで躓きながらドアの前まで行く。

舞は下着姿を見られた、と思ったのか素早く毛布で体を隠す。

こ、こんな事がバレたら殺されるじゃ済まないな。

覚悟しておこうか、俺。

ゆっくりとドアを背に、舞の方を向く。

「あ……で、電気ついてるから、その……そんなに見ないで……でも、見たいなら……いっぱい見て」

どっちやねん。

と赤色灯のように真っ赤になる舞にツッコミながら、焦りつつパーカーを羽織る。

よ、良かった。

右胸にある拳銃のホルダーは、外されて無いみたいだ。

「……………朱雀。続きを、どうぞ……………」

さあ召し上がれ、と言わんばかりの差し出しっぷりに、若干動揺しながらも俺はある行動に移ろうと決意した。

「……………わかった。わかったからあっちを向けよ。な、なんだ、俺だつて恥ずかしいんだからさ」

「わ、わかった」……………つて……………朱雀……………」

「良いから良いから、早くあっちを向け」

「は、はいっ！！了解っ！！」

舞は何を想像したのか、興奮しながら指示した通り、クルッと俺に背を向ける。

それを見た俺は音でバレないようにGLOCK17の安全装置を外しながら、ゆつくりと右胸のホルダーから左手で抜く。もうこうなったら修理代なんだ。

「……………す、朱雀。ぬ、脱ぎ終わったら言ってね！！」

俺が何を脱ぐつて？

と舞に背を向けた俺は　　ガウンガウン！！

ドアの鍵穴に銃口を当て、発砲する。

「えっ!!朱雀っ!!置いて行かないでよ!!」

「……悪いけど今回はかりはそうはいかないよ」

どがああんっ!!

俺はそんな台詞を吐きながら、かつこよく左手でGLOCK17を回してホルダーにしまうと勢い良くドアを蹴破る。

勢い良く蹴破られたドアは、勢い良く外側に開き、俺はわたわたと慌ててベッドから降り、セーラー服を着る舞を尻目に階段を風の如く駆け降りて行った。

初めからこうすれば良かったんだな。

何、修理代ケチってんだよ俺。

鼻から血が出てないか確認しつつ歩いていると

「朱雀う !!帰ってきたら“続き”しようね!!絶対だよ

!!」

と、見上げれば10階から舞が手メガホンでそう叫んでいた。

あのあと、学校から帰路に着いた俺は唐突に降ってきた大粒の雨に打たれ、ずぶ濡れになって部屋に到着する。

ドアの前に立ち、ぶつぶつと文句を言いながら懐からキーカードを取り出して開け……って開いてるし。

ちびツインテのピンクライオンの仕業だな。

あんだけ男子寮だから勝手に入って来るなと言ったのに、また来てやがるのか。

ちくしょう、ナメてやがる。

珍しく玄関口にキレイに並べられた黒いストラップシューズを見ながら毒づき、俺はスニーカーを脱ぎ捨てて上がる。

一度更衣室に行き、びしょびしょのワイシャツとストラックスを脱ぎ、私服に着替えてタオルで髪の毛を拭きながらリビングに向かうと……

「遅い!!」

またしても、あの独特なアニメ声がりビングに広がる。

かわいい犬歯を剥き出しにし、ツリ目を更に吊り上げて俺をギロリと睨みやがる。

「相変わらずいちいちうるせーな。別に待ってるなんて言ってないだろ」

俺は困ったように言う。

なんか怒らせるようなことしたか？

「何回電話しても出ないし、いつたい今の今まで何処ぶらついてい

たわけ？」

「あ、そう。そいつは悪かった。が、お前には関係無いことだろ」

なんでか苛々していらっしやるご主人様へ、L字型に配置されたソファの端っこに腰を下ろし、ちよつと逆ギレ気味に言い返す。

もうプライベートルームもクソもあつたもんじゃないな。

また勝手に人ん部屋に入つてやがるし。

「つーか、なんで勝手に入つてんだよ？人の部屋にさ？」

「これもパートナーのあんたとのスキンシップを取るための訓練の一貫よ。悪い？」

「……あのさ、できればそういうのは学校だけにしてもらえ無いか？常日頃からプライベートルームまで侵害されちゃ、俺が休むところが失くなる」

「ナニよツッ！奴隷がご主人様であるあたしに逆らうわけ？」

「……いい加減にしてくれ。何なら今のお前を不法侵入及び恐喝罪で逮捕するぞ？」

と睨みを効かせて俺が言うと、びくつ、と俺を見上げて一瞬だけたじろぐアリア。

よく考えて見れば、確かに今の状態ならアリアは二つの罪を侵しているわけだ。

そうなる俺はアリアを現行犯で逮捕できるわけだが、今まで俺はそれを黙認してきたわけで、ちよつと脅かすためのジョークで言ったつもりだった。

「……………」

プライドの高いアリアお嬢様はジーツと俺を睨みつける。

はいはい、分かりました。

俺が悪うございました。

と、俺はそのそと立ち上がると、先日、偶然見つけたので買って置いた冷凍ももまんを冷凍庫から出し、レンジで温めてから皿に乗せてアリアに差し出す。

「も、もまんっ」

「そうだ、その通りだ。ソイツを食って機嫌を直せ」

「な、なによ……あたしが機嫌悪そうに見えたの？」

「ま、まあな」

「だ、誰のせいだと思ってるのよ！！あんたが待たせるのが悪いんだからね！！」

ギョッ。

俺はガバを撃たれるかとちょっとびっくりして身構えるが、アリアは指を指していつものように怒鳴るだけだった。

ふう、びっくりさせやがって。

と胸を撫で下ろす間もなく、

「はむはむう。む、スザク！！」

「はうっ！！な、なんだっ!？」

「ももまんのお代わりってあるの?」

ズルッ。

ソファアのひじ掛けに付いていた肘がずり落ちる。

「あるにはあるが、お前、腹壊すぞ?」

「いーの！！あなたには関係無いでしょ！！早くお代わりちょうだい！！」

「へいへい。どーなっても知らんからな」

と、再びパシられる俺。

齒向かったらガバの風穴祭なんて荒業で殺されるのがオチだな。なんて思ったら急に悔しくなったので、わざと熱々に温めたももまんに反感の意を込めてアリアに何気なく差し出す。

「!?!?!?!?!」

いつものようにももまんをわしづかみにしたアリアは、あまりの熱さにびっくりして手を引っ込める。

アハハハハ、ざまあみる。

と、遠くから見て鼻で笑ってやる。

我ながら陰険な仕返しだな。

「どうしたアリア？熱いうちに食わねえと冷めてまずくなるぞ？」

と、面白がってちょっと煽ってみる。

「う、うるさいうるさい!!そんなこと分かってるわ!!バ、バカスザク!!」

「そう。んじやもつたいないから早う食べ。せっかく買ってきて取っついてやったんだからな」

「うう~~~~~!!」

と、可愛らしい唸り声を上げて熱々のももまんにらめっこする。まあ、こうしてみると等身大の女の子っていうか、普通の女の子だよな。

こういう意外性ってアイツらしくくて可愛いんだけど、ガバぶっ放したり、ポン刀さえ振り回さなければの話ね。と、いつもの位置に腰を下ろす。

もしも、もしもだぞ？

俺が普通の高校に通ってて、普通の一般的な男の子“鳳凰院朱雀”として神崎・H・アリアという女の子と出会ってたら、俺の人生どうなってるだろうな。

少なくとも、友達止まりで終わりだろう。

可愛いのは可愛いが、好きになれそうに無いと言っか、なんかであって……

っーか、それこそ有り得ん。

……なんでこんなことを考えてるんだろ、俺は。
最近、どうも調子が狂うな。

「……なあアリア？」

「はむ？なあにはむう」

「……ももまん食いながら返事するな。はしたねえ。貴族様のきの字もねえぞ？」

「な、どういう意味よッ！！」

「まんまそっいう意味だよ」

「むぎい〜！！バ、バカにするなあ！！風穴地獄に突き落とやる！！」

「なんだか凄そうな地獄だな。っーかちよつと待て！！まず俺の話を聞け！！」

なんだか凄そうな地獄を想像しつつ、ムキになってソファアに立ち上がり、スカートの中からガバを引き抜こうとするアリアを焦りながら制止し、俺は話を続ける。

アリアもアリアで、さすがに無防備な俺を撃つ気は無いらしく、しれっとスカートから手を離す。

あ、焦ってた俺がバカだったな。
ん？

……でも今のはちよつとおかしいぞ。

前のアリアなら「風穴地獄ッ！！」とか言ってソッコーぶっ放して

そうなのに。

「先だつて言つてた理子のドロボーとかいうヤツ、マジで引き受ける気か？理子は俺達に盗みの片棒担ぎをさせるつもりだぞ」

と、冷や汗を拭いながら食い終えた皿を片付けつつ、アリアに尋ねる。

あのアリア対理子の騒動の後、まず理子が独自に下調べをするとか言い、俺達は一週間ほど待機してる　とのことだったのだが……

「良くないに決まつてるでしょ。リュパン家の人間と組むなんて、ホームズ家始まって以来の不祥事になるわ。けど、今は状況が状況よ」

アリアが首を左右に振ると、しやらしやら。

ピンクの長いツイントールが曲線を描いて揺れた。

「理子がママの裁判で証言するつて言うんだから……これも必要悪と割り切つて、本当にやつても良いと思つてる。それに、聖書にも書いてあるでしょ。汝の敵を救せ、つて」

……聖書読んだことの無い、俺に言われてもなあ。

そもそも、宗教なんて興味が無いし。

「……柔軟なのは構わんが、泥棒はつまり窃盗罪だ。前科一犯、付くことになるが、武偵なんて、その辺が身奇麗なヤツの方が少数派だけだな……それも覚悟の上か？」

違法改造銃を使つてる俺も言えたことじゃないんだが。

「ああ。そこは心配しなくていいわよ。これは犯罪になりえないわ」
「……犯罪になりえない？ど、どういうことだ？」

「理子が言ってた『ブラド』ってのは、イ・ウーのナンバー2
相手がイ・ウーなら、もはや法律の外。仮に窃盗容疑で逮捕されて
も、起訴されないわ」

「……なるほど。そういうことか……」

別にその理屈を知らないわけではない。

俺もかつては政府の必要に応じて、その裏側の連中と関わりを持っ
た武偵だ。

死んだ俺の義父も、かつてはそっち側の人間だった。

おおかた、特一級国家機密だのそれ相應のマズイもの、なのだろう。

「……まさかスザク、知ってるの？」

「ま、まさか。知ってるわけ無いだろう。だが、触れたらマズイも
のってくらいはだいたい予想が付く」

「……さすがね。妙に勘が良いわ。ま、まさかそれもあんたの力な
の？」

「さあな。生れつき、というか何て言うかで……」

「……毎回思うんだけど凄いわね。推理力といい戦闘力といい、ホ
ントに凄いしか言えない。あんたを産んだ親の顔が見ていたいわ」

なんて言いながら、ちゃっかり俺の隣に移動してやがるなコイツ。

親の顔、か。

そうか、そうだな。

そつえばコイツ、俺の両親が亡くなったことを知らないんだっけ
か。

まあ、今頃引つ張り出すのもなんだし、言わんでも良いか。

「そんなことよりね、スザク」

俺が無意識に黙りこくっていると、何気なく隣に座るエリアが唐突に話を切り出す。

「あんたはどうするの？やるの？」

「ん？あ……ああ。そんなこと聞くまでめ無いだろう。曲がりなりにもお前の相方、ワトソン君なんだからよ」

と、ぶっきらぼうに返事をする。

「ふーん。なんで理子の手助けするのよ」

「し、知るかよ……それがお前に何か関係あるのか？」

「……カワイイ子に泣き付かれたから、助けるってわけ？」

「だからどーしたってんだよ。それってどちらかと言えばお前だろ？」

「じゃあ、なんでよ」

俺が理子に貸すのは 兄さんの情報のためだ。

俺は、兄さんは4年前の有楽町線地下鉄籠城事件で死んだはずだった。

しかしそれが、兄さんが生きている理由を示唆している。

昨日の、理子の話で。

……兄さんが生きている理由を知りたい。

そして、なぜ兄さんが突然姿を消し その結果、俺が人生を180度変えることになったのか、直接会って、確かめたい。

そのためには、唯一の情報源 理子に協力するしかない。それが、今の俺の立場だ。

「スザク？どうしたの」

俺がまた黙りこくってしまったので、アリアが少し眉を寄せる。

「何でもねえよ。お前には関係ない」

俺はしれっとそっぽを向く。

兄さんのことは、俺の個人的な問題だ。

それに俺の中では、誰にも触れられたく無い心の深い所にある悩みでもある。

たとえパートナーだからといって、むやみやたらと話したくは無。

「知ってるんだから」

再び不機嫌そうなアリアのアニメ声に、俺は視線をアリアへ戻す。

“知ってる”……？
何を、だ？

「ふん。あんたが言わなくてもだいたい分かるわよ。理子はぶりっ子だから、男子ウケがいいもんね。むっ、むっ、胸もあるし」

んなこと知るかよ、俺が。

そもそも俺は女に……
っつて……

な、なんか、アリアが……

変なことを言いはじめたんだが……

「武偵は闇、毒、女に堕ちる。あんた……昨日の夜、あの部屋で、り、り、理子に……」

なんだなんだなんだっ!?

ジリジリと後ずさる俺。

ぎろろろ、とスゴイ睨み目になりながら、アリアは、きゅい
ーん。
何を想像したのか、電源をONにしたニクロム線みたいに一気に赤
くなりやがった。
そして、びしっ。
牙みたいな犬歯を剥き、『犯人はお前だ!!』って感じに人差し指
を突き出す。

「へ、へ、変なことされて、トリコになったんでしょ!!」

……

……

……はア!?

「ど、ど、ど、どんな破廉恥なことをされたのよ!! 包み隠す白状
しなさい!!」

「ぬぁにを聞くかと思えば……いつちゃん忘れたい事を……」

「ちゃ、ちゃんと話しなさいよッ!! な、な、何をされたのっ!!」

「ち、ちよつと待て。落ち着け、落ち着けアリア!! つーか何でそ
んなこと聞きたがるんだよ!!」

「え、あ、それはそのう……う……うるさいッ!! こッ

このピンク武偵ッ!!」

色的にピンクなのはそっただろ、と心のツッコミはさておき、ぎー、
と両手を振り上げたアリアは、やはり理子が俺にまたがっていた光
景を覗いていたらしい。

うむ、なんて言い訳をしようか。

「た、た、確かに理子にまたがられていたのは紛れも無い事実だが、
俺はそれ以上の事は何もしてないし、されてない。それはお前の誤

「解だ」

「う、嘘いいなさいッ！！ふふふ二人で、べべべットに入ってたじゃない……！」

「んじゃ、一つ聞き返すが、仮にお前が好きでも無い奴に強引に部屋へ呼ばれて、挙げ句に手を引かれて無理矢理ベッドまで連れていかれて強引に押し倒され、それを助けに来た別な奴に見られて誤解されたら、なんて言う？」

「う……それは……あ、え、うう……」

「ああなつた経緯を簡単に説明するとそうことなるんだよ。俺はあの晩、俺は理子に騙されて呼び出され、ついに行ったら……ってわけだ。だから俺は自分に非があるような行為はしていない。断じてな」

俺はアリアの目を真っすぐに見て、瞬きもせずに言い切る。

ふふふ、我ながら上手い弁解だぜ。

俺の言った事に多少たじたじしながらも、アリアは反論せずにジツとして聞いていた。

そして、しばらく黙って俯くと、

「そう。ごめん。私の勘違いなら謝るわ。だ、だけど……！」

「ただ、なんだ？」

と眉を顰める俺の横で、アリアは、ぎゅ~~~~~っ！！

駄々をこねる子供のように目をきつく閉じてこう言った。

「あ、あなたは、あたしだけのものモノなの……！」

アリアの、台詞に
ずでんっ!!

びっくりしてソファーから勢いよくずり落ちて尻餅を着く俺。
ふう、ふう、心臓が爆発しそうだ。

いや、今ので心臓が爆死したかもしれん。

もう、勘弁してください神様仏様。

これ以上の拷問に私は耐えられません!!

っ！かありえんだろっ!!

爆弾発言ですって!!

いきなりなんっ！こといつちゃってくれんだよ、この子は。

「そもそも理子に騙されるあんたが悪いッ!!」

は、はあ。

そいつはどうもすみません。

っ！か、あのタイミングで理子がアリアに化けてたから、その雰囲気
に吞まれてまんまと引っ掛かったわけで……

というのはそれとこれでは別だが、まさかいまさら「アリアに化け
ていた」なんて事を言うわけにもいかんし。

言ったら言っただで殺されるのが目に見える。
ぎろろろっ。

アリアは涙目になって睨むと、ぼぼぼとさらに赤熱化し、

「スザクって、ほ、ほ、ホントに女の子に騙されやすいのね!?!こ
の間、舞から借りた本にも書いてあったけど、お、女の子は、ほん
本当に好きな男には、っ……付き合ってもいない段階では、あ、あ

んなにベタベタできないものだからねっ!!」

女子三人あいつ見るとその理論はもはや古いのでは無いかと思うぞ。
つーか舞よ、頼むからコイツに変な本は貸さないでくれ。

ただでさえアリアとか俺はそういうのが苦手なのに、お前みたいなヤツに精神汚染されたが最後、色んなイミで俺の命は無いだぞ!!
まあ、アリアは染まる可能性は皆無かも知れん、が、話を鵜呑みにしそうで怖い。

……そもそも、だ。

恋愛沙汰が大の苦手なアリアちゃまが、超っつかえながらも不得意な恋愛分野の話をするなんて、どういう風の吹き回しだよ?
台詞の端々で視線を泳がせるし、妙な汗もかいてやがるぞ。
まさか、コイツ熱でもあるのか?

「ど、どういう理屈だ?話が見えんぞ」

「リュパンの一族は、世界から選りすぐった少数精鋭のパーティーで泥棒を働くことで有名なのよ!!理子があんたのこと『相性バツチリ』とか言っていたのは……きつとあれ、あたしのドレイ(もの)に色仕掛け(ハニートラップ)で横取りして、自分が将来作るパーティーの一員にしようとしてるんだわ!!そんなの、絶対、絶対、許さないんだから!!」

がうつ!! と犬歯を剥くアリア。

「あんたはあたしだけのドレイ(もの)なの!!だから他の人に仕えちゃダメなんだからね!!そこんどこ、ちゃんと弁えなさいよ!!
?いい!?!」

あ、あゝ。

そういうことか。

なるほどなるほど。

俺はドレイ＝所有物、っていうことね。

そういえばそうだな。

まったく、ビックリして損した。

妙な独占欲を發揮させやがって。

「と、とにかくまあ一回ぐらいなら許すけど、理子とはあれっきりにしなさいよ？裏切ったら風穴開けまくって人間レンコンにしてやるからねっ！！」

な、なあ？

風穴開けまくったら、人って原形すら留めてない肉塊ミンチになるよな？

人間レンコンっておかしくないか？

人間ミンチと比喻するなら分かる気もするが、それはおいておこう。また妙な揚げ足取ってポコポコにされちゃ構わないからな。

「だいたいあんた、意外と真面目そうに見えて不真面目な拳げ句、かなりの“たらし”なんだから。舞とか楓と一緒にのベッドで寝たり……」

アリアはネチネチと俺の不名誉なあだ名に加えて、振り返りたくない過去の話まで持ち出して来やがった。

これ、理子のことイライラしてるのの八つ当たりも入ってるな。完全に。

とうとう　　アリアがギロツとコツチを睨み、

「ま、舞にキスまで許して……あ、あたしにも、し、したくせに……」

がるるる、とライオンっぽい威嚇音を鳴らし始めたので、俺は保安上の理由から「シヨンベン」と宣言し、ソファアを立った。

（ん……メールだ。そういえばアリアとしゃべっていて気付かんかったな）

トイレに避難した可哀相な俺は、ズボンのポケットに入れていた携帯のバイブレーションで気が付く。
用を足すと、洗面所で手を洗い、タオルで綺麗に拭いてからケータイのフリップを展開する。

「……な、なんじゃこりゃ……」

それは、今夜フランスへ旅立つ舞からの並々ならぬ愛のスパムメールだった。

な、なんだよ、新着メール20件って!?

変な汗をかきながら、恐る恐る一つずつ開けて読んでいく。

内容はごめんなさいの連呼に始まり、途中、何故か応急室での事の『続き』の話に変わっていき 何故か知らんが、俺は舞が帰ってきたらその『続き』なる行為をすることが確定しているようだった。

舞の中では。

（……ヤバいな……俺、こんな事言ってたか……? 必死になり過ぎて何を言ったか覚えてないぞ……あ、またメールが来た）

新着メール1件。

宛名が表示されないと言うことは、未登録アドレスからだ。

まさか広告メールか?

とそのメールを開けると、そこには今日の日付で集合時間、集合場

所と思わしき文章が定型文と共に長々と記述されていた。

(これは……招待状？一体誰からだ？)

アドレス自体には見覚えはない。

記述されていた時刻はAM20:00。

今は午後7時50分だから、もうすぐだな。

場所は、第2男子寮屋上　って此処の屋上かよ。

待て、此処の屋上は立入禁止のはずだ。

俺や彩みたいなのよほどの不良でない限り、入ろうなんて誰も思わない。

何か……とてつもなく危険なニオイがする。

この手の招待状は、トクにね。

一旦、部屋に戻ると、クローゼットの奥から埃を被った防弾学ランとスラックスを取り出す。

これは、東北武偵高附属中学にいた頃に着ていた、三着目の制服だ。青を基調した清々しい爽やかなデザインの学ランに、同色で水色のラインが入ったスラックス。

左襟には東北武偵高附属中学の校章。

右胸には複数個の勲章バッチ。

念のため、防弾制服よりも性能が低いけどわりに着替えておく。

ゆっくりと右胸と右足太股にあるホルダーに二丁の拳銃を帯銃し、ギミッククロッドを収納するスペースが無いので、置いていく代わりにナイフを携帯する。

久しぶりだな、これを着るのは。

何もなかったように部屋を出ると、廊下にエリアが立っていた。

「珍しい格好して、何処に行くつもり？」

青い学ラン姿の俺に興味津々のエリア。

「ちょっと蘭豹先生に呼び出しされてね。防弾制服の上着が無いから中学時代に着ていたこれを着て行くのさ。大丈夫、夕飯に間に合うように帰ってくる」

「そ、そつよね。早く帰ってきなさいよ!! 一時間過ぎたら晩御飯は無し!!」

「さすがに厳しいな。おっと、もうこんな時間だ。んじゃ、行ってくる」

「……行ってらっしゃい!!」

と何故か叫ぶアリア。

それを尻目に、俺は再び玄関を潜るのであった。

満月が浮かぶ夜。

相変わらず、町は行き交う車で喧騒に満ちていた。

俺は導かれるがままに、第2男子寮の屋上へと向かっていた。

先程のメールの文面からしても、明らかに怪しいような感じがした。夜中に屋上へ呼び出すなんて、どこかおかしい。

俺は愛銃を片手に握り、壁を背に、非常階段をゆっくりと上る。

微かに、人の気配を感じる。

誰だ

と、屋上に着いた時だった。

「「「「誕生日おめでとう………」」」」

ぱぱぱぱん！！

とクラッカーが豪快に鳴り響き、闇夜にヒラヒラと紙吹雪が舞う。唐突な出来事に、拳銃を身構えたままキョトンとする俺。

目の前に広がる屋上の殺風景には彩、アラン、隼人、熱田の馴染みある四人組が小さなブルーシートを引いて中央にあるオードブルを囲い、なぜか俺が来るのを待っていた。

誕生日……おめでとう……？

「先輩っ！！早く早く！！」

「料理が冷めるだろ。早くしなよ！！」

「そうですよ朱雀さん。早く来て下さい！！」

「何だよ朱雀っ！！水臭いやろうだなっ！！ポケットとしゃがって！！今日は何月何日だ？」

「6月……3日……あ」

あ、ああ、そうか。

右胸のホルダーへ拳銃を戻しつつ思い出す。

今日は6月3日。

俺の、18回目の誕生日だったな。

毎日毎日、あまりにも忙し過ぎて自分の誕生日を忘れるところだった。

「何だよお前ら、知ってて呼び出したのかよ……」

「ふふふ。そこんところには抜かりはないぞ相棒よ。この俺様が、大切な仲間の誕生日を知らないわけねえだろ」

「嘘付かないでくださいよ彩先輩！！ボクが言うまで忘れてたくせに」

「何をっ！！あれはだな」

「まあまあ落ち着いて二人とも」

何やら言い争い始めそうなアランと彩を、いつものスマイルで宥める熱田。

「こつこつという時くらい和やかにこつこつよ二人とも。邪魔する人は居ないんだし」

「確かにそだな。まあなんだ、むさ苦しい男だけの誕生日パーティーも、なかなか悪くはないだろ？朱雀？」

「まあな。ホントにびっくりさせやがるよ。お前らは。こんな風に祝ってくれた事は今までなかったから正直言つと嬉しいよ」

「やったあ 朱雀先輩が喜んでくれたあ」

「うわ、ちよ、おま、いきなり抱き着くなアラン！！」

「さあて、朱雀さんの誕生日を祝って、シャンパンでも豪快に開けますかあ！！」

と隼人は高級そうなビンに入ったシャンパンを、背後から取り出す。すると彩はそれをいきなり奪い取ると、シャカシャカと勢いよく振

り始めた。

ま、まさか、あんにやるう……

いち早く危険を察知し、ジリジリと後退する俺を見て、ニヤリと不気味な笑いを浮かべる彩。

月明かりに陰っているため、目だけが陰って俺からは見え、より一層、彩の不気味な感じを引き立てる。

「なア朱雀……このシャンパンのシャワー、浴びたいか？」

「そ、そんなん浴びたく無いに決まってるだろっ！！」

「そうかそうか。そんなに浴びたいか。キヒヒヒヒ」

奇妙な笑い声まで上げやかるか、コイツは……！！

そのままジリジリと後退していき、とうとうフェンスに背中を打つ。マ、マジかよ……

と後ろを横目で見て、視線を戻すと彩の顔が真ん前にあつた。

「それじゃあ、改めて朱雀の18歳の誕生日を祝ってえ……」

「や、やめろおおおお！！」

しゅばんっ、しゅばばばばばばば……！！

と勢いよくビンの口から吹き出るシャンパンをぶっかけられる俺。笑い声を上げながら頭からシャンパンをぶっかける彩。

「こんのっ……！悪ふざけはやめやがれ……！！」

「簡単にやめるかよ……！ほれ、もういつちょ……！祝いの杯じゃああああ……！！」

《しゅばばばばばば……！！》

「ぶはっ……！がはっ……！や、やめろっの……！！」

「やめないやめないまだまだやめない、そおれっ……！！」

《しゅばばばばばば……！！》

「ぐはあっ！！ た、炭酸が目につ！！」

俺達二人が、鬼ごっこをしているのを遠巻きに見ている三人は、

「なんか楽しそおですね……朱雀先輩と彩先輩……」

「良いんじゃないのアランくん？自然体の二人を見ている見たいで。僕は楽しいよ。見ている方が」

「そおですね……っーか見ているだけじゃつまらないじゃないですか熱田先輩っ！！二階堂先輩はどう思います？」

「まるで子供の頃の二人を見てみたい。童心に返ったと言っか……なんか見てる方も心底楽しくなるよ」

「むー……。つまらないからボクも混ざる！！先輩ーっ！！ボクも入れてー！！」

と無邪気に手を振りながら、二人に割って入るアラン。

駆けていくアランを静かに見送る熱田と二階堂。

そしてシャンパン掛け合い合戦はさらにヒートアップする。

「ねえ、二階堂くん？」

「何です？先輩？」

「最近、君に関する良からぬ噂を聞くんだけど……」

「へえ。どんな噂です？」

「君が、別な組織の“スパイ”とか言う噂。実はその話でウチのクラスが持ち切りだね。確かに転校して来てまだ日が浅くて学校に慣れないのは分かるんだけど、授業とか学校に居ることって滅多にないよね？」

「……なるほど。それでその噂が。それは誤解ですよ。ほとんど任務に借り出されているから授業になかなか出れないだけです」

と、二階堂は右手に持つ骨付きあらびきウィナーをガブリとかじ

りながら言い切る。

その隣で、なんか安心したような安堵の表情を浮かべ、中央に並ぶオードブルの中からサンドイッチを取る熱田。

「そうかい。誤解ならわざわざ深く聞く必要は無いよね。ごめんよ、変な事を聞いちゃって。機嫌悪くしただろう?」

「いえいえ。大丈夫です。そう思われても仕方ないですよ先輩」

「そうだね。いやあ、僕って噂とかそういうのって聞いちゃうと真相を確かめなくなる主義でさ」

「その癖、今のうちに治しておいた方が良いですよ先輩。それは“余計な事”に首を突っ込んで自分自身を危険に曝す。つまりは真偽に惑わされて疑心暗鬼を生み、パーティーの信頼や先生の信頼をも失墜させかねません。興味本位で動く、と言うのは言語道断。そうなるを取り返しの付かなくなることが起きるのは目に見えています。チームワークを主要とする“武偵”としてあるまじきことですから頭の片隅にでもしまっておいてくださいね」

「……わかった。肝に銘じておくよ」

「すみません先輩。つい生意気な事を言ってしまったって……」

何かを諭すような真剣味を帯びた声色で熱田へ言う隼人。

その後、何かに気付いたように目を伏せると俯いて先輩である熱田へ謝罪する。

まさかそんな事を言われるとは思っていなかった熱田は拍子抜けした。

しばらく長い沈黙が二人の間に流れると、シャンパン掛け合い合戦でダラダラに濡れた三人が戻って来る。

「結局、ずぶ濡れじゃないか三人とも」

「まあな。朱雀の誕生日パーティーだからこのくらい弾けないとソッとするだろ」

「はちやめちやだね相変わらず君は」

「つたく、釣られて俺もびしょ濡れだ。このエロ魔人のせいだな」

「僕も同感だよ、エロ魔人は」

「そおだそおだ〜！！朱雀先輩と熱田先輩の言う通り彩先輩はエロ魔人だあ！！」

「なんだつてえアラン？んなことばかり言つてると“すっぽんぼん”にして街中歩かせるぞ？」

「はい、ずびばせんでじた。もう言いませんです。だから勘弁してくんなまし」

酔っ払つてるのか、アランの言動がはちやめちやになってる。
ん？

そ、そういえばなんか服が酒臭いな。

「なあ彩？念のために聞いておくが、そのシャンパン、ノンアルコールか？」

「……いんや。アルコール7%だ。ラベルに書きちよる」

「「え！？」」

「まさか……ちょ、おま、それはいくらなんでもそりゃあ無いだろ！！」

「んああ〜〜なんかイイ気分でふ」

「ねえ朱雀くん？アランくんの目が……」

「ん？おおうつ！？どしたアラン！？」

「ありやりや、目が据わつてら」

フラフラとした足取りで俺に近づき、しな垂れかかるアラン。
それを見て笑う彩。

やれやれ、と頭を振るう熱田に、体育座りで俺らを見る隼人。

「つか彩、お前どーかしとるぜ。」

いくら誕生日パーティーだからといってアルコールは無いだろ。

あああ、せつかく着てきた東北武偵高附属中学の学ランが酒臭くなつたろうが。

「お？よく見てみりやそれ、東北武偵高附属中学の学ランだよな？」

「今頃か。おせーんだよ気付くのが」

「……東北武偵高附属中学？ああ、彩くと朱雀くんの母校だよな。しかしいまどき珍しいね、青色の学ランって」

「まあな。俺らの時でその青色の学ランは最後だ。確か、俺達が二年生の時、新入生から緑色のブレザーに赤と黒のストライプネクタイ、水色のワイシャツにブレザーと同色のスラックスに変わった」「こりやまた随分派手なこつた。今残ってる青色の学ランっていつたら、俺が持つてるヤツだけかもしれん」

「凄いいじゃないか朱雀くん！今からネットオークションに掛けたら高く売れるかもよ？」

「売らねえよ、一銭にもならん」

「何言つてやがるお前、かの有名な武偵“鳳凰院朱雀様”の刺繍入り、それで着用済み、ましてやこの数の武偵勲章バッチまで付いてれば、言うまでもなくプレミアもんだぜ？」

「アホ。オークションに出す前に武偵法に引っ掛かるだろ」

「あああ」

俺の真面目なツッコミに、納得したように頷く二人。

まずもつてだな、武偵勲章なんてオークションとか市場に出してはいけないもんだぞ？

ありや国から選出された荣誉ある勲章なんだからよ。

酔っ払つてたアランは、さすがに酔いが回るのが早いのか、俺の膝枕ですやすやと寢息を立て、気が付いたらさつきまで座っていた隼人の姿はなかった。

つーか、よく男の膝枕で寝れるなコイツは。

「さて、もうこんな時間だから僕は帰るよ。明日も学校があるし」
「そうだな。俺達は後片付けしてから帰るとするか」
「ありがとう熱田。楽しいパーティーに呼んでくれて感謝するよ」
「礼には及ばないよ朱雀くん。むしろ礼を言うべき人は僕じゃない。
んじゃ、お先に失礼します」
「「お疲れ」」

先に帰る熱田を見送り、俺達はいそいそと後片付けを始める。

アランは冷えたタイルの上に寝かせ、ブルーシートを畳み、ゴミを回収する。

後片付けはそんなに時間が掛からなかった。

しかし……さすがに寒くなってきたな。

早く部屋に戻らないと。

なんて考えながら、夜の天高く昇る満月を見上げる。

「二人で満月を見るのは、実に一ヶ月ぶりだな朱雀」

「ああ」

「なんか最近、お前が危ない目に遭ってるような気がする。なんて言うんだ……見えない敵みたいなヤツと戦ってるっーか」

「……………」
「目に見えないところで必死になって戦ってるのは、普段のお前を見てると、何と無く分かる。だから敢えて言っておく。お前の体は普通の人とは違う。俺もそうだが、お前の場合、もっと苛酷なモノだ」

「……………？どういう意味だ？」

「お前は限りなく“魔”に近い存在を“無意識に殺そうとする力”が備わっているはずだ。鳳凰院つっー家系なまえの遺伝で。実は俺にもそれに近いモノがある」

いつの間にか隣に、彩が満月を見上げながら立っていた。
彩は険しい顔をしながら真剣に俺へ話す。

「これから武偵として活動していく上で“人とは違う存在”と戦う事があると思う。今のお前なら特にな。お前の内にある“力”に呑まれないようにさえしていれば問題はない」

「人とは違う存在……？はっ。何の事かと思えば……」

「良いから聞け。最近、やけに鼓動が高鳴る事とか、手に紫色のアザが動いて見えるって事がないか？」

「……何で知ってるんだよ、それ」

と驚く俺を見てさらに険しい表情になって黙り込む彩。

「……おい、何で黙り込む？何か知ってるのか？」

「……いや、何でもない。心配するな」

「そ、そうか」

「悪い。今の事はなかった事にしてくれ。よし、もう帰るか。肌寒くなってきたし」

と、いつものようなマヌケ面になって俺を見る彩。

あの事を知っていたのはかなり気になるが、忘れるということとは、勘違いだったのか。

なんてアランを抱えながら非常階段を下りていると、とても重要な事を思い出し、悍ましいほどの寒さを感じる。

(しまった……アリアのこと、すっかり忘れてたッ！……どうしよう……あれから3時間以上過ぎてるし……怒ってるよな、絶対)

そう内心呟きながら、アランを部屋まで送り届け、猛ダッシュで自室へ戻るが……

「ス〜ザ〜ク〜……」

と、玄関で待ち伏せしていたコメカミに怒りマークを浮かべたアリアに、

「風穴地獄っ！！」

バリバリバリバリバリバリッ！！

と問答無用のガバ乱射を喰らうのであった。

なア、神様よお。

俺という人間に、安息の地というものはないのでしょうか？

P.S.

あまりにも怖いのでアルコールの染みた学ランだった事を忘れており、アリアぶっ放した弾丸が服を擦ったことで摩擦熱が気化したアルコールに引火して発火。
危うく風穴地獄ならぬ火だるま地獄に陥れられるところでした……。

ACT 9 ・ 鳳凰院朱雀の憂鬱（前書き）

長らくお待たせいたしました！！

今年初の『緋弾のアリア』運命を射す漆黒の魔弾』を更新いたしました！！

感想よろしく願います！！

ACT9・鳳凰院朱雀の憂鬱

はあ、凄く憂鬱だ。

昨夜は彩の計らいでシャンパンシャワーを頭のとっぺんから浴び、帰宅直後にアリアの風穴祭りで服に付いたアルコールに引火、危うく焼死体になりかけた翌日の朝。

相変わらずどんよりと曇った曇天の下、俺はいつものようにキンジと起き、制服に着替えてバス停に向かっていた。

火だるまになりながらもほぼ無傷と言う奇跡の生還を果たしたが、マジックとかそんなんじゃないからこっちはマジで死ぬって覚悟したくらいだからな。

あの時はね。

しかも、今でも鮮明に覚えてるから始末が悪い。

溜息しか出ない俺を見た隣のキンジは苦笑いを浮かべる。

まあ、そりゃあそうだよ。

シャンパン浴びてアルコールが染みた防弾制服に、発砲された弾丸の摩擦熱で引火して死にそうになるヤツなんているかって。

笑い話も甚だしいぞ、コレ。

人間焼きも如何なもんだぜ、まったく。

いつも以上に早くアリアとコンビを解消したいと思ったぞ。

もともとは俺が悪いのだが、まさか焼かれるなんてさ。

……これがホントの根性焼きってか。

根性どころか焼け死ぬわ!!

「だ、大丈夫ですか？先輩？顔色が……」

「心配すんな。いつもの事だ」

「そ、そうですか」

「まったく……今、こうして生きてるのが不思議だよ」

「まあまあ。アリアも悪気があってやったわけじゃないですし……許してやったらどうですか？」

「謝りに来るとも思えないし、言ったら言ったで逆鱗に触れて風穴地獄へ直行。だったら俺が行くしかないだろ」

「か、かかか風穴地獄う！？なんかモノ凄い地獄ですけれ先輩が謝りに行くっておかしく無いですか？」

ふむ。

……まあ妥当な正論だが、そんな正論を覆すのがあのモンスターガール・アリア様だからな。

真つ向勝負の正攻法で通用しないのは目に見えてる。

ならこつちが折れるか、秘奥義『逆ギレ口論』でアリア自体を丸め込むしか方法はない。

しかし、後者で丸め込んでもブチ切れて武力行使されてしまえば意味が無い。

……結論から言ってしまうえば『忠実になれ』って事だが、そうなる
と調子に乗ったアリア様の思うツボだ。

その塩梅がアイツの1番難しい所なんだよな……なんて難しい顔を
してバス停に佇む俺。

「先輩？どうかしましたか？」

「いや。なんでもない」

「そうですか。あんまり考え込まないほうが良いですよ」

「そうだな……ってそれが無理なんだよー！！」

「アハハ……ですよね」

キンジはいいいなあ。

そう思いながら曇天を見上げる。

「おっはよう相棒！！今日はヤケにブルーじゃねえかい！？」

と、背後から忍び寄り、俺の後頭部に向けてラリアットを繰り出す変態。

最初から感づいていた俺は身体を少し傾けて躲し、背後に回り込んで変態の後頭部を掴み、バス停の時刻表が書いてある看板へ勢いに任せて思い切りたたき付ける。

バガアンツ！！

凄く良い音が辺りに響き渡り、通行人が一斉にこちらを向く。

知っている人は知っているだろうが、俺の場合はもはや名前ですら呼ばない。

だってさ、“変態”って言えばみんな分かるだろ？

「おはよう変態。今日も朝から騒がしいな」

と冷たい視線を送りながらわざとらしく言う俺。

看板に張り付いたまま、マンガのように下へゆっくりとずり落ちる変態は、こちらを向いて鼻を痛そうに擦りながら言い返す。

「ひでえなおい……せめて名前で呼べ」

「変態がお前の名前だろ。自分で認めてたくせにか？」

「認めてねえよ。つーか、フツー認めるか！！ありゃジョークだ」

「ジョーク？ジョークのようには聞こえなかったか？」

「おいおい……ちょっと待ってくれ。マジで言ったと思うか？この俺が？」

とキンジに助言を求める変態。

呆れてなのか苦笑いをしたまま無言のキンジ。

その直後、最強ブッキー御一行（楓・ジル・理恵）がバス停へ到着する。

「おはよう変態スケベ野郎。今日も朝からスケベ面全開じゃの」
誰が言うのかと身構えていたが、朝のキツイ一撃を放ったのは楓だった。

「うるせー！！誰がスケベ面かつ！！」

「……止めて楓。私の彩を虐めないで」

「理恵よ。どうしてそんな変態スケベ野郎を庇うじゃ？」

「……何と無く。それに……夜桜彩を虐めて良いのは私だけだから」
「「「どういう意味だツ！？」」」

俺と彩、キンジが同時にハモる。

その瞬間、彩を見ていた理恵が黒い笑みを浮かべていた。

ヤバい……この人はヤバい。

「ま、まあ深く聞くと取り返しのつかないことになるだろうからあえて聞かんが、いつからそんなキャラになったんだ？理恵ちゃん？」

はああ……と溜息をつきながら話す彩。

……彩も災難だな、サイだけに。

俺が標的じゃないことに胸を撫で下ろす。

これ以上、変な小判鮫が増えられても困るからな。

「……私は前から変わってないわよ。彩が私だけを見てくれば変わると思う」

「あのな……お前だけ見てもなんも面白くな……いでっ！！耳を抓るな！！」

「……彩、私に『好き』って言って」

「いや……いでで……嫌だ……あだだだ……」

この光景、なんか見たことがある。

……まさにこれ、俺とアリアじゃないか？

好き嫌いはどうであれ、端から見ればこんな感じなのか。

そりゃあ仲良く見えてもおかしく無いよな。

今度からは気を付けなくては。

俺は彩と理恵の夫婦愛をまじまじと観察していると背後にムラムラとした危ないオーラが。

振り返らないように堪えていたが、肩を叩かれたので振り向く。

「なあ朱雀？オレとて、てて手を、つ、繋ごう」

「なにい！！何のこれしき……朱雀よ！！今日は放課後を空けておけ！！夜な夜なデートじゃ！！」

「……おまえらなあ……」

「夜な夜なデート……だと！！させるか！！朱雀はオレのもんだ！！」

「おのれえジル……まだ懲りぬか！！何遍も言わせるで無いっ！！朱雀はわしのモノ！！お前とは不釣り合いじゃ！！」

また始まった……。

俺はおまえらの何なんだ？

再び頭を抱えて座り込む俺。

どうしようホントに。

真面目な話、俺が休める場所なんて無いのかな。

なんて真剣に考えてる傍らで口喧嘩や理恵の拷問を受ける彩の悲鳴が聞こえる。

深く溜息をつくとき、武偵高行き指定バスが到着する。

前から楓、ジル、キンジ、俺、彩、理恵の順で並ぶ。

窓から中を見る限り、相変わらずすし詰め状態だ。

ぶしゅー……………

と自動ドアが開くと俺はビックリした。
今日はやたらと人が多いぞ。

よりによって女子が。

前にいるキンジの顔が引き攣ってるぞ。

乗れるか、これ？

……ん？

不穏な動きを感じて背後に立つ彩の顔を見ると、見事に鼻の下が伸びてる。

この野郎……バスの揺れとこのすし詰め状態を利用してセクハラするつもりか？

それはいくら何でも武偵としてあるまじき行為だな。

よし、日ごろの怨みを思い切り返すか。

俺は彩の後ろに立つ理恵を呼ぶ。

「理恵」

「……何？」

「愛しの彩にくっついてちゃんと見張っておきな。アイツ何やらやらかすつもりらしいから」

「……わかった。くっついてる。忠告どうもありがとう」

「……ちっ」

俺と理恵の会話を聞いてた彩は悔しそうに舌打ちをする。

キンジが乗ったのを見計らって俺はバスに乗り込み、さすがに座れないので吊り革を掴むことにしたのだが、何故か楓とジルに挟まれるような配置で吊り革を握る羽目に。

彩と理恵は後ろ側、キンジは一つだけ空いていた席を見付けて座る。

なんだよこの布陣は？

俺をサンドイッチする意味があるのか？

俺はその意図が分からないまま、バスがゆっくりと発進した。

すし詰め状態のバスを降りると雨が降り始めていたので、昇降口へ逃げるように駆け込む俺達。

しかし俺ってヤツは相変わらず学習能力が無いヤツだな。

こんな時に限って傘を忘れて来るとはね。

溜息混じりに下駄箱へ靴を入れ、教室に向かって歩いてみると後ろから声を掛けられた。

振り向くといつものように爽やかスマイルを浮かべる熱田の姿があった。

「おはよう朱雀くん」

「おはよう熱田。今日は遅かったのか」

「うん。ちよっと調べたい事があってね。最近、調子はどうだい？
アリアちゃんとは仲良くしてる？」

「……よ、余計なお世話だよ。しっかし世の中珍しいことがあるよな。調査活動なんてしそうにない装備料のお前が調べ事って。どう
いう風の吹き回しだ？まさか備品が無くなったりとかしたのか？」
「うーん、ちよっとね。個人的な事だよ。あんまり喋りたくない事
だから聞かないことにしてくれるかな？」

と困ったように頭を掻きながら言う熱田。
なら聞いても仕方ないかと諦める俺。

「そうかぁ。無理に聞くつもりは無いから安心しな」

「ありがとう。なんか最近、妙な感じがするんだ。胸騒ぎって言う
か、この子達から執拗に伝わって来る“メッセージ”があるんだ」

熱田が言う“この子達”と言うのは普段から身につけている武器の事だ。

こう見えても熱田は、その華奢な体つきとは裏腹に、巷では破壊力抜群の最強銃と恐れられている『DE50A・E』なんつー代物を腰の両脇に携えてやがる。

一方はシルバーフィニッシュ、もう一方はブラックフィニッシュと色違いを二挺も。

一度だけ使っていた所を見たが、あれは普段の熱田の姿とは考えられなかった。

……それよりも話を戻そう。

何故、熱田は“この子達”と言うのか。

前にも話したかも知れないが、彼はこの武器達と“意思疎通”ができると言う。

前記では“会話”と言ったような気がするがあれは俺の説明のミスで、あえて比喻するならば“テレパシー”に近い感覚らしい。

ハッキリとは分からないみたいが、武器そのものに触れ、受け取ったイメージで意思疎通ができるみたいだ。

彼は遺伝だと言っているが、もしもそれがホントなら超能力者だと俺は思う。

だから彼は武器をモノとして扱うのではなく人に見立て例えたりする。

これも彼の優しさの表れなのかも知れないが俺以外は誰も信用してくれていない。

俺も信じたくは無いのだが、毎回、熱田が感じたイメージの通りになる。

正直、怖くなってしまっ。

「……そうか。んで？」

「今のところ、サツパリ意味が分からないんだけど嫌な予感がするんだ。だから朱雀くん“あるモノ”を渡したい」

「……………あるモノ」？
「これだよ」

と、なにやら弾丸ケースに入ったモノを俺に手渡す熱田。

よく見てみると、これは“武偵だけ”が使える特殊な改造を施した弾丸 『武偵弾』だった。

「……………武偵弾？」

何故、いまさらこんなものをと首を傾げて熱田を見る。

「多分、この先で起きる出来事で朱雀くんが“1番必要”になるモノだと思ってるね。早めに製造したんだ」

「熱田が……………？」

「うん。僕の勘が正しければこれは重宝するはずだよ」

「……………そ、そう。流石だな。んで中身は？」

「うーん、確か……………」

珍しく何か仕込んだ弾頭の中身の名前が出て来ないらしく、ひたすら腕を組んで考え込む熱田。

おいおい……………硫酸とか止めてくれよ！！

間違っつて撃つちまったら取り返しの付かないことになるからな！！
なんて考えてるとHR開始のチャイムが鳴り始めた。

それを聞いた俺は急いで弾丸ケースをバックにしまい、死に物狂いで教室へと向かった。

さて。

いつちゃん嫌いな午前中の普通科目を終わらせた俺は、今、テンションがハイになっている。

何故かって？

久しぶりに手元に金が残ったので、今日は豪勢に振る舞う、というわけだ。

もちろん、奢ったりはしない。

つーかほかの連中にはいつも奢ってるから奢るつもりは毛頭ない。毎日、貧相な昼食を取っていた分、やけに気分が良い。

このことがバレるとクレクレ変態やら随分と可愛らしい後輩、猛獣ピンクライオンやらがわんさか群がってくるので、ここはポーカーフェース。

何食わぬ顔で食堂へ行き、列に並んでハンバーグ定食を注文する。キョロつく和不審がられるので堂々とハンバーグ定食をお盆に乗せて、人目の付かない食堂の端っこのテーブルまで持って行く。よっしゃ、此処まではセーフ。

後は奴らに見付からずに食うだけ。

キタ ……！！

節約した甲斐があつたぜ。

ナイフで出来立て熱々のハンバーグを一口サイズに切り、頬張ろうとする

「おゝ？随分と豪華な昼食だなあ」

はずだった。

テーブルの下から、ぬっと顔を出す変態野郎こと彩。

そのいやらしい瞳は明らかに俺のハンバーグを狙っていた。

「な、なんだよ？」

「ハンバーグ定食良いなあ……。俺っち弁当忘れたからちよーだいッ！！」

「あげるかッ！！てめえに何杯、牛丼奢ってやがると思っただよ！！」

「ちっちな。牛丼ぐらいケチんなよ。たかだか牛丼だろ」

「されど牛丼だ。そんなに食いたきゃAVの膏んだ出費を減らしてから食え！！」

なぬ、と眉を潜めて黙り込む彩。
してやったりとせせら笑う俺。

悔しそくにジト目で俺を睨みつける彩の背後に、弁当包みを二つ持った理恵が現れる。

「……彩……お弁当持って来た……」

「お？おおおお！！ありがとっ！！理恵さああん！！アンタは救いの女神だっ！！」

「……ふふ。こんなことだろうと思ったわ。まったく、そういう時ばかり調子良いわね……」

「……うん？いつもじゃねえか？」

「……そうね。んじゃ私もご褒美貰おうかしら？」

俺の前に座っていちやつく二人。

こうして見ると、どこにでも居そうなカップルにしか見えない。
いや、訂正しよう。

バカップルだ。

……でもまあ良いんじゃないか。

喧嘩するほど何が良いつてことわざがあるからな。

と俺は気を取り直して、プレートに戻したハンバーグをフォークにぶっ刺し、口に運ぼうとする。
が。

「あむっ」

「あっ」

突如、フォークにぶっ刺したハンバーグが消えた。

口へ運ぶ最中、脇から突然出て来たアランが俺のハンバーグを横取りしたのだ。

呆然とすると同時に、微かに怒りを覚えたような気がする。

「おいし〜」

と、きつく目を閉じて両手を胸の前で握るアラン。

その仕草がどう見ても女の子だ。

怒りを堪えているのか、フォークを握る手が小刻みに震えている。

「アラン……お前、どこから湧いて出た？」

「湧いて出たとは失礼な！！さっきからいましたよ！！」

「菌類かなんかじゃないのか？お前は？」

「俺はキノコじゃないっ！！」

「んじゃあれか、体を細切れにしても再生する……」

「うーん切ったら増え……プラナリアかっ！！切っても増えないっ！！切ったら死ぬ！！」

ほう。

いつにもましてキレのあるシッコミだ。

まあ冗談はこれくらいにして。

「アラン。率直に聞くが俺が飯を食うのを邪魔しにきたのか？」
「いえいえ違います！！あ、ハンバーグが美味しくて忘れてました。先輩にお弁当を届けにきたのです。いつも貧相な昼食しか食べて無いのを見ていたので作ってきたんですが……」

男の子とは思えぬ仕草でハートがあしらわれた可愛らしい弁当包みに包まれた二段弁当と差し出す。

「なぬッ！？アランちゃんの愛妻ベツ！！」

《ぐいつ！！》

「……はい、卵焼き」

《ギョッ》

「ぐぼげぼぼ……理恵さん？むりくり押し込まんでけれ！！」

《ギョッギョッギョッ》

「げぶっ！！」

前に座る彩が恨めしげにアランの作った弁当を見ていると、口に出汁巻き卵をぐいぐいと突っ込む理恵。

あっちも嫉妬したのか……？

男なのに？

それは良いとしてなんだよこのカンジ。

俺にはまったく理解できん。

「ぜひ食べて下さい！！」

「……って言われても」

と、弁当を丁寧に両手で差し出された俺。

俺は1番楽しみにしていたハンバーグ定食頼んだのに、何故、男なぞ作った弁当を食べにやあならん？

おかしいだろ、明らかに。

断ろうとしたその時、背後に夥しいほどの殺気を感じてゆっくりと振り返る。

「お昼から随分とまあ楽しそうじゃねえか」

と、頬を引き攣らせ、むりくり笑顔を作って立つジルがいた。それにビックリしたアランは勢い良く自分の弁当を背後に隠す。背後からはよく分からんどす黒いオーラが吹き出し、頭にはハッキリとお怒りのマークが浮き出ております、はい。

俺は椅子を引いて微かに後ずさる。

……俺、何かまずいことでもしたか？

「なあジル？どうした？」

「ど、どうしたって……その……」

「……？」

バシンッ！！

もじもじしたかと思うと、テーブルの上に可愛らしい弁当包みに包まれた弁当をたたき付ける。

あまりにもその音が大きすぎて辺りがやたらと静まり返った。

俺もびっくりして何が起きたか理解出来ずにいた。

恥ずかしいのだろうか、珍しくジルの顔が赤い。

そして小さな声で一言。

「……食べ」

「はい？」

「……定食なんていいから……オレが、つ、作った弁当を食べ」

プルプルと体を震えさせながらぶっきらぼうに言う。

ジルがちらりと横目で理恵と彩を見ると、二人はウィンクで視線を

返す。

そういうえば、聞いた話じゃジルって料理できないはずだよな？

おいおい……一体、何がどうなってんだ？

たじたじの俺はただただそれを見ているしかなかった。

「オレが、初めて作った弁当だ。残さず食いやがれ」

「……そ、そうか。ありがとう」

「朱雀にはいつも世話になってる礼だ。べ、別に深い意味はねえ。ただし！！」

「……ただし？」

「残したりほかの連中に食わせたらためえの命はねえからな！！」

……それって、きよ、恐喝ですか。

ハイハイ、分かりました。

食べりや良いんでしょ食べりや。

食い物一つで自らの命を落としちゃ敵わん。

前に座る二人は、あちゃー、と頭を抱える。

実に勿体ないが冷めてしまったハンバーグ定食を通りすがりの生徒に渡し、ジルの手作りだと言う弁当を見下ろす。

ああ……久しぶりの860円がオサラバだ。

そしてこの“パンドラの箱”を開けなければいけなくなった。

さて……出て来るは蛇か鬼か……。

はたまた原子爆弾か。

ゆっくりと蓋に手を掛け、開けてみると中身は俺の予想を超えていた。

ぶきつちよな性格の割には細かいな。

出汁巻きタマゴにから揚げ、ツナサラダ、スパゲティー。

どれも失敗したようには見えない。

見た目だけはね。

「凄いなジル……やれば出来るじゃないか」

「へっ。オレに掛かれば朝飯前だ」

「それじゃあ、いただきます」

「……」

とりあえず褒めてはみたものの、味はどうなんだろう？

嫌な予感はあるが、本人のいる前でまずいなんて言えないな。明らかにそれは自殺行為だ。

恐る恐る箸を取り、出汁巻きタマゴを口へ運ぶ。

「……！？」

ありえんっ！！

出汁巻きタマゴってこんなに塩っぱいか！！

出汁じゃねえ、塩巻きタマゴだ！！

吐き出す訳にもいかずに、ゆっくりと飲み込む。

うーん、まさか他の食材も？

確かめるために恐る恐るから揚げを食べてみる。

その瞬間、衝撃の味のせいで俺の意識が寸断された。

鶏肉じゃなくて生姜揚げだな。

俺の舌がおかしいのか、これって。

いや、それはありえん。

次第に遠退いていく意識の果て、そう思いつつ後悔し、ジルの叫び声がかげに尾を引きながら聞こえただけであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7934/>

緋弾のエリア～運命を射す漆黒の魔弾～

2012年1月14日00時52分発行